契約の代価２　―インモラリティ・コントロール―

織田撫子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
契約の代価２　―インモラリティ・コントロール―

【Ｎコード】
Ｎ８８３７Ｗ

【作者名】
織田撫子

【あらすじ】
契約の代価　続編
”オペレーション・ヴァルプルギス”終結後、インドへ渡ったその後のお話。

辛い経験を乗り越えようとするエルメス、そしてそれを支えるシュヴァリエたちの奮闘と日常を描く、カイの綴る報告書。

ＦＩＬＥ－１　Ｃｏｍｔｅ　［伯爵］

不死の王　アーサー・ペンドラゴン様

エルメスプランセス　シュヴァリエ筆頭

カルロ・ジェズアルド改め

カイ・ペンドラゴン

戦後におけるシュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動報告

アンタは今どこで何やってんですか。さっさと帰ってきやがれバカ。

あぁ、とりあえず、伯爵の新しい名前アーサーってことになったから。ミナ・・・ていうか、ミナも今はエルメスって名乗ってるけど、まぁ、兎に角アイツが勝手に決めた。

その件に関してはおいおい言及していくとして、とりあえずアーサーが消えてからの事をこれから書いて行こうと思う。

アーサーが帰って来た時に、それまでの事を口頭で説明すんのが面倒くせぇからな。

つっても、もしかしたらその時になって「やっぱ見せるのやめよ」とか思うかもしれねぇけど、まぁその時にならなきゃわかんねーし、書いときゃよかったって後悔するのも嫌だからとりあえず書くことにする。

アーサーが消滅した後、エルメスは戦ったよ、ジュリオ様と。裏切りは許さないって、アーサーとみんなの為に。

アイツ凄かったよ。ちゃんとアーサーの眷属としての矜持を保って、アーサーの能力を踏襲して、エルメスなりのラグナロクを発動させた。

エルメスが言うには、ラグナロクというか、アーサーの能力の根源はサイコキネシスと元素を操る能力だって言って、めちゃくちゃ化学戦だった。正直俺にはわけわからん現象だったけど、とにかく壮絶だった。まさか中性子爆弾作るとは思わなかったからな。少なくとも今のエルメスには全く勝てる気がしない。

だからついた二つ名。何個かあったけど、なんだっけ。

“蒼い錬金術師”　“不死王の愛娘（ノーライフキング）”　“無限の賢者アンフィニサージュ”

俺的には“不死王の愛娘”って響きがいい。ぴったりじゃん。“蒼い錬金術師”ってのもあいつにはぴったりだと思う。まさしく錬金術だったしな。“アンフィニサージュ”これはアイツにしては尊大すぎだ。どんなネーミングセンスしてんだ。フランス語なのを見

ると名付けの犯人はアレクだな。

で、まぁ話を戻すけど、戦ってジュリオ様を圧倒して瀕死にまで追い込んでたんだけど、とどめを刺そうとしたエルメスを止めて、俺がジュリオ様を殺した。アーサーにしてみたら喜ばしい事だろ。感謝しろ。

なんでかっていうと、教皇からの命令があったっつーのが1つ。それと、エルメスにジュリオ様を殺してほしくなかったから。それに、どうしてもエルメスを殺したくなかったし、死んでほしくなかった。まぁ、俺の都合が8割だけど。

この2人が殺し合いをしても、結局呪いの連鎖って消えねぇんじゃねぇかと思った。エルメスにジュリオ様を殺されたら、俺がエルメスを殺さなきゃいけなくなるだろ。それに、あの時仮に形勢が逆でジュリオ様がエルメスを殺しても、俺はジュリオ様を恨むと思うし。だから俺が殺した。

それでかえってエルメスは心配してたけど、それはまぁ、いい。

で、戦いは終わったけど、エルメスはアーサーもみんなも、誰も守れなかったってすげぇ後悔してた。強くなってみんなを守るってクリシュナさんと約束したのにって。もう生きていたくない、死にたい、殺してくれとか言い出した。だから、引き留めた。

そりゃ引き留めるよな。アイツに死んでほしくなくてジュリオ様を殺したのに、アイツが死んだら意味ねぇし。引き留めるために、俺と死神の奴らとみんなで一緒に生きると決めた。つーか実は決めてた。で、今一緒にいるわけ。

とりあえず、ミラーカさんの砂を集めて、棺に入れて城の裏庭に埋葬した。本当はオーストリアに連れて行ってあげたいってエルメ

スは言ってたけど、今はフィレンツェで我慢してもらって、落ち着いたら国に返してあげようってことになった。

エルメスはミラーカさんの墓の前でずっと泣きながら謝ってた。守ってくれてありがとう、守れなくてごめんなさいって。ミラーカさんだけじゃなくて、エルメスはクリシュナさんも北都も失って、ボニーさんとクライドさんは行方不明で、さらにはアーサーまでいなくなって、本当に一人ぼっちになってしまった。一夜にして大切にしていたものを全て、失った。　アイツの絶望は俺の想像もつかない程なんだと思う。

アイツ前に言ってたんだ。俺が「お前が心まで化け物になってるようには見えない」って言ったら、なんだかしょんぼりしてさ。

「今のままで、また大事な人を失うようなことがあったら、その時は耐えられるのかな」

そう言ってた。一時は耐える気力すらなかったけど、でも今は耐えてる。心も化け物にせずに。すげぇよな、アイツ。

状況は違うし、自分で決めて実行したことだけど、俺だってジュリオ様を手にかけた罪悪感で死にたいと思った。でも、それ以上の絶望を味わってなお、アイツは耐えてる。

そんなエルメスの姿を見て、俺が死にたいなんて言えるわけねぇし、むしろダメだよな、そんなの。だから、俺がアイツの傍にいて、一緒に生きてってやりたいと思った。なんか、俺がしっかりしないと、とか思った。　あれ、なんか俺アイツの保護者みたいじゃね？

まぁ、兎に角そう言う事だ。

で、レミは地下室に隠れさせてたんだけど、出してやったら行くって聞かねぇから一緒に連れて、偽造パスポート作って、アーサーに言われていた通り、インドに逃げた。アーサーの棺も一緒に。で、今インドでシャンティの屋敷に世話になってる。

その逃避行で何が一番面倒くさかったってパスポートだよ、パスポート。偽造するくらいなら大した作業じゃねぇんだけど、まぁ俺らは慣れてるしな。

どうせ作るなら名前変えようぜってことになって、エルメスが提案した。

「みんなもう死神じゃないんだから、レミと一緒にシュヴァリエになればいいじゃん」

なんかそんなこと言い出して。で、騎士と言えば円卓の騎士だろってことになって、みんな円卓の騎士から名前を取ったわけだ。偶然にもエルメス以外のメンバーはレミ入れて丁度１２人だったしな。

で、やっぱりアンタは王だからアーサーになったわけ。エルメスには最初王妃の名前がいいんじゃねーかつったら、

「王妃は王を裏切るからダメ！」

とか言って、伝説の錬金術師の名前をシュヴァリエに倣ってフラ

ンス語読みにパクってエルメスになった。だったら、王の補佐役やってた魔術師のマーリンでいいんじゃねーのとも思ったけど、なんか知らねぇけど却下された。ヘルメスをリスペクトしてるとか言って。どうでもいいけど。

ちなみにレミはランスロットになった。まぁ、ランスロットは王妃さえいなけりゃ裏切らなかっただろうからな。

ただ、納得いかないのがなんで俺がカイなのかって事なんだけど。それもエルメスが勝手に決めやがった。

「“永遠の毒舌家”とか言われてるカイ卿はカルロにぴったりじゃん！」

とかなんとか言いやがって、マジあのバカ女シバキ回したい。で、他の奴らはこんな感じ。

クリスティアーノ　↓　ガウェイン
レオナルド　↓　キルシュ
クラウディオ　↓　ペレアス
ヨハン　↓　ベドウィル
エドワード　↓　パーシヴァル
アレクサンドル　↓　ライオネル
オリバー　↓　ユーウェン
ルカ　↓　ディナダン
ジョヴァンニ　↓　ガラード
ミゲル　↓　トリスタン

ついでに姓は

「私は娘でしょ？　みんなは言ってみれば孫みたいなものじゃない。

家族みたいなもんだし、同じでいいよね」

結局考えるのも面倒だったから、もうそれでいいやってなった。

とりあえずそれで全員名前が決まって、いざ作業に取り掛かろうと思ったら一大事だよ。

俺達はさっきも言ったけど慣れてるから写真とか用意してあるわけ。問題はエルメスだよ。今更写真撮れねーしどーすんのみたいな。

結局あいつが1枚だけ写真持ってて、それで何とかしたけど。でもその写真、家族写真だったんだぞ。しかも高校の卒業式。

まぁ、吸血鬼だし別に老けたりしねーけど、パスポートの写真にそれはちょっとどうかと思うよ、俺は。正直加工がメチャクチャ大変だった。

つくづくエルメスには手を焼かされる。

まぁ、そんな感じで紆余曲折あって、パスポートの偽造は完了した。

で、城に火を放ってすべてを燃やし尽くした。もうフィレンツェっていうかイタリアにもヴァチカンにも戻ってくることはないと思うし、あの城での思い出は、良い事以上に悪い事の方が強く残ってしまったから。過去には執着しない、もう、後戻りしないって言う覚悟も含めて。

そんで、アーサーが前に買ったって言ってた飛行機で、アーサーの棺も一緒にインドに行った。

で、すぐにまた一大事だよ。屋敷に着いてシャンティの顔見た瞬間エルメス号泣。で、シャンティはシャンティでアーサーたちがいないって知って号泣。俺ら呆然。ていうか、早く屋敷に入れろみたいな。

二人とも全然泣き止む気配がなくて、俺らも正直困ったっつーか、ぶっちゃけ俺はキレそうでした。

そしたらスニルが気ィきかせてくれて、とりあえず屋敷に入れたんだけど、またこいつらが本当にアーサーを崇拝してたんだな。アンタの部屋そのまま残してるんだよ、誰も手を付けずに、アーサーだけの部屋だからとか言って。それでまたエルメス号泣だよ。泣かせてくれるじゃねーの。いい加減俺はウンザリだけどな。

その後もウンザリの連続だよ。アーサーの部屋にとりあえずアーサーの棺を置いて、エルメスもアーサーの部屋がいいって言って、まぁ、そこまではいい。

アーサーの傍でアーサーの帰りを待ちたいって気持ちは俺にもわかるしな。インドに行く前だってアイツ自分の棺に寝ないで、泣きながらアーサーの棺の前で過ごしてたんだ。

アーサーの棺に伏して、アーサーの紅い結晶を握りしめながらポロポロ涙零して

「会いたいよ、早く帰ってきて」

何度も何度もそう言いながら。吸血鬼じゃなかったら病気になるんじゃねーかって思う。

本当にエルメスにとってはアーサーが全てなんだよ。もし、あの時アーサーが

「必ず帰ってくるから待っていてくれ」

この一言を言わなければアイツは死んでたと思う。

その一言だけでエルメスは生きてるんだよ。パンドラの箱に残った小せぇ希望に縋り付いてるみたいに。

エルメスは言ってた。アーサーの為に生きてアーサーの為に死ぬんだって。そう言う契約をしたんだって。アーサーは約束は絶対破らないから、自分が破っちゃダメなんだって。

それを言えるようになるまで、アイツもかなり悩んでたんだけど。最初はさ、仲間も全員居なくなって、こんな思いを抱えながら、帰ってくるかもわからないマスターを一人で待ち続ける事なんかできないって、そう言って死のうとしたくらいだったしな。

それでも、アイツはアーサーの為に待つことを決めたんだよ。もし、アーサーが生きてて、帰って来た時に自分が居なかったらアーサーが辛い思いをするからって。もう、アーサーを一人ぼっちにはさせないんだって。

俺だって、いつまでもあんな風に泣いてるエルメスを見ていたい

わけじゃないし、アーサーが帰ってきてくれたらどんなにいいかって思う。

でもな、それを踏まえてもあり得ねーんだよ。あのバカ女の我儘炸裂だよ。

「一人じゃ寂しいから、みんな一緒の部屋でいいじゃん」

もう、ちょっと俺は本当に眩暈がしたよ。あんな面倒くせぇ女とそこまで、２４時間いるなんて耐えられない。俺は基本自由人だから無理。できる事なら２３時間一人でいたい。俺には無理。つーかどうやったら１２台もベッドが入るんだよ。野戦病院じゃあるまいし。

勿論、全員大反対だよ。シャンティ達ですら反対した位だ。当然だよな。そしたらまさかのご指名だよ。

「ランスとカイは一緒じゃなきゃ絶対イヤ！」

もう本当アイツ殴っていいか？　このメンバーの中で俺が一番嫌がってんの。一目瞭然なの、それは。それを無視しての我儘放題だよ。これは正直アーサーの監督責任だと思う。甘やかしすぎだ。

そっからはまぁ想像つくと思うけど、いつもどおりの大喧嘩だ。

「いいじゃん！　なんでダメなの？」
「お前がウザいから」
「ウザくないよ！」
「いや蜘蛛の巣よりウザい。ていうか、逆になんでだよ！」
「だって、一人は寂しいし怖いもん」
「じゃぁランスだけでいいじゃねーか！」
「ダメだよ！　ランスは癒し系でカイは励まし系なんだから！」
「意味わかんねぇよ！　面倒くせーんだよてめーは！　ガキじゃねーんだから寝れるだろ！」
「無理！　もう！　なんで我儘言うの！？」
「おま・・・ちょっと待て、俺が我儘なのか？」
「そうだよ！　私に忠誠を誓うって言ったのカイじゃん！」
「いや、言ったけどよ、そう言う事じゃなくてだな。物事には限度ってもんがあんだろうが」
「忠誠を誓うってことは絶対服従って事だよ？」
「それは違う！　それはお前間違った認識だ！　その暴挙が許されるのはアーサーだけだ！」
「暴挙なの！？　なんで私はダメなの？」
「お前がダメじゃなくてアーサーが特殊なんだよ！　わかったら諦めろ！」

　このやり取りでわかってもらえると思うが、アーサー、アンタのせいだ。妙な親の背中を見て育つからこういうアホな子供に成長するわけだ。
　以前ジュリオ様に部下の教育がどうのこうの言ってたけど、エルメスを見る限り、アーサーの教育方針にも十分問題があったことは明白だ。

で、何がムカつくってこれでも諦めなかったアイツの無駄な執念深さ。ずっとガキみてぇにヤダ！　つってゴネて鬱陶しいことこの上ない。しかも涙目で、段々泣きそうな顔になってくるし。え、なにこれ。俺が虐めてるみてーじゃん、みたいな。

もうさ、今がこんな状況じゃなかったらブッ叩いてるところなんだけど、状況が状況なわけじゃん。俺ら的にはこれ以上エルメスを余計なことで泣かせたくないわけじゃん。もはや今の俺はエルメスに対しては聖人の域に達してるわけじゃん。

だからアイツに泣かれるとスゲェ困るわけよ。アイツ泣かせたら犯罪者扱いなわけよ。うわー、カイ、エルメス泣かせた、みたいな視線が俺にとっては毒劇物なわけよ。今の俺にとってはエルメスの「涙ながらの訴え」は最終兵器に等しいわけよ。頼むから泣くな！　何でも言う事聞くから！　くらいな勢いなわけよ、実に不本意ながら！

そういうわけで、この件に関しては、こいつは折れることはないんだろうなって渋々俺の方が諦めた。

「あー！　もういいよ！　わかったよ！　そこまで言うなら一緒の部屋にしてやる！　でも、俺の眠りを妨げたり俺の生活の邪魔したら有無を言わさずお仕置きだからな！」
「うん！　わかった！　ありがとう！」

俺が諦めて話がまとまった瞬間、アイツお礼言って笑ったんだけど、久しぶりにアイツの笑顔を見て、なんかすげぇホッとした。

アイツあれからあんまり笑わなくなって、まぁ当然なんだけどさ。笑う事があっても愛想笑いっつーか、営業スマイル。いかにも、な笑顔。

「みんな心配しないで、私は大丈夫だから」

ってかんじの。なんか自分に言い聞かせて、俺らに気ィ遣ってるみたいな取ってつけたような笑顔だったんだけど、その時エルメスは前みたいにちゃんと感情のある顔で笑った。

だから、まぁこの決定が不本意には違いなかったけど、それに釣り合う代価かなとは思った。

とりあえず話がまとまったから、俺はアーサーの部屋の寝室のベッドで寝ることにした。俺達棺持ってねぇし、あったとしても生まれた土地の土なんて無いどころか、それがどこかも覚えてねぇしな。寝室が無駄に広かったおかげで、ランスのベッドも運び込めたし、エルメスとアーサーの棺も運んだ。

で、こっからちょっと面白いんだけど、またエルメスの我儘が炸裂。

「ランス、一緒に寝よっか！」

「え？　エルメス様は棺でお休みになった方がよろしいんじゃありませんか？」

「いーの！　私と一緒に寝るのイヤ？」

「い、イヤじゃないですけど、でも・・・」

「じゃぁいいでしょ？」

「ダメです！」

「どうして？　私の事キライ？」
「好きです！　だからダメなんです！」
「意味わかんないよ！　ホラもう我儘言わないの！」

結局、エルメスは勝手にランスのベッドに潜り込んで、暴れるランスを押さえつけて一緒に寝てる。

多分ランス的には

「エルメス様と一緒に寝るなんてドキドキして眠れません！」

て事なんだと思う。アイツ残酷だよな。ランスが今まだ１０歳だからいいものの、１５歳とかだったら気の毒すぎる。

ていうか正直すげぇウケるんだけど。アイツのああいう男の気持ちを理解しないところは、見てる分には最高に面白い。

さすがはバカの象徴だ。やっぱりアイツのバカなところは長所だと思う。

で、それが数時間前までの話。もうそろそろ朝になるから、インド逃亡生活１日目が終わるところ。

とりあえず、今日までの流れをざっと書いてみたけど、もっと詳しく知りたいならエルメスに聞け。俺は話すの面倒くさいし、俺の主観でしか語れないからな。

今日の所はこれで終わり。これから毎日書くかはわかんねぇけど、なんかあったら書こうと思う。

でも、できればこの報告書の数が増えないことを祈る。

さっさと帰ってこい。じゃねーと、その内愛想尽かされて本当にランスに横取りされるかもしんねぇぞ。

以上

ＦＩＬＥ－１　Ｃｏｍｔｅ　［伯爵］（後書き）

登場人物紹介

■カイ［俺］
本編の主人公。エルメスのシュヴァリエ筆頭で親友。
エルメスを心底バカだと思っているが、心底大事にも思ってる。
博学多才、頭脳明晰、眉目秀麗、品行方正、完璧と優秀の体現者、
それが俺！と思い込む、人格の破綻した自由人。
好きな言葉　独立自尊

■エルメス
今のところペンドラゴン一族のトップ。先の戦争で家族を失って傷心中。
アーサーを見て育ったせいか、傷心中なせいか我儘が加速中。
アーサーの帰りを待つため、カイ達と行動を共にする。
好きな言葉　日進月歩

■アーサー
エルメスの主人。ペンドラゴン一族本来のトップ。現在消滅中。
必ず帰ってくると約束したものの、いつ帰ってくるかはわからない。
本当に帰ってくるのかもわからない。どこにいるのかもわからない。
アーサーの愛がどこに行くのかもわからない。
何を考えているのかもよくわからない。
作者ももてあます謎の男。
好きな言葉　難攻不落

FILE―2　Charisma　［カリスマ］

シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動報告

今日も俺は寝起き早々ウンザリさせられました。むしろ泣かされました。助けろ。

いや、冗談抜きで泣いた。マジでアーサー、アンタどんな躾してんだ。本当にどういう教育をしたんだ！　俺は腹が立って仕方がない！

何がそんなに悲しいって、目が覚めたらエルメスが「おはよう」ニッコリだよ。普通だって？　普通じゃねーよ。俺寝起きね。エルメス眼の前ね。おかしいだろ。

目開けて速攻ギョッとしたぞ。昨夜ランスと仲良くネンネしてたやつが目の前にいるっておかしいだろ。どういうことだ。

「いや、ていうかお前なんでいんの」

「だってランス朝になったらいなかったから・・・」

ランスは人間だし普通に朝起きてベッドから出たようで、途中でランスがいないと気付いたエルメスは寂しくなって俺のベッドに潜り込んできたらしい。運悪く昼間はシャンティ達は仕事でほとんど

出払ってるらしいし。さっそく俺の生活は崩壊だよ。マジ勘弁してほしい。

まさか寝起き早々涙で枕を濡らす羽目になるとは思わなかった。マジ俺可哀想。昨日の俺を拷問の末殺してやりたい。

「あぁもう！　だから嫌だって言ったんだよ！　超うぜぇ！　邪魔すんなって言っただろーが！」

「邪魔なんてしてないよ！　じっとしてたよ！」

「そういうことじゃねーよ！　勝手に人のベッドに入ってくるな！」

「だってランスがいないんだもん！　目が覚めた時誰もいないと怖いんだもん！」

エルメスのその言葉を聞いてようやく理解できた。あいつは自分が一人ぼっちになったことが怖くて、それを体感したくなかったんだとわかった。

まぁ、それを差し引いてもあり得ないけどな。

「いや、わかる。わかるけどな、お前はわかってねぇみたいだけど、俺一応男ね。わかるか？」

「バカにしすぎだよ！　そのくらいわかってるよ！」

「全然わかってねーじゃねーか！　仮にこのタイミングでアーサーが帰ってきたら俺が殺されるんだけど！　その辺わかってるか！？」

「え？　なんで？」

「・・・いや、もういい」

もうさ、本当さ、昨夜ランスで笑って申し訳なく思ったよ。マジでアーサー怒んないでよ、俺は全然悪くないから！　全く持って悪

くないから、むしろ被害者だから！

ていうかその後も、エルメスは俺がいるのに普通に着替えるわけよ。そりゃ前にアイツとストリップ剣劇で立ち回りしたけど、だからって気を抜きすぎだと思う。多分アイツの中で俺の性別は存在してないんだな。

こんなに他人に気を遣ったのは初めてだ。多分俺ハゲるぞ。もしくは精神分裂症とかになる。

頼むから俺が発狂する前に帰ってきてくれ。今すぐ帰ってこい、頼むから。土下座するから。マジアイツうぜぇ。前からウザかったけど一層ウザさに拍車がかかってる。俺の手に負えるようなレベルじゃねぇ、なんとかしろ。誰か変わってほしい。

寝起き早々地獄に突き落とされた可哀想な俺だったわけだけど、唯一の救い。

「カイとランスがいてくれたから怖くなかったよ！　ありがと！」

まぁ、アイツの素直な性格は財産だと思う。正直金輪際こういう事は御免だけど、エルメスがちょっとでも元気になるなら同室くらいは許してやってもいいかなーとか思ってみたりした。

エルメスは強い奴だけど、だからってなにもかも一人で我慢させるのは可哀想だ。一生エルメスの傍にいるって誓った以上は、アイツが辛さとか恐怖とかを克服する手伝いをするのも俺の仕事だ。あんなんでも一応俺たちの「ご主人様」なわけだし、おもりぐらいはしてやんねぇと。

「あ！　良い事思いついた！　今日から3人川の字で寝ればいいん

だ！」

前言撤回。やっぱ無理。俺程度の才覚じゃ面倒見きれませんよご主人様。アイツの笑顔に騙された。アイツがバカだってことを一瞬忘れてた俺が憎い。

とりあえず、その後エルメスをシカトしてシャンティ達に俺とエルメスとガラード達とで事の顛末を説明した。

アーサーの事やジュリオ様の事、スパイ活動の事なんかはそれぞれ俺たちも知らない事実もあったわけだし、説明は分担しながらだったんだけど。

正直俺も“オペレーション・ヴァルプルギス”の事は直前まで知らされてなかったから、ガラードから話を聞いてやっぱりちょっと辛かったな。

最初ジュリオ様からその作戦を聞いたときは、裏切られたって言う思いと、裏切らなければならないって言う罪悪と、ジュリオ様への忠誠と、エルメスへの友情とで八方塞がりになって結局止めることが出来なかったし。

なんといってもこのインドの屋敷はスレシュの屋敷だし、俺の両親を殺して俺を誘拐した犯人の家だと思うとなんとも複雑だ。まぁ、今の住人は無関係だってわかってるけど。

フィレンツェにいた時は、俺は本当にジュリオ様がエルメスを愛していて、呪いから解放されたがってるんだって信じて疑わなかっ

た。だから、あの戦争は正に寝耳に水だったんだけど、ジュリオ様の気持ちもわからなくはない。

確かにあの時ジュリオ様の言っていた通り、ジュリオ様の復讐は正当性があると思う。どう考えたって呪いの種を蒔いたのはアーサーであって、襲撃されてもしょうがないと思う。だけど、ジュリオ様のやり方は、ダメだ。

アーサーを絶望の底で殺す為に、羊のふりをしてエルメスやみんなを、俺達をも騙して、もしジュリオ様の計画通りになったとしても、その後俺はそれまでのようにジュリオ様を信頼して着いて行けたかと考えると、答えはＮＯだ。

俺は心底ジュリオ様を信頼していたし、だからこそエルメスまで騙していたことが悲しかった。ジュリオ様はわかっていたはずだ。俺がどれほどエルメスを大事な友達だと思っていたか。それをわかっていて、その事を利用されたことがとても悲しかった。その事を無下にされたことが辛かった。俺はあの人を父親のように思っていたから、余計に。

あの人は、アーサーに裏切られて相当辛い思いをして来たんだ。だから、化け物になった。なってしまった。

あの人を化け物にしたのはアンタだ。アンタが招いた事態だ。だけど、呪いの種を蒔いたのはアンタだけど、それを育てて呪いの花を咲かせたのはジュリオ様だ。結局ジュリオ様も弱い化け物だったって事だな。

俺やガラードからジュリオ様の話を聞いてシャンティ達は当然怒ってたよ。昔の事なのにって、エルメスやミラーカさん達は関係ないのにって。クリシュナさんを殺した黒幕だったなんて許せないって。まぁ、その感想は当然だと思う。けど、それを聞いたエルメス

は驚くべきことを言った。

「それはそうなんだけど、でもジュリオさんは可哀想な人なんだよ。本当のジュリオさんはとってもいい人なの。心の底から“ミナ”を愛してただけなんだよ。悪いのはアーサーさんと私なの。ジュリオさんに呪いの種を植え付けて、ジュリオさんの苦しみに気付いてあげられなくて、より一層ジュリオさんを苦しめた、私にも罪があるの」

それを聞いてさすがに全員絶句した。アイツはあれほどの目に遭っていながらジュリオ様を許そうとしてるんだ。そんな心情を持てることが信じられなかった。アイツが自分の愛する夫や家族を失ったのはジュリオ様のせいなのに。アイツもジュリオ様と同じように裏切られて、愛する人を殺されてしまったのに。

エルメスはアーサーやジュリオ様とは違う。いや、もしかしたら一緒ではいけないと思ったのかもしれない。きっとジュリオ様を許しても、その理不尽を許すことはないだろうとは思う。でも、それでもアイツは罪だけを憎んで人を憎んではいけないと思ったんだろう。

ジュリオ様を憎み続けても、それに囚われるだけってのは目に見えてるから。8年前に復讐をしないと決めたということもあるんだろう。アーサーやジュリオ様って言う前例があればなおのこと。それで苦しむ姿を見てきたのなら尚更。

エルメスはきっと苦しむのは自分で最後にしたいと思ったんだろう。もしエルメスがジュリオ様を憎んで、ずっとずっと憎み続けたら、呪いの種を蒔いたアーサーも、今でもジュリオ様を嫌いになれ

ない俺たちも、ジュリオ様を憎むエルメスを見て苦しむとわかってるから。

アイツは今生きている奴らの為に、前に進む努力をしているんだ。死んだ人達に後ろ髪引かれながら、必死に。自分一人で全部を背負って。アーサーが種を蒔いてジュリオ様が育てた呪いの花を摘んだのは俺だったけど、摘んだだけならまた蕾をつけたかもしれないそれを、呪いの樹ごと切り倒して枯らせようとしている。

エルメスは本当に強いよなぁ。エルメスの力になってやりてぇけど、呪いの樹がデカすぎて、俺程度の才覚じゃ力になれないんじゃないかって自信失くす位だってのに。

でも、やっぱりアーサーが帰ってくるまでは、なんとかエルメスが立っていられるくらいには力になってやりたいと思う。できるかはわかんねぇけど。多分そう思ったのはシャンティ達も同じだな。

「ミナ様、アンタがそう言うならあたし達はもう何も言わねぇよ。でも、無理すんなよ、一人で我慢すんな。ミナ様がインドを出る時に言っただろ。復讐はしない方がいい、後悔するよって。よかったじゃねぇかよ、カイがいて。カイがいたから、復讐せずに済んだんだろ。呪いの連鎖を止めてくれたんだろ。

「それに、こうも言ってたよな。シャンティはもう一人じゃないんだから、みんなで幸せになることを考えてって。それはミナ様だって同じなんだぞ。ミナ様の為に一緒に生きようって言ってくれる奴が傍にいるんだぞ。ミナ様をそれほどまでに大事に思ってくれる奴が傍にいるんだぞ。ミナ様が我慢して周りの奴らだけ幸せになっても意味ねぇよ。ミナ様だって幸せになれる様に、あたし達も傍にいるから。ミナ様は一人じゃないから、だから一人で泣くなよ」

それを聞いたエルメスはありがとうって言いながら泣き出して、シャンティはそんなエルメスを抱きしめながら一緒に泣いていた。俺達だけなら正直不安だけど、シャンティ達もいるなら大丈夫そうだ。

アイツいい奴だな。エルメスの事が本当に好きなんだな。シャンティの言葉から察するにシャンティも色々あって乗り越えてきたんだろうな。多分、エルメスの存在もあるんだろう。

今のエルメスに必要なのは、同情してくれる偽善者じゃなくて共闘してくれる戦友だ。その点シャンティはいい相棒なんだと思う。

インドに行くようにあらかじめ指示してたアーサーの采配は大当たりだったわけだ。つーかアンタまさかここまで予測してたのか？

自分が消えることも？　だとしたらやっぱりアンタは恐るべき策略家だな。敵わねぇはずだ。

とりあえず説明を終えた後、エルメスとシャンティは話したいことがあるっつって二人でシャンティの部屋に入って行ったもんだから、残された男どもでアーサーたちの思い出話でもすることにした。

どうでもいいけど、この屋敷における男女比率って異常だな。25対2ってあり得ねぇ比率だよな。どうにかなんねぇの？　まぁ、いいんだけど。

アイツらはアーサーたちと出会ってからどういういきさつでアーサーたちに仕えることになったのか、エルメスの結婚式とか、テロ

騒動とか、イスラムの襲撃とか色々教えてくれた。

聞けば聞くほどエルメスってバカだな。とりあえず、アーサーも苦労したんだな。同情する。んで、これからは俺らが苦労するんだろうなと思うと、もう既に面倒くせぇ。つーか既に苦労してる。同情しろ。

そういえば、こいつらとアーサーが出会ったいきさつを聞いて思ったんだけど、さすがだな。こいつらはみんなアーサーの事を英雄視してる節があるけど、実際違うだろ。

こいつらを雇用した理由は４つ。

1．化け物に仕えさせるのに不可触の民、いわゆる無戸籍の孤児の方が都合が良かった。
2．不可触の民は常に救いを求めているから、救ってくれる人間を裏切ることはない。
3．仮に裏切りを働かれても殺してしまえばいい。不可触の民なら家族も戸籍もないから周りから不審に思われることもない。
4．なによりシャンティを気に入った。

正解だろ？　なんでわかったって？　そりゃわかるよ。ジュリオ様と似たようなもんだからな。ただジュリオ様と違う点は、アーサーに家族がいたことだな。仮にアーサーがジュリオ様と同じようにこいつらを駒としか思っていなかったとしても、エルメスや他の人たちは違っただろ。

こいつらが言ってたぜ。根気よく自分たちに教育を施してくれたミラーカさん、禁を犯したと知っても、それを隠して真実を教えてくれたボニーさんとクライドさん、いつも自分たちを世話して労ってくれたクリシュナさん、いつも優しくしてくれたエルメス、そして何より、自分たちを拾ってくれたアーサーに心から感謝してるって。

アーサーはさ、本当はこいつらに吸血鬼ってバレた時点で殺そうとでも思ってたんだろ。でも家族がそれを許さない。こいつらに関わって、こいつらから信頼を得て、みんなもこいつらを信頼したから。特にエルメスあたりが猛反対しそうだしな。だろ？

それにアンタ自身も感化されたはずだ。レヴィが言ってた。イスラムが襲って来た時、一緒に戦いたいって申し出たシャンティにアーサーが言った言葉が忘れられないって。

「私に恩を返したいと思うなら、生きてここから逃げろ」

お前たちに死なれたら辛いからって言ってもらったような気がして、すげぇ嬉しかったってさ。

こいつらとアーサーたちとの関係を聞いて思ったよ。もしジュリオ様にも家族がいたら、俺達も違っていたのかなーって。誰かがあの人の心を支えてやってたら、化け物になってなかったんじゃないかって。

もしかしたら、ジュリオ様はヴァチカンに来たのは間違いだったのかもしれない。あのまま、イギリスでヘルシング卿に仕えてた方が良かったのかもしれない。まぁ今更考えてもしょうがねぇけどな。

でもアーサー、アンタはやっぱりスゲェな。さすがに王様だよアンタは。アーサーにエルメスや家族がいたのはたまたまじゃねぇな。アーサーはあんなに傍若無人で自己中でヤな奴なのに、アンタに関わった人間はみんなアンタに着いて行きたくなる。

まさにカリスマだな。

こいつらも、シュヴァリエの奴らも、エルメスも、クリシュナさんも、ミラーカさんも、ボニーさんも、クライドさんも・・・あ、でもアンタ北都とは異常に仲悪かったよな。まぁ、北都はシスコンだったからしょうがねぇか。北都にしてみりゃクリシュナさん以外、エルメスに近づく奴は許せねぇんだろ。

そういえば、クリシュナさんはここで亡くなったんだってな。エルメスを庇って死んだって前にエルメスから聞いたな、そういえば。女の為に自分の命を懸けて守るってスゲェよなぁ。クリシュナさんこそ正にシュヴァリエじゃねぇか。クリシュナさんも吸血鬼だったみてぇだけど、あの人に限っては名前の前に“聖”がついてもいい気がする。

クリシュナさんとエルメスはそりゃもう仲が良くて、クリシュナさんはエルメスをすっげぇ大事にしてたってこいつらも言ってたし、俺の見る限りもそうだったな。アンタ、クリシュナさんに勝てねぇんじゃねーの。あの人を超えるのは相当苦労しそうだぞ。

まぁ、帰ってきたら目一杯エルメスを大事にしてやれ。せいぜい頑張れ。って俺は何者だよ。

とりあえず、さっきから

「カイ、何してんの？　何書いてんの？」

ってエルメスがうぜぇから、今日の所はこのへんで報告を終わる。

以上

ＦＩＬＥ―２　Ｃｈａｒｉｓｍａ　［カリスマ］（後書き）

登場人物紹介

■ジュリオ
故人。カイの育ての親であり、元主人。エルメスの為にカイが殺害した。
エルメスやアーサーを裏切り、先の戦争を引き起こした張本人。

■ランス（ランスロット）旧：レミ
シュヴァリエ幹部の一人。現在１０歳。ペンドラゴン一族において唯一の人間。
いずれはエルメスに吸血鬼化してもらう予定。
エルメスを慕いついてきて、次期旦那の座を虎視眈々と狙う腹黒美少年。
好きな言葉　私利私欲

■ガラード　旧：ジョヴァンニ
シュヴァリエ幹部の一人。エルメスの唯一の支配下の吸血鬼。
エルメスに命を助けてもらった為に忠誠を誓った。
最近まで人間だったのでまだ２０歳と若く、世間知らずで青臭いところがある。
好きな言葉　雪中松柏

■シャンティ
インドの屋敷の女主人。かつてアーサーに拾われてそのことをとても感謝している。

エルメスとも仲良し。元盗賊団のリーダーだった為、若干ガラが悪い。

好きな言葉　臥薪嘗胆

■クリシュナ

故人。アーサーの兄であり、エルメスの夫。先の戦争にて戦死。

人格者で博識で愛妻家というスーパーマン。

彼の思想はエルメスに多大な影響を与えた。

エルメスにとっては幸福の象徴そのものであり、尊敬の対象でもある。

FILE－3　Chat　［お喋り］

シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動報告

なぁ、なんで俺の周りにはムカつく奴しかいねぇんだ。俺が一体何をした！

発端は昨夜だよ。昨夜は結局エルメスとシャンティは夜中まで話してて、それから飯食って風呂入ってだから、部屋に戻ってきたのはもう夜中の４時を回ってたわけだ。

暇だったのか構って欲しかったのか、報告書を書く俺に付きまとって鬱陶しかったんだけど、シカトしてたらその内諦めたようで寝ると言い出した。でも、その時にはすでにランスは寝てて、エルメスは困惑した。

「カイ、一緒に寝ていい？」
「ざけんなバカ！　それはもうやめろって言ったじゃねーか！」
「静かにしてよ、ランス起きちゃうじゃない」
「・・・とにかくダメだ。絶対許さん。そこまで面倒見きれるか。そこまでする位なら死んだ方がマシだ」
「死ぬとか言わないでよ！　バカァ！」
「お前が一番うるせぇよバカ」

エルメスが見当違いなところで大声を上げるもんだから、案の定ランスが起きてきた。

「うー・・・二人とも、どうなさったんですか？　こんな夜中にケンカですか？」

「あぁ、ワリーな。ホラ、ランス起きたんだから一緒に寝ればいいだろ。つーか、よく考えたらランスが寝てても一緒に寝ればいいじゃねーか！」

「やだよ！　寝てる人の隣で一人起きてるのは寂しいの！　一緒に寝付きたいの！　何のために二人と同室にしたと思ってるの！？」

「おま・・・計算済みかよ！　つーか交代制！？」

「そーだよ。夜はランスで、昼はカイだよ」

「ちょ、ちょっと待ってください！　どういうことですか！？」

会話が飲み込めないらしいランスに昼間のことを話してやると、ランスは顔色を変えた。まぁ当然だ。

「つーわけでランス、お前エルメスが目覚めるまでベッドから出るな」

「そうですね、そうします。エルメス様ダメじゃないですか。男は狼なんですよ？」

「待て待て、ランス？　お前どこでそんな言葉覚えてきやがったんだ？　つーか迷惑してんのは俺の方なんだよ！」

「エルメス様、カイ様は前科者なんですからちゃんと気を付けましょうね？」

「え？　うん、わかった」

「わかったじゃねーよ！　つーかなに前科者呼ばわりしてんだ！　つーかシカトすんな！」

「何をおっしゃるんですか。前科者なのは事実じゃないですか」
「昔の事じゃねーか！　すっかり忘れてたんだけど！」
「加害者が忘れても被害者は心に傷を負っているものですよ。カイ様は一応シュヴァリエ筆頭なんですから、ちゃんと騎士らしくしてください。さ、エルメス様寝ましょうか」
「うん。カイおやすみー」

結果的には俺の望むとおりになったんだけど、全然釈然としねぇ。つーか超ムカつく。あのクソガキ、シバキ回した上に吸血してブチ殺してやりてぇ。

大体エルメスもその話題が出る度に「そういえば」みたいな顔してんじゃねーか。アイツも忘れてんじゃねーか。なんで俺ばっかり文句言われるわけ？　スゲー腹立つ。なんなの？　つーかなんでランスが知ってんだよ。マジ怖えぇ。何者だよアイツ。

え？　ていうか俺が悪いの？　俺が悪いの？　いや、俺は悪くない！　仮に俺が悪かったとしたらそれは昔の俺だ！　今の俺は悪くない！　だろ？　頼むからそうだと言ってくれ。今の俺にはアーサーしか頼りにならん。絶対俺は悪くない。と思う。

で、今日目が覚めたらもうエルメスもランスも起きたようで部屋にはいなかった。やっぱり素晴らしいな、一人って。最高だな。昨日が最悪だったからより幸福を感じる。孤独を愛する男、俺。そんな俺にとって今の環境は地獄と同義語なわけだ。

でも、ランスがいるなら俺は別室でもいいだろ。そう思ってシャンティに別室を賜ろうと相談したら、なんでか知らんが白い目を向

けられた。

「あぁ、そーだな。アンタみたいな危険人物をミナ様と同室にするのは危ねーからな」

ランス！？　てめぇ何喋ってんだコノヤロー！　よく見たらほぼ全員から白い目線を感じる。なにこれ、俺はこんな孤独は望んでねぇぞ。

リオ　「はーぁ、なんだかんだ言ってさぁ、副長も結局はその程度の男なんだよね」
ガルフ　「セクハラどころか犯罪者じゃねーか。それでも聖職者？　生殖者の間違いだろ」
ディナ　「副長最低ー。2次元の趣味を3次元に持ち込むなよ」
ランス　「カイ様は本当にヒドいお方ですね」
トリス　「ていうか、副長だけズルい」
ユアン　「お前それは違くね？」

もうあり得ない。なにこれ。俺可哀想すぎじゃね？　もうこれはイジメだよ。迫害とも言う。アーサー、アンタになら俺の悲壮が分かるはずだ。

俺が何かしましたか。いや、してねーよ。うん、しようとしただけで実際は何もしてねぇ。俺は何もしてねぇ！　なのになんだこの扱いは！　俺が何をしたって言うんだ！　冗談じゃねぇぞ！

俺　「うるせぇよてめーらは！　俺はまだ何もしてねーの！

ふざけんな！」

パーシー「まだってなんだよ！　これからすんのか！」

気の毒な俺「しねーよ！　つーかお前ら面倒くせぇ！　黙れ！」

キルシュ「被告からは反省の色が窺えませんね。有罪」

可哀想な俺「誰が被告だ！　何様だてめーは！」

ベディ「検事、求刑の弁論を」

ガラード「裁判長、極刑を望みます」

何故かバカどもが裁判を始めやがって、いい加減イラついて銃を取り出そうかと思っていたところで、エルメスが間に割って入って来た。

「異議あり！　もういいじゃない。面倒くさいし。私別に怒ってないし、カイはカイなりに反省してるんだから、ねぇ？」

「そーだぞお前ら！　いい加減にしろよ！　俺は無罪だ！」

「反省してる素振り位見せようよ・・・まぁいいけど。部屋はランスがいてくれるならカイの好きにしていいよ」

「やった！　さすがだなお前！　さすがにこの俺様が主と認めただけはあるな」

「結局自分を褒めるんだね・・・」

「いやいや、もう本当忠誠を誓いますよ、エルメス姫」

「誰が姫・・・まぁいいや」

もうさすがだな。エルメスの博愛主義は賞賛に値する。アイツがここまで寛容なのは多分アーサーの躾が行き届いていたおかげだな。アーサーが普段からエルメスに無茶ブリかましていたおかげで、ちょっとやそっとではコイツは怒ったりしない。よく調教されてる。さすがアーサーはやることが違う。

ガルフ　「ていうかエルメス原告じゃん。なんで弁護してんの？」
ディナ　「エルちゃんあまーい！」
ベディ　「性犯罪は再犯率高いんだぞ！」

バカどもが何か言ってるけど、エルメスが俺に着いたならただの野次に過ぎない。

従僕な俺「諸君、黙りたまえ。姫はやめろと言っておられる。姫の命令に逆らうな」
ペレアス「副長がそれ言う！？　ていうか誰だお前！」
忠臣な俺「黙れ。エルメスには絶・対・服・従だ。金輪際この話題を出すな。出したら殺す。それと俺はもう副長じゃねぇ。筆頭と呼べ」
ペレアス「急に忠臣ぶりやがって・・・」

アホどもはまだブーブー言ってたけど、俺圧勝。見事なまでの起死回生。さすが俺。
落ち着いたところでソファに座ったら、エルメスの隣でシャンティとレヴィが大きく溜息を吐いていた。

「まぁ、このお姫様にその手の話題が尽きないのは今に始まったことじゃねぇしな」
「そうだな・・・」
「は？　なに？　どういうこと？」

俺も含めてシュヴァリエ全員がシャンティ達に振り向いて、なんかエルメスが慌てだした。もう俺はこの時点で半分くらい読めた。
消去法で行けば簡単なことだ。

「あーハイハイ、俺わかった。アーサーだろ」
「おぉ、正解。あの不倫騒動はびっくりしたよ。しかも結婚式当日に発覚してるし」
「不倫・・・エルメスお前スゲェな。大体アーサーとクリシュナさん兄弟じゃねぇか。お前どんだけビッチだよ」
「誰がビッチよ！　ていうか違うし！　誤解だって言ったじゃない！」
「でもアルカード様は認めてたし、事実があるのに誤解っておかしくねーか？」
「うっそれは・・・でも違うの！　えーと、えーと、そう！　騙されたの！　罠よ！」

どういうことかよくわからんけど、さすがアーサーはやることが違うな。兄貴の女に手を出すとはさすがだ。伊達にエロオヤジの称号をほしいままにしてねぇな。敬意をもって呼んでやろう。このエロオヤジめ。
ていうか、罠ってなんだよ。童話に出てくるバカな小娘か？　いや、普通に普段からエルメスはバカな小娘だな。
ついでに、クリシュナさんが言っていたことも納得できた。

「つーかお前さぁ、前にクリシュナさんも言ってたけど防御力低いんだよ」
「どういうこと？」
「隙だらけってことだよ。言ってたじゃねーか。付け入る隙を提供してるって」
「え？　私が悪いの？　私のせいなの？」
「そーだな。お前バカだから」
「そ、そんなバカな・・・いや、バカじゃないよ！　まぁ、でもいいや」

「いいのかよ！」

一瞬落ち込んだものの、すぐにエルメスは開き直った。ていうか開き直るとはどういう事だ。いいやってなんだよ。いいんなら遠慮しねぇぞ。と思ってたらエルメスに睨まれた。

「だって、仮にこれから何かされても、私に触れた時点で燃やすなり凍らすなりするもん」

普段バカだからすっかり忘れてたけど、コイツ強いんだった。俺らなんかよりも圧倒的に。エルメスに手を出せば間違いなく死ぬ。下手したら爆死する。それだけは勘弁だ。

「ハハハ、心配すんな。そんなことする奴ここには一人もいねーよ」
「カイ様がおっしゃっても説得力ありませんね」
「あぁ？　うるせぇ。つーかランス、てめぇ覚えてろよ」
「なにがですか？」
「クソガキが・・・まぁいい。後3年もすれば苦悩に喘ぐのはお前だ。ざまぁみろ」
「カイ様と一緒にしないでください。僕はカイ様と違って騎士で紳士ですから」

あーもうマジ腹立つんだけど、この腹黒のクソガキ。ジュリオ様と同じようなこと言いやがって。こいつも撃ち殺してやろーかな、マジで。

自称紳士な奴が一番厄介でムカつく。アーサーもクリシュナさんと喧嘩した時そう思っただろ。紳士なんて絶滅すればいいと思わねぇ？　好きに生きて何が悪いんだっつーの。

その後しばらくゴチャゴチャ話してたら、エルメスは部屋に戻っていった。それを見届けていたらレヴィが話しかけてきた。

「ミナ様、思ってたより元気そうでよかったな」

確かに、普通に喧嘩もするし元気そうではある。でも、それは多分人前だからだ。元気そうなだけで元気なはずがない。

クリシュナさんの時も似たような感じではあったけど、あの時とは違う。本当にいなくなってしまったんだから。それも全部一度に。

「きっとアイツは今頃アーサーの棺の前で泣いてるよ」

そう言うとレヴィたちは悲しそうな顔をしてた。心配、だよな。当然だ。でも、どうすることもできない。どうしたらいいのかが分からない。俺達はただ普通に今までどおりにエルメスと接してやることしかできない。

少なくとも、俺らがエルメスの前で悲しそうな顔をしちゃいけない。でも、それしか方法は見当たらないし、今は終戦直後だし何をしてもエルメスを元気づけてやることなんか出来ない。

無力だな、俺は。

柄にもなくちょっと落ち込んでたら、急にシャンティが立ち上がって俺を呼んだ。

「カイ、何ぼさっとしてんだよ。いくぞ」

「は？　行くって？」
「ミナ様のとこだよ。友達が泣いてんなら、一緒に泣いてやんのが友達だ。一人で泣かせてんじゃねぇよ」
やっぱシャンティはいい奴だ。どういう風に育てばこんなアツい奴になれるんだ。こいつもスゲェ。何でもない時に出会ってたら鬱陶しい女だろうけど、今は相当頼りになる。つっても別に俺は泣かねぇけど。
シャンティと一緒にエルメスの所に行くと、エルメスは泣いてるどころか読書中だった。俺達の入室に気付かない程熟読中だ。なんで普通に本読んでんだよ。なんで泣いてねぇんだよ。俺の発言と立場をどうしてくれんだ。
「カイ？　どういうことだ？」
「俺に聞くな」
「アンタがミナ様が泣いてるっつったんだろ！」
「そう思っただけだ！　そこまで責任持てるか！」
「アンタよくそれでシュヴァリエ筆頭とか言えるな！」
「なんでそこまで言われなきゃいけねぇんだよ！　このバカ女！」
「なんだと！　このエロメガネ！」
「んだとテメェ！」
ダメだ。俺こういう気の強い女は好きじゃねぇ。俺は一見淑女っぽく見えて、でも打算的で高潔そうな女が好きなの。ミラーカさんがどストライクだったの！　情熱的で気が強いバカ女って対極じゃねぇか。アーサー、アンタこいつのどこが気に入ったわけ？
シャンティとケンカを始めたらさすがのエルメスも気づいて止め

に入って来た。しっかりと会話の内容も聞こえてたみたいで、泣いてなくてゴメンとか言う始末。アホか。

「心配して来てくれたの？　ごめんね、ありがと」
「別に」
「プッ！　カイ照れてんじゃねーよ」
「は？　んなわけねーだろ！　そもそもお前が行くって言ったんじゃねーか！」
「アンタがミナ様が泣いてるって言うからだろ！」
「はぁぁ！？　俺のせいかよ！　エルメスが泣いてないならソレでいいだろ！」
「二人ともやめてよー！」

申し訳ない事に傷心のエルメスにケンカを仲裁させてしまった。この時はなんも思わなかったけど、後でちょっと反省した。それもこれも全てシャンティのせいだ。俺のせいじゃねぇ。

「ていうか、お前何読んでたんだ？」

少し落ちついてエルメスに尋ねたら、本を掲げてニコッと笑った。

「ダンテの神曲！　クリシュナのお気に入りだったの！　テロの時クリシュナに面白いから読んでみてって言われたけどそのまま忘れちゃってて、今思い出したの！」
「ふーん、そうか。俺も好きだぞ、神曲」
「意外・・・」
「うるせぇ。イタリア人で元聖職者なら当然だ」

「あ、そっか」

そっからなんとなく本を読む流れになって、エルメスと二人で神曲を読んでたらシャンティも覗き込んできた。

「お前読んだことあるか？」
「いや、ない」
「つーか読めんのか？」
「読めるよ！　バカにしすぎだろ！」
「あーワリーワリー」

再びケンカが勃発しそうになって面倒くさくて適当に謝ったら、エルメスが笑い出した。

「二人とも仲良しだねー！」

このバカ！　どの辺が仲良しだ！　てめーの目と耳はちゃんと機能してんのか！　もう本当俺疲れるよ・・・何とかしろよこのバカを。まぁ、笑ってるならいいけどよ。

「ちょっとミナ様、冗談キツイよ」
「はぁぁ！？　ざけんな！　お前が言うなよ！　俺のセリフなんだけど！」
「いや、あたしのセリフだっつの！　アンタこそふざけんな！」
「本当仲良しだねー。知り合ったばっかなのに。なんか嫉妬しちゃう」
「はぁ！？　バカじゃねーの！？　ちげーつってんだろーが！　バカ！」

もう本当ヤダ。なんでエルメスわかってくんねーの？　なんでアイツはあんなにバカなの？　もう本っ当疲れる。マジでインド来てから以前より溜息倍増なんだけど。エルメスと出会う前に比べて４倍なんだけど。どうしよう俺。

もー！　アーサー！　アーサー頼むよ、助けてくれ。俺溜息つきすぎて酸欠で死んじゃう。

以上

ＦＩＬＥ－３　Ｃｈａｔ　［お喋り］（後書き）

登場人物紹介

■ガルフ（ガウェイン）旧：クリスティアーノ
シュヴァリエ幹部の一人。カイの副官的存在な人。
対人格闘が得意で、それにおいてはカイよりも強い。
頭も性格も割といいのに苦労人。
好きな言葉　初志貫徹

■ペレアス　旧：クラウディオ
シュヴァリエ幹部の一人。ガウェインに続く常識人。
ぶっちゃけシュヴァリエ達の中でまともなのはこの二人しかいない。
手先が器用で、化学と工学が得意な為エルメスと趣味が合う。
エルメスが核爆弾を作るきっかけを作ったのはコイツ。

■リオ（ライオネル）旧：アレクサンドル
シュヴァリエの一人で、チャラ男３兄弟の一人。
とにかくチャラい。ウソや詐欺が得意な人を騙すプロ。
好きな言葉　自由闊達

■ベディ（ベドウィル）旧：ヨハン
シュヴァリエの一人。チャラ男３兄弟を抑止する人。
止められた試しはない。結構真面目な奴。武器萌えで制服萌え。
好きな言葉　質実剛健

■キルシュ　旧レオナルド
シュヴァリエ幹部の一人でチャラ男３兄弟の一人。
エルメスに「ヴァチカンのゴルゴ」と称される狙撃の名手。

仕事中はなかなかイイ男だが普段が残念。

■パーシー（パーシヴァル）旧：エドワード
シュヴァリエの一人でチャラ男3兄弟の一人。
武器マニア。一番好きなのは日本刀。
なので以前は剣術使いのエルメスに相当萌えていた。

■ユアン（ユーウェン）旧：オリバー
シュヴァリエの一人。乗り物好き。
彼に操縦できない乗り物は女性くらいなもの。
人知れず悩みを抱えている。

■ディナ（ディナダン）旧：ルカ
シュヴァリエの一人。ある意味紳士。
誰よりも女性に優しいが一歩間違えればチャラ男3兄弟の仲間入り。
トラップを仕掛けるのが得意&趣味で、子供のころはよくいたずらしていた。
でも逃げ足が速く、めったにカイに怒られない。

FILE－4　Cemetery　［墓地］

シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動報告

女二人に騙されるわ、何もできないわで今日の俺は散々だ。

確かにエルメスは言ったんだよ。部屋は俺の自由にしていいって。シャンティも確かに言ったんだよ。別室を用意するって。なのにまだ同室だよ。

「あ、カイ悪いな。満室だ。ウッカリしてた」

８合目まで登って突き落とされた気分だよ。ていうか本当は満室どころか俺とランスがエルメスと同室でギリギリなんだと。

「ていうか、一応一部屋空いてはいるけど使い物にならねぇんだよ」
「あ？　なんでだよ？」
「その部屋からランスのベッド持ってきたし、まぁそれだけならベッド買えば済むんだけど、ガラスは割れてるし壁も穴だらけで外壁にまで穴が開いてるからな」
「なんだそれ」

シャンティにとりあえずその部屋を見せてもらったら、マジでヒドイ有様だった。片付けすらしてねぇし、なんだこれ。

「修理しろよ」
「いや、記念に取っとこうと思って」

「記念ってなんだよ！　意味わかんねぇんだけど！」

シャンティが訳わかんねぇこと言うと思って突っかかったら、シャンティはエルメスに視線を流した。

つられてエルメスを見ると、何か知らんけど涙目。

「・・・どした？」

「ここ、クリシュナが使ってた部屋なの」

なるほど、それはわかったけど、なんでこんな荒れてんだか。でもその理由はすぐに分かった。

「実は結婚式の後にクリシュナ様の部屋で二次会したんだけどさー。そん時に不倫疑惑が発覚して、ミナ様とアルカード様が大ゲンカ始めちゃったんだよ。で、この有様ってわけ」

あぁ、なるほど。何やってんだよアーサー。手加減しろよ。いい加減にしろよ。アンタのせいで俺までとばっちり受けてんじゃねーか！　勘弁しろよマジで！

「カイ、ごめんね。本当はカイにこの部屋を使ってもらったらいいんだけど、残しておいてほしいの。だから同室で我慢してくれる？」

出た、リーサルウェポン。たーのーむーかーらー、泣きそうな顔するな。なんだよこれは。新手の脅迫か？　「ＹＥＳ」としか言いようがねぇだろうが！　さてはコレもアーサーの躾の賜物だな！？

あまりにもアーサーが自己中すぎてエルメスは泣き落としって言

うスキルを得たわけだな！　いい迷惑だ、チクショー！

渋々ＯＫの返事をして、というかどの道そうするしかねーし。結局同室のままってわけだ。

とりあえず寝起きドッキリの件に関しては、ランスが頑張ってくれているので俺は安心だ。アーサーも安心したろ。まぁ３年も経てばわかんねーけどな。３年経ってランスが助けを求めてきても絶対助けてやんねぇ。せいぜい苦しめばいい。大人の階段なめんなよ。ざまぁみろ。

つーか３年経ったらエルメス３０歳かよ。アラサーじゃねーか。なんて頼りねぇアラサーだよ。まぁ見た目はその半分くらいにしか見えねぇけど。つーかアイツ１９で吸血鬼化したって聞いたときはびっくりしたな。やっぱ東洋人ってのは幼く見えるもんだ。

それにしてもランスの趣味が良くわからん。もっと成長したら熟女萌えになるんじゃねーか。いや、もしかしてアイツ未亡人萌え？　まぁどうでもいいや。

そんな未亡人は今日もアーサーの棺の前で神曲を読んでる。もうそろそろ終わりそうだ。多分今頃ダンテはベアトリーチェに再会してるところだろう。

エルメスも、今まさにダンテと同じように地獄を旅してる。ダンテと違って水先案内人のヴィルギリウスもいない、広大で忌々しい地獄と煉獄をさまよってる。悪魔と亡者に追いつめられながら、アーサーと再会できる日を心待ちにしてるんだ。それがいつかもわか

らずに。それがどれほどの道のりかもわからずに。それがどれほどの苦悩かだけを知りながら。

そう思うと、本当にエルメスは辛い選択をしたと思う。いや、違うな。その選択をさせたのは俺だ。俺が引き留めてアーサーを待てって言ったせいだ。アーサー、頼むから帰ってきてくれ。この選択が正しかったんだと、安心させてくれ。

じゃなきゃ、エルメスが可哀想だ。もしアーサーが帰ってこなかったら、エルメスは死ぬかもしれない。そうなったら俺も生きている意味はない。エルメスはどれくらいなら待てるんだろう。時間がたつにつれて悲しみは薄れるかもしれないけど、それに比例して焦燥は大きくなると思う。

もしエルメスが待つことを挫折しそうになっても、何とか引き留めようとは思う。でも、１０年とかあまりにも時間がかかるようなら、さすがに俺も引き留め切れねぇかもしれねぇ。その時は・・・どうするんだろうな、わかんねぇ。

でも、俺はアイツと一緒に生きるって決めたから、もしアイツがどうしても待てなくて死にたいって言ったら、本当にどうしてもダメだっていうなら、その時は、許せ。

許してくれ、許してやってくれ。

それほどまでにエルメスが追いつめられてしまったら、待ち続けることを正しいと言える自信はなくなると思うから。その時は、神に謀反を企てた罪人が凍りつく地獄の最下層・コキュートスの更に奥、イスカリオテのユダが堕ちた、第４圏ジュデッカで待つことに

する。つーか結局待つんじゃねーか。

けど、そこならジュリオ様もいそうだな。3人で氷漬けになりつつルシフェルに食われつつ待っとくわ。つーかダンテは恐ろしい世界を考えるもんだ。冷凍された上に悪魔に食われるってなんだよ。どんだけ裏切り者が嫌いなんだ、ダンテは。

ま、一応今の所信じてるけどな。エルメスが待ってるんだし。きっとエルメスはアーサーを裏切ることはないし、俺はエルメスを裏切らないから、待つことにする。

しかし、俺はいつの間にこんな忠臣キャラになったんだ。正直なところ不思議で仕方がない。だって俺たちはさ、ジュリオ様にこっぴどく裏切られてるわけじゃん。ぶっちゃけ人間不信っつーの？ハイハイどうせ裏切るんでしょ、みたいな。信用？　なにそれ美味いの？　みたいな。

でも、不思議とエルメスが俺たちを裏切ることはありえない気がする。アイツは別格だ。

まぁ、そんな奴じゃなきゃ一緒に生きようなんて言わないわけだけど。多分、死神として活動している間に、エルメスに何度も助けられたからだろうな。エルメスがいつも身を挺して俺たちを守ってくれて、ガラードの命を救ってくれたから。信頼、依存と言ってもいい。ジュリオ様だってさすがにそこまではしなかった、いや違うな、できなかったのかもな。

エルメス、アイツは俺たちの“イコン”だ。

アイツには言うなよ。調子乗るから。本当もうガラードに至っては女神の様に崇めてるからな。まぁ命の恩人だし当然かもしれない。ちなみに俺はバカの象徴として崇めてるけど。崇めてることに変わりはない。そう言う事にしておけ。

今夜の空模様は大荒れだ。さっき停電になった。一時保存しといてよかったぜ。また書き直すのとか超面倒くせぇしな。マメな俺、さすがだ。そんな天気なのに、俺がちょっと部屋から出た間にエルメスはいなくなっていた。

屋敷の中を探してみても見当たらないし、まさかと思って外に出てみたら、案の定いやがった。

屋敷の裏庭でバケツひっくり返したみてぇな土砂降りの中、傘も差さずに座り込んでた。何してんのかと思って近づいてみたらエルメスの前に小さな石碑があって、摘んだばかりのような花が添えてあった。

エルメスがインドで祈りを捧げるような石碑の持ち主と言ったらクリシュナさんしかいない。そうか、これはクリシュナさんの墓なんだな。そうか、だからアーサーはインドに行けと言ったのか。

この雨の中じゃ傘なんてクソの役にも立たねぇ。足元はずぶ濡れ

だ。でも、エルメスに歩み寄って後ろから傘をさすと、エルメスは振り返らずに呟くように言った。

「クリシュナの、お墓なの」
「そうか」
「インドを出てから、今日初めてお墓参りなの」
「そうか」
「今まで、必要なかったから」
「・・・そうだな」
「でも、これからはお墓参り、しなくちゃいけない。ここで、クリシュナが眠ってるから。私が・・・来なかったら、クリシュナ、寂しがるから」

なんて言っていいか、わからなかった。エルメスの頬を伝うのが雨なのか涙なのかも、俺にはわからない。

「エルメス・・・」
「違うよ」

泣いてるのか？　そう尋ねようと思ったら遮られて、またエルメスは呟くように震える声で言った。

「・・・雨だよ」

肩と声を震わせながらそう呟くエルメスを見て、猛烈に、憎いと思った。なんで、なんで神はエルメスにこんな酷い仕打ちをするんだ。エルメスは何も悪くないのに。エルメスが何をしたって言うんだ。あんまりだ。エルメスが可哀想だ。なんでエルメスにこんな泣

き方をさせるんだ！　頼むから、声を上げて泣かせてやれよ！　泣くことくらい許してやってくれよ！

吸血鬼よりも、悪魔よりも、神の方が余程酷い。神はエルメスを救わない。神はエルメスに辛い試練しか与えない。神なんか死んだ方がマシだ。アーサー、アンタもそう思うだろ？　でも、それ以上に酷いのは俺かもしれない。泣いているエルメスを前にしても、どうしたらいいのかわからなくて、ただ、立ち尽くしている俺の方が酷いのかもしれない。

「友達が泣いているなら一緒に泣いてやるのが友達だ」

シャンティはそう言った。でも、俺は泣けない、泣き方なんか知らない。じゃぁ、エルメスが泣けるようにするしかない。せめて、素直に泣けるようにしてやりたい。

最早、無用の長物になった傘はその場に捨てた。エルメスの隣に跪いて、頭を抱えて撫でてやると、少ししたら声を上げて泣きはじめた。

今は、これしかできない。でも、これでいいんだと思いたい。土砂降りの雨が鬱陶しい。早く晴れて欲しい。

早く以前のような、晴れた日の、太陽のようなエルメスの笑顔を見たい。それまで、俺はエルメスの泣ける場所になってやりたい、

いや、ならなきゃいけない。
辛いなぁ。俺は何回エルメスの泣き顔を見ればいいんだろう。

でも、一人では泣かせたくない。その方が辛い。エルメスも、俺も。せめて、泣きたい時に泣けるようにしてやりたい。そうすれば、笑いたい時に笑ってくれるかもしれないから。

エルメスが泣きたい時に泣かないのは、自分を責めているのかもしれない。自分のせいでみんなを失ったと思い込んで、だから自分が泣いちゃいけないと思っているのかもしれない。
それに、ここにはエルメスが安心して泣ける場所がないのかもしれない。そんな場所があるとしたら、アーサーだけだと思う。でも、アーサーはいない。

エルメスにとって、アーサーは師であり、父であり、主君であり、神であり、すべてだ。アーサーが居なければ、エルメスは生きてはいけない。
エルメスはそう思ってるし、事実そうだと思う。

俺には、アーサーの代理は勤まらない。それはわかってるけど、でも俺が代わりにならなきゃいけない、そう決めた。

でも、俺は無力だ。何もできない、してやれない。どうしたらいいかが分からない。なんで俺にはわからないんだろう。今まで俺は何を見て、何を感じて生きてきたんだろう。こういう時に役に立たないことしか、俺は知らない。

いっそ、ジュリオ様が憎い。結局俺は人殺ししか知らない。俺はただの兵器だ。今までの事が、エルメスにとっては微塵も役に立たない。俺のこれまでの人生は、この一瞬で、すべてが無駄なんだとわかった。

だって、そうだろ？　エルメスを救ってやれない。俺はエルメスに忠誠を誓った。エルメスの役に立たないなら、価値はない。その考えは極端かもしれない、でも、そうなんだよ。

あぁ、悔しい、悔しい。

もっと前からエルメスをちゃんと見ていればよかった。エルメスを取り巻く人たちをよく見ておくべきだった。もっとエルメスの話を聞いてやればよかった。俺は知らなさすぎる。

アーサー、アンタならこういう時はどうするんだろう。エルメスの為に何をすればいいんだ。俺にはかけてやる言葉も見つからない。なんて言えばエルメスが救われるのかが分からない。

俺には、エルメスが泣き止むのを待つことしかできない。何もできない自分が悔しい。俺は一体何のために傍にいるんだろう。

アーサー、俺はどうしたらいいんだ。教えてくれ。

エルメスを救えるのはアーサーしかいないんだ。俺じゃダメなんだよ。

アーサー、お願いだ。早く帰ってきてくれよ。エルメスを、助けてくれ。

ＦＩＬＥ－５　Ｃｒｙｂａｂｙ　［泣き虫］

報告

シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動

連日愚痴で悪いと思ってたが、今日はちょっと良い報告だ。

この前の墓参りの日から、エルメスは少しだけ弱音を吐くようになった。今までアイツは辛いとか苦しいとか俺たちに直接言う事はなかったから、多分良い事なんだと思う。

あの墓参りの後、俺も考えてみた。俺はいつも文句はポンポン言うのに、よく考えてみたらそれ以外の事をほとんど言わない。だから、言った方がいいのかなって。例えそれが見当違いの事でも、エルメスを思って味方になる奴がちゃんといるんだってわかってくれるならそれでいいと思った。

前にエルメスは言ってた。

「私自分のこととか話したのカルロが初めてだし、何でも言い合える人に出会えることってそんなにないと思うから、カルロの事大事な友達だって思ってるよ」

そう言ってもらった時にスゲェ嬉しかったのを覚えてる。アイツは良くも悪くも思ったことを何でも口にする。でも、今は言わない。それなら、俺が話せばアイツも話すんじゃないかって言う安直な発想だけど。

今のエルメスはまさにダイヤだ。研磨されて擦り減っていく比重と比例して、輝きを増していく。でも、その輝きはなんというか、儚い。刹那。それが俺は、悲しい。その悲しい輝きにみんな惹きつけられて、エルメスを心配せずにはいられない。

前はアイツの周りはなんだか明るくて、温かい感じがしたけど、今は違う。目を刺すような冷たい光だ。前のアイツが太陽であったなら、今は月。吸血鬼なのに太陽と揶揄すんのはどうかと思うけど、でも俺はそう思った。

今のアイツは月のようで、自分で光ることが出来ない。光が当たらないと輝かないダイヤも同じだ。当然だけど、まだエルメスの心は上手く歩けない。月みてぇにグルグル回ってる。当然だけど、仕方ないけど、なんとかしてやりたい。一刻も早く。

墓参りの時、泣き止んだエルメスが言った。

「カイ、ごめんね。いつも心配顔させちゃうね。ごめんね。もう大丈夫だよ」

俺は謝ってほしいわけじゃない。俺に気を遣って欲しくなんかな

い。俺の心配なんかしてほしくない。自分のことだけ考えていてくれたらいい。なのにエルメスは自分が悪いと思った。そんな風に思わせたかったわけじゃないのに。

きっと俺が何も言わなかったからだ。お前は何も悪くないよって言ってあげればよかったのに、言えなかった。俺が言っていいのかわからなかった。

俺ともあろうものがこんな後悔をするとは思わなかった。カイ卿は“永遠の毒舌家”なのに口を開くのを躊躇うなんて、とんだお笑い草だ。らしくねぇ。自分に腹が立ったっつーのもあるけど、なんかいてもたってもいられなくて速攻エルメスのとこに行った。

エルメスはシュヴァリエの奴らとシャンティファミリーの奴らと、とにかくみんなでリビングでテレビを見てた。本当は二人の方が話しやすいけど、みんながいた方が俺がしくじった時にフォローが入るだろうと思って、そのままテレビを消してやったらすぐ振り向いて怒り出した。

「あぁー！　私のマハラジャ・ナイト２４！　この司会の人が面白いのに！　楽しみにしてるのに！」

エルメスの楽しみを奪ってしまったことにちょっとだけ躊躇したけど、そのままリモコンを握り潰した。

「ミナ、テレビよりも俺の話を聞け」
「えぇ？　なに？　ていうか今はエルメスだよ」

「俺は作られたエルメスと話をしたいんじゃねぇ。本当のミナと話をしたい」
「・・・どうしたの？」
「ミナ、お前は自分のせいだと思ってんのか？」

俺の言葉にエルメスは困ったようにして俯いた。どうやら正解だったらしい。

「クライドさんとボニーさんが行方不明なことも、ミラーカさんとクリシュナさんと北都とアーサーが消滅したことも、お前は自分のせいだと思ってんのか？　ジュリオ様が裏切って攻撃してきたことも、俺がジュリオ様を殺したことも、自分のせいだと思ってんのか？」

畳み掛けるように質問しても、エルメスは俯いたまま答えようとしない。

「ミナ、答えろ」

ちょっと厳しいかと思ったけど、逆に普段通りの方がいいと思った。むしろ怒らせた方が饒舌になるかもしれねぇって言う目論見もあったけど。すると、俺の作戦は功を奏した。

「だって、私が誘拐されたせいでジュリオさんを城に入れちゃったんだよ。私がしっかりしてなかったから、ジュリオさんの苦しみに気付いてあげられなかったから、戦いをさせちゃったんだよ。私が強くなかったから北都も消えちゃったんだよ。私が・・・私のせい

で！　私を守ってミラーカさんとクリシュナは死んじゃったの！　アーサーさんは消えちゃったの！　私のせいでカイにジュリオさんを殺させちゃったんじゃない！　ジュリオさんはカイのお父さんなのに！　私が・・・全部私の・・・なんで、なんで私が生きてるの！」

一息に叫んで、エルメスは泣き出した。あーあ、俺泣かしちゃった。アーサー怒んないでよ、わざとじゃねぇから。必要悪だから。一つ溜息を吐いて、エルメスの涙を拭いた。

「ミナ、俺を見ろ」

エルメスはゆっくり顔を上げて、目が合ったのを確認して、作戦を実行に移した。

「お前はどうしようもねぇバカだな。お前は激しく勘違いしてる。それを俺が正してやるからよく聞け。いいか、まず誘拐についてだけど、誘拐されたのはお前だ。お前は被害者だ。自分で言ってただろ、とばっちりだって。お前は被害者だ。お前は何も悪くねぇ」

「でも、私が・・・」

「でもじゃねぇ。悪いのはジュリオ様だ。お前は何も悪くない。大体、ジュリオ様が城に行くって言った時、お前反対しただろ。ちなみに俺も反対したしな。アーサーの気持ちを利用して、それを押し通したのはジュリオ様だ。お前は悪くない。お前が悪いなら銀行強盗に遭った銀行も悪いってことになる。それは違うだろ？」

「・・・うん」

「お前は悪くない。わかったか？」
「うん」

「じゃ次。お前がジュリオ様の気持ちに気付かなかったから戦争が起きたんじゃない。あの人はお前と出会ったその日には既に襲撃を計画してた。ジュリオ様がずっと“ミナ”を忘れられなかったから戦争が起きた。お前は“ミナ”じゃねぇだろ。別人だ。違うか？」
「・・・違わない」
「コレも悪いのはジュリオ様だ。あの人が弱かったから悪いんだ。あの人が“ミナ”を忘れられなかったせいだ。忘れようとしなかったせいだ。あの人は死ぬ間際まで“ミナ”に囚われた。それほどの妄執を他人がどうこうできるはずがない。あの人自身にできないんだから当然だ。お前の意志も誰の意志も届かない次元にあったんだ。お前がしっかりしてようがしてなかろうが関係ねぇ。あの戦争は、ジュリオ様の妄執が引き起こした。わかるな？」
「うん」

「それと、これが一番大事だけど、クライドさんとボニーさんが行方不明なのと、みんなが死んだのはお前のせいじゃねぇ」
「でも、私が弱かったからだよ」
「なんでお前が弱いとお前のせいなんだよ」
「私が弱かったから、守ってあげられなくて殺されたんだもん」
「殺したのは誰だよ」
「・・・ジュリオさん」
「じゃぁ悪いのはジュリオ様だな」
「・・・でも」
「でもじゃねーの！　じゃあお前が殺したのかよ」
「違うけど・・・」
「じゃぁお前は何も悪くねぇよな」
「・・・」

「お前のせいじゃねぇ。ミラーカさんが言ってただろ。それが自分の使命なんだって。彼女は自分の使命を果たしただけだ。クリシュナさんと北都はお前を守るって責任を全うしただけだ。愛する人を守りたいと思うのは当たり前の事だ。それをお前が讃えてやらなくてどーすんだよ。お前が自分の責任だと思ってる内は、ミラーカさんもクリシュナさんも北都も浮かばれねぇだろ。お前を守って死んでいった人たちに感謝こそしても、懺悔や謝罪をするな。わかったな」

「わかった」

「それと、まぁ正直俺の事はどうでもいいんだけど」

「よくないよ！　カイはジュリオさんの事大好きだったじゃない！」

「まーな。俺はあの人を信頼してたし、尊敬もしてたけど」

「なのに、私のせいで・・・」

「あのなー、お前のせいじゃねぇよ。お前の為ではあるけどな。つーかそもそも、教皇の命令だったし。でもそれ以上に俺の為だ」

「カイの為？」

「そーだよ。単純なことだ。お前とジュリオ様を天秤にかけて、どっちが俺にとって重要だったのか、それだけだ」

「でも・・・」

「でもじゃねぇっつってんだろ！　これに関してでもは許さねぇぞ！　俺がそうだって言うんだからそうなんだよ！」

「でも、だって！　カイがジュリオさんを殺したのは呪いの連鎖を止める為でしょ！」

「言い方変えてんじゃねぇよ。まぁ勿論それもあるけど、それは正直付録だ」

「じゃぁ、なに？」

「お前を殺したくなかった。死なれんのがヤだったから」

「なんで？」

「なんで！？　なんで・・・なんで？」

予期せぬ質問に思わずシャンティに振り向くと溜息を吐かれた。
こいつに溜息つかれると異常にムカつく。

「友達だからだろ」
「あ、そうだな、それだ。友達だからに決まってんだろ！　わかったか！」
「・・・なんか釈然としないんだけど」
「なんでだよ！　俺がそうだっつったらそうなんだよ！」
「シャンティが言ったんじゃない」
「うるせぇ！　意見としては同じだ！　要するに、俺の都合なの！　お前に生きててほしかったからジュリオ様を殺したってのが実は８割くらい占めてんの！　だからお前は何も気負う必要はねぇ！　わかったか！」
「・・・わかった」

「えーと、後はなんでお前が生きてんのか。バカじゃねーの。なんだそれ」
「バカじゃないもん！　だって、みんないなくなったのに私だけのうのうと生きてるなんて許されない気がするんだもん」
「ハァ、バカ。お前はのうのうとは生きてない。あの日からずっとお前は悩んで苦しんで生きてる。ずっとアーサーを待ってる。お前が一番苦しいのに、俺達にまで気を遣ってる。それでのうのうと生きてるってんなら、世の中の大半の奴は生きる価値はねぇ」
「でも、クリシュナも北都もミラーカさんも、アーサーさんもいなくなったのに・・・」
「そうだな。で、誰か一人でもお前に死ねっつったか？」

「言わない」
「てことは生きてろって事だろ。大体消えた人達はみんなお前に生きててほしかったから、その身を賭してでもお前を守ったんだぞ。それなのに生きてるのが許されないなんて、じゃぁ何のためにお前を守ったのかってことになるだろ。それは逆に申し訳ないと思わねぇか？」
「・・・」
「お前は何も悪くない。お前は十分苦しんだ。お前は生きてていい。生きる価値がある。それはここに居る全員が保証する。俺たちはお前と一生一緒に生きるって誓っただろ。その誓いをお前は破るのか？」
「そうじゃないけど・・・」
「ハァ。お前はさ、アーサーと約束したんだろ。アーサーの為に生きてアーサーの為に死ぬって。その誓いも破る気か？」
「破らないよ！」
「じゃぁ生きろよ。お前が前に言ってただろ。誰かが生きててほしいと願っているうちは死んじゃだめなんだって。俺も、コイツらも、死んでいった人たちも、大勢の奴らがお前に生きててほしいと願ってる。生きてるのが許されないなんて二度と考えるな」
「・・・うん」

「要するに、総合するとお前は一つも悪くねぇって事だ。わかったな？」
「わかった」
「本当に？」
「うん」

「ミナ、お前は何にも悪くねぇよ。お前のせいじゃねぇ。お前が辛

いって言っても泣いても笑っても誰も怒ったりしねぇよ。ここにはお前の味方しかいない。もう我慢すんなよ。誰にでもいくらでも頼っていい、甘えていいんだぞ。大抵の事なら我儘も聞いてやるし、ずっと傍にいてやるから。だからお前一人で何でも背負い込むな。みんな、お前を本当に大事に思ってんだから。その事をちゃんとわかってくれ。俺らを信じてくれ。頼ってくれよ、な？」

「・・・うん、カイ、ありがと」

またしても泣き出したエルメスは、ちょっとだけ前のエルメスに戻った気がした。とりあえず、理詰め&洗脳作戦第一段階はクリアだ。この調子で毎日言ってやろう。

「ミナ、俺たちがお前を心配するのをお前が気にする必要はねぇんだからな。俺らが勝手に心配したくてしてんだから。俺らは好きでやってんの。だから謝んな」

「う、うん」

「なんかあったら誰でもいいから捕まえて話せ。その為に俺らは傍にいるんだからな」

「うん」

「俺たちは絶対にお前を裏切らないから、信用してくれ」

「うん」

「ミナ、俺たちはみんなお前の味方だから。お前と一緒に生きるって誓っただろ。俺は・・・いや。とにかく、わかったな」

「う？　うん。俺は、なに？」

「なんでもねぇ」

「気になるよ」

「気にすんな」

「気になる！」

「うるせぇ」
「きーにーなーるー！」
「うるせぇっつってんだろ！」

うっかり口を滑らせたせいでエライ食いつきようだ。どうしよう、うぜぇ、叩きてぇ。でも今は我慢だ。耐えろ、俺。

しかし、どうしよう。言いたくねぇ。でも言った方がいいんだろうか、いや言いたくねぇ。俺絶対恥かくし。でも、もし言ってエルメスが元気になるならちょっとくらい恥かいてもいいか、そう思った。

「ハァ、いいか。一回しか言わねぇ。二度と言わねぇからな」
「うん」
「俺はお前が大好きだよ。お前を大事な友達だと思ってる。大事な家族だと思ってる。お前が居なきゃ俺は生きていたくない。お前にとってのアーサーがそうであるように、俺に、俺たちにとってお前がすべてだ。俺は、世界で一番お前が大事だ。だから、えーと、あー・・・まぁそういうことだ」

なんとか頑張って言ったら、エルメスはキョトン顔してる。周りの奴らがクスクス笑ってる。キルシュに至っては指さして笑ってる。チクショー、アイツ後で撃つ。

クソ、やっぱ恥かいた。頼むから俺のこの恥に見合うリアクションをしてくれ、と思ってたら、エルメスは突然泣き出した。
アレ、なんで？　なんで泣くの？　って内心パニックに近いくら

い慌ててたらエルメスが抱き着いてきた。

「ありがとう、すごく嬉しい。私もカイが大好きだよ。私もカイは大事な家族だって思ってるよ。カイ達が居なかったら生きてたくない、生きてられないよ。傍にいてくれて、本当にありがとう」

どうやら喜んで頂けたようだ。なんとか俺の恥に見合う反応を戴けて超安心した。エルメスの頭を撫でてたら、思った。俺はスゲェ頑張って言ったけど、コイツは普通に言えるんだなって。

俺は嬉しかったし、エルメスも嬉しいって言ってくれた。エルメスが喜んでくれるなら、俺ももうちょっと頑張って、普通に言える努力をしてみようと思った。

でも、もう二度と人前で言わねぇ。アイツらのリアクションが心底ムカつく。あークソ、リオの奴いつまで笑ってんだコノヤロー。アイツも撃つ。

どうでもいいけど、コイツ腕力強えぇ。さすがアーサーの眷属だ。苦しい。え、プロレスじゃねぇよな。どうしよう、突き飛ばしていい？　いやでも我慢だ、耐えろ、俺。とか思ってたら、急にエルメスが離れるもんだから何故か知らんがむせた。

「どうしたの？　大丈夫？」

「・・・なんでもねぇ。つーかまぁ、兎に角そう言う事だ。家族なんだから言いたいこと言っていいんだぞ。それが普通だろ。もう一

人で悩むなよ。わかったな」
「うん、わかった！　ありがと！」

そう言って笑ったエルメスの顔は太陽みたいだった。少しだけ状況は好転したようだ。話が終わった後にガラードが話しかけてきた。

「何となく今まで副長とエルメスの関係をうまく形容する言葉って見つからなかったんだけど、今日の話を聞いてしっくりくるのを見つけたよ」
「あ？　なに？」
「兄妹、これが一番合ってる気がする。確実に友達以上で恋人以上に信頼してる関係なんて、兄妹しかないじゃん」

それを聞いた全員が「それだ！」って満場一致で納得してた。なんか、俺的にもしっくりきた。エルメスは俺の家族、妹。思わず納得。道理で手間がかかる。道理で保護者のような気分にもなるわけだ。でも、妹なら手間をかけて、保護して当然。

このままエルメスが元気を取り戻して、穏やかにアーサーを待てるようになればいいなと思う。アーサーが帰って来た時に、前のエルメスみたいな笑顔で迎えてやれたらいい。そうなるように、俺も頑張るとします。

以上

ＦＩＬＥ－５　Ｃｒｙｂａｂｙ　［泣き虫］（後書き）

登場人物紹介

■ミラーカ
故人。アーサーの親友。先の戦争にて戦死。
アーサーとエルメスを守るため魂を引き替えに二人を守った。
最後まで二人を愛し死んでいった非業の美女。
エルメス以上にアーサーの理解者で、苦楽を共にした竹馬の友。

■北都
故人。エルメスの弟。先の戦争にて戦死。
極度のシスコンでアーサーにすら牙をむくほどの狂犬。
クリシュナだけは仲良し。
最後まで姉と共に戦い、励まし奮起させた強い子。

■ボニー&クライド
アーサーの支配下の吸血鬼カップル。眷属ではない。
先の戦争から行方不明。戦争当日に挙式予定だった。
ボニーの好きな言葉　永世中立
クライドの好きな言葉　行雲流水

LETTER 1　Cai［カイ］

拝啓　アーサーさん

初めてお手紙書きます。なんだかわからないけど、急にアーサーさんにお手紙を書きたくなりました。

アーサーさん、あなたが消えた後、今日まで色々ありました。今はカイ達とシャンティの所にいます。あ、カイっていうのはカルロの事です。今は私もエルメスって名乗ってるんですけど。あ、ていうか勝手にアーサーって名前変えてごめんなさい。

アーサーさんが居なくなった後、私はジュリオさんを殺そうとしました。ジュリオさんが心の底から憎くて、彼をこの世から欠片も残さず消滅させてやろうと思いました。

でも、カイがジュリオさんを殺しました。私がジュリオさんを殺したら、カイが私を殺さなきゃいけないからって。今になって思うと本当にその通りで、“ミナ”の呪いの連鎖を止めようと思ってたのに、また自分で新しく呪いの連鎖を繋げようとしてたって気付いて悲しくなりました。

私は本当にバカです。どうしようもないくらいです。今日カイに言われました。お前は悪くないって。そう言われるまで、私は全部自分が悪いんだって思ってました。今でもちょっと自責の念はあり

ます。でも、私に味方してくれる人がいっぱいいるんだってわかって、早く元気にならなきゃって思いました。

今日、カイに言ってもらったことを思い出してたら、クリシュナが殺された時の事を思い出しました。今日カイが言ってくれたようなことを、私はアーサーさんに言ったなぁって。シャンティの時もそうだったなぁって。

どうしてでしょうね。人にはそう言う風に言えるのに自分の身にそう言うことが降りかかってくると、言われるまで気付きもしないんです。本当バカみたいですよね。

だけど、そう言ってもらわなかったら今こんな風に思えませんでした。本当にカイやランスやガラード、シャンティ、みんなのお陰です。私本当にみんなが居なきゃ生きていけません。みんなのお陰で生きてます。みんなのお陰でアーサーさんを待てます。

あの日、私は全てを失いました。でも、その代り新しく家族が出来ました。すごく悲しいけど、でも私は幸せ者です。

だけど、すべてを失ったのは私だけじゃありません。カイだって大事なものをたくさん失いました。カイはジュリオさんを殺してしまいました。自分の都合だって言ってたけど、きっと今でも後悔してるんじゃないかなって思います。

だって、カイは本当にジュリオさんが大好きだったんですよ。ジュリオさんを撃った時のカイの顔が忘れられません。凄く苦しそうで、今にも泣きそうで、このまま自殺しちゃうんじゃないかって思

うくらい、辛そうでした。
ジュリオさんが砂になって死んだ後、ごめんなさい、ごめんなさいって何度も謝ってたんです。

それなのに、俺の事はどうでもいいっていうんです。私の為にカイはいつも一生懸命です。カイにはいつもたくさん迷惑かけて、すごく気を遣わせてしまいます。私はもう今は前みたいにできません。もう少し時間が経たなきゃ無理です。

カイはジュリオさんを失いました。ヴァチカンを失いました。今までの人生を壊されました。信頼を裏切られました。大事にしていたものをたくさん失いました。

だからでしょうか。今カイが取り戻せるものは何もありません。だから私だけでも元に戻そうって頑張ってくれてるのかもしれません。それは私にとってすごく嬉しいけど、同時にとても悲しい。

カイはあの時、ジュリオさんを撃った後、死んでしまいたかったと思います。カイにとってジュリオさんは全てでした。私がアーサーさんを殺すようなものです。もし、私がカイと同じだったら、誰がなんて言っても絶対死んでいると思います。カイみたいに踏みとどまって、私まで引き留めるようなことは、私にはできません。とてもじゃないけど、できません。

カイはすごく強い人だと思います。きっとすごく罪悪に苛まれてると思うんです。きっとすごく苦しいはずなんです。それなのに、

私とアーサーさんの為に、私に生きろと言いました。私とアーサーさんの為に一緒に生きるって言いました。

アーサーさんが待てって言うんだからちゃんと待ってろって言いました。一緒に待っててやるからって言ってくれました。お前を一人にはしないからって言ってくれました。

カイがそう言ってくれるから、私は待つことが出来ます。でも、カイはカイですごく苦しいはずなのに、いつも私の為に気を遣って私の為に苦しそうな顔をしています。今のカイは私の為に生きてます。私のせいで、生きてます。

それが良い事なのか、悪い事なのか、よくわかりません。

アーサーさん、私は災厄のような女でしょうか。今、私は決して幸せだとは言えません。私の周りの人たちも、幸せだとは思えません。カイはただでさえ苦しいのに、私のせいで余計に苦しんでいます。私は災厄なのでしょうか。

今私の周りにいる人たちは、みんな私を心配してくれています。心配させてしまっています。カイは好きでやってるんだから気にするなって言います。そんなこと言われても気にしちゃいます。そうでしょ？

だけど、心配かけるのが嫌ならしっかりしろよって話ですよね。まぁ、そう言う風に思えるのもカイ達のお陰なんですけど。

今日の事で、クリシュナの言葉を思い出しました。何もかも背負っていつまでも苦しいって言ってちゃだめだよって。理不尽は存在して当然だって、できることを考えなさいって。

本当にその通りだなって思います。こんな酷い理不尽がこの世に存在するのかと、今でも恐ろしく思います。だけど、アーサーさんは怒るかもしれないけど、私はジュリオさんを許してあげられたらいいなって思ってます。

ジュリオさんを恨んでしまったら、１００年の呪いは更に１００年続くのでしょう。それだけは、避けたいんです。呪いを絶とうとしてくれたカイの為にも、呪いを生んだことを後悔していたアーサーさんの為にも、自分の為にも。

私、前にクリシュナに言われて思ったんです。クリシュナの様になりたいなって。彼は現実主義者でした。強く優しい人でした。どうしようもないことを、いつまでもクヨクヨ考えているような人ではありませんでした。自分の為に、自分が大事に思う人の為に、いつもできることを考えて、できることをする人でした。

今の私にできることは、みんなの思いに応えられるようにすることだと思います。カイもみんなも、私の為に一生懸命になって励ましてくれたり心配してくれたりしてます。でも、いつまでも心配かけたくないし、これ以上カイに苦しんでほしくないから。

だからって、無理に明るくふるまうのも違うかなって思いました。多分それも見抜かれちゃってるんでしょうし。だから、泣きたい時

に泣く努力をしてみます。

アーサーさんに前に言いましたよね。泣きたい時に泣けるのも強さだって。自分で言っといて忘れてるんだから本当私バカです。

とりあえず、あんまり考えないように頑張ろうって思います。ミラーカさんとクリシュナと北都はもう、戻って来ません。その事を考えるだけで、胸が苦しいです。だけど、今更どうしようもありません。後悔しても仕方がないんです。後悔して戻ってくるわけじゃないから。

カイに言われました。私を守って死んでいった人たちの為に、感謝はしても謝罪や懺悔をするなって。本当、そうだなって思いました。私のしていたことは彼らに対する冒涜でした。自分を恥ずかしく思いました。

だから、これからは彼らの死を悼んで、彼らに出会えたことを感謝して生きて行けるように頑張るつもりです。本当はすごく辛いけど、自信ないけど、でもその方がやっぱりいいと思うし、そうすれば彼らはずっと私の心の中で笑ってくれると思うんです。

今、私がこんな風に思えるようになったのは、カイやみんなが支えてくれるおかげです。本当に頭が上がりません。

カイは言いました。私が世界で一番大事だと。大事な家族だと。

その言葉で、私の苦しみの世界は一気に壊れました。

あれほど自分を責めていたのに、誰かに必要とされていることがわかっただけで、赦されたような気がしました。本当に心の底から嬉しかった。そう言う風に思ってくれる人がこの世に存在することが死ぬほど嬉しかった。涙が出るほど嬉しかった。ていうか、泣きましたけど。そりゃ泣きますよ。泣くでしょ、普通に。

カイはまるでヴィルギリウスのように私を地獄から導いてくれます。

私は地獄をさまようダンテです。地獄の悪魔と亡者に怯えて、迷って、泣きながら出口を探す憐れな吸血鬼です。今日の事がなかったら、地獄の恐ろしさに目を閉じて耳を塞いで、隣で導いてくれるヴィルギリウスの存在にさえ気づかなかったかもしれません。

カイは私の道標です。彼が居なかったら生きていけません。きっと、ずっと地獄から出ることが出来ないでしょう。だけど、カイがいてくれるなら、いつか地獄から抜け出して、煉獄を上って、ベアトリーチェに会えると思うんです。

アーサーさん、早くあなたに会いたい。アーサーさんのいない世界はとても怖くて寂しいです。アーサーさんに会って、その声を聴きたい。色んなことを話して、笑って、怒ってほしいです。

でも、その時に私も前の私に戻っていられるように頑張ります。今のままの私でアーサーさんに会うのは、アーサーさんに申し訳が

立ちません。

アーサーさんはきっと、私が生きているかどうかも分からずに不安だと思います。状況もわからずに今頃苦しんでいるんじゃないかと心配です。だから、帰って来た時に安心できるように、あなたの居場所はここにちゃんとあるんだとわかってもらえるように、私とみんなで、笑顔でお帰りって言います。

ずっと、ずっと、待ってます。あなたが約束を破ったことはないから、ずっと信じて待ってます。

だから、私が笑顔でお帰りって言ったら、ただいまって笑ってください。

また、何かあったらお手紙書きます。でも、デスクの引き出しがいっぱいになる前に帰ってきてくださいね。待ってますから。

敬具

ＦＩＬＥ―６　Ｃｈａｎｇｅ　［気分転換］

シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動報告

明けましておめでとう。今年もよろしく。つかランスに言われるまで忘れてた。もう正月じゃん。ていうか、コイツら正月らしいこと一切しねぇの。

「あたしらスラム育ちだし？」
「どうでもいいよな」
「わかんねぇし」
「ていうか、仕事忙しいし」

こういうところは共感できるな。実をいうと俺もイベントとか大嫌い。面倒くせぇもん。実は世の中で一番嫌いなイベントがクリスマスだったりする。あの浮かれっぷりが腹立つ。

去年戦争まで起きたせいでより嫌いになった。クリスマス死ね。キリストもう起きてくんな。てめぇの誕生日なんざどーでもいいんだ。知ったこっちゃねぇ。

正月なんてどうでもよくて、仕事が忙しいシャンティ達は今日も仕事だったみてぇだ。つーか、言うの忘れてたんだけど、シャンティあれで社長だ。部下は今んとこ身内だけらしいけど。何やってるかっつーと人材派遣会社なんだと。

なんで人材派遣かって言うと、ここでまたアーサーが絡んできやがる。

アーサーは自分たちを拾って人並みの仕事を与えてくれた。誰だってその機会さえあれば、才能のある奴だっているし、誰かの役に立てる。特にスラムの奴らなんてその最たる例だ。仕事ができないわけじゃない。機会がないからできない。仕事がないからできない。

だからいずれもっと会社をデカくして、そういう奴らに働く場所と、能力とやる気を生かせる場所を提供したいんだと。アーサーがそうしてくれたようにな。

そう言うのを考えると、アーサーってさぁ、蒔いたのって呪いの種だけじゃないんじゃねぇの。良い方の奴も蒔いてんじゃん。まぁ、それをシャンティたちがこれからどう育てるかってのが課題だけど、なんとかなんだろ。

シャンティからその話聞いてエルメスは嬉しそうにしてたぞ。いねぇのに喜ばせられるってなんだよ。もう、なんなんだよ。なんか腹立つ。別にいいけどよ。

そっからまた話が正月の事に戻ったんだけど、正月だってのに実

は俺らは密かに頭を抱えてた。

血のストックが底を尽きかけてた。以前は餌なんて喰いきれない程に手に入ってたから、ぶっちゃけ余裕ぶっこいてたっつーか、現実ナメてた。

その辺の奴殺して持ってこようかとも考えたが、それじゃシャンティ達に迷惑がかかるだろうし、今妙な騒ぎを起こしたら逃げた意味ねぇしな。

本来なら心配かけんのが嫌だったんだけど、手に詰まったもんだから、エルメスに相談することにした。

「うーん、私達が前にインドにいた時の入手先って、病院か大学の医学部から輸血用とかを盗んでたんだけど」

「大学？」

「そう。クリシュナが大学にいたから」

「吸血鬼なのに大学生！？」

「ううん、博士。准教授」

「マジか」

吸血鬼に戸籍がある意味もよくわかんなかったけど、人格者でしかもインテリってクリシュナさんはどんだけスーパーマンだよ。よくエルメス相手にしてこれたな。

いや、もしかすると、だからこそバカなエルメスに惹かれたのか？　想像を絶するバカっぷりが面白かったとかならまだ納得できるけど。

いや、今はそれはいいとして、病院は盲点だったな。

「なるほどな。じゃぁ今夜あたり盗みに行くわ」
「私も行く！」
「いや、お前は留守番してろ」
「なんで？」
「お前連れて行くと必ずと言っていいほど不測の事態が起きるから。最早そのこと自体は不測じゃねぇ」

エルメスはブーブー言ってたけど、シュヴァリエ全員が俺に着いたもんだから諦めたようだ。
シャンティにデケェ病院の場所を聞いて、俺とガルフとリオとベディとで行くことになった。他の奴はエルメスと留守番だ。

「カイ、誰かに見つかっても殺しちゃダメだよ？」
「言われなくてもわかってますが」
「隠密行動の時は慎重にね？」
「だから言われなくてもわかってますが」
「好き嫌いしちゃダメだよ？　でもＡＢ型は数が少ないから取って来ちゃだめだからね？」
「だから言われなくてもわかってるっつってんだろーが！」
「もう、すぐ怒るんだから。ベディ、ナースさん見つけてもついてっちゃダメだからね？」
「な！　ちょっと待って！　なんでエルメスが知ってんの！？」
「あ、ワリ、俺が教えた」
「なんで副長は変なところで口が軽いんだよ！」

「ハハハハハハ」
「また笑って誤魔化す！」

そう言うわけで、俺ら４人でプラプラ歩きながら病院に向かった。車で行ってナンバー控えられたりしたらダリーし。走りゃ車よりはええぇし。

ガルフ「なんかこういうの久しぶりじゃね？」
ベディ「しかも盗みに入るだけって超平和じゃね？」
リオ「つか手ブラとか初じゃね？」
ガルフ「つかクーラーボックスとか持ってこなくてよかったわけ？」
俺「あ、忘れてた。戻んの面倒くせぇから途中で買ってくか」
ベディ「はぁ？　今何時だと思ってんだよ」
俺「知らね。じゃぁそれも病院で盗みゃいいだろ」

正月ボケしてるだのなんだの文句を言われたが、帰りの短時間で腐るわけねぇだろっつって結局そのまま病院に着いた。で、やっぱ病院に潜入つったらコレだろ。

俺「俺超カッコよくね？　超似合ってね？」
リオ「似合いすぎて逆に怖えぇ」
ガルフ「マッドサイエンティストにしか見えねぇ」
ベディ「コレ持って帰っていいかな」
俺「実用の機会ねぇだろ。つか、どんだけお医者さんゴッコやりてぇんだ、てめーは。いっそ引くわ」
ベディ「うるせーな！」
俺「てめーがな」

素敵に白衣を着こなした俺らは、無線を繋いで散開してそれぞれ血を探しに行った。しばらくウロチョロしてそれっぽい部屋を見つけたらビンゴ。早速血を持って部屋から出ようとしたら、ガルフから無線が入った。

ガルフ「お、俺どうしよう」
俺　「あ？　どした？　今どこだ？」
ガルフ「西棟の壁に掴まってる」
俺　「は？」

勿論無線はみんな聞こえてたから、ソッコー外に出て西棟に行ったら4階の壁にガルフがぶら下がってた。なにやってんのアイツ。つかウケるんだけど。

俺　「ギャハハハ！　お前何やってんの！」
リオ　「何それ？　楽しい？」
ガルフ「笑い事じゃねぇんだって。助けろよ！」
ベディ「飛び降りりゃいいじゃん」
ガルフ「・・・それもそうだな」

結局ガルフだけ成果を得られなかったんだけど、結構収穫はあったからそのまま帰りながら何があったのか聞いてみた。

「入った部屋自体は良かったんだよ。準備室みてーなさ。で、血を探してたら人が入って来たから、慌てて外に出て隠れてたわけよ。で、いつまで待っても出ていかねぇから何してんだろと思ったら、医者とナースがイチャついてやがった」

白衣４人組が深夜のスラムで大爆笑だよ。そしてそれを羨ましがるベディ。だからお前どんだけだよ。つーか、エルメスいなくても不測の事態起きてんじゃねぇか。もしかしてトラブルメーカーって感染症か？

ヒーハー笑いながら屋敷に着いたら、そのままの格好で帰ったの忘れててコスプレだのなんだの笑われた。

「似合うだろ？」
「似合ってるけど、金髪メガネで白衣って３つもクリシュナと共通点あるのに、どうしてカイはそんなに邪悪なの？」
「てめー、クリシュナさんと比較してんじゃねぇよ。あの人と比較されたら大概の奴は邪悪だろ」
「他の３人はカイほど邪悪じゃないよ」
「うるせぇ」

結局屋敷に帰ってからもマッドサイエンティスト呼ばわりされたんだが、思いついてエルメスに白衣を着せてみた。

「似合わなさすぎだろ」

「そんなことないよ。保健室の先生くらいには見えるよ」
「どのへんが？　袖余ってるし、なんか親父のシャツ着たガキみてぇ」
「せめて大人にしてよ！」
「じゃぁスゲェ間抜けな助手」
「間抜けは余計！」
「いや、不可欠」

エルメスはキーキー言ってたが、他の奴らは「あー」つって納得してた。コレとっといてアーサー帰って来た時にも見せてやる。

あーでも、なんか今日は久々笑ったなー。結構楽に血も手に入ったし、ずっとこんな感じで毎日楽しけりゃな。なんかいい気分転換になった。俺だけ気分転換するのも悪いし、次はエルメスも連れて行ってやるか。つーかたまには外に連れ出してやんねーとな。

「じゃぁ、その時私はナースさんだね！」
「お前にだけは看護されたくねぇな」

言いながら思わずベディを見たら、なんか打ちのめされてた。何を想像してんだ、何を。なんかバカばっかりだな。まさかバカも感染症か？

いかにも間抜けそうなナースエルメスはアーサーに献上してやる。楽しみにしてろ。

以上

FILE－7　Companion　animal　［ペットじゃなくて家族です］

シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動報告

今日早速エルメスを外に連れてってやったんだが、なんかスゲェ疲れた。今度は別の奴に付き合わせる。もう俺は一緒に出歩きたくねぇ。

「なぁエルメス、今日どっか行かねぇ？」
「どこかって？」
「どこかだよ」
「・・・・行かない」

序盤からエルメスにフラれた俺にみんなは大爆笑だよ。いきなり可哀想な俺。まぁ、ノープランな俺も悪いけど。つーか本当はどこかなんてどうでもいいんだけど。

「うるせぇ。俺が行くっつったら行くんだよ。さっさと支度しろ」
「横暴！　ていうか、カイが行きたいところあるんでしょ？　どこに行きたいの？」
「別に」
「別にって・・・意味わかんないよ。行きたいの？　行きたくない

の？　どっち？」
「むしろお前一人でいいから出かけてこい」
「全然意味わかんないよ！？」
「うるせぇ、さっさと支度しろ・・・あぁ、もうそのままでいいや、面倒くせぇ」
「え！？　ちょ、うぁ！」

で、無理やりエルメスを連れ出したんだが、さすがにノープランだ。さて、どうしようと考えてたら、気付いたら後ろからついてきてたはずのエルメスがいねぇ。早速迷子。

あーマジかよ。屋敷出てまだ１０分だぞ、ありえねー。渋々来た道を戻ったら、アイツ、スラムの孤児に捕まってた。

「ごめんね、お金持ってる人とはぐれちゃって何も持ってないの」

俺は金ヅルか。飛び蹴りしたい衝動を何とか抑えて、エルメス引き摺ってスラムを抜けたところでアイツが離せって暴れるから離してやった。

「もう！　扱いがヒドイ！」
「じゃぁはぐれんな」
「カイが歩くの早いんだよ！　勝手に連れ出しといて一人で行っちゃうから！」
「お前が遅いんだよ。ダックスみてぇに足短ぇから」

「ヒド・・・それでもシュヴァリエなの？　紳士なの？」
「役職は一応シュヴァリエだが、残念ながら紳士じゃねぇ」
「それを偉そうに言う人初めて見たよ」
「つーかどこ行こっかなー。どこ行きてぇんだ？」
「こっちのセリフだよ！」

キャンキャン吠えるエルメス無視して、適当にプラプラしてたらなんか大通りに出て、そしたら急に目の前にあるショッピングモールに行きたいとエルメスが言い出した。

「ここテロ現場！　今どうなってるのか見たい！」

あぁ、例の。エルメスが一人で乗り込むと言う暴挙を犯したって噂の。まぁいいかと思って中に入ってしばらくウロついてたら、またしてもエルメスがいねぇ。もう俺、帰っていいかな。アイツ置いて帰っていいかな。

探すのが心底面倒くさかったから、企業の良心に頼ることにした。

ピンポンパンポーン

「ナリマン・ポイントからお越しのエルメス・ペンドラゴン様、エルメス・ペンドラゴン様。お連れ様がお待ちです。サービスカウンターまでお越しください」

アナウンスを流して貰ったら、アイツ顔真っ赤にしてソッコー走ってきやがった。マジ面白れぇ。アイツ最高。

「もー！　もー！　ヒドイよ！　恥ずかしいでしょ！」
「アハハハ！　お前最高！」
「最悪だよ！　もー！」

顔を真っ赤にして怒るエルメスに俺は腹抱えて笑ったんだけど。しかし、コイツの迷子癖は本当に何とかなんねぇのか。アーサー、本当に苦労したんだな。なんかしみじみと同情する。
さて、どうしたもんかと考えてたら良い事を思いついた。

「エルメス、ペットショップ行くぞ」
「え？　蛇買うの？」
「どっから蛇が湧いて出た？」
「だってカイ蛇っぽい」

もうコイツの思考は意味わかんねぇよ。何？　蛇っぽいって。最早ツッコむ気力も起きねぇよ。アーサー始終こういうのに晒されてたの？　本当気の毒だな。本当心底同情する。だから今は俺に同情しろ。

「わけわかんねぇ事言ってんな。動物なんていらねぇよ」

「じゃぁ何？　見たいの？」
「いや、買い物」
「なにを？　ペットなんていないじゃん」
「いや、うるせぇ犬が一匹いる」

そう言ったらエルメスは少し考え込んで、すぐにハッとした顔をした。

「まさかと思うけど私のこと言ってんの？」
「そーだけど？」
「私犬じゃないもん！　犬嫌いなのに！」
「キャンキャンうるせぇよ。室内犬かてめーは。オラ、二度と迷子なんねぇように首輪買ってやっからさっさと来い」
「ヤダよ！　バカじゃないの！」
「お前がな。何度も迷子になりやがって。わざわざこの俺が買ってやるんだから有難く受け取れ」
「有難迷惑だよ！」
「迷惑はお前な」

あまりにもエルメスがキャンキャンキャンキャンうるせぇから首輪は諦めた。まぁ折角デケェとこ来たんだし買い物でもさせてやろうと思って聞いてみた。

「お前はどっか行きてぇとことか見てぇとことかねーの？」
「えー？　うーん、うーんとねー・・・」
「あ、俺煙草吸いてぇ。バルコニー行くぞ」

「結局カイの都合なんだ・・・」

不服そうにするエルメスを迷子にならねぇように引き摺ってバルコニーのベンチに座った。煙草吸ってたらなんかエルメスがじーっと見てる。

「なんだよ？」

「何歳から吸ってるの？」

「１２」

「不良・・・ていうか、カイって本当は何歳なの？」

「ヒミツ」

「ケチ！　でも、アーサーさんが私より一回りは上って言ってたっけ・・・ん？　じゃぁ４０歳くらい！？　なんて落ち着きのないアラフォー・・・」

「黙れ小娘、生意気だ。お前もアラサーにしてはガキみてぇじゃねーか」

「アラサー言うな！」

そーいや、俺が同い年だっつったからこいつは馴れ馴れしくなったんだった。なのに、年上だと判明したのにいつまでも馴れ馴れしいのはどういうことだ。そっちはいいのかよ。エルメスは本当に意味わからん。つーか一日に何回意味わからんって感想を述べさせる気だ。いい加減しつけーぞ。

「そういえばミラーカさんが割った窓ガラスとか全部綺麗になってたなぁ。従業員通路とかどうなってるんだろう？」

「従業員通路？」

「そう、そこで私爆破されちゃって。アーサーさんが助けてくれたんだけど、クリシュナとアーサーさんに怒られちゃった！」
「・・・・・だろうな」

アーサー・・・かける言葉も見つからねぇよ。本当に苦労したんだなぁ。俺もそんな苦労をするんだろうか。あーヤダヤダ。

「でも、私もまた血も力もなくなっちゃったから本当に気をつけなきゃなぁ」

しみじみと日が暮れた街を見下ろしながら呟くエルメス。紫色の空はあの日の夜明けみてぇだ。

あの日大事な仲間も何もかも失ったエルメスは能力こそ覚醒したけど、血と共に力は失ってしまった。教訓は最高の教師だと言うが、教訓と呼ぶにはあまりにも酷だ。

でも、だからこそわかってもらう必要がある。

「そーだぞ、お前。今またお前が単独で戦うようなことしたら、今はアーサー程の奴はいねぇんだから、俺らの命と引き換えにお前助けなきゃいけねーんだからな」

アーサーとの再会を果たす前にエルメスを死なせるわけにはいかねぇし、それに俺らが誰か一人でも死んじまったら、エルメスは再び地獄の底に突き落とされる。

勿論死ぬ気はねぇし俺らも気を付けるけど、エルメスにも気を付

けてもらわねぇと、と思ってたんだが。

「いや、お前何笑ってんの」
「だって、カイがそんなこと言うなんて意外過ぎる」
「あ？　・・・いやバカ、そういうことじゃなくてだな」
「命かけて私を守るなんてアーサーさんかクリシュナみたーい！」
「喜ぶな！　ちげーっつってんだろ！　俺がそんな気持ちワリー宣言するか！」
「気持ち悪い？　ちょっと、それはあの二人に失礼じゃない？」
「あの二人はいいんだよ！　俺的に気持ちワリーの！　つーか、ちげーつってんだろ！　面倒くせぇ！　もういい、絶対ぇ助けてやんねぇ」
「えー！　ケチ！」
「ケチじゃねぇ。甘えんな」

激しく勘違いしてやがる。いくつになっても甘えん坊なこのバカには、多少厳しく躾しとかねぇと後が面倒くせぇな。

「何でもいう事聞いてくれるって言ったのにー！　ウソつき！」
「そんなこと言った覚えはねーよ！　多少の我儘は聞いてやるっつったの！　勝手に俺の発言を捏造するな！」
「一緒じゃない」
「何でもと多少じゃ大違いだ、バカ！」

どうやらエルメスの脳と耳には自分に都合よく変換する、悪魔のようなフィルターがついているらしい。こっちが気を付けねぇとウ

ソつき呼ばわりだ。
イヤ待て。それはおかしい。それは違うだろ。なんで俺がそこまで気をつけなきゃいけねぇんだよ、腹立つ。
アーサー、ウマイ事エルメスを飼い馴らす方法を教えてくれ。俺の手には負えない。

以上

ＦＩＬＥ－８　Ｃａｌｌｉｎｇ　［天職］

報告　　シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動

クリシュナさんにはもちろん、アーサーにも謝罪させてください。本当にすいません。エルメスに対してそういう感情を持つことはあってはならないと思います。本当にすいません。全ては俺の責任です。

「ピーピー」

「へへ、キロちゃん可愛い！」

先日連れまわした先でエルメスはカナリアを買って帰ってきた。キロって名前は日本語の「黄色」から来ているらしい。微妙にネーミングセンスねぇ。でもまぁ気晴らしにはなったみてぇだし、本来の目的が達成できたならいい。俺は疲れたけど。

ガラードと二人でキロを愛でてたんだけど、ポツリとエルメスが言った。

「私の羽根ね、北都が作ってたんだけど、カナリアの羽根なんだっ

て。北都が学校で飼育係してたからって」

それを聞いてなるほどな、と思ってたんだけど、突然横で別の声が聞こえた。

「カナリアと戯れるエルメス。超萌える」
「あ？」
「どうしよう、俺エルメスの事好きかも」

そう言ってきたキルシュを思わずブン殴ってやりました。褒めろ。

「ウソウソ！　冗談！　冗談だって！」
「てめぇ、冗談でも言って良い事と悪い事があんだよ。つーかそもそもそんな事を冗談で言うな」
「ていうか、何も殴ることねーじゃん！」
「殴るだろ。そりゃ殴るだろ。一応あれでもエルメスは主人だぞ。それはあってはいけないことだ。許されん」
「副長、相変わらず厳しい・・・」
「当たり前だ」
「夢くらい見させてよ」
「夢を見るのは許すが、二度と起きてこれなくすんぞ」
「・・・すいません」

俺的には、エルメスが跪くべきはアーサーで、隣にはクリシュナさんが居るべきだ。べきっつっても今は不可能なわけだけど、俺的にはいずれ隣もアーサーに占領して戴きたい。理由は単純。落ち着

くだろ。やっぱそうこなくっちゃなーみたいな。

今の所エルメスは隣の席をクリシュナさん以外に譲る気はねぇみてーだけど。まぁ正直その方があのバカどもの暴走を抑制できるから、それはそれでいい。

前にも言ったがこの屋敷の男女比率を考えると、それも心配の一つだ。ちなみに俺の心配は無用だ。俺には全っ然理解できねぇから。エルメスがとか他人がどうこうじゃなくて、そう言う感情が理解出来ねぇ。むしろ邪魔。

そう言うわけで、キルシュの件もあったしちょっとだけ目を光らせてたわけだ。まーそしたら、叩きゃぁ埃ってのは出てくるもんだな。

この際もうランスはいい。ある意味アイツは公認だ。ガラードもいいだろ。ガラードの場合はその域スッ飛ばして崇拝まで行ってる位だ。

基本的にほとんどの奴らは元聖職者なだけあってしっかりしてる。微妙にわかりづれぇのがあのチャラ男ども。パーシーとリオ。キルシュはもうブン殴ったからいい。

アイツらは昔からチャラかったし、隙あらばエルメスを口説こうとしてたから微妙にわからん。ある意味そういう性格なんだろうか

ら、ほっといて平気な気もするけど念のため見張ってた。そしたらまずパーシーが網にかかりやがった。

「エルっち、デートしよっか」
「ヤダ」
「いーじゃん、副長とはデートしたじゃん。今度は俺」
「強制連行されて引きずり回されるのをデートって言わないよ」
「・・・言わないな」

確かに言わねぇ。引きこもりの室内犬を無理やり散歩に連れてった、の方が正解だ。つーか俺的には俺以外の誰かがエルメスの相手してくれんなら楽だから、それはそれでいいんだけど。でもパーシーは明らかに動機が不純だ。

「じゃぁ俺が本当のデートしたげるよ」
「えー、いいよ」
「楽しいって」
「やだ！　私にはクリシュナがいるからダメ！」
「俺がクリシュナさんのかわブッ！」

なんとなくそれ以上喋らせちゃマズイ気がして、パーシーに飛び蹴りをお見舞いした。褒めろ。

「テメェ今何言おうとした？　あぁ？」
「聞くくらいなら遮んなよ！　ていうか痛いし！」

「痛みを伴わない教訓に価値はない」
「だからってそんな渾身の力で蹴ることねーじゃん！」
「渾身の一撃を食らうような真似をするお前が悪い。お前ごときがクリシュナさんの代理なんざ笑止千万。身の程を知れ」
「ご、ごとき・・・」

とりあえず、これでパーシーはちったぁ大人しくなった。目の前で急に俺に蹴られたパーシー見てエルメスはびっくりしてたが、まぁいい。どうせやるなら徹底だ。出る杭は打ち込みまくって叩き潰す。そんぐれぇしねぇと、バカには通用しねぇ。

一方のリオは意外となかなか網にかからねぇ。チャライにはチャライが、いつも微妙なところで引き下がる。さすがに以前潜入とかやらせてたせいか、引き際が分かってるのか。
もしくは、パーシーとキルシュに俺に殴られるから気をつけろって警告を受けて警戒してるのかもしれねぇ。まぁ、それならそれでいい。むしろそれでこそ、だ。

が、アイツは人を騙すプロだ。完全に俺は油断してた。今日はエルメスとリオと二人で出かけてた。まぁその時は特になんも言ってなくて、キロの餌を買いに行くっつってただけだったから放っといてたんだが。帰ってきたエルメスが言った。

「カイ、どうしよう。なんか私、リオの彼女になっちゃったみたいなんだけど」
「・・・は？」

事の顛末はこうだ。買い物しながらリオが言った。

「エルちゃん、最近はホラーな夢とか見たりしない？」
「まだ時々。でも大丈夫だよ」
「それならよかった。なんかあったら俺にすぐ言うんだよ」
「うん、ありがとう」
「俺はエルちゃんの味方だからね」
「うん」
「ずっと傍にいるからね」
「うん」
「何かあったら頼ってね」
「うん」
「些細なことでも何でも言ってね」
「うん」
「俺の女になりなよ」
「うん・・・ん？」
「うん、て言ったからね」
「え」

どうもその会話の流れに騙されたらしい。エルメスはバカだからその流れでうっかり肯定の返事をしてしまったわけだ。で、困って泣きついてきた。

ある程度はわかってたけど、そんな手管に騙されるとはどんだけバカなんだアイツは。エルメスの防御力の低さには改めて落胆させられる。

でも、それを一緒に聞いてたランスとガラードは速攻リオん所言

って文句言い始めた。

「この詐欺師！　卑怯者！」
「ライオネル様には心底失望しました」
「なになにー？　二人ともヤキモチ？」
「誰が！　恐れ多いっつの！　俺は絶対認めない！　絶対許さないぞ！」
「ガラードの許可とか必要ないしー」
「なんだとぉぉぉ！？」
「まぁまぁガラード様、落ち着きましょう。ライオネル様はこんな手段でもとらないと一生相手にされないんですから。必死なんですよ」
「え、ちょ、ランス、それはヒドクね？」
「ランス良い事言うな！　その通りだ！　リオなんかエルメスから見たら使用済みティッシュだ！」

あの二人、意外に使える。エルメスの近衛に任命してやろう。しかし、リオはしぶとかった。

「ムカつくなー。でも二人が何言ってもエルメスはうんって言ったもんね。その事は事実じゃん」

バン！

「ぎゃぁぁぁ！！　痛ぇぇ！」
「不届き者が。恥を知れ」
「ちょ、副長！　普通撃つか！？」
「撃つ。もしくは撃ち殺す」

いい加減しつけーから撃った。褒めろ。厚顔無恥な奴には近衛長官、俺が直々に説教だ。

「いいかお前らよく聞け。どうしてもエルメスを手に入れたいなら、越えなきゃいけねぇ壁が3つある。まずは近衛のランスとガラード。次に長官、俺。最後に帝王アーサーだ。この壁を超えるのはまず不可能だ。どうしても越えたいなら死ぬ覚悟をするんだな」

俺の話を聞きながら、撃たれたリオに視線を注いだバカどもは大人しく頷いた。さすが俺、超かっけぇ。

ユアン「リオ、諦めろ。見ろよあの番犬」
ディナ「メチャクチャおっかねぇ。ケルベロスかよ」
俺「地獄の番犬、ケルベロス。いーねぇ、良い響きだ」
ガラード「ちょうど3人だしね」
ランス「エルメス様に近づいたら噛み殺しますよ」

エルメスの近衛部隊「ケルベロス」ここに結成。王族の親衛警備隊である近衛隊と近衛長官、もはや俺らには天職だな。

しかし、あのバカエルメスのせいで近衛長官から一気に転落する羽目になった。

「3人ともありがと。助かった」
「つーか、お前ももうちょっとしっかりしろ。アーサー泣くぞ」
「アーサーさんが？　泣かないよぉ。ていうか、なんか3人とも北都みたいだねー」

言われて見れば、北都はアーサーにすら牙をむく狂犬だったな。
実は北都ってケルベロスの再来？

トリス　「そういえば、ガラードは副長とエルメス兄妹みたいだってたな」
パーシー「あれ？　てことは」
キルシュ「副長って単なるシスコンじゃね？」
リオ　「ガラードとランスはマザコンじゃね？」
キルシュ「やーい！　シスコーン！」
パーシー「やーい！　マザコーン！」
俺　「誰がシスコンだゴルァ！　ざけんな！」
キルシュ「副長がだよ」
俺　「んな訳ねーだろ！　ブッ殺すぞゴルァ！」
パーシー「怖！　このシスコン兄貴めっちゃ怖ぇえ！」
俺　「テメェら・・・つかガラード、ランス！　お前らもなんとか言え！」
ガラード「・・・うーん、別にいいかな」
ランス　「そうですね」
俺　「ナニィィィ！？」

近衛部隊「ケルベロス」は「エルメス・コンプレックス」に改名だよ。もうあり得ない。俺泣きたい。

「なんか嬉しい！　これからは3人がシスコンやってくれるんだね！」

「シスコンやるっておかしいだろ！　職業みてぇに言ってんじゃねぇよ！」

「意外と天職だと思うよ」

「んな訳ねーだろ！　バカ！　もう・・・バカ！」

「んもー、すぐ怒るんだから。私にまで噛みつかないでよ。狂犬病の予防接種受ける？」

「受けるか！」

本当信じられん。あり得ねぇ。なんでエルメスがノリノリなんだよ。意味わかんねぇよ。天職とか言われても意味わかんねぇよ。職業じゃねぇだろ。

つーか何でランスとガラードは容認してんだよ。意味わかんねぇよ。もう本当意味わかんねぇ。

以上

ＦＩＬＥ－９　Ｃａｒｉｔａｓ　［愛］

シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動報告

檻の中で餌をついばむキロを見て、泣いていた。

「私は北都から人間としての死を奪って、最後にはあんな可哀想な死に方をさせてしまった」

カナリアの羽根は北都の羽根。キロを見て北都を思い出したエルメスは、そう言って涙を零す。

エルメスは二度も北都に死なれてしまった。一度目は目の前で、二度目は自分の中で。エルメスも北都をとても大事にしていた。本当に仲のいい兄弟で、大事な弟だった。

あの日、北都は最後の一葉で、エルメスの最後の砦だった。最後の拠り所だった。アーサーを失って自暴自棄になりかけたエルメス

を救ったのは北都だった。
北都が一生懸命エルメスに語りかけた。立て、戦え、みんなの思いを無駄にするな、そう言って。その言葉にエルメスは涙を拭って立ち上がった。

あの時北都がそう言わなければ、エルメスはきっとそのまま殺されてた。アーサーを失ったという絶望、地獄にもたらされた蜘蛛の糸。
細く光るその糸は、何よりも強い兄弟の絆。北都が地獄からエルメスを引き上げた。その北都も、もういない。

再び地獄に突き落とされたエルメスに、蜘蛛の糸を垂らしてくれる者はもう、いない。エルメスはこれから自力で這い上がってこなければならない。俺が手を伸ばしても、届かない。地獄が、深くて。深淵、底が見えない程に。

「私、お父さんとお母さんに合わせる顔がない。あの日お父さんは北都を助けられなかったことを、自分をすごく責めてた。だけど、私の中で生きてるってわかって救われたって言ってた。それなのに、私はまた北都を、本当に死なせちゃった。私はお父さんとお母さんに、なんて謝ればいいの？」

答えが、見つからない。どうしたらいい、なんて言えばいい、どうすればエルメスが救われるのか。わからない、わからない。
困惑してエルメスを見つめる事しかできない俺に、エルメスは尋ねる。

「こんなこと聞いて怒るかもしれないけど、カイは家族を失った時、どうやって乗り越えたの？」

俺にとってはもうずいぶん昔の話だ。あの頃俺はまだガキで、目の前で繰り広げられた惨劇が何なのかもよくわかっていなかった。自分の足元まで流れてきた母さんの血が恐ろしくて、ただ、泣いていた。

あの日以来、俺は泣かなくなった。泣けなくなった。それ以上に悲しい事など、今までなかったから。今こんなことになって、エルメスを見てとても悲しく思うのに、泣き方すら忘れて一緒に泣いてやることもできない。

少なくとも今こうなるまでは、それでいいと思っていた。必要のない事だと。俺はもうただ泣いていた頃のガキじゃない、強くなったんだ。そう、思ってた。

あの日、両親を目の前で殺されて殴られて気絶した。気が付いたらジュリオ様の屋敷にいて、頭が痛くて、両親がいないことが怖くて、そこがどこかもわからなくて、恐怖した。

「大丈夫だよ。ここはヴァチカン」

「ヴァチカン？」
「神様のいるところだよ」
「神様が住んでるの？」
「そうだよ。これからは君をずっと神様が守ってくれる。だから、大丈夫。怖くないよ」
「だいじょうぶ・・・」

大丈夫、そう言ったジュリオ様の言葉に安堵した。その言葉はガキの俺に、お守りの様に響いた。

夢を見る。あの日の夢、怖い夢。飛び起きる度に呟く。
大丈夫、大丈夫、ここには神様がいるから、大丈夫。神様が守ってくれるから、大丈夫。
まじないのように、呟く言葉。

しばらくして、ガルフやペレアス達も屋敷にやってきた。それからも少しずつ増える、同族。自分の身に起きたことを知らない奴も、知っている奴も、理解していない奴も、支え合った。同じ苦しみを分かち合う、兄弟のように。

その中で俺は一番年上で、誕生日も一番早かったから自然と長兄のような立場になっていく。
しっかりしなきゃ、コイツらを守ってやらなきゃ、俺は兄ちゃんなんだから。大丈夫、神様が見守ってくれてる。大丈夫、神様が頑張れって言ってくれる。大丈夫、俺には神様がついてる。
自分に、言い聞かせた。

「カルロがいつもみんなを引っ張ってくれるから助かるよ。カルロはえらいね」
「はい、ジュリオ様。ありがとうございます」

ジュリオ様に褒められるのが、嬉しかった。

１０歳になって、初めて銃を握った。構えて、標的に照準を定めて引き金を引いた。衝撃、硝煙の匂い、破裂音。初めてだったのに、弾は標的に命中した。

「すごいね。カルロは才能あるね」

甘い響き。もっとジュリオ様に褒められたい。それから俺は銃の訓練に没頭するようになる。

連続して撃てるようになったら褒めてくれるかな。命中率を上げたら、早撃ちができる様になったら、色んな銃を使いこなせたら、褒めてくれるかな。

ただ、ただ、ジュリオ様に褒められたくて、それだけの為に銃の腕を磨いた。そんな幸福な少年時代は、終わりを告げる。

１４歳の誕生日を迎えたその日に、ジュリオ様は言った。

「カルロ、君は本当に優秀だ。俺の仕事を手伝わない？」
「仕事、ですか？」
「そう、エクソシスト。カルロがいてくれたらきっとみんな助かるよ。カルロは才能あるから、困っている人の役に立てる。俺を助けると思って、ね？」

ジュリオ様を助ける、俺が、ジュリオ様の助けになる。大人になったみたいで、認めてもらえたような気がして、嬉しかった。

初めて出陣した戦場で、殺すべき相手は人間だった。エクソシストは悪魔を祓う仕事なのに、なぜ、人間を？　疑問に思う。俺の質問にジュリオ様は笑って答えた。

「いいんだよ、大丈夫。異教徒は人間じゃないから、殺していいんだよ」

大丈夫という言葉に、初めて違和感を感じた。震える手で、引き金を引いた。初めて、人を殺した。殺した女が死にゆくさまを見て、母さんを思い出した。

俺のしたことは、母さんを殺した人間と同じことなんじゃないか。父さんと母さんはカトリックだったけど殺された。宗派の違いに何の意味があるのか。

神を、疑った。

でも、次第に麻痺していく「正常」な感覚。破裂音と硝煙の匂い。それは人の感覚を麻痺させるものだと、後から知った。

その後、精鋭部隊「死神」が組織され、その隊長に就任し、以前よりも圧倒的に活動の機会は増える。今まで何人殺したかなんて、数える必要もない。数なんて、意味はない。ただ、ジュリオ様の為に、ただ、仲間を守るために、敵が邪魔だから、殺す。

大丈夫、俺のしていることは悪じゃない。大丈夫、俺は、隊長なんだから。大丈夫、俺はなんだってやれる。

子供の頃から変わらない、大丈夫、の祈り。その祈りが、ある日突然、嫌いになった。

「ラルフ！　しっかりしろ！」
「隊長、すいません・・・」
「大丈夫だ、すぐ助けが来るから！」

仲間の一人が撃たれて重傷を負った。

「猊下！　救援の要請をお願いします！　ラルフが撃たれました！」
「カルロ、今からでは間に合わない。諦めるんだ」
「諦める!?　このままではラルフが・・・」

「大丈夫、神に召されるんだよ。ラルフは天国に行ける」

ジュリオ様の言った通り、ラルフは天に召された。

大丈夫、大丈夫、大丈夫って、どういう意味だったっけ。助かるから、大丈夫？　死ぬから、大丈夫？　天国に行けたら、大丈夫？

死んじまえば、同じじゃねぇか。なにもなくなる。全然、大丈夫じゃねぇ。

祈りを、やめた。

そして運命は変わる。

「ラルフみたいなことが今後起きないように、洗礼を受けてもらう。大丈夫、ちゃんと人間には戻してあげるよ。約束する」

神を疑った報いか、俺は吸血鬼になった。いつかは人間に戻れる、その約束にすがって。

ラルフが死んでしばらくして、ジュリオ様は赤ん坊を連れて来た。

「カルロ、新しい兄弟だよ。この子の名前はジョヴァンニ。カルロ

が面倒見てあげて」

手渡された赤ん坊は俺を見て笑った。血に濡れた、人でなくなった人殺しの腕の中で。

兄弟と言っても俺にとっては子供と言ってもいいほどの年齢差。俺も普通の人生を歩んでいたら、子供がいてもおかしくねぇよな。そう思って腕の中のガラードの笑顔を見て実感した。

これが、命。

可愛いな。この子も、人殺しになるのか。人殺しなんかさせたくねぇな。

俺の願いを、運命は聞き入れない。呪われた存在の祈りを、神は聞いてくれない。

俺の指導でメキメキと銃の腕を上げたガラードは、やはり戦線に投入される。初戦を終えたガラードは、俺と同じ人殺しの目をしていた。

この子も、あの小さくて可愛かった子も、人殺しになっちまった。けど、せめて俺と同じ呪われた存在にはしたくねぇ。

ガラードの吸血鬼化は、まだ未熟だと言う理由をつけて待ってもらっていた。

そして出会う、俺の神。エルメスによってガラードは吸血鬼化された。

エルメスを恨んだ。俺の希望を、殺した。

だが、神は言う。生きていてほしい、大事だから。生きていてくれるなら、なんだっていい。それが私の願いだから。死んでほしくないから。ジョヴァンニの心は、私が守るから。

それを聞いて知る。それが、それこそが愛。

エルメスはガラードを守ると、俺に約束した。言葉の通り、愛を注ぐ。聖母のように。

ジョヴァンニは俺と同じにならずに済みそうだ。母親がいるから。

ガラードが言った。

「伯爵にすぐ泣くのはミナの遺伝か？　って言われた！」

この子には、未だ感情がある。まだ若い、世間知らずな子供。ミラーカさんの墓の前で泣くエルメスをみて、涙をこぼすガラードに羨望すら覚えた。

よかった、この子にエルメスがいて。よかった、この子に母親がいて。俺の母親は死んでしまったけど、俺が育てた子に母親ができて、運命の呪いに苦しまずに済んで、本当に良かった。

俺の祈りは、初めて神に聞き届けられた。俺の願いを、俺の神が叶えてくれた。この時になってようやく俺は、救われた。

俺のクソ暗い昔話を聞いて、エルメスは涙をこぼした。

「何泣いてんだよ」
「カイが、泣かないから」
「同情するなっつったろ」
「カイが泣かないから、私が代わりに泣くの。同情なんかじゃないよ。私はガラードのお母さんで、カイがガラードを育てたお父さんなら、私達は同じ気持ちのはずだよ」
「・・・バカな奴」

俺の代わりだと言って泣くエルメスの涙を拭ったら、俺の手を取

ってエルメスは言った。

「カイにはみんながいたから、ガラードがいたから、乗り越えられたんだね。じゃぁ、私もきっと乗り越えられる。みんなが、ガラードが、カイがいるから。家族がいるから。きっと、大丈夫。みんなが私を大事にしてくれるから、大丈夫」

俺が嫌いになってしまった大丈夫という言葉を使って、泣きながら微笑んだエルメスは続けてこう言った。

「みんなは私の大事な家族。私の愛する家族。お父さんとお母さんがどれほど私と北都を愛してくれていたか、今ならわかる。きっとこの世界に生まれたこと、それだけで幸せだと思えるほどに愛は深かった。カイのご両親もきっとそう。

「カイがガラードやみんなを大事にして愛していたから、ガラードやみんなは苦しまなくて済んだんだね。そして今は私を大事にして守ってくれる。カイが大事にした人たちに、今私は大事にされてる。愛は、繋がっていくんだね」

エルメスのその言葉に、俺の神の愛に、あの日以来忘れてたはずの涙が、頬を伝った。

何度でも俺を救う神は、俺の涙を見て嬉しそうに笑う。

「カイの心も、愛も、ちゃんと生きてる。よかった」

こういう時、つくづく思う。アーサーは大した王様だったが、その娘も大した女だ。

親の存在というのは、偉大だ。

以上

LETTER 2 Clan［一族］

拝啓　アーサーさん

とても悲しくて、とても驚いて、とても嬉しい事がありました。

この前、カイとお出かけして、ていうか連れまわされたんですけど。その時に金糸雀を買ってもらったんです。お店で見かけた時に、北都を思い出して。

その後も、カイとランスとガラードはシスコン呼ばわりされたりして、なんだか北都を思い出さずにはいられませんでした。

金糸雀にキロちゃんって言う名前を付けて、籠の中で餌を食べているのを見ていたら、北都を思い出してどうしようもなく悲しくなりました。大好きだったのに、大好きでいてくれたのに、2回も死の恐怖を味わわせてしまって、本当に可哀想なことをしてしまいました。

それに、アーサーさんも一緒だったからわかると思うけど、お父さんとお母さんの事を思うと、胸が張り裂けそうになりました。あと7年で時効が成立したら日本に帰れるかもしれないのに、帰った時に両親になんて謝罪したらいいんだろうって。

そう考えると、帰りたいけど、帰るのが怖いと思ったりしてどう

しようもなく辛くなりました。

そしたらカイが来て、だからそのことを話したんだけど、さすがに困ったような顔をして。だけど、よく考えてみたら私だけじゃないんだって思って。シャンティも、カイ達も、みんな家族を奪われてる。家族から奪われてる。

でも、みんな頑張って乗り越えてる。その事に気付いて、怒られるかなって思ったけど、カイに聞いたんです。そしたら、カイは怒らずに昔話をしてくれました。

カイの過去は、とても悲しいものでした。とても辛いものでした。とても辛い運命でした。それでも生きていられたのは、信仰とジュリオさんとシュヴァリエのみんなの存在だったみたいです。

その中でも、特にガラードの存在が大きかった。私は知らなかったんですけど、ガラードはカイが面倒を見て育てたそうです。それを聞いて納得がいきました。

私がガラードを吸血鬼化した時に、カイはすごく怒りました。本当に私を本気で殺そうとするくらいに。本当に怒っていました。

その時はジュリオさんへの忠誠とか誓いだと言ってたんです。それが嘘だとも思えませんけど。多分、ジュリオさんは吸血鬼化を今のところはしないって約束してくれてたのにって、そう言う意味だ

ったのかなって思います。

あの時言われたんです。ガラードには神はいなくなったから、お前が祈りも懺悔も呪いも何もかも引き受けると約束しろって。だから、絶対にガラードの心は守るって、それがマスターの責任だからって言ったら許してくれたんです。

あの時のカイは本当に怒ってて、少し疑問に思うくらいでした。だけど、カイの話を聞いてようやくわかりました。カイがガラードに自分と同じような辛い思いをしてほしくなかったんだって。自分が大事に育てた子に、辛い運命を歩ませたくなかったんだって。

カイは神様を信仰してたから、吸血鬼になったことがすごく嫌だったんだと思います。辛かったんだと思います。それを私に隠していたのも、そのせい。私が友達だから、自分の本心を知られたら私が傷つくと思ったのかもしれません。相変わらず、カイは自分が辛くてもいっつも後回しです。

でも、カイの昔話を聞く限り昔からそうだったみたいです。みんなの為に頑張って、ジュリオさんの為に頑張って、ガラードの為に頑張って、今は私の為に。

カイの過去はとても辛く悲しいものだったけど、カイは救われたんだと言ってました。ガラードが今、苦しんでないから。私がガラードに愛を注いで心を守ったからって。私もそれを聞いて凄く嬉し

かったです。

カイの話を聞いて思いました。連鎖は呪いだけじゃないって。愛も連鎖するんだって思いました。カイが愛した兄弟たちが、今は私を大事にしてくれます。アーサーさんの愛した娘は、今みんなを大事に思っています。アーサーさんの救った孤児たちは、別の孤児たちを救おうとしています。

本当に辛い事があって、理不尽しかないと思っていたこの世界にも、こんなに素晴らしい事があるんですね。私はそれがとても嬉しくて、今生きていることを、今周りにいる人たちの事をとても愛しく思いました。その事に、とても、とても、救われました。

カイは、泣かないんじゃなくて泣けなかったんだって言ってました。ご両親を殺された時以上の悲しみを感じることはなかったからって。ジュリオさんを殺した時でさえ、凄く辛そうにしていたけど、泣かなかった。みんなは泣いていたけど、カイだけは泣かなかった。

だから私がカイの代わりにって泣いたら、バカな奴って言われたんですけど、話の最後に愛も繋がっていくんだねって言ったら、カイは一筋だけ涙を零しました。

カイの涙を見て思いました。カイはガラードやみんなを本当に大事に思ってるんだなって。だから、カイの与えた愛が連鎖して、今私の救いになってることが嬉しかったのかなって。自分の与えた愛が連鎖して、今誰かを救っていることが嬉しかったのかなって。

カイのガラードに対する思いを聞いて、カイが私をガラードの母親だって言うのを聞いて、お父さんとお母さんの事を思いました。その時に思い出しました。この世に存在するもので一番美しいものは、親から子供への無償の愛だと。

それはきっと空よりも広くて、海よりも深いものなのでしょう。きっと我が子がこの世に生を受けたことが、至上の喜びであるほどに。それほど深く強い愛情、絆。

ガラードがいることで、今になってわかるようになりました。ただ、ただ、存在することが、嬉しい。些細なことでも、笑ってくれることが嬉しい。例え本当の親子じゃなくても、本当の兄弟じゃなくても、血縁を凌駕するほどの、それほどの、愛情。

それほどの愛情を抱く私の両親が、北都を死なせてしまった私を責める事なんてないだろうし、悲しむと思うけど、きっと一緒に泣いてくれるんだろうって、私と同じ気持ちで泣いてくれるんだろうって、そう思いました。

私、本当に今日カイとこの話をすることが出来て良かったです。カイは救われたって言ってたけど、私も本当に救われました。とてもとても嬉しかった。

アーサーさんが私に向ける愛情も、きっとそれに近いものなんじゃないかって思います。アーサーさんはいつも私が笑っていられるように、いつも私の事を考えていてくれました。

有償の愛ならできないことでさえ、苦しい決断も、悲しい別れも、辛い選択も、アーサーさんは私の為にしてくれた。それはきっと無償の愛なのですね。

これを言ったらアーサーさんは怒るかもしれないけど、やっぱり私にはアーサーさんは偉大なる父です。畏怖すべき、敬愛すべき、偉大なる父です。

私達だけでなく、シャンティ達や、トリン、ツァン達の上にも愛情の連鎖を振りまいたあなたは、私達みんなにとって、偉大なる父です。私達の愛の連鎖の生みの親です。あなたが私の、私達ペンドラゴン一族の父であることを、心から誇りに思います。

敬具

P・S

カイが泣いたって書いちゃったこと内緒にしててくださいね。喋ったらブッ殺すって言われてるから。後が怖いので。

ＦＩＬＥ－１０　Ｃｏｎｆｌｉｃｔ　［葛藤］

シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動報告

ちょっとちょっと。それはないんじゃないの。それはないんじゃないの！

さて寝るか、と思って寝室入ったらエルメスに先に寝られてた。俺のベッドで。あれ、なんで？　なんでランスのとこに寝ないの？　疑問と共に怒りがこみあげてきて、文字通り叩き起こした。

「ぅや・・・いたい・・・」
「おはよう、エルメス。てめぇ何してんだコラ」
「寝てたの」
「ランスんとこ行け」
「やーだ」

瞬間的に相当イラついたぞ。なんって我儘な娘だ。マジどんな躾したんだよ。腹立つ！　と思ったんだが、話を聞いてみると意外な

事実が発覚。

「エルメス様、今夜はカイ様とお休みください」
「どうして？」
「色々と諸事情がありまして」
「ふーん？　わかった」

先日１１歳を迎えたランスはとうとう大人の階段を上り始めたようだ。つーか諦め早っ！　騎士で紳士なんじゃなかったのかよ。もうちょっと頑張れや。

「そういうことなら棺で寝ろ」
「やーだ」
「ヤダじゃねぇ。お前の本来の寝床は棺だろ」
「まだ怖いからヤダ」
「じゃぁ勝手にランスんとこいけ」
「カイは私の事嫌い？」
「いや、別に嫌いとかじゃなくて」
「嫌いなんだ・・・」
「い、いや、そうじゃなくて」
「私嫌われちゃったんだ・・・・しくしく」
「ご、ゴメン！　嫌いじゃねぇから！　うん、いいから。ここで寝ていいから！」
「本当？　ありがとう！」

しょうがねぇから渋々許可した。だって泣かれたんだぞ！　なに

も泣く事ねぇのに！
　つーか俺、騙されたのか。もしかして騙されたのか。あれはワザとなんじゃねぇか、後からそう思い至ってイラついた。本当は蹴っ飛ばしてでも追い出したいところなんだが、そうもいかない。

「カイと一緒に寝てるとクリシュナ思い出す」
「オイオイ、恐ろしい事言ってんじゃねぇよ」
「カイ、腕枕」
「ざけんな。俺はクリシュナさんじゃねーし」
「ちぇっ、ケチ」
「ケチじゃねぇ」

　俺はエルメスに背中向けてたんだけど、少ししたら後ろからシクシク聞こえてきて、ビックリしてエルメスの方向いたら泣きつかれた。キャー！　俺貞操の危機！

「背中向けないでよ。寂しい」
「うん、わかった。わかりました。だからちょっと離れてもらえませんかね。お兄ちゃんからのお願い」
「ねぇ、どうしてカイはいつも自分のことを後回しにするの？」
「シカトかよ・・・つーかしてねーし。俺はいつも自分最優先だけど」
「してるよ。カイだって辛いのにいつもどうでもいいって言って後回しにするじゃん」
「いや、してねぇ。するはずがねぇ」
「でもジュリオさんの話した時はそう言った。ガラードの話の時もそう」

「まぁ、それは・・・ていうかお前は何に泣いてるわけ？」
「だって、私はいっぱいカイに助けてもらってるのに、私はカイを助けてあげられないの？」

正直、何言ってんだこの小娘は、と思った。正直なところ、イタリアにまだいた頃から俺はエルメスにかなり助けてもらってた。コイツが気付いてないだけで、色々と救われたことは沢山あった。

それこそ、ガラードの件にしても、ジュリオ様の件にしても。むしろ、エルメスを救ってやれないのは俺の方だ。エルメスを救えるのはアーサーしかいねぇから、俺の存在はその場凌ぎでしかない。
俺はエルメスの助けにはならない。アーサーの代理すらも勤まらないんだから。エルメスを助けてやれないのは、俺の方。

「俺はもう既にお前に助けられてるよ。たくさん」
「ウソ、私には何もできないもん」
「んなことねぇ。お前はいつも俺が欲しい時に欲しい言葉をくれるし、俺の為に泣いてくれるだろ。ガラードの件にしてもそうだし、ランスも大事にしてくれるし、ジュリオ様の時だって安らかに死なせてくれて、俺の話を聞いて慰めてくれたし。それ以外にも、それ以前からたくさん」
「でも、カイは苦しそうにしてる」
「・・・そうだな。贅沢言うなら否定はしない」
「今は何が辛いの？」
「アーサーがいなくてお前が泣いてるから」
「アーサーさんが居ないのはカイのせいじゃないよ」
「あぁ、俺のせいじゃねぇし、俺にはどうしようもねぇ。お前が泣くのを止められるのはアーサーしかいねぇし、俺にはそれはできな

い。俺にはどうしようもない事が、俺にお前を救えないことが、今は辛いかな」

「そんなことない。私いっぱいカイに救われたよ」

「でも、お前は泣いてる」

「けど、それは・・・」

「いつも救われてるのは俺の方だ。俺は救われてるのに、お前を救ってやれない。ゴメンな。ただ、傍にいる事しかできなくて、ゴメン」

自分で言いながら、自分の無力さにいっそ泣けてくる。アーサーが帰ってきてくれたら、エルメスを閉じ込めてる悲しみの繭は一瞬で燃え落ちるのに。俺には北都の様に蜘蛛の糸を垂らしてあげることも、クリシュナさんの様に存在するだけで幸せの象徴になれる力もない。俺には何もない、何もしてやれない。ただ、傍にいる事しかできない自分が悔しい。

俺がエルメスを救わなきゃいけないのに、いつも救われるのは俺の方で、俺だけが救われる。誰もエルメスを救ってあげられない。俺はエルメスを救ってあげられない。その事が、辛くて悲しくて仕方がない。

アイツが自力で地獄から這い上がって、悲しみの繭を突き破って出てくるのを見守ることしかできない、自分の無力さが悲しい。

もういっそ、エルメスに俺を救ってほしくない。いっそ、傍にいるのが辛い。俺の無力さが、浮き彫りになるから。エルメスを置いて、俺だけが幸せになるような気がして、嫌なんだ。

「カイのバカ」
「は？」
「カイはいつも私の事考えてくれてるけど、全然私の事見てくれてない」
「・・・ん？」
「私、本当にカイにたくさん助けられたよ。カイが私を世界で一番大事にしてくれるから、すごく救われてるよ。カイの存在が、救い。いつも傍にいてくれて、ありがとう」

まただ。また、救われる。俺が救われる。何度でも、俺は救われる。俺だけが救われる。俺は、何もしてやれないのに。この心に同時に発生する悲壮と歓喜を、なんと呼ぶんだろうか。

「エルメス、ゴメンな、ゴメンな。傍にいてやることしかできなくて、ゴメン。お前が元気になれるなら、俺はアーサーの代わりにも、クリシュナさんの代わりにも、北都の代わりにも、なんにだってなる。お前が幸せになれるなら、俺は何にでもなるから」
「ありがとう。でも、カイは、カイだよ」

俺はアーサーになりたい。クリシュナさんになりたい。北都になりたい。エルメスを救う事の出来る誰かになりたい。

俺は、俺でいたくない。エルメスを救えない無力な自分が、大嫌いだ。

ＦＩＬＥ－１１　Ｃｈｒｏｎｉｃｌｅ　［年代記］

シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動報告

一日１０万な。で、今日で３００万だ。キッチリ払えよ、延滞料金。

「マジあり得ねぇ」
「もう１か月だよぉ」

アーサーを待つこと既に今日で１か月経過。ふざけんな。ていうかさぁ、せめていつ帰ってくるとかわかんないわけ？　自分の事だろ？　あぁ？

「ねぇ、カイ、そろそろ一回イタリアに戻らない？」
「ミラーカさんか？」
「うん」
「うーん、まだ少し早い気がするな。ヴァチカンの調査がまだ入ってるかもしれねぇし、それにオーストリアっつってもそれのどこかもわかんねぇからな」

「そっか、そうだよね」
「まぁ、ミラーカさんの出生地に関してはトリスに調べさせるから」
「うん、ありがとう」

あれからちょうど一か月経って、その間にエルメスも少しだけ落ち着いたようだ。悲しみに時間は最高の薬だと聞いたことがあるが、全くその通りだ。

けど、それと比例して色んなことに目が行くようになった分、新しく悲しみの種を拾ってくることもある。みんながいないという事を実感して、死んだという事を改めて実感して、アイツは時折泣いてる。拾って来た種を一粒ずつ潰していってる。隠れて、独りで。

本来なら一人で泣かせたくねぇけど、アイツの方が俺から逃げてしまう。この前エルメスが泣いていることが辛いって言ってしまったせいかもしれねぇ。俺を苦しめたくないと思って、隠れて一人で泣くんだ、アイツは。

俺はアイツを助けてやりてぇのに、支えになりてぇのに、余計な苦しみを背負わせてしまった。最悪だ。俺は一体どこまで役立たずなんだ。

アーサーは笑ってるエルメスが好きで、エルメスの笑顔を守る為にエルメスを大事にしてたのに、その為に俺に仲良くしてやれって言ったのに、俺はアイツを苦しめる事しかできねぇ。いつも、泣か

せてしまう。
俺だってエルメスの笑顔を取り戻してぇし、大事に思ってんのに。

アーサーに当たり前にできることが、俺には全然できねぇ。アーサーと俺にはきっと決定的な違いがあるんだろうけど、それがなんなのかわかんねぇ。
わかれば、俺にもアーサーの代わりが務まるかもしれないと思ってんだけど。

まぁ、仮にそれが愛情と友情の差だと言われたら、正直俺にはお手上げだ。さすがにそこまで模倣してやる事はできん。無理だし、あり得ねぇし、ぶっちゃけ嫌だし。断固拒否。

まぁ、愚痴はこの辺にしておこう。最近愚痴ってばっかだな。ちょっと反省。

知らない間に俺に一方的にフラれたエルメスは、トリスの部屋でミラーカさんの事を調べてる。けど、中々それらしい情報が出てこなくて、かなり苦戦してる。

エルメスの話ではミラーカさんも３００歳超えてたらしいし、貴族と言っても何かやらかした人か英雄でもない限りは、そんな昔の人の情報なんか出てこなくても仕方ねぇんだけど。

「ていうかそもそもさぁ、ミラーカさんって本名なの？」
「・・・あ」

トリスに言われるまで俺も気づかなかった。そうだよな、アーサーだって偽名なんだし、ミラーカさんだって本名とは限らねぇじゃねぇか。本名がわかんねぇ以上、完全に迷宮入りだ。

「しまったぁ、ミラーカさんの本名聞いとくべきだった」
「偽名使ってる人に聞いて教えてくれると思えねぇけど？」
「あ、それもそうだよね。アーサーさんも教えてくれなかったし」
「そりゃそうだろ・・・」
「でも聞いちゃったけど」

エルメスの言葉に俺とトリス興味津々。アーサーの正体めっちゃ知りてぇ！　それはエルメスも同様だったらしい。

「トリスちょっとパソコン貸して！」
「いーよー」

みんなには本名内緒！　つって自分で検索を始めたエルメスは、少ししたら結果に辿り着いたようだった。

「マジでぇぇぇ！？」
「どした！　どした！？」
「ちょ、ヤバい。ちょ、ヤバい」

なんかエルメスの動揺が半端ねぇ。こっち振り向いてワタワタしてる。ますます俺ら興味津々。

「見せて！」
「どれ・・・」
『マジでぇぇぇぇ！？』

危うく腰抜かしそうになったぞコノヤロー！　いえ、すいません。今まで生意気な口きいてすいません。

「まさかアーサー様があの世界一有名な吸血鬼だったなんて・・・」
「まさかアーサーさんがあの串刺し公だったなんて・・・」
「まさかアーサーがあのワラキアの英雄だったなんて・・・」

俺らしばらくボーゼン。いまだに信じられんが、そう言われてみれば確かに最強の吸血鬼で、化け物たちの中で神格化するほどの吸血鬼っつったらもうアンタしかいねぇじゃねぇか！

まさかアンタがあのドラキュラだったとは驚きだよ！

「す、すごい・・・私何も知らないで、今までとんでもない人に仕えてたんだ。ヤバイ！　超スゴイ！」
「つーかお前、伝説の吸血鬼の眷属とかマジスゲェ！」

「つーか俺らも血族じゃん！　うわー、マジスゲェ！」

俺ら大興奮。ハリウッドスターに知り合いがいるとかよりも自慢できるじゃん。マジスゲェ。マジヤベェ。

興奮しすぎてエルメスに至っては、名字ドラキュラに変えちゃおうとか言いだすほどだ。それはちょっとさすがにあんまりだから却下したけど。

少しして興奮が落ち着いてきた頃に、改めてパソコンの画面を見つめてたトリスがあれ？　っつって俺らを呼んだ。

「アーサー様の名前、アナグラムだ」
「え？」
「ほら、ＤＲＡＣＵＬＡ、これ逆から読んでみて」
「え？　ＡＬＵＣＡＲＤ・・・アルカードさんになった！」
「おー！　こんなトリックが！」

思わず拍手だよ。アンタすげぇな。存在が魔術じゃねぇか。その後もアンタの謎解きで大盛り上がりだよ。

つーか今更だけど、隠してたところ探ったりして悪かったな。心配するな、誰にも言ってねぇから。俺らだけで盛大に楽しんでやったから！　ハハハハハ！　やべぇ、みんなに喋りてぇ！　・・・・・・冗談だ。

しかし、アンタも色々あったんだな。俺らが知ったことは史実上のアンタでしかないし、本当の事かはわかんねぇけど、それでも俺なんかよりも遥かに辛い人生だったんだな。トリスがなんかしみじみ言ってた。

「俺らが５００年前に臣下にいたら吸血鬼になってなかったって、こういう事だったんだ」

アーサーも裏切られ続けて、それでも戦い続けてきたんだな。絶望してそれでも尚、生き続けてきたんだな。５００年以上も、ずっと孤独でも、それでも生き続けてきたんだな。

アーサー、アンタは本当にすげぇよ。エルメスの父親なだけあって、エルメス以上に強えぇ。弱い化け物なんかじゃねぇ。本当に弱いなら、とっくに生きることから逃げてる。

アーサーは本当に立派な王様だ。今俺達に、アーサーの血がわずかにでも流れていることを、本当に誇りに思う程だ。

正直俺は吸血鬼になったことがすげぇイヤだったんだけど、アーサーの事を知って、この事があって、なんかイヤじゃなくなった。

うーん、まさかアーサーにまで救われるとは。アーサー親子、恐るべし。

以上

ＦＩＬＥ－１２　Ｃｕｌｔ　［熱狂的崇拝］

シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動報告

エルメスがうざい。

「カイー、アーサーさんまだ帰ってこないの？」
「さーなー」
「アーサーさん早く帰ってこないかなぁ」
「そーだなー」
「アーサーさんに会いたいなぁ」
「そーだなー」
「カイも会いたいでしょ？」
「別にー」
「でも帰ってきてほしいでしょ？」
「まーなー」
「じゃぁ会いたいでしょ？」
「別にー」
「意味わかんない！」

わかれよバカ。確かに俺はアーサーに一日でも早く帰ってきてほしいと思ってるけど、別にアーサーに会いたいわけじゃねぇからな。勘違いすんなよ。エルメスの為だからな、言っとくけど！

「カイー、アーサーさん今どこにいるのかなぁ」
「さーなー」
「アーサーさん何してるのかなぁ」
「さーなー」
「アーサーさんに会いたいよぉ」
「さーなー」
「そこでさぁな、はおかしいよ！　もー！　さっきから返事が適当過ぎだよ！」
「そりゃそうだろ！　俺の相槌のキャパ越えてんだよ！　お前この会話何ラウンド目だと思ってんだ！」
「そんなのしょうがないでしょ！」
「しょうがなくねぇよ！　一日に１０回も２０回も同じこと言いやがって！　いい加減しつけーんだよ！」
「だって！　だって！　会いたいんだもん！」

先日の件でアーサーに惚れ直した様子のエルメスは、更にアーサーが恋しくなったらしい。よかったな。

しかし、そのとばっちりがコレだ。この会話を毎日毎日一日に何十回も繰り広げられる俺の身にもなってみろ。

勿論、エルメスがアーサーに会いたい気持ちはよーくわかる。うん、わかる。だけどもだ・け・ど、人には我慢の限界と言う物があ

るのだよ。人じゃねぇからってのはこの際無しだ。

元々サッパリ風呂上り気質な俺には、今のエルメスのようにベットベトした粘着ローション気質は耐え難いわけだ。そりゃもう苦痛なわけだ。わかる？

例えるなら酔っぱらって調子に乗ったオッサンが、若い女に何度も同じ自慢を繰り広げているのと同じ状況だ。な、うぜぇだろ？実にわかりやすい解説。さすが、インテリジェンス俺。

「はぁ・・・アーサーさん、会いたいな・・・」
「また始まった・・・ハァ」

そりゃゲンナリもするぜ。溜息も出るさ。そんな俺の気も知らないで、シュヴァリエの奴らったら笑うのよ。ひどいじゃない。

リオ　「プクク、副長、アーサー様に嫉妬してんだぜ」
パーシー「可愛い妹取られたとか思ってんだぜ、あのシスコン」

こいつらは死ねばいいと思う。ていうか、殺そうと思う。

俺　「テメェら・・・人の気も知らねぇで好き勝手言いやがって」
ペレアス「んなことねぇよ？　副長の気持ちはよーくわかってるから！　なぁ？」

トリス「そうだよー。なんてったって世界一大事な妹だもんなー」
ディナ「大好きな妹だもんなー」
ユアン「そりゃアーサー様の話ばっかりされたら寂しいよなー」
キルシュ「シスコンの副長には耐え難いよなー」
俺「そーかそーか、お前らがそんなに死にたがってたとは知らなかったぜ。すぐ楽にしてやる」
バカども『ギャァァァ！』

ふぅ、スッキリした。いいストレス解消になった。とりあえず喋った奴は全員撃った。黙って苦笑いしてただけの奴らは見逃してやった。神のごとき慈愛を持つ俺、さすがだ。

でもさ、でもさ、その後がもっとヒドイのよ。もっと可哀想なのよ、俺。

「ちょっと！　何も撃つことないじゃない！　みんなに謝りなさい！」

え、この子お母さん？　俺のお母さん？
エルメス激怒。まさかの命令口調。あまりの剣幕に思わず怯んじゃった俺。

「カイはいつもすぐ撃つんだから！　やめなさいって何回言われたらわかるの！」
「いや、でもこいつらが・・・」
「言い訳しない！　今度やったら爆破するわよ！」
「ご、ごめんなさい」

「謝る相手が違う！　みんなに謝りなさい！」
「ごめん・・・」

完全にお母さんに怒られるガキだよ俺。つーかブチギレたエルメス超怖えぇ。普段が温和なだけに温度差が半端ねぇ。爆破するって言われた時マジ冷や汗かいたぞ。

しかしエルメスは俺に言ってはいけないことを言ってしまった。

「どうしてそんなにバカみたいに撃つの!?　全く！　変なとこばっかりアーサーさんに似て！」

一瞬、どこの世界のホームドラマ？　と思ったけど、聞き捨てならないセリフにアドレナリンが再活性。本来の俺、復活。

俺　「テメェ、今なんつった？　誰が誰に似てるって？」
エルメス「カイの変なとこがアーサーさんに似てるって言ったの！」
俺　「そりゃ聞き捨てならねぇな。眉目秀麗・豪放磊落・品行方正な俺様があんな自己中横暴吸血鬼と似てるわけねぇだろ！」
エルメス「品行方正の方が聞き捨てならないけど!?　自己中横暴吸血鬼なんて、カイの為にあるような言葉じゃない！　加えて鬼畜！」
ガルフ　「更に付け加えると狂犬」
パーシー「歩く嫉妬心」
ディナ　「歩く独占欲」
リオ　「つまり極度のシスコン」

俺　「更に言うなら優秀・有能・秀才・完璧！　それが俺！」
エルメス「カイはどこまで強欲なの!?　バカじゃない!?」
ガラード「ていうかシスコンは否定しなくていいの？」
俺　「忘れてた！　する！　全否定！」
ベディ「全否定したらバカしか残らねぇじゃん」
エルメス「カイって結構バカだよね」
俺　「黙れ！　お前に言われたくねーんだよ！　アルティメットバカ！」
エルメス「アルティメット!?」

　このバカは究極のバカなだけに、とんでもねぇ事を言いやがる。似てる？　俺が？　アーサーに？　冗談じゃねぇ。欠片も似てねぇよ。共通点があるとしたら性別くらいなもんだっつの。

「お前よぉ、冗談は顔だけにしろよ、マジで」
「ヒド！　なんでそう言うこと言うかな！」
「事実だから。大体アーサーつったらさぁ、自己中・性悪・人格破綻者・傲岸不遜・陰険・卑怯・横暴・乱暴・粗野・エロオヤジ。どこも俺と共通点ねぇよ」
「全部該当するよ!?　今のまるっきりカイの自己紹介じゃん！」
「んなわけねぇだろ！　あんな化け物と一緒にすんな！　俺は地上に舞い降りた高尚かつ崇高な天使だぞ！」
「よ、よくそんな事を恥ずかしげもなく言えるね・・・ある意味尊敬するよ」
「おう、尊敬しろ。俺に跪き傅き敬い崇め、奉れ」
「・・・・・・カイって、すごいね」
「ようやくパーフェクトバカにも理解できたか。引き続き俺を敬愛しろ」

「うん、もう相当引いてる」

何なんだこのクソ生意気でバカな小娘は。アーサーの躾がなってねぇから俺はこんな不当な言い様をされてんだぞ。アンタみてぇなのをモンスターペアレンツと呼ぶんだ。そのガキも親に似てモンスターだ。こっちはたまったもんじゃねぇ。

エルメスといいシュヴァリエといい、俺の周りはバカばっかだ。嫌がらせか。もしくはこれが俺に対する神の報いか。冗談じゃねぇ。

でもとりあえずバカどもは一応大人しくなったから俺もソファに腰かけたら、ずっと黙ってたランスが隣に座ってきて俺に耳打ちした。

「本当はアーサー様に似てると言っていただけて嬉しいでしょう？」

急に何を言いやがるんだこのクソガキは。何を根拠にそんなイカれた発言をしやがるんだこのクソガキは。

俺の目から放たれるふざけんなビームに気づいたランスは再び耳打ちした。

「エルメス様の為に何にでもなりたいカイ様には本望でしょう？」

「は！？　なに！？　何言ってんの！？」

「アーサー様の代わりになるとおっしゃったじゃありませんか」

「おま、お前聞いてたのか！」
「えぇ、カイ様のメソメソ言う声で目が覚めましたから」
「メソメソなんてしてねぇ！」
「してましたよ」

俺としたことがなんたる失態。あれを他人に、よりによってこの腹黒のクソガキに盗み聞きされるとは、大失態にも程がある。自殺級ショック。

慌ててランスを引っ掴んでその場から逃亡すると、案の定、悪魔の囁き。

「みなさんに知られたくはないでしょう？」
「テメェ今度は何が目当てだ。金か？」
「お金なんて要りません。僕の頼みを聞いてほしいだけですよ」
「要求はなんだ」
「勿論エルメス様です」
「出た・・・とうとう本性表しやがって。お前がエルメスをオトすのを黙認もしくは協力しろってか」
「察しが良くて助かります」
「お前見た目草食系なのに、なんでそんなに獰猛なんだよ。いっそお前の野生が恐ろしい」
「カイ様だって野獣の様にエルメス様に襲い掛かったじゃないですか」
「お前・・・お前本当いい加減忘れろ。俺は今それどころじゃねぇんだよ。なんでお前が当人以上に根に持ってんだよ」
「勿論わかってますよ。今のカイ様にそんな気が微塵もない事も、エルメス様を大事にしてらっしゃることも。ですが、僕はそれが許せません」

「は？　なんでだよ。これ以上のノープロブレムは存在しねぇ」
「いいえ、大問題です。できる事ならエルメス様に近づいてほしくもありません。ですが、それがエルメス様の望みなので、僕は渋々容認しているにすぎません」
「お前本当どんだけだよ・・・」

アーサー、ヤベェよこのガキ。相当だよ。もう病気だろ。アンタ本当にうかうかしてらんねぇぞ。コイツの策略好きと腹黒さと卑怯さはアーサーを彷彿とさせるな。

ていうかさぁ、まぁ人には色々欠点なり長所なりあるわけじゃん。でさぁ、よく考えてみたらさぁ、別にアーサーに似てるとこがあんのって俺だけじゃない気がする。
ただ単にアーサーが人の悪い部分の集大成ってだけであって、たまたま一致するようなところはみんなあるぞ。

要するにアーサーは悪の代名詞。ＯＫ？　仮にアーサーの資質を継ぐ奴がいるとしたら、俺の目の前でニヤリと笑うこの薄気味悪い腹黒のクソガキだろう。間違いねぇ。

「つーかお前、さっさと諦めやがった上に卑怯くせぇ。騎士で紳士じゃねぇの？　恥ずかしくねぇの？」
「カイ様、ご存じないんですか？　本物の騎士あるいは紳士は、悪にすら喜んで手を染めるものです」
「それは主人の為にだろ。お前は自分の本能に忠実なだけじゃねぇか」
「いずれエルメス様は、僕なしでは生きていられないようにして差

し上げます。それこそがエルメス様の幸せですよ」
「おま・・・どこでそんなセリフ仕入れて来るんだよ。お前本当に11歳？」

恐ろしい・・・一応上司としてコイツの面倒を見てきたが、こんな恐ろしい奴に育つとは・・・ガラードと何が違ったんだろう、コイツ。
ガラードは俺に似てあんなに素直でいい奴に育ったのにコイツときたら。多分コイツの企み好きはジュリオ様の影響だな。間違いない。

アーサー、このガキヤバいぞ。本当にヤバいぞ。弱みを握られた以上、俺はもうエルメスに賭けるしかないぞ。今はまだアーサー、アーサーってばっかり言ってるけど、その内寝取られるぞ、文字通り。

あ、でもエルメスがウザくなくなるなら、それはそれでいい気もするな。うん。やっぱ俺ランスに着くわ、悪いけど。決めんのはエルメスだ。せいぜい頑張れ！　ハハハハハ！

以上

ＦＩＬＥ－１３　Ｃｏｖｅｒ　［補填］

シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動報告

結局あれからどれほど頭を悩ませてもミラーカさんの本名はわからなくて、まぁ当たり前なんだけど。どうせならインドに連れてきて、クリシュナさんと一緒に眠らせてあげようという事になった。

「本来ならちゃんと生まれたところの方がいいんだろうけど、クリシュナと一緒ならミラーカさんも寂しくないよね」

「そうだな。お前も毎日会いに行ってあげられるしな」

「うん」

実際にミラーカさんを迎えに行けるのはまだ少し先になりそうだ。今あの城に行って、ヴァチカンの調査員にバッタリ遭遇、なんてことになったら本末転倒だからな。

話の流れで、エルメスがミラーカさんのことを話してくれた。

「ミラーカさんはアーサーさんの次に出会った吸血鬼で、私が吸血鬼化したばっかりの頃からずっと一緒だったんだ」

「ふーん、じゃぁ付き合い長いんだな」

「そうだよ。アーサーさんと暮らし始めた当日に紹介してもらったから。その頃はね、ミラーカさんアンティークショップやってたの。無許可営業だったけど」

そう言うとエルメスは壊れてしまったコバルトブルーの髪飾りを取り出した。これが壊れてしまったのはあの戦いのせい。ジュリオ様に髪の毛を掴まれた時に一緒に握りしめられて割れてしまった。

「これはね、その時にミラーカさんがくれたの。出会った記念に、お友達になった記念にって。私すっごく嬉しくて、使うのが勿体なさ過ぎて、自分の結婚式とあの時しか使ったことなかったんだよ。だけど、壊れちゃうならもっと普段から使ってあげればよかった」

エルメスは髪飾りを握りしめて悲しそうに俯く。あの日の彼女の死は、彼女の死に方は俺の目から見てもエルメスにとっては恐らく一番心残りだ。ミラーカさんはエルメスとアーサーを守るために、ずっと封印してた力を解放してしまった。そのせいで死んでしまった。

彼女はそれが使命なんだと言ってたし、それは讃えてあげるべき

だ。彼女は立派に使命を全うして、そのおかげで今エルメスは生きてる。彼女のあの決断があったからこそ、今のエルメスがある。だけど、わかってはいてもエルメスは後悔せずにはいられない。

「アーサーさんにとってのミラーカさんは、私にとってのカイと同じだったのよ。１００年前からずっとアーサーさんを支え続けて、私の事にしても他の事にしても、私達に相談できないような事でもミラーカさんには頼ってた。本当にアーサーさんにとってミラーカさんはとても大事な人で、特別な人だったの。あの時のアーサーさんの辛そうな顔が忘れられないの。あの時のミラーカさんの涙が忘れられないの」

あの時の事を思い出す。涙ながらに微笑んで幸せだったと言いながら消滅したミラーカさん。普段の様子からは想像もつかない程取り乱して、ミラーカさんの砂に縋り付いていたアーサー。その隣で慟哭するエルメスの姿。

エルメスの言う通り、アーサーにとってミラーカさんは唯一無二の親友だったんだろう。後になってガラードから聞いた話だと、スパイ活動の事もミラーカさんだけは最初から関与してたと言ってたし、立場的にも心理的にも彼女はアーサーの相談役だったんだな。

「ミラーカさんにとってもアーサーさんは本当に特別だった。あの二人が並んだところは綺麗で、とても綺麗だけどなんだか悲しくて。きっと二人とも同じ悲しみを背負って、二人で乗り越えてきたんだと思う。だから私の事もとても大事にしてくれたの。いつも可愛がってくれて、妹みたいに大事にしてくれた。大好きな優しいお姉さ

んだった」

泣きながらそう言うエルメスにとっても、ミラーカさんは特別だったんだろう。吸血鬼になったばかりの時から傍にいた姉。そういえば俺とエルメスがケンカした時も、真っ先に文句言ってきたのはいつもミラーカさんだった。

そう思い返してみると本当にエルメスを大事にしてたんだなぁ。・・・・・もしかして、俺嫌われてたかも。

「私とアーサーさんの為に命を張って、魂を代価にして使命を果たしたミラーカさんには本当に感謝してもしきれない、謝罪してもしきれない」

「そうだな。でも、お前もわかってると思うけど彼女は立派に使命を果たしたんだから、ちゃんと讃えてやれよ」

「うん。でも、できることならアーサーさんの為に、ミラーカさんには生きていてほしかった。ミラーカさんが居なくなってしまって、アーサーさんは心の拠り所をなくしてしまった。帰ってきても、きっとミラーカさんが居ないことはアーサーさんにはとっても辛い事だと思う」

「確かにそうかもしれねぇな。１００年以上もずっと傍にいた親友がいなくなるなんて、想像するだけでも辛いな。それほどの時間を一緒に過ごしてきて、きっとあの二人は友達の域なんて超えてたんだろうな」

「そうだね。きっとあの二人は心で深く繋がってたんだよ。心で繋がったソウルメイトだったんだよ」

「ソウルメイトか・・・」

話ながら考えた。もし、同様に俺の前からエルメスがいなくなってしまったら？　想像すらしたくねぇ。エルメスのいない世界を想像できねぇ。想像するだけで辛い。俺が想像だけで味わう以上の辛さを、アーサーは帰ってきてから実際に体験しなきゃいけない。

きっとアーサーはとても辛い思いをするだろうし、きっと一生忘れられなくて後悔もするんだろう。そんなアーサーを見て、エルメスがどれほど悲しむか。

「それほどの人がいなくなってしまって、アーサーさんはきっと帰ってきてもすごく悲しむ。ミラーカさんが居ないことはアーサーさんにはきっと耐え難いこと。だから私が支えてあげなきゃ。私がミラーカさんの代わりにならなきゃ」

エルメスは、本当にアーサーの為に生きている。だからこそきっとエルメスはアーサーの支えになれると思う。でも決意をしたような眼でそう言ったエルメスは、すぐに落ち込んだような顔をした。

エルメスはミラーカさんじゃないから、及ばない部分もあるとわかってる。だからその事で、すごく苦悩すると思う。考えればすぐにわかることだ。

でも、そう考えていて気付いた。俺とアーサーとの決定的な違い。エルメスがミラーカさんの代わりに、俺がアーサーの代わりになれない理由。

「お前は多分ミラーカさんの代わりにはなれないんだろうな」

「・・・そうだと思う」
「でも、それはお前の力不足とかじゃないぞ」
「え？　じゃぁ、なに？」
「元々の関係が違うからだ。人にはそれぞれ役割があるだろ。友達は親にはなれない。家族は恋人にはなれない。人には決まった相手にしか見せない決まった顔がある。ミラーカさんの席はミラーカさんだけの物だ。アーサーにとってのお前はお前でしかない。お前以外にはなれないんだよ。だからこそお前にしかできないこともあるんじゃないか。お前にしか見せない顔もあるだろ」
「・・・そっか、そうだね。そうだよね」

他人が他人の席を補うことは、その関係が深ければ深いほど不可能だ。その人はその人でしかない。その人の席は空けておかなければならない。本人がその席を整理できるようになるまで。

それができるようになるまではきっと苦しむ。心に穴が開いたみたいな言葉があるけど、本当にそうなんだろう。けど、それは自分で乗り越えなきゃいけねぇ事だ。むしろ誰かを代理に立てるなんてことはするべきじゃねぇ。それは、本来の席の持ち主に対しても、代理にしようとした人に対しても冒涜以外の何物でもない。

それこそかつてエルメスは経験している。“ミナ”の人形。人形が手に入れば楽だろう、自分から人形に成り下がって、人形になりきってしまえば楽だろう。でも、人は人形じゃねぇ。エルメスはエルメスだ。俺は俺だ。

エルメスにとってのアーサーは、師であり父であり主人だ。エル

メスにとっての俺は友達であり家族であり臣下だ。最初から決定的に違うんだ。根本的に違う。俺がアーサーになることは最初から不可能だった。俺が俺以外になることは、最初から無理なことだった。

「カイはいつも私の事を考えてくれてるけど、全然私の事見てくれてない」

あの時のエルメスの言葉の意味がようやく分かった。俺が見ていたのはエルメスの向こう側にいるアーサーで、アーサーならどうするかって事ばかり考えて、エルメスが俺に求めているものに目が向いてなかったんだと気付いた。俺が俺であることを忘れていた。

でも、それなら俺にしかできないことだってちゃんとあるはずだ。エルメスが俺にしか見せない顔があるはずだ。それに俺がちゃんと気づいてやらなきゃ。

とりあえず、一つだけアーサーに頼みがある。エルメスは以前アーサーに人形扱いされていた時に傷ついたと言ってた。それでも今アーサーの為にミラーカさんの代わりになりたいと思った。

きっとアーサーはミラーカさんが居ないことにとても傷ついて辛い思いをすると思うけど、できることならエルメスの思いを汲んでやってほしい。傷ついて尚、自ら人形に堕ちようとしたほどの思いを、いつかわかってやってほしい。すぐには無理でもな。とりあえず、それだけ。

以上

LETTER－3　copy　［模倣］

拝啓　アーサーさん

今日はちょっと私の悩みを聞いてください。

カイは普段からいつも私の事を考えてくれて、自分のことを後回しにして、辛い思いを押し込んで、私を励まそうとしてくれてます。いつもたくさん心配かけて、いつもたくさん助けてもらってます。

だけど、私は助けてもらってばっかりで、カイを助けてあげられません。カイが背負うジュリオさんへの罪悪とか、あの戦争で受けた悲しみを私が癒してあげることが出来ません。

それをカイに話したらやっぱりいつも通り別に、みたいな、俺はいつも自分最優先だ、みたいな感じで。私じゃ助けにならないのって聞いたら、バッカじゃねーの、みたいな顔されて。

だけど、カイは私にいっぱい助けてもらったって、救われたからって言ってくれたんです。でもカイはずっと辛そうな顔してるから、今は何が辛いのって聞いたら、アーサーさんが居なくて私が泣いてることが辛いって言ったんです。

私はそれを聞いてとても嬉しかったけど、とても悲しく思いました。カイは何にも悪くないのに、私の悲しみをカイにまで背負わせてしまっていると思って、とても悲しくなりました。

私はやっぱり災厄だったようです。私はいつも助けてもらってるのに、私がカイを苦しめてたんです。その事が、すごく悲しかった。

それなのにカイは、いつも助けてもらってるのは自分だからって、お前を救ってやれなくてゴメンって、傍にいる事しかできなくてゴメンって謝るんです。私にはそれがとてもとても辛かった。

私には、カイが傍にいてくれるだけで十分なのに、たくさん助けてもらってるよって言ってるのに、カイは全然わかってくれないんです。

ずっと自分を責め続けて、アーサーさんの代わりに、クリシュナと北都の代わりに、私の幸せの為になら何にでもなるとまで言って。そこまでカイを追い詰めてしまった自分が、許せない。

だから、せめて私の泣き顔をカイに見られないように、と思ったんです。それに気づかれたら怒られちゃうかもしれないけど、気付かれなきゃいいかと思って。

でも、問題はここからです。

この前ちょっと色々あって、なんだか最近とてもアーサーさんに会いたくて、本当にどうしようもないくらい会いたくて。それをずーっとカイに言ってたら、さすがにうぜぇって呆れられたんですけど。

そしたら、それを見てたシュヴァリエのみんながまたシスコンとか言い出して、それでカイが怒ってみんなを撃っちゃったんです。それはさすがにあんまりだと思って、私が怒ったら一応おとなしくなったんです。

でも、前から思ってたけど、アーサーさんとカイって普段は仲悪かったけど、妙なところで意気投合してたじゃないですか。なんか変なところばっかり似てると思ってて。

アーサーさんもちょっとしたことですぐクライドさんをリンチしたりしてたし。だからそれを言ったらカイがものすごい怒り出して。

なんか色々言ってましたけど、自分は優秀で完璧で品行方正だから、あんな自己中横暴吸血鬼と一緒にすんな！　とか言い出して。もう、何を言ってるんだこの人、と。

しまいには、俺は地上に舞い降りた天使だとかアホみたいなこと言いだして、本当にこの自信は一体どこからやってくるのかと呆れました。というか、引きました。

この前はあんなにメソメソ言ってたのに、相変わらずキャラに定まりがないと言うか、いっそ二重人格なんじゃないかと思う程です。ていうか、絶対二重人格です。良い人の時と悪い人の時でギャップが激しすぎます。いっそ異常者です。

メソメソしてる時のカイはあり得ない程自信喪失してるのに、普段が異常なほど自信満々なのはなぜですか？　どっちが本物なんですか、あの人。もう私にはわかりません。意味が分かりません。

どっちも共通してるのは、結局私の話を聞いてないことですね。普段はまぁ当然ですけど、メソメソバージョンの時だって、私は助けてもらってるって何度も言ってるのに、全然聞いてなくて助けてやれないって言い張るし。結局私の意見無視ですよ。

つまるところ、あの人自分の考えに絶対の自信があるんですよ。それがいい事でも悪い事でも。しかも思い込みも激しい。俺がそうだっつったらそうなんだよ！　ですよ。

私の意見なんか聞きゃしないんですよ。私が私のこと言ってるのに完全シカトですよ。世界はカイを中心に回ってるみたいです。

なんかそう考えると、カイの為にと思って隠れて泣いたりしてたのがバカみたいに思えてきました。私が何しても、何もしなくても、カイが考えを改めない以上は変わらない気がする・・・。そう思いません？

あ、でも一つだけ改まったみたいでした。さっきも書いたけど、カイは自分がアーサーさんの代わりにならなきゃってずっと思ってたみたいだったんですけど、それは考え直したようです。

実はミラーカさんの事で少し話したんですけど。ミラーカさんは、アーサーさんにとって本当に特別な人で、大事な友達だったでしょ？　だから、アーサーさんがすごく辛い思いをするだろうって思って。

だから、アーサーさんが帰ってきたら私がミラーカさんの代わりにアーサーさんを支えてあげなきゃって言ったんです。

そしたらカイが、人には役割があって、その人にしか見せない顔があるから、その人の席はその人の物でしかないって。私は私でしかなくて、だからこそ私にしかできないことがあるって言ってくれたんです。

そう言われて、確かにそうだなぁって思って。私は逆立ちしたってミラーカさんにはなれないし、逆にミラーカさんも私にはなれないですもんね。

だから、私は私なりにアーサーさんを支えようって。私にしかできないことをしようって思いました。

そう言えば以前クリシュナに、自分にできる事、自分にしかできないことを考えて実行した方が建設的でしょって言われたのを思い出しました。なるほど、こういうことなのね、と思いました。

カイも自分で言いながら、それだ！　みたいな顔してたので、少しはカイの肩の荷も降りたんじゃないかな、と思います。

私もカイも今は五里霧中を試行錯誤しながら歩いてるけど、この1か月で色んなことを考えて、色んなことが見えてきました。少しだけ、霧が晴れてきた気がします。

アーサーさん、今カイが傍にいてくれることで、より強く思います。ミラーカさんが亡くなってしまったことが本当に心残りで、残念でなりません。

アーサーさんが帰って来た時に、もう今まで支え合ってきた親友はここにはいない。その事を思うと、アーサーさんがどれほど悲しむかと思うと、苦しくて仕方がありません。

アーサーさん、残念だけど、私ではミラーカさんの代わりにはなれません。私はミラーカさんほど世界の事も人の事もわからないし、アーサーさんの事にしてもその気持ちを深く理解してあげられないかもしれません。

だけど、私は私なりにあなたの支えになります。前に約束した通り、ずっと傍にいます。どこにもいきません。一生あなたの為に生き続けます。

私ではあまりアーサーさんの役には立てないかもしれないけど、絶対にあなたを一人にはしません。ずっと傍にいますから。それだけは約束します。それだけは私の役目、私の使命です。誰にも譲ってあげないんです。

きっと私は前の様に一生懸命あなたの背中を追いかけるんだろうけど、あなたの後ろで背中を見守って支えるのが、私の使命です。そこが私の席です。たまに振り返って呆れたように笑う、あなたのその笑顔を絶やさないようにずっと傍にいますから。

アーサーさん、あなたに早く会いたいです。もう1か月も経ってしまいました。あなたに会いたくて、会いたくて、会いたくて、どうにかなってしまいそう。

あなたはいつ帰ってくるんですか？　もう1か月も経ったのに、まだ私は待つんですか？　まだ、ただいまと言ってくれないんですか？

早くあなたに会いたい。早く帰ってきてください。じゃないと、アーサーさんが帰って来た時に話すことが多すぎて、話す方も聞く方も大変ですよ？

まぁ、いつまでも待ちますけどね。でも、ホントに帰ってきてくださいよ？　絶対ですよ！　じゃなきゃアーサーさんの正体みんなにバラしちゃいますからね！

敬具

ＦＩＬＥ－１４　Ｃｉｇａｒｅｔｔｅ　［煙草］

シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動報告

やはり、俺は間違っていたようだ。俺の教育方針も、考えも。俺が甘かった。でも俺は悪くねぇ。

「カイー、明日お買い物行きたーい」
「そーか。行って来い」
「一緒に行こうよ」
「断る」
「行こうよ！」
「断固拒否」
「行くの！　命令なの！」
「お断りします」
「んもー！　ケチ！」
「ケチじゃねぇ。ランスと行け」

我儘でうぜぇこのバカなお嬢ちゃんは、買い物に行くのだとうるさい。前回の事があるから、俺は二度とコイツと外出したくないんだけど。

そんなやり取りをしてランスに押し付けようとしたら、ランスが傍まで寄ってきた。

「僕が同伴するのは構いませんが、それでもカイ様にはご同行頂きたいと思います」

「あぁ？　なんでだよ」

「エルメス様になにかあったらどうなさるんですか？　シュヴァリエなんですからちゃんとお守りするのも仕事のはずですよ」

「アイツが人間に負けるわけねぇだろ」

「それだけではありません。また以前の様に警察沙汰にでもなったら、僕には対処しかねます」

そうだった。忘れてた。以前こいつはランスと出かけた際に迷子になった挙句、ギャングを壊滅させた上に警察沙汰にまでなったんだった。

あの後大変だったな・・・教理省の枢機卿（表）のジーサンから

「さすが、と言っておきましょう。さすがに殲滅機関を率いるキング枢機卿の部下なだけに、大したじゃじゃ馬ですな。しっかり手綱を握って、調教するがよろしいでしょう」

とか嫌味言われて、特務機関聖堂騎士（パラディン）の機関長からも文句言われて。散々だったな・・・

全く、何がどうなったらそうなるんだ。アーサーの躾がなってねぇせいだぞ。あんな面倒事は金輪際ごめんだ。コイツを野放しにし

ておくのは危険だな。
そう言う結論に至って、俺も渋々同伴することにした。

んで、翌日。

「カイ様！　歩くのが早いです！　エルメス様に合わせてください！」
「あぁ？　何言ってんだ。お前らが俺に合わせろ」
「何をおっしゃるんですか。それでもシュヴァリエですか？　それでも筆頭なんですか？」
「これでもシュヴァリエ筆頭だ」

チクショー腹立つ、このクソガキ！　こいつのせいで終始険悪ムードだよ。コイツ空気読むとかそう言うのしないわけ？　面倒くせぇ。腹立つ。
で、イライラしながらもなんとか一度も迷子にならずに、エルメスの行きたがってた靴屋に到着。迷子にならなかったのはよかった。そこは。

椅子に座ってボケーっと買い物をするランスとエルメスを眺めてたら気付いた。ランス、デカくなったなぁ。ガキは成長が早ぇぇな。

「カイ、お待たせー」
「お待たされ。エルメスお前身長いくつ？」
「ん？　１５０だよ」

「ちっさ！　ガキか！」
「東洋人は西洋人に比べたら小さいものなの！」
「だとしてもチビだろ」
「まぁ、だとしてもチビだけど」
「ちょっとお前ら二人背中合わせに並んでみろ」

買い物を済ませて戻ってきた二人を早速比較してみることにした。
二人を背中合わせに並ばせて、頭を合わせてみる。

「お、ランスもう少しでエルメス追い抜くんじゃねぇか」
「本当ですか！？」
「あぁ、あと3センチ位」
「ウッソ！　もうランスに追い抜かれちゃうんだ。やっぱり子供は成長早いねぇ」
「来年なったらとっくに追い越してんだろうな」
「うわぁ、嬉しいです。僕も早く大人になりたいなぁ」
「今から大人んなるのなんかあっという間だぞ」
「へぇー・・・」

エルメスと出会ったばかりの頃、約3年前はまだほんのガキだったんだけどなぁ。ガキの成長はいつ見てもいいもんだ。ランスは自分の成長が嬉しいようで終始ニコニコだ。１０代の時間なんて本当にあっという間だから、コイツもすぐに大人になっちまうんだろうな。

「カイ様は身長いくつですか？」

「１８０ちょい」
「デカ！　ムダに！」
「ムダじゃねぇ」
「じゃぁ僕は１８５目指します」
「目指したからってなれるもんでもねぇけどな。つーか何そのムダな負けず嫌い」
「大人になってまでカイ様より劣る部分があるなんて、自分が許せません」
「どういう意味だコラ」

なんでコイツこんなにムカつくの？　なんで俺に負けたくないの？　もしかして俺見下されてんの？　俺はコイツ喜ばせてやったのに、この言いようはどういうことだ。なんなんだよ、腹立つ。

店を出てそんなことを考えながら歩いてたら、通りすがりに男に肩がぶつかった。サーセン、と声をかけてそのまま行こうとしたら急に大声でまくしたてられた。が、何を言ってるのかが分からん。

「エルメス、アイツ何言ってんの。何語？」
「あれはヒンディ語だね。ぶつかっといて謝罪もなしかって」
「あー、じゃぁゴメンって言っとけ」
「うん」

エルメスが間に入ってその男を宥めはじめる。でも、事態は俺の予想だにしない展開に。エルメスとその男が段々険悪になってきて、大声で口ゲンカを始めた。

「ちょ、エルメス！？　何やってんだお前！」
「だってコイツ調子乗るんだもん！　病院行くから金出せとか言うから！」
「あぁ？　面倒くせぇ。んなもんやりゃいいだろ。ホラよ、拾え」

財布から金を抜き取って男の前にばら撒いてやった。で、男が金を拾ってる間にエルメス引き摺ってその場から退散。

「なんかカイ、成金の超ムカつくオッサンみたいだったよ」
「お前ね、誰のせいだと思ってんだ。しなくて済むケンカ始めたのは誰だ。なんでもかんでも拾ってくんじゃねぇよ、バカ犬が」
「そうですよ、エルメス様に何かあったらどうするんですか。ケンカはダメですよ」

ランスにまで説教されたエルメスは、くっ、みたいな顔してる。そりゃランスでも説教すんだろ。この点に関して俺に同意しない奴はいねーはずだ。

しかし、街を見ていて気付いた。首都なだけに色んな地方から人が集まるものなんだろうが、さっきのヒンディ語と言い、街中では色々な言語で会話がなされてる。洋服を着た男、サリーを着た女。近代的な建物にムガル帝国時代の名残を残す建造物。混在する文明に目を奪われる。

「インドは文化が多様だな」

「そうだよ。インドは国と言うより大陸だって言葉がある位だもん。人種も文化も言語も多種多様。面白いよねぇ」
「ふーん、すげぇな」
「そういう多種多様なインドの文化とかが面白くて、クリシュナは宗教とか歴史とかを研究してたんだよ」
「ふーん、つか吸血鬼なのに宗教研究してたのか」
「そうなの。クリシュナって変わってるよねぇ」

クリシュナさんを思い出しながら笑うエルメスに何となく可哀想な気がしてきたが、それ以上に嫉妬むき出しの視線をぶつけるランスが気になる。
しょうがねぇだろそこは。お前、思い出位ひたらせてやれよ、と内心呆れた。

思わずランスに溜息を吐いて次の店に入ると、蒸せかえるような香の匂い。

「うっ！　くっさ！　気持ち悪！」
「本当・・・どうしよう」
「お二人ともどうなさったんですか？」
「この香が気持ち悪りぃ」
「・・・そうでしょうか？」
「前に同じの嗅いだことある。ミラーカさんが言ってた。サンダルウッドっていう儀式に使われる香だって」
「なるほど、道理で。オイ、さっさと済ませてさっさと出てこい」
「え？　カイは？」

「こんな臭ぇとこいられるか。俺は外で待ってる」
「わかったー」

しばらく外で待っていると、青ざめた顔をしたエルメスと、その後から心配顔をしたランスが出てきた。

「気持ち悪い・・・」
「どっかで休むか？」
「うん・・・」

近くに公園を見つけてベンチに座ると、エルメスはランスに膝枕されながらうだりはじめた。　煙草に火をつけてその様子を見ていたら、エルメスがフイとこっちに顔を向ける。

「うぅ、今はその煙草の匂いがすごくいい匂いに感じるよ」
「さっきのアレに比べりゃぁ、だろうな」
「カイ様、煙草って美味しいんですか？」
「吸う奴にはな。ランス、お前も吸ってみろ」

吸っていた煙草をホレ、とランスに向けると、ランスは慌てて首を横に振る。

「い、いいです！」

「お前早く大人になりてーんだろ？　俺にできることができないままでいいわけ？　俺はお前くらいの歳にはもう吸ってたけどなぁ。非喫煙者はシュヴァリエん中じゃお前だけだぞ」
「えぇー…」
「ちょっとカイ、ダメよ。ランスはまだ子供なんだから」

出た、お母さんエルメス。うぜぇ。
起き上がってきたエルメスは俺の手から煙草を取り上げ横に離すと、煙草は一瞬で灰になってその場にサラサラと散っていった。

「エルメス様すごーい」
「つーかソレまだ吸ってたんだけど」
「あ、ゴメン、つい」

怒られた上に一瞬で灰になったマイハニー。エルメス許すまじ。
でも慈愛にあふれる俺はあっさり許して新しく火をつけた。

「そういえば、煙草変えた？　なんか匂いが違う」
「そりゃな。こっちで同じの売ってねぇから」
「それもそっかぁ。ていうか、やめようと思ったことないの？」
「ねーな。コイツと共に生きてコイツと共に死ぬの、俺は。俺が死んだら棺に煙草１０カートン入れろ。墓にも花じゃなくて煙草を供えろ」
「どんだけ・・・仮に私がやめてって言ったらやめる？」
「絶対やめねぇ。意地でもやめねぇ。つーかやめてほしいわけ？」
「んーん、別にどうでもいい」
「どうでもいいのかよ」

日の暮れた公園で紫煙をくゆらせる俺。素敵すぎる。ハードボイルド、俺。いや、ハードボイルドではないな。ニヒリスト、俺。いや、ニヒリズムに煙草は関係ねぇ。ワイルドビューティ、俺。そうだ、これでいこう。

そーいや、吸い始めた頃はよくジュリオ様に隠れてみんなでコソコソやったなぁ。で、ソッコー見つかって怒られたっけ。懐かしい。ジュリオ様は煙草、嫌いだったからなぁ・・・

「――――！」
「カイ？　どうしたの？」
「いや・・・なんでもねぇ」
「でも、なんか顔色悪いよ？」
「なんでもねぇよ」

煙草から昔の事を思い出して、ジュリオ様の事を考えた瞬間に、あの日、ジュリオ様を殺した瞬間の映像がフラッシュバックした。

エルメスの手前と言うのもあるけど、それ以上に自分の為に見て見ぬふりをしている感情、罪悪感。言い訳をしようもないほど、俺はジュリオ様を殺した事を心底後悔してる。

でも、その事をいつまでも引き摺ってたらエルメスが苦しむし、俺も苦しい。早く、忘れてしまいたい。早く、消えて欲しい。

もう二度と、大事な人を手にかけることはしないと誓うから、も

う二度と、誰も裏切らないと誓うから、無理やりにでも俺の選択を正当化させてくれ。

悪いのはジュリオ様だ。俺達を裏切って、エルメス達を裏切って、俺達を騙して、エルメス達を騙して、俺達の思いを蹂躙して、エルメスの家族を殺した。

悪いのはジュリオ様だ、俺のやったことは間違いなんかじゃない。主人の間違った判断を是正したに過ぎない。そうだ、俺は悪くない、俺は悪くない。

俺は悪くない・・・けど、あの人が大好きだった。俺の、大好きな父親。

正義の為に親を殺すのは、本当に正しい事なんだろうか。正義なんて立場が変われば悪にもなる。俺のやったことは本当に間違いじゃなかったのか。

仮に誰から見ても正義だ、と言ってもらっても、あの人に受けた恩を仇で返したことに変わりはない。俺達の出自がなんであれ、育ててくれたのはあの人だ。その事実に変わりはないのに。

何度も同じ葛藤を繰り返す。今まで毎日のように同じ問答を繰り返して、このメビウスの輪から抜け出られた試しはない。

時間が忘れさせてくれるのを、待つしかないのか。

「カイ様、火、消えちゃってますよ？」

ランスに言われて煙草を見ると、根元まで短くなってとっくに火は消えていた。その場にポイと放り投げて足で踏みつけると、再びランスが口を開く。

「ジュリオ様の事ですか？」
「・・・別に」
「やっぱりまだ後悔してますか？」
「うるせぇ」
「・・・カイ様、もしカイ様がジュリオ様で、僕やガラード様がカイ様だったら、あの時、あの瞬間、カイ様はどう思われますか？」

無駄な鋭さと不躾なランスにかなり腹が立ったが、言われて考えてみた。

もし俺がジュリオ様と同じように、どうしようもない憎悪に憑りつかれて同じことをして、ランスやガラードに殺されるとしたら、それはきっと、本望だ。

目的を果たすよりも、それほどの事をしても尚家族に看取られるなら、泣いてくれたなら、幸せなのかもしれねぇ。

ジュリオ様は俺が嫌いになってないって言ったら、じゃぁいいや、と言ってた。実に曖昧なニュアンスではあるけど、それは、そう言う事なのかもしれない。

でも、それ以上にというかそれ以前に、自分の息子にそんな責を負わせたくはねぇから、そもそもそんなことしねぇけど。

「元気でな、ってジュリオ様は最後に言ったんだよなぁ」
「じゃぁ元気じゃなきゃいけませんね。ジュリオ様を裏切ったと思って後悔してるなら、これ以上の裏切りはダメですよ」
「お前、生意気」

驚いたことに、全く持ってランスの言う通りだ。コイツの言う通りだと思うのは相当癪なんだが、非常に遺憾ながら、なんか気が楽になった。

しかし相当不本意だ。チクショー。エルメスはなんかニコニコしてるし、腹立つ。部屋でサンダルウッド焚くぞ。あ、俺が嫌だ。煙草の煙を充満させた棺にランスもろとも押し込んで、釘で棺の蓋を打ちつけてやろう。そうしよう。

こんな風に、コイツらと楽しく元気に生きてりゃ、その内煙みたいに後悔も消えちまうんだろうな。

今日は、素直にそう思えた。

でも、その帰り道。
野良猫に魅了されたエルメスはまんまと迷子になった。

その内ヤキ入れてやる。

以上

ＦＩＬＥ－１５　Ｃａｓｈ　［現金］

第１期決算報告

これは由々しき事態である。

ペレアス「ヤバいな」
キルシュ「あぁヤバいな」
ガラード「どうすんの？」
ガルフ　「どうしよっか」
俺　　「またトリスの力を借りるか」
ランス　「何をおっしゃるんですか。働けばいいでしょう。皆さん無職じゃないですか」
幹部一同『シュヴァリエだ！』

シュヴァリエ幹部会議中。全員で頭を抱える原因は、金欠だ。

俺　　「折角トリスが大金用意してくれたってのによぉ、お前ら湯水のように使いすぎなんだよ！」
キルシュ「あると使うもの、それが金じゃんよ」

俺　「だからってお前ら限度ってもんがあんだろ。毎晩のように夜遊びしやがって」
キルシュ「それ以外に俺ら楽しみないじゃん」
ガルフ「まぁ、確かにな。つーかカイだって何から何まで全部アルマーニで揃えやがって。人の事言えねぇだろ」
ペレアス「しかもエルメスのもそれのレディースラインで揃えてるし」
俺　「それは俺じゃなくてアーサーだよ！　俺がやったのはアルマーニのエクスチェンジ！　アイツにアルマーニは早ぇぇ！」
ガラード「一緒じゃん」
俺　「一緒じゃねぇよ！　ジョルジオ・アルマーニはエクスチェンジとは格が・・・」
ペレアス「ハイハイわかったわかった。副長のブランド解説は置いといて、どうすんの」

シャンティファミリーに支払う迷惑料及び水道光熱費　月４００万
シュヴァリエの遊興費　月８００万
被服、日用品費　月５００万
その他　７００万

残金　１５０万

ガルフ　「どう考えても使いすぎだな」
ペレアス「どんだけインド経済に貢献してんだ」

キルシュ「お陰で俺ら繁華街では既に有名人だぜ」
ガラード「自慢してる場合じゃねーし」
ランス　「本当ですよ。遊ぶことしか能がないんですか？」
キルシュ「ランス、もうちょっと歯に衣着せようか」
俺　　「バカ、ランスの言う通りだ。どんな遊び方してんだお前ら。これからは自重しろ」
キルシュ「なんだよー、自分はエルメスに貢いでるくせにさぁ」
俺　　「貢いでねーよ！　アイツが買えってうるせーから渋々買い与えてんじゃねーか！」
ガルフ　「それを世間では貢いでるっつーの。全く、どいつもこいつも・・・」

　この調子だと１５０万なんて3日で飛ぶ。金は天下の回り物と言うが、どう考えても流してばっかで帰ってきやしねぇ。

俺　　「おい、お前らホストクラブででも働け。毎日が遊びだぞ」
キルシュ「やだよ。相手したいんじゃなくてされてーの。第一酒飲めねーし。お陰でキャバクラ行ったら嫌な顔されんだからな」
ペレアス「キャバクラでもねぇのにこの金額はすげぇよ。一体どんな店で何時間延長して何件ハシゴしてんだよ」
キルシュ「ランスの前じゃ言えねー」
ランス　「僕も聞きたくありません。虫酸が走ります」
キルシュ「ランス、もしかして俺のこと嫌いなの？」
ランス　「僕は本来エルメス様しか好きじゃありませんし、エルメス様に色目を使う人は誰だって嫌いです。いっそ死ねばいいです。この下種野郎」
キルシュ「クソー！　なんだよお前！　超ムカつくんだけど！」
ペレアス「ランス、その辺にしとけ。泣くからコイツ。つーかお前

も子供相手にキレんな」
俺　「つーかランスの性悪っぷりはいっそ将来性を感じるな。アーサーの後継はランスで決まりだ」
ガルフ「何言ってんだよ。カイに似たんだろ」
俺　「どこが!?　俺に似たのはガラード！　ランスは微塵も似てねぇ！」
ガラード「いや、俺はエルメス似だから。どうでもいいけど、何度脱線したら気が済むんだよ」

ガラードが溜息を吐きながらそう言って、思わずみんなで、そうだった、と現実を思い出した。その時会議室（という名のガルフの部屋）にノックの音が響く。

「カイー、いるー？」
「あぁ、なんだ？」

エルメスがドアから顔を覗かせてきた。部屋に入ってきたエルメスは申し訳なさそうにしながら、俺に一枚の紙を差し出した。

「おま・・・俺は今この類の紙を見ると頭痛がするんだけど」
「ごめんねぇ」

エルメスの持ってきた紙はまさかの請求書。その額１５万。こっちの気も知らないで残金は１３５万に減少。

「てめぇ１５万も何に使いやがった」
「本」
「本！？　本で１５万！？」
「うん。１００冊くらい買っちゃった！」
「買っちゃった！　じゃねぇよ！　テメェ本ばっか買いやがって、もう本棚入りきらねぇだろ！」
「心配ご無用！　本棚も買ったよ！」
「そう言う事じゃねぇよ！　つーか余計な出費すんな！」
「うん、ゴメンね・・・これからは気を付けるよ。だから怒んないで。ごめんね？」
「ハァ・・・ったくお前は・・・しょうがねぇな。俺が払っといてやるから」
「わーい！　ありがとー！　じゃぁお願いね！」
「ハイハイ」

上機嫌で部屋から出ていくエルメスに深ーい溜息を吐いて振り返ると、なぜか白い目線。

ペレアス「副長、エルメス甘やかしすぎ」
ガラード「なるほど、確かに貢いでる」
キルシュ「涙目の上目遣いとごめんね？　に騙されてんだぜ、このシスコン」
ランス「さすがエルメス様。カイ様をウマイ事手懐けましたね」
俺「は！？　手懐けるってなんだよ！　騙されてもいねーし！」
ガラード「それ否定したら副長が率先して貢いでる事になるよ」

俺　「貢いでねーし！」
ペレアス「貢がされてんだよ」
ガルフ「エルメス意外と悪女だな。カイがエルメスにお願いされたら断れないってちゃんとわかってるぜ、アレ」
俺　「そんなバカな・・・」
ガルフ「バカはお前な」

なんということだ。したたか！　女ってしたたかでズルい！　畜生、俺の慈愛を弄びやがって、エルメス許すまじ！
怒りと悲しみに打ちひしがれる俺の気も知らねぇで、シュヴァリエの奴らは何故か笑いだす。

ガラード「こんなに他人に振り回される副長見るの初めてだ」
キルシュ「確かに。俺らは女で遊んでたけど、副長は遊ばれてるよな」
ペレアス「確かに。俺も女には気を付けるわ。いい勉強になった」
ガルフ「確かに。でもカイは既に手遅れだな」
ランス「確かにそうですね。まぁ、エルメス様がどれほどカイ様を弄ぼうが全く問題ありませんが」
俺　「バカ言え！　大問題だコノヤロー！　ざけんなよ、クッソォォォ！　冗談じゃねぇぞコノヤロー・・・アイツ、あのバカ女、その内目にモノ見せてやる。ヤッてやる、泣いて気絶するまでヤッてやる！」
エルメス「そんなことしたら芥子炭にするよ？」
幹部一同「ギャァァァ！」

突然現れたエルメスに一同仰天。エルメスは本当に突然、ガルフ

のベッドの上に正座して座っていた。

「おま、お前どっから・・・」
「その前に。あなた、謝罪と焼死、どっちにする？　それとも、バ・ク・ハ？」
「すいませんでした」
「わかればよろしい」

思わぬ真相を突きつけられた上に、盛大に驚かされた上に、謝罪までさせられた。俺ちょっと可哀想すぎる気がする。アーサーは本当にどういう教育をしたんですかね。バカかと思えば変なところで妙に頭使いやがって。ムカつく。

ガラード「ていうかエルメス急にどっから、いつの間に？」
エルメス「エヘヘ、ジュリオさんにできることが私にできないはずがないと思って、本で勉強したのだ！」
キルシュ「もしかして瞬間移動？」
エルメス「うん！　体を素粒子まで分解して自分の認識した座標で観測したの！」
ペレアス「量子力学か？」
ガルフ　「ゴメン、全然意味わからん」
エルメス「要するに行ったことある所なら行けるって事！」
ランス　「それはすごいですね。迷子の心配ないじゃないですか」
エルメス「うん。でも人前じゃ使えないけど」
俺　　「んなことより何の用ですかね」

俺の質問にエルメスは思い出したような顔をして、デケェケースを目の前に2つ置いた。

エルメス「お金盗ってきたよ」
キルシュ「は？」
エルメス「お金」
ガルフ「え、ていうか、盗ってきた？」
エルメス「うん。銀行から」
ランス「ご、強盗したんですか？」
エルメス「やだなぁ、泥棒だよ！」
ペレアス「相変わらず悪趣味だな」
エルメス「趣味じゃないよ！」

そう言ってエルメスが開けたケースには札束がギッシリ詰まっていた。アーサー・・・アンタ本当にどんな教育したんだよ。まんま、本物の悪女じゃねぇか。笑顔で泥棒したとか普通は言わねぇよ。

「テメェ、なにやってんだよ。なんで勝手にそう言うことすんだお前は！」
「だって、お金ないって言ってたから」
「だからってお前、やって良い事と悪い事があんだろうが！」
「でも困ってたでしょ？」
「だからってこんな金使えるか！　返してこい！」
「でも私達はいつも泥棒してたよ」
「マジか」
「マジ。それにホラ、いつも色々買ってくれるでしょ。貰うばっかりって悪いし、私もたまにはみんなの役に立たなきゃと思って。だ

からそんなに怒んないでよ。ごめんね？」
「ハァ・・・ったくもう、本当お前はしょうがねぇな。今回だけだぞ」
「うん！　ありがとう！」

元気よく返事をしたエルメスはその場からフッと消えていなくなった。それに少し驚いたけど、さすがアーサーの眷属だな。何でもアリか。

エルメスも反省してるようだし、それに俺らの為にと思ってやってくれたみてぇだから、今回は許してやることにした。次回からはやっぱりトリスに助力願う。まぁ、結果的には一緒だけど。

ガラード「ていうかやっぱり副長エルメスに甘いよ」
ペレアス「エルメス甘やかすなって言ったの誰だよ」
キルシュ「俺らにはいっつも厳しいくせにー」
俺　「バカ言え。今回だけだ。それに俺らの為だってんならしょうがねぇだろ」
ガルフ「だからお前騙されんだよ。バーカ」
俺　「あぁ！？」
ランス「カイ様は完全にエルメス様の傀儡ですね。アハハ最高！　マジウケる！」
俺　「ランス、テメェ素に戻ってんじゃねぇよ」
ランス「次期息子、そして次期旦那候補のこの僕がマリオネットのカイより格上なのは当然じゃん。敬語遣ってやる義理ねーし」
俺　「誰がマリオネットだコルァ！　つーか敬称くらいつけやがれ！　このクソガキが！」
ガルフ「やっぱランスはカイ似だな」

俺　「黙れ！　うっせー！　クソボケチクショー！」
ペレアス「副長が一番うるせーよ」

アーサー、俺もう本当どうしよう。タスケテ・・・泣きたい。色々ムカつきすぎてわけわかんなくなってきた。
俺はもう本当、なんなんですかね。どうしたらいいんですか。どうすればいいんですか。全員殺せばいいんですか。そうですか。わかりました。あ、心配するな。エルメスだけは見逃してやっから。

幹部のバカども「ギャァァァァァァ！」

アーサーの助言のお陰で、心の平穏を取り戻しました。だいぶスッキリしました。ありがとう。
ストレスフリーな俺、プライスレス。

以上

FILE－16　Couple　［カップル］

【重要】アーサーへのクレーム報告

疲れた・・・俺にはね、正直理解できないんだよ、そういうの。
だから余計面倒くさい。

インドに来て既に一か月を経過。それで最近やっと少しだけ落ち着いてきて、インドの生活にも慣れてきた。それで気づいた。

どうやら俺はシャンティファミリーの一人、アジメールに嫌われているらしい。

なんで？　俺は何かしたか？　全く身に覚えがない。でもアイツは俺と目が合った瞬間に逸らしたり睨んだりする。なんだよ、スゲェムカつくんだけど。
別にほっといてもいいんだけど、それにエルメスが気付いたら余計に気を遣わせるだろうと思って、シャンティに聞いてみた。

「あぁ、そーみたい。なんか文句言ってたもん」
「なんで！？　俺何もしてねーじゃん！」

「アハハハハ！　確かにね。まぁでもしょうがねぇよ」
「なんでだよ」
「嫉妬だよ、嫉妬」
「はぁ？　なにが？　なんで？」
「カイはミナ様と同室で、いっつもつきっきり。ミナ様はカイに頼りっきり。まるで夫婦」
「はぁぁ！？　同室は俺の意志じゃねぇし、しょうがねぇだろ！つーか俺的には病気で入院中の娘を心配する父親の気分なんだけど！」
「あ、そっちのがしっくりくるな。まぁ、一応あたしはわかってっけどさ、ミナ様に一番近いのはカイだし、ミナ様がカイを傍に置きたがるのが気に入らないんだよ」
「それ、俺のせいじゃねぇじゃん・・・」
「まーね。でもしょうがねーじゃん。アジメールはミナ様大好きだし。ライバルだと思われてんじゃねーの」
「あり得ねー・・・大体エルメスにはクリシュナさんとアーサーがいるんだし、つーか俺無関係なんだけど！　つーかクリシュナさんとアーサーは良いのに、俺が目をつけられる意味が分からん！」
「まぁ、あの二人にはみんな感謝してるし、尊敬してるから。アンタにはしてない」
「テメェ・・・」

要するにとばっちりだ。最悪だ。超面倒くせぇ。やっぱほっとこう。

シャンティと話が終わって部屋に入ろうと思ったら、ディナが慌てて走ってきた。

「副長！　大変大変！」
「だから副長じゃねぇって。筆頭もしくはカイ様と呼べ」
「それどころじゃないんだって！　ケンカ！」
「は？」
「ガラードとアジメールがケンカはじめてんの！　止めて！」
「はぁぁぁ！？」

普段大人しいガラードがケンカするなんてどういう風の吹き回しだ。ていうか面倒くさいんだけど。

「いーや！　お前なんかまだまだだね！」
「お前みたいな新参者に何が分かるんだ！」
「わかるに決まってんだろ！　俺はエルメスの息子なんだから！」

何を言ってるんだこいつらは。何をやってるんだこいつらは。

「何？　つーかなんでケンカしてんの？」

傍でケンカの様子を眺めてたパーシーに聞いてみると、パーシーは笑って答えた。

「あぁ、どっちがエルメスをより崇拝してるか競ってんだよ」

バッカじゃねぇの！！　そんなこと競ってどうすんの！？　アホ

か！

もう俺やだ・・・面倒くせぇ。アーサーさえいてくれたらこんなアホどもが活発になることもなかったのに。もういっそ、これはアーサーのせいだぞ。マジで。

俺　「あーお前らもうやめろ、うぜぇ」

ガラード「ゲッ！　副長！」

アジ　「つーかアンタが一番ムカつくんだよ！」

俺　「あーハイハイわかったから。うるせぇ、黙れ」

ガラード「副長も何とか言ってやってよ！　俺エルメスの唯一の支配下の吸血鬼じゃん！　特別じゃん！？」

俺　「あーハイハイそうだな」

アジ　「ていうかガラードもだけどカイが一番ムカつくんだよ！　急に現れて当たり前みたいにミナ様につきっきりでさぁ！」

俺　「あーハイハイすんませんね」

ガラード「ていうか、そうだよな！　副長ズルい！」

アジ　「だよな！　なんなんだよアンタ！　カイよりも俺の方がミナ様好きなんだからな！」

俺　「あーハイハイそうですね」

なにこれ超うぜぇんだけど。もう本当どうでもいいんだけど。なんでケンカしてた二人が俺に突っかかってくんだよ。俺が一体何をした。うるせーし、マジうるせーし。

正直俺は呆れて物も言えない的な感じなんだけど、このバカどもは容赦なく文句を連ねてくる。さすがに腹が立ってきた。

俺　「つーかお前らよぉ、そんなにエルメスが好きなら言えば

いいじゃねーか。それで白黒はっきりさせりゃいいだろ」
ガラード「俺のはアジメールと違って不純な好意じゃねーの！　大体近衛の俺がそんなことしたら本末転倒じゃん！　アーサー様に殺されるじゃん！」
アジ　「誰が不純だ！　つーかできるか！　俺はアンタと違って厚顔無恥じゃねぇんだよ！　ミナ様にはクリシュナ様とアルカード様がいらっしゃるんだぞ！」
俺　「誰が厚顔無恥だ。つーか、わかってんならケンカする理由もねぇだろ。大体お前らがケンカして一番嫌がるのは誰か考えろ」
バカ二人「「・・・」」
俺　「わかったらバカみてぇなことでケンカすんな。お前らがどんなに競っても、エルメスはみんなを平等に見てるぞ、アーサー以外はな」
アジ　「・・・アンタもか？」
俺　「当然だ。アイツの博愛主義は徹底してるからな。こいつは嫌い、こいつは好きみたいなことをエルメスは出来ない。今俺が一番アイツに近いのは、俺が言い出したから、友達だから、筆頭だから、それだけだ」

やっとのことで黙ってくれた。さすが俺、さすが管理職の威厳。
しかし、クリシュナさんにランス、アーサーにコイツら、エルメスがこんだけ愛されてるのは良い事なんだろうけど、そのとばっちりを食らうのは心底面倒くせぇ。アイツの博愛主義は八方美人とも言うな。その内絶対自分で責任を取らせる。

ケンカが収束してリビングの人口が減ってきた頃に屋敷のインターホンが鳴った。シャンティが連れて来たのは一組のカップル。

「ミナ様にお客様だ。呼んできてくれねーか？」
「あぁ、ランス」
「はい」

ランスに呼ばれてリビングにやってきたエルメスは急に涙目になって、そのカップルに抱き着いた。

「@■¥○★¥▽。@☆○#$%○#$■%#○！」
「#$☆#△$%○#%&■！」

何語？　なんて言ってるかわかんねぇんだけど・・・ひとしきり抱き合って不思議語で語り合ってた3人は少しすると落ち着いたようでソファに座った。

「あ、紹介するね。この二人はベトナムでの友達なの。女の子がトリン、男の子がツァン。ベトナムのセーフハウスの守護者たちだよ」
「あーなるほどね。んじゃさっきのはベトナム語か」
「うん。ていうか、トリンとツァンって英語しゃべれた？」
「あたしは喋れるよ。お父さんアメリカ人だしね」
「俺は今義父さんに習って勉強中」
「ツァン上手じゃない！　ていうか、義父さんってまさか！」

目を輝かせたエルメスの前にトリンとツァンはにっこり笑って左手を差し出した。その左手の薬指には光る指輪。

「うわぁ！　結婚したんだ！　おめでとう！」
「えへへ、ありがとう！　もう、アミン連絡つかないから知らせる事も出来なくて困ったよ」
「ごめんねぇ・・・ていうか私も結婚したんだよね、一応」
「マジで！？　いつの間に！？」

目を輝かせる二人の前で、エルメスは寂しそうに笑った。話すのはまだ辛い、か。だけど、この二人が友達だってんなら話して慰めてもらうのもいい。

「エルメス、積もる話もあるだろうから部屋でゆっくり話せ」
「あ、そうだね、ありがとう。カイも一緒に来てよ」
「あ？　なんでだよ」
「私一人じゃ話せないから」
「・・・わかった」

「――――――――――――――――――――――そっか、アルも・・・」

泣きながら一生懸命言葉を繋ぐエルメスの話を聞いて、ツァンは寂しそうに呟いて、トリンは泣いていた。話はベトナムを出国してから今日の事まで。でも序盤からエルメスの顔は曇った。インドに来てすぐにクリシュナさんと出会ったから。

エルメスの話を聞いて思った。本当にエルメスとクリシュナさんは運命の出会いだったんだな。

昔なんかの雑誌で読んだことがある。お互いに一目惚れして出会った男女は、遺伝子で惹かれあってるんだと。遺伝子の引力とでもいうのか。まぁ、運命って言うには夢のない話かもしれねぇけど。

でもそれは本当に砂漠から砂金を見つけるような確率で、そんな相手に出会えたら運命としか言えねぇと思う。

エルメスはアーサーと出会ったからクリシュナさんと運命的な出会いをして、アーサーとジュリオ様が宿命の再会を果たしたから俺たちと出会って、今ここにいる。人の生ってのはわかんねぇもんだ。

「でもね、アーサーさんは帰ってくるって言ったの。だから待ってるの。ここでカイやみんなと一緒に、クリシュナのお墓を守りながらずっと待つの。きっと帰ってきてくれるから」

泣きながらそう言って、エルメスは二人に笑顔を向けた。その笑顔はやっぱり営業スマイルで、トリンとツァンはすぐにそれに気づいたようだ。

「辛いな、辛いよな。よく耐えてきたな。でも、無理すんなよ」
「そうだよ。辛い時には辛いって言っていいんだよ。あたしたちにできることがあったら何でも言ってね？」

つくづく、エルメスは周りに恵まれてると思う。多分それもエルメスの人徳なんだろうけど。二人の言葉を聞いてやっぱりエルメスは泣き出して、ありがとう、と小さく言った。

しばらく経って落ち着いたエルメスは、二人に何故ここに来たのか尋ねた。

「実はシャンティから連絡を貰ったのよ。会いに来てあげて欲しいって」
「え？　シャンティが？　なんで知ってるんだろう？」
「俺同様にシャンティにも継承したんだろ？　譲渡書と別に連絡先を残してあったみたいだよ。アルに何かあったら連絡するようにって」
「ウソ・・・」

エルメスと共に俺も驚いたぞ。アーサー、アンタいつから予測してたんだ。それとも念のためレベルの杞憂か？　いや、アンタのことだ。そんなはずはない。
いつからこうなるとわかってた？　もしかして、今消滅してるのは計算の内なのか？　それなら何故、エルメスに何も話してないん

だ？

驚いていたエルメスは徐々に考え込むような顔をしてブツブツ言いだした。

「そう言えばアーサーさん、インドを出る時にすぐにまた戻ってくるとか言ってた。その時、その内話すとか言ってた。そう言えばなんかミラーカさんとコソコソしてた。そう言えばなんか対策があるのどうの言ってた！　そう言えば私を眷属にしたのは理由があるとか言ってた！　そう言えば消える瞬間、時が来てしまったとか言ってた！　てことは私に出会う前から、８年前からわかってたの？　まさか、まさか、今いないのって計算通りなの！？」

「そーみたいだな」

なぜか俺に突っかかってきたエルメスに俺は肯定してやりました。ざまぁみろ。全くアーサーは大した奴だよ。何重に策を弄してやがるんだ。

ていうか、エルメスには話しとけよ！　どんだけエルメスが辛い思いしてると思ってんだ！　このボケ！　アホ！　バカ！

「んもー！　アーサーさん相変わらずヒドイよー！　教えないって言ってたのはこの事だったのか！　そりゃ計算通りなら帰ってくるって言えるよね！　全くもー！　本当にあの人はー！　バカマスター！」

「全くだな」

「本当だね。相変わらずアルは性格悪いな」

「ドンマイ、アミン」

ソファに伏せて暴れるエルメスに俺らは苦笑いですよ。あーでも、ムカつくけど、ちゃんとアーサーが帰ってくるってわかって、正直スゲェ安心した。

つーか話しとけよ！　この件に関しては１００回文句言っても足りねぇ！　このバカ！　陰険クソオヤジ！

ひとしきり暴れて起き上がってきたエルメスは怒ってたけど、でも嬉しそうに言った。

「全くもう、しょうがないなー。待っててやるかぁ」

全然しょうがないって感じじゃなかったけどな。いつ帰ってくるのかはわかんねぇけど、帰ってくる可能性が高いって言う保証は、随分エルメスを楽にしてくれた。

帰ってくるかどうかわからないって不安は、本当にエルメスにとっては辛いものだったから、本当に良かったと思う。つーかマジこのバカ！　ざけんな！

しばらく話して再び４人でリビングに戻った。さっきの話をシュヴァリエやシャンティ達に話して聞かせると、なんだよー！　ってやっぱ怒ってたぞ。でも、みんな安心してた。

当然だ。俺らだってアーサーが帰ってくるのを本当に心待ちにしてんだからな。つっても別にアンタに会いたいわけじゃねーからな。言っとくけど。

つーか、トリンとツァンが結局、爆撃機だった件。

「ていうか、最初アミンが結婚したって言った時、あたしカイくんが旦那さんだと思った」
「あー俺も」
「んなわけねーだろ。たまたま近くにいただけじゃねーか」
「それもだけど、なんていうか雰囲気？」
「そうそう。カイくんがアミンを見る目が超優しいから」
「イヤイヤイヤイヤ、やめてくれ。本当にやめろ」
「えー？　カイが旦那さん？　想像できなーい」
「しなくていい！　あり得ねぇから！　お断りだから！　断固拒否！」
「・・・ちょっとショックなんだけど」
「黙れ！　むしろ喜べ！　バカ！」
「もぉ、何怒ってんの？　ていうか、喜ぶわけないじゃない！　カイが一番仲良しなのに！　カイは特別なのに！」
「うぉぉ！　マジやめろバカ！　空気読めバカ！　喋んなバカ！」
「な、何もそこまで言うことないのに・・・」

夕方のことがなきゃ普通に嬉しかったと思いますよ。でもね、視線がね。痛いんですよ。もうアジメールとガラードがめっちゃ睨んでるしさぁ、ランスとかスゲェ形相してるしさぁ。マジあのバカ女勘弁してほしい。

「あ、じゃぁあたし達帰るね」
「アミン、また来るからな」
「二人ともありがと！　送ってくよ！」

「あたしも一緒に行くよ」

どうも雰囲気を察したらしいトリンとツァンは足早に立ち去って、エルメスとシャンティも二人と一緒に屋敷を出て行った。俺も着いて行こうと立ち上がると、にっこり笑ったランスに引き留められた。

ガラード「ふーん、副長は特別なんだってさ」
アジ　「ウソつき」
ランス「まさかそう言う作戦？　僕たちを安心させといて、裏から虎視眈々と・・・」
おれ　「なわけねーだろ！　エルメスが言ったのはそう言う事じゃねぇよ！」
アジ　「じゃぁなんだよ」
俺　「え？　えーと・・・あ、そうだ。付き合い長ぇし！」
アジ　「それなら俺たちの方が付き合い長いけど」
俺　「あー・・・えーと、あ、仕事で一緒だったからだ！」
ガラード「それなら俺らも一緒だったけど」
俺　「・・・つーかお前ら面倒くせーよ！　元々友達なんだから普通だろ！　いいじゃねーか別に！」
ランス「よくない！　カイが同室なだけでも僕は嫌なんだから！」
俺　「それは俺の意志じゃねぇよ！」
アジ　「だからムカつくんだろーが！　なんでミナ様はアンタを指名してんだよ！」
俺　「部屋が空いてねぇからだろ！　つーかランスも指名されてんだろ！」
ガラード「それはランスが子供だからじゃん。なんで副長なの？」
俺　「知るか！　エルメスに聞けよ！　つーか俺はむしろ誰かに変わってほしいんだけど！」

ガラード「そんなこと言ったらエルメスが可哀想。それ聞いたらエルメス悲しむよ」
アジ　「ミナ様のご指名なのに逆らうのかよ！　反逆者め！」
ランス　「カイは筆頭なのに命令の一つも聞けないわけ？」
俺　「なにをぉぉぉ！？　つーかお前らどっちだよ！　もう面倒くせーよ！」

もー！　アーサー！　アーサー！　何とかしろよコイツらを！
付き合いきれねぇし、面倒くせーし、もう面倒くせぇ！
念のため言っとくけど、俺はエルメスには興味ないからね！？
忠誠と友情しかないからね！　エルメスも俺にはそう言う興味はないからね！

大体さぁ、そう言う嫌疑をかけるのって俺にもエルメスにも失礼だと思わねぇ？　俺もエルメスも友達だって言ってるわけじゃん。俺はエルメスのシュヴァリエとして忠誠を誓ってるわけじゃん。その友情と忠誠を疑われたと思うと、俺は悲しくてしょうがねーよ。

もう本当俺の味方になってくれんのシャンティくらいしかいねぇ。アイツはその辺分かってくれてるみたいだからな。やっぱアイツはいい奴だ。

アジ　「とか何とか言って実際嬉しいくせに」
ガラード「さすが副長。ポーカーフェイスが上手だな」
ランス　「カイはジュリオ様によく似てウソつきだもんね」

アーサー、アンタ帰ってきたらこいつらを速攻シバキ回してくれ。

生きてることを後悔するほどにシバキ回してくれ。頼むわ。

以上

FILE－17　Chain　【鎖】

シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動報告

何に囚われて、何に縛りつけられているのか。俺は、分からない。

あれからしばらくトリンとツァンはインドに留まってた。大体１週間くらいか。その間毎日屋敷に遊びに来ては、エルメスを元気づけてくれた。

その時に、トリンの救出作戦だの、デイヴィスファミリーとの抗争だの、トリンに射殺された話だのいろいろ聞いた。

アイツすげーな。こんなにネタに困らねぇ奴なんてそうそういねぇぞ。なんなのアイツ。ネタ製造機？

「あたしを助けに来てくれた時のアルはさすがだったよ。あたしベッドに手錠で捕まってたんだけど、鍵かかったドアをバーンって壊

して、手錠ブチって引きちぎって「立てるか？」って。危うくホレそうだった」
「もう、その事何度思い出してもムカつくよ。その間私撃たれてただけだし」
「まさしく撃たれ損だよな」

思い出話に花を咲かせて笑うエルメスは、以前のエルメスに戻ったような笑顔だ。この二人のお陰で、だいぶ元気を取り戻せたみてぇだ。やっぱ持つべきものは友達だな。

ツァン「でも俺アミンが死んだって聞いたとき本気で泣きそうだったよ」
トリン「あー・・・ごめんね」
エルメス「もう済んだことじゃない！　友達に射殺されるなんて中々経験できな・・・あ、今でもしてるわ」
ツァン「えぇ！？　どゆこと！？」
エルメス「カイに何度か殺されそうになったし、殺し合いもして何度か撃たれた」
トリン「カイくん・・・本当に友達なの？」
俺「親友」
ツァン「・・・アミン、お前騙されてるんじゃないの」
エルメス「騙されてはないよ。カイが異常なだけ」
俺「まぁ、そうだな」
トリン「認めるんだ・・・ていうか、アミンはそれでいいんだ」
俺「いいに決まってんだろ」
ツァン「なんでカイが答えんの？　あのさぁ、限度って言葉知ってる？」
エルメス「まぁ、ちょっとくらいなら死なないから」

トリン　「そう言う問題？」

死ななきゃいいってもんじゃないよね、とオシドリ夫婦は首を傾げるが、エルメスは終始ニコニコしてた。

コイツの寛容さはもはや寛容とは言わねぇ。ただのバカだ。撃った俺が言うんだから間違いねぇ。

俺　「それを水に流しても有り余るほど助けてやってるからな」
エルメス「そうだけど、カイがソレ言う？」
俺　「言う」
エルメス「バカじゃないの？」
俺　「バカはお前。全く、クソ生意気なバカ娘だな」
トリン　「ヒド・・・カイくん、本当に友達なの？」
俺　「大親友」
ツァン　「ウソつけ！」
俺　「マジで。世界で二番目に大事にしてやってっから」
ツァン　「なんか胡散臭い上にいかがわしいんだけど」
トリン　「ちなみに一番は？」
俺　「二番と圧倒的に差をつけて、俺」
エルメス「私が一番じゃなかったの？」
俺　「日によってごく稀に一番だ。喜べ」
エルメス「そっか。ありがとう」
ツァン　「アミン、飼い馴らされてんな・・・」

そーだよ！　本来俺が飼い馴らすべきだ。ていうか、本来俺がこの駄犬を飼い馴らしてたんだった。

じゃぁなんで俺貢がされてんだよ。意味わかんねぇし。やっぱガ

ルフたちの勘違いか。そうだな。そうに決まってる。俺がエルメスにいい様に使われるはずがねぇ。

大体見てみろ、このバカを。終始ヘラヘラ笑ってるだけのバカ娘じゃねーか。コイツの取り柄つったらバカと巨乳以外にはねーだろ。そんなバカに俺が操作されるはずはねぇ。

つーか何回バカを連発させる気だ。いい加減ゲシュタルト崩壊してくるぞ。つーかアーサー本当によくこんなバカに惚れたな。マジで理解できん。

しかし、アーサーと言い、クリシュナさんと言い、ランスと言い、アジメールと言い、まぁガラードは別格だが、アタマおかしいんじゃねーの。俺には全く理解出来ねぇ。

いや、もしかして、俺がアタマおかしいのか？　いや、そんなはずはねぇ。まぁ確かにちょっと異常なところはあると自覚してるけど、俺はおかしくねぇ。

つーか、なーんで俺は今日こんなにイライラしてんだ。多分エルメスに対するストレスがかなり溜ってるんだな。それはそれでムカつくな。エルメスごときの為にストレスため込むなんてバカみてーじゃん。

「ツァン、マイケルさんとはどう？」

「義父さんは、さすがだよ。超やり手。基本的にいい人だし、さすがに元マフィアだけあってコネクション作るの上手いんだよ。見ててすごい勉強になる」

「へぇー！　でも、確かにそうかもね！」
「ツァンとお父さんが仲良く上手くやってくれるから、あたしも安心だよ」
「本当だね！　そう言えば子供は？」
「実は今5か月！」
「マジで！？　すごーい！　おめでとう！」
「えへへ、ありがとう」

トリンとツァンは本当に幸せそうで、そんな二人ののろけ話を聞きながらエルメスも嬉しそうだ。エルメスは本当にこの二人の幸せな姿が嬉しいんだろうな。

エルメスは、幸せじゃないのに。

夫は死んで、子供だって作れない。主人もいなくなって家族も死んだ。エルメスはもう人並みの幸せを手にする事は出来ないのに、なんで、笑って聞いていられるんだよ。

――――――――なんで俺はこんなに、この二人に、エルメスに腹を立ててるんだろう。

エルメスはこの二人の幸せな姿を見て喜んでるじゃねぇか。二人の幸せを羨んだり妬んだりしてねぇじゃねぇか。エルメスが笑ってるなら、それでいいじゃねぇか。

エルメスは前のエルメスみたいに、幸せそうな笑顔で笑ってる。この二人の存在が、エルメスを元に戻しつつある。それで、充分だろ。

なんだ？　俺は、どうしたんだ。どうしたって言うんだ。エルメスが笑ってるのが、許せないなんて。
あり得ない。今日の俺は明らかにおかしい。この二人に妙に腹を立ててる。二人と笑いあうエルメスに腹を立ててる。何故？

――――――わからない。俺は、どうしたいんだ。どうなれば満足するんだ。

エルメスの笑顔を取り戻したいんじゃないのか？　エルメスが幸せになれば、それでいいんじゃないのか？　アーサーが帰ってきて、エルメスが安心できればそれでいいんじゃないのか？

この二人が来たことでそれに近づいているのに、俺はそれを不満に思ってる。自分が、わからない。

アーサー、俺は、どうしたんだ。何に囚われてるんだ。俺はどうしたいんだ。俺はどうなれば満足するんだ。

俺は自分が、わからない。

以上

ＦＩＬＥ－１８　Ｃｏｎｔｒｏｌ　［支配］

報告　　シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動

この安心は、一体どこからやってくるのか。この不安は、一体どこからやってくるのか。
俺は何を心配しているんだろう。何を懸念してるんだ。

「もうそろそろベトナムに着いた頃かなぁ」
「多分な。わかんねーけど」

あの二人が帰ったことに、安心してる。

「寂しいー！　今度私達もベトナムに遊びに行こうよ！」
「そのうちな」

寂しがるエルメスにイラついてる。

「もー、カイどうしたの？　なんか最近冷たい」
「俺はいつも優しい」
「・・・どこが？」
「全部。俺はお前にはいつも優しい」
「まぁ、そうと言えばそうだけど。でもなんかおかしい」
「お前ほどじゃねぇ」

やっぱり俺はおかしい。

一週間ほどインドに滞在していたトリンとツァンは今日、帰って行った。二人を空港まで見送りに行って、飛び立つ鉄の鳥を見て、俺は心底安心した。

あぁ、よかった。これであの二人にはしばらく会う事はないだろう。これで、エルメスは今までどおり――――――――――今までどおり・・・なんだ？

なんで俺はあの二人が気に入らないんだ。シャンティ達やシュヴァリエ達に、あそこまで腹を立てたことはない。あの二人とシャンティ達とシュヴァリエ達と何が違う？

イラつきすぎて、思わずエルメスに冷たく当たってしまう。なぜ？　エルメスは何もしてないだろ。俺が勝手にイラついてるだけだ。ただの、八つ当たり。俺らしくもない。

いや、エルメスにもイラついてた。エルメスの笑顔に、イラついてた。なぜ？

わからない、わからない。

――――――――――――――――――不安

なにが？　何度考えても、わからない。

もう、考えるのは辞めよう。どうせわからない。分からないことをいつまでも考え続けるのは、面倒くせぇ。

今回の事は、忘れよう。きっと、たまたま虫の居所が悪かっただけ。そうに決まってる。

「カイ、煙草吸い過ぎ！」

最近イラついてたせいか、明らかに本数が増えてた。空港からの往復だけで、もう既にひと箱空になった。

「うるせーよ。吸血鬼なんだから別に病気になったりしねぇよ」
「それはそうだけど。私に煙草の匂いが移っちゃうじゃない」

その言葉に、強烈に感じた――――――――――幸福感。

「別にいいじゃねーか」
「もぉ、よくないよ。髪についちゃってるもん。ホラ」

エルメスのサラサラとした長い髪から漂う煙草の香り。「俺の」煙草の香り。

漂う香りは、まるで、マーキングでもしたように。証拠。エルメスが、俺の物であるという、証拠のよう。

感じた不安、幸福感、行きついた結果。

執着、依存、嫉妬、独占、支配――――――――――――――俺はエルメスを、征服したい。

強烈な、征服欲。異常な、独占欲。
俺はエルメスを、自分の「所有物」だと思ってる――――――――

いっそのこと、これが愛情ならよかったのに。

俺は自分の都合で、自分の好きなように、自分の望むように、俺だけのエルメスを作り出そうとしている。

俺の理想。

エルメスが幸せになって、アーサーが帰ってきて、エルメスを幸せにする。それまでは、エルメスはアーサーを思って、俺の保護の下で、俺の管理下で、俺の手によって笑顔でいなければ気が済まない。

俺以外の他人が、俺とアーサー以外の他人が、エルメスを笑顔にすることが許せない。俺の手で生み出されるものでなければ気が済まない。

これは愛情なんかじゃない。異常な、所有欲。異常な、支配欲。異常な、管理欲。

愛情だったなら、エルメスがただ笑顔でいれば、幸せだと言うなら、それで満足できたはずなのに。エルメスの幸せだけを願えたはずなのに。

切望するのは、俺に支配されたエルメスの幸福。

その為に、エルメスの我儘を何でも受け入れて、片時も離れず傍にいて、エルメスに近づく他者を排除する。

エルメスの独占支配。強烈な嫉妬と執着と依存。まるで、ジュリオ様の妄執を引き継いだようだ。

異常な、妄執。

――――――――――――――――――――異常

あぁ、俺は、異常だ。

LETTER－4　Cruel　［邪険］

拝啓　アーサーさん

どうしよう、どうしよう。私カイを怒らせちゃったのかな。嫌われちゃったのかな。アーサーさん、私はどうしたらいいんですか？

この前からカイの態度がおかしくて、ずっとなんか冷たい気がしてたんですけど、最近明らかに避けられてると言うか、冷たくされます。

もしかしたら、我儘を言って調子に乗りすぎて呆れられちゃったのかもしれないし、すぐにケンカになったり、トラブル起こしたりするのを怒ってるのかもしれません。

お金を盗んできたのを怒ってるのかもしれないし、トリンとツァンが遊びに来てた時に、仲間外れにしたみたいに思われて、怒ってるのかもしれないし、全部かもしれません。

トリンとツァンが帰って行った後くらいからますます私を避けるようになって、私が話しかけても適当にしか返事をしてくれないし、私が近づくと逃げられちゃいます。

私はカイに嫌われちゃったんでしょうか。どうしよう、どうした

らいいんですか。

私、カイに嫌われちゃったら、生きていけません。ずっとあんな風に冷たくされるなんて、耐えられません。

シャンティと、ガラードとランスに相談してみても、そんなはずないよって、カイは私を大事に思ってるよって、気のせいだって言ってくれるけど、気のせいのはずない。

謝った方がいいのかもしれないけど、何に怒ってるのかわからないし、そんな状態で謝っても適当に謝ってるみたいに思われて、余計に嫌われちゃうかもしれないし。

それになにより、面と向かって嫌いになったって言われたら、私もう生きていけない。辛くて辛くて、今だって死んじゃいたい。

私、カイがいなきゃ生きていけないのに、カイに嫌いって、いらないって言われたら、どうしたらいいのかわかりません。生きる気力なんて失くしてしまいます。

みんなが、カイがいるからアーサーさんを待てるのに、カイがいてくれたからちょっとずつ元気になれたのに、私がバカだから嫌われちゃったんでしょうか。

私、カイに甘えすぎてたのかもしれません。カイに頼りすぎてた

のかもしれません。カイは前から鬱陶しいの嫌いって言ってたし、私のそう言うところに嫌気がさしたのかもしれません。

カイが頼っていいって、甘えていいって言ってくれた言葉を真に受けて、調子に乗りすぎてたのかな。

アーサーさんにも調子に乗って怒らせたりしたことといっぱいありましたもんね。私は、そういうダメな女なのかもしれません。

アーサーさん、もしアーサーさんが同じ理由で怒ったら、私がごめんなさいって、これからはちゃんとするからって言ったら許してくれますか？

ちゃんと言う事聞くから、我儘言わないからって謝ったら許してくれると思いますか？

ガラードとランスとシャンティは、カイが私を嫌いになるなんて絶対にあり得ないって言ってくれるし、私もそうだと思いたいです。

だから頑張って謝ってみようと思うけど、本当にカイが嫌いになってたらどうしよう。そう思うと、怖くて、辛くて、悲しい。勇気がでません。

こんな時アーサーさんが居てくれたら、私もカイも怒ってくれて仲直りできたかもしれないのに、アーサーさんが居ないと私一人じゃ、自分のことも解決できない。

アーサーさん、お願い、助けて。帰ってきて。私、どうしたらいいのかわかりません。怖い、怖い。

カイに嫌われたら、生きていけない。

ＦＩＬＥ－１９　Ｃｏｎｃｅａｌ　［隠蔽］

筆頭にあるまじき思想に対する反省文

あれから俺も、かなり考えてかなり悩んだ。

とりあえず、なんで俺がそこまで異常者なのかという事から考えてみた。で、出た結果。

異常な男に異常な環境で育てられ、加えてこの異常な状況。正常でいられるわけねぇだろ！　あの日以前から精神崩壊してたっつーの！　つーか既に１０代の頃に「正常」なんてなくなってるじゃん、俺！　それどころか、ガキの頃から既におかしかったのかもしれねぇ。

よし、これはジュリオ様のせいだ。全責任はジュリオ様にある。

次に、なんでエルメスにそこまで執着するのか。で、出た結果。

エルメスは俺にとって友達で、家族みたいに思ってて、俺の主人で、俺のイコンで、俺の神で。俺の神なら俺の物で、俺だけの為に・・・いやいや、落ち着け、俺。

とにかく、度が過ぎた。友情とか忠誠とか通り越して、これはもはや信仰、いや狂信だ。

アイツはいつも俺といる時は本当に楽しそうに笑ってて、よく怒るし、泣くし、俺を何度も救ってくれて。だから、アイツのその全てが俺に向いてなきゃ嫌だと思うようになった。

今こんなことになって、マジ大変なことになったと思ったけど、心のどこかでヤッター！と思ってた節がある。

アイツにはもう頼れる相手は俺しかいないから、俺が支えてやんなきゃって、俺がアイツを助けるんだって、俺が、俺が、俺が・・・・俺はダチョウ倶楽部か！

ハァ、まぁとにかく、俺の手の届かない神々しいエルメス様が地上に、地獄に突き落とされてきて狂喜したわけだ。うわー俺って最低。

で、結果は散々。俺にはエルメスは救えない。俺にはエルメスを幸せにできないという現実に直面してしまった。だから、他人がエルメスを笑顔にしてることがものすっごく許せなかった。

その中で、なんでアーサーはいいのかっていうと、俺のエルメス幸せプランにアーサーが最初から組み込まれていたこと、それと実に癪だが、アーサーが俺より圧倒的上位のオスだということもある。

シャンティ達を許せたのもそこだ。幸せプランの一員だったから。

何より屋敷で共同生活してても、俺がほとんど寄せ付けねぇしな。
だけどトリンとツァンは俺にとってはイレギュラー以外の何物でもなかったわけだ。だからあんだけ、帰れ！　とか思ってたわけだ。

シュヴァリエの奴らなんて、説明する必要もねぇ。俺の管理下にあるから。

要するに、全て俺が管理できてりゃそれでいいわけだ。マジ・・・俺どんだけ管理好きなのよ。管理職も職業病とかあんのか。職業病で管理したがってんのか。

あぁ、本当に異常だよ、俺。本物の異常者じゃねぇか。あの時ランスが言ってた言葉の意味が、今はよーく理解できる。

「いずれ俺なしでは生きられないようにしてやる。それがエルメスの幸せ」

俺はヘンタイか！　・・・ヘンタイかもな。ランスの場合、それが恋愛感情から来てるだけまだマシだ。まだ救いようがある。

でも俺違うじゃん！　別に愛してねーもん！　ただ所有したい！独占したい！　支配したい！　エルメスは俺の物だ！　俺のエルメスに近寄るな！

イカンイカン、思わず興奮してしまった。つーか、俺のじゃねぇだろ。アーサーのじゃん。なのにさー、なのにさー、もっかい前に書いた報告書読み直して気づいたんだけどさー。

俺今まで何度かさー、エルメスをアーサーにくれてやるだの、プレゼントしてやるだの書いてたじゃん。完全に俺のもんだと思ってるよねコレ。完全に俺の所有物だと思ってるよねコレ。

「俺のだけど、やるよ」

みたいなさー。もう、俺なんなの本当。もう俺本当ヤバいわ。ランスもヤベェけど、俺の方がよっぽどイカレてる。ランス、アイツ本当に俺に似てたんだな・・・もうイヤ。

ハァ、もう、コレもある意味裏切りだよな。アイツは俺を家族だと、親友だと思ってんのに、俺の中にあるのはただの支配欲だ。トリンとツァンの言った通り、友達だなんて思ってなかったんだ。本当に俺は最低だ。

エルメスは俺の信仰の対象そのもので、エルメスは俺の前ではいつも笑ってなきゃいけなくて、俺の前でだけ泣いて、俺だけに怒って、俺だけを救う。

それこそが俺のエルメスであって、俺に向けられるものと同じものが、俺以外の「友達」に向くのが死ぬほど嫌だ。

エルメスを笑わせていいのは俺だけ、エルメスを泣かせていいのは俺だけ、エルメスを怒らせていいのは俺だけ。エルメスを助けて、

守って、保護し、管理し、支配し、征服していいのは俺だけ。

もう、マジで他の奴らなんか死に絶えればいい。飛行機落ちろって本気で思った。

異常な執着と異常な嫉妬。

俺はなんて異常なんだ。怖えぇー、俺。マジ変なとこばっかジュリオ様に似てしまった。本当、ここに至って初めてジュリオ様を殺してよかったとすら思える。マジあの人のせいだ、全部。

ジュリオ様に奪われた俺の人生。普通の家庭、普通の家族、普通の友達、普通の環境、普通の人生。

エルメスに出会うまで、俺は異常な環境で異常な人生を歩んでた。でも、エルメスと出会って、俺の苦悩も呪いも何もかも、アイツが払拭してくれた。

アイツが友達になってくれて、普通の友達みてぇに助けて、助け合って、ケンカして笑い合って。

吸血鬼だけど、アイツは俺の理想を、俺の憧れを再現して、俺の願いをすべて叶えてくれた。

エルメスを俺の神と言わず何と呼べばいい。

エルメスが幸せになるなら、俺は何だってやる、何にだってなってやる。アイツが本当の、本来の神の姿に戻れるのなら、俺は何でもする。

アイツは俺の、俺だけの神じゃなきゃいけない。

っあー！　また暴走した。本当、なんなの俺。そう言えば前にエルメスが、俺の理性のリミッター壊れてるとか言ってたな・・・確かにブッ壊れてっかも。マジ修理出そう・・・どこにだよ。

もう本当にさ、こればっかりは完全に隠蔽する必要があると判断した。ていうか、頑張って健常者になる必要がある。

動機としては別にやましいところはないし、いや、やましいと言えばやましいか。そこはおいといて、エルメスが結果的に幸せになるなら、むしろ俺に任せとけって感じではある。でも、人としてどうなのよっていう。人じゃねぇけどよ。

もしエルメスにこの事を感づかれたら、間違いなく軽蔑される。間違いなく嫌われる。そんなことになったら、俺ショック死。本当、冗談抜きで死ぬ。マジで、冗談じゃねぇ。

あ、ちなみにこれに関してはアーサーに見せる気はねぇからな。

コレ、ただの懺悔だから。
なら別に書く必要ねぇだろってなるかもしんねぇけど、どっかに吐き出しとかなきゃ頭バーンなるからな。一層異常になるぞ。
これ以上エスカレートしたら、エルメス連れ出して逃亡するぞ・・・
・いや、ウソ、冗談。これは本当に冗談。

とにかくそういうわけで、俺は考えを纏めるのに必死だったこともあって、隠蔽&健常者な俺に生まれ変わろうと、とりあえずエルメスを避けてた。
エルメスと離れて、俺にとってもエルメスにとってもお互いが「一番」でない状況を作り出すことが先決だと思ったから。

でも、その俺の行動が思わぬ結果を呼んだ。

今日バルコニーに出て煙草吸ってたら、突然、本当に突然ガラードとランスとシャンティに飛び蹴りされた。3人がかりで。

俺　「うぉ!?　何!?　お前ら何すんだ!」
ガラード　「何すんだはこっちのセリフだ!」
俺　「は!?」
シャンティ「アンタ、ミナ様が一番大事なんじゃなかったのかよ!」
ランス　「エルメス様、泣いてるんだよ!　カイが無視するから!」
ガラード　「なんで急にエルメスに冷たくすんの!?　理由を言え!」

あぁ、どうしよう、状況は分かったけど理由は絶対誰にも言えねぇぞ。という逡巡と動揺を上回る歓喜。俺は状況を察した瞬間に、大喜びした。わーい、ヤッター。マジ最低。でも喜んでる場合じゃねぇ。

俺　「え？　理由？　えー・・・別にないけど」
シャンティ「理由もなくあの態度!?」
ランス　「自由にも程があるよ!　エルメス様の気持ちも考えろ!」
ガラード「エルメス、泣いてたんだよ？　カイに嫌われたらどうしようって。カイに嫌われたら生きていけないって。エルメスに謝れ」

もう、俺にはコイツらが天使に見えた。エルメスが俺に嫌われることを恐怖してる、俺の存在に依存してる。その事をもたらしたコイツらに好きなだけ褒美をくれてやりたい。

あー、俺超幸せ。超嬉しい。ヤッター!

ってのを面に出すわけにもいかねぇから、大人しくわかったって頷いてエルメスの所に行った。で、エルメスの隣に座って、ゴメンなって謝った。

「私の事、怒ってる？」
「いや、なんでもねぇ。ゴメン、悪いのは俺だから」
「カイ、私の事嫌いになった？」

「そんなわけねぇだろ。俺はお前が一番大事だから」

訪れる、最高の、至福の瞬間。エルメスは俺にすがるみたいに抱き着いて、泣き出した。

「本当に？　本当に？」
「本当に」
「ごめんなさい。もう我儘言わないから、カイのいう事ちゃんと聞くから、私を嫌いにならないで」
「バカ、俺がお前を嫌いになるはずないだろ」
「よかった、私カイに嫌われたと思って、嫌われたらどうしようって思って、私、カイに嫌われたら生きていけないから」

多分、俺は笑ってたと思う。俺のしたことはエルメスの俺への依存度を急激に高めて、エルメスの中での俺の重要度は生死を左右するほどになった。
その事に俺は幸福を感じて、笑いそうになるのをこらえるのに必死だった。

あぁ、エルメスは健気だな。たまに同じことをやってやろうか。
それとも、嫌いになるぞって脅迫したら、エルメスは俺に服従するかも。

いや、落ち着け俺！　俺って悪魔！　最低！　健常者になるんじゃなかったのかよ！　ここで喜んだらお終いだっての！　ここは反

省するところ！

なんか妙な葛藤に苛まれた。ハァ、健常者への道のりは、程遠いな。

俺は異常で、最高に、歪んでる。俺は、悪魔だ。

ＦＩＬＥ－２０　Ｃａｓｔｌｅ　［城］

シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動報告

思えば、俺は昔からそうだった。

普段は誰にも関心を持たない。自分のことしか興味はない。だけど、特定の人物や感情、現象には異常なほど執着して盲信した。あまりにも執着して、盲信しすぎて、自分をどうでもいいと思ってしまう程に。

ある時は神に、ある時はシュヴァリエ達に、ある時は栄誉や仕事に、ある時はジュリオ様に、そして今はエルメスに。

多分、それは俺にとっての現実逃避の一環なんだと思う。辛い現実から目を背けたくて、異常なほど特定の人や物事に執着する。それしか見えないように自分を固執させる。

この異常な本性は、俺の弱さそのものだ。

なーんで、こんな摩訶不思議なイケメンになったかなーと言う俺の悩みも知らず、エルメスはキロと遊んでる。

いっそ能天気なアイツが羨ましいよ、全く。俺がおかしいわけだが、半分はお前のせいだぞコノヤロー。

気分的には俺はこんな本性に気付きたくはなかったけど、このままほっといたらヤバイことになってた気がしなくもない。

下手したら俺より先にエルメスや他の奴らに感付かれてた可能性もなきにしもあらず。今、この段階でブレーキかけられんなら、それに越したことはねぇ。

俺の狂信の対象が他に移れば楽なんだけど。俺もなんかペットでも飼おうかな――――――――ペットを溺愛する俺、気持ち悪っ！　ダメだ、らしくねぇ。向いてねぇ。ペットはやめよう。

いやぁ、しかしこれが愛情なら本当によかったっていうか、まだマシだったんだけど。残念ながら俺にはそれが理解できない。ただ、だからこそ最悪のパターンは回避できる。

今の俺に後から愛情なんて厄介なものが付属されたら、それこそ最悪だ。想像するだけで恐ろしい。もしその時アーサーがいなきゃ俺の天下、アーサーがいれば殺されて終わり。

そう考えると、マジで俺そう言うの理解できない人で本当に良かった。そこは異常でよかった。いや、良くねぇ、良くねぇよ。現状で妥協してんじゃねーよ。

いつからこんなカンジになっちまったのかはっきりわかんねぇけど、少なくとも最初の内は単純に友達だと思ってたはずだ。

その頃に、戻りたい。

今、俺はエルメスを裏切ってる。エルメスを騙して、ウソをついてる。エルメスが友達だと思ってる俺は、こんな俺じゃない。

そうだ、本当の俺はこんな奴じゃない。こんな弱い奴じゃない。戻るんだ、強い俺に。エルメスの友達に、戻るんだ。

そこで俺は色々考えた結果、手っ取り早く元に戻れる方法を発見した。そうだ、催眠術師を探そう。

この超面倒くせぇ本性を消し去って戴こう。金と他人の力で俺の悩みは一発解消。うん、いいな、この方法は。

しかし、俺の面倒くさがりが意外な展開に発展した。

「エルメス、俺ちょっと出かけてくる」
「え？　どこいくの？」
「あー・・・人探し」
「クライドさん達探しに行くの！？」
「え、いや、えーと」
「私もいく！」
「え、えぇー・・・」

なぜかクライドさんとボニーさんを探しに行くことになった。

「でも、どこから探せばいいかな？」
「え、あ、そうだな。とりあえず城に一旦行ってみるか？　何かがかりがあるかもしんねぇし、もうそろそろ調査も済んだかもしんねぇし、ミラーカさんの事もあるし」
「うん！　そうだね！　そうしよう！」

元気よく返事をしたエルメスが俺の手を握ると、気が付いたら目の前にはあの巨大な城。

「・・・お前、行くなら行くって言えよ。すげぇビックリしたじゃねーか」
「あ、ゴメン」

一応周囲を警戒。人影、人の気配はなし。調査は終わったのか、今日はもう終わったのか。とにかく誰もいなくて安心した。

エルメスと改めてあの巨大な城を見上げる。石灰質の白い城壁は焼けて黒くなってるし、天守閣の辺りは爆発のせいで崩壊してる。あれだけエルメスが手を入れていた庭も踏み荒らされて、花壇や噴水、石像にもおびただしい数の弾痕。

城の有り様は、荒廃、この一言に尽きる。

3年近くもエルメス達とここで過ごした。楽しく、過ごしてた。3年かけて作り上げた城も庭も関係も信頼も、ジュリオ様に一夜にして滅ぼされた。

エルメスはかつて青いバラが権勢を誇っていた、今では枯れて荒れ果てた花壇の前に座り込んで、枯れたバラを一つ手に取った。

「青いバラは、ジュリオさんだったんだね」
「どういうことだ？」
「他人の都合で、勝手に作り替えられた。バラは青い色なんてきっと望んでなかったんだね。赤いまま、枯れたいと思ってたんだね」

アーサーによって恋人を奪われ、自らも吸血鬼になったジュリオ様は、せめて人間に戻りたいと渇望してた。
人間の手前勝手な夢のために赤を奪われ、青を組み込まれたこのバラも、ジュリオ様と同じことを考えてたんだろうか。

エルメスの隣にしゃがんでバラに手を触れると、かさり、と音を立てる。その中に茶色い蕾のようなものをみつけた。バラの、種子。

「そーかもな。でも、このバラから採れた種子は、んなこと思ってねぇよ」

俺は最近になってやっと受け入れられたけど、他の奴らは切り替えが早かったからなー。リオに至っては鉛玉で撃たれても怪我もしないって逆に喜んでたくらいだ。

今更、人間に戻ろうとは思わねぇ。むしろ人間に戻ったら、エルメスの傍にいられなくなる。そっちのが願い下げ。

枯れたバラから見つけた種子をエルメスの手に渡すと、エルメスはその種子をぎゅっと握ってそっか、と笑った。

城に入ると中はもっと荒れてた。真っ黒で、焼け焦げた家財が散乱してた。

本当に戦争が起きたんだな、俺達は何もかも失ったんだな。

あの楽しかった日々も、使用人達も、エルメスの家族も、ジュリオ様も。

荒れた城内の静寂さが、一層寂しさを引き立てる。穴だらけでボロボロになったテーブルに目をやると、近くにはアンナさんが旦那

さんの快気祝いにとくれた花瓶が割れて転がっている。
ふと、エルメスが再び俺の手を取ったかと思うと、次の瞬間にはインドの屋敷の自分の部屋に戻っていた。

「エルメス？」
「カイ、ごめん・・・私、まだ・・・」

エルメスは俺の手を握ったまま俯いて泣き出した。あの日、あの場所で真実を知らされて、あの瞬間から裏切られた。あの瞬間から、同居人が敵になった。いつまでも、裏切られたトラウマはエルメスに着いて回る。

あの城で3年も過ごして、3年分の楽しかった思い出は、あの一夜に塗り替えられた。あの城での思い出は、ほとんどが黒く塗りつぶされた。

「どうして、どうして私はあの瞬間まで気づけなかったの…」

あの瞬間まで気付かせなかったのは、アーサーと俺たちの責任だ。仮に事前に知らせていたとしても、あの戦争を止めることは不可能だった。
きっと、アーサーとジュリオ様が再会した時点で、こうなる運命だったんだ。そうでも思ってなきゃ、この状況に耐えられない。

しばらく泣きすがっていたエルメスは、少ししてポツリと言った。

「ボニーさんとクライドさんの結婚式、楽しみにしてたのにな…」

挙式当日に起きた戦争。あの二人が恐らく一番残念だったに違いない。あの時――――――――

――――――――思い出した。

あの時、二人はサルーンに姿を現すことはなかった。呼びに行ったはずのシュヴァリエ達も何の報告もなかった。

でも、確かあの時シュヴァリエ達には呼びに行く振りをしてあの二人を殺害しろ、と命令が下りてたはずだ。

まさか、シュヴァリエたちが殺したのか？　いや、それはあり得ない。じゃぁ、既にあの二人も殺害されていたのか？　いや、でも直前までミラーカさんとアーサーが二人に着付けをしていたと言ってたし、何よりいくら城が広いからって銃声に気づかないはずはない。ならばサイレンサーを使ったのか？

でも、あの後シュヴァリエ達は何も言ってなかった。生きてるとも、死んでるとも。あの状況なら仕方がないといえなくもないし、何よりあの後もバタバタしてそれどころじゃなかったし。

今思うと、戦争が終わって逃走の準備をしているときも、俺はエルメスのことで頭がいっぱいでそこまで余裕がなかったけど、誰一人その話題を持ち出さなかったことが不思議で仕方がない。

これは、何か裏があるような気がするな。元々シュヴァリエ達はアーサーの命令でスパイ行為をしていたんなら、俺の知らない事実がまだあったとしても不思議じゃない。

絶対何かある。これはアーサーから俺への挑戦と見た。絶対暴く！

以上

FILE－21　Cover　up　【隠し事】

【重要】アーサーへのクレーム報告　2件目

エルメスが落ち着いてから、あの時の状況をガラードに聞きに行った。

「あの時、呼びに行っただろ。あの二人は？」

「実は俺達はアーサー様から二人を呼びに行く振りをして逃げろって言われてたんだ。でも、どうせならあの二人も一緒にって思って部屋に入ったんだけど・・・」

「・・・けど？」

「いなかった。どこを探しても、どこにもいなかった。姿も砂もなくて、生きてるのか死んでるのかも、俺にはわかんない」

「そうか、わかった。完全に生死不明か・・・いや、待て、呼びに行く「振り」？　アーサーがそう言ったのか？」

「そうだよ。で、そのまま逃げろって」

どういうことだ、それはおかしい。「呼びに行きそのまま逃げろ」じゃなく「振りをしてそのまま」？

本当に呼びに行く必要はない、そういうことか。なぜ、必要がない？　アーサーは、あの二人がいないことを知ってたのか？

いや、待て、よく思い出せ。いつからあの二人を見なかった？　いると思い込んで、思い込まされていただけで、実は既にいなかったとしたら？

いつから・・・戦争の3日前から前日にかけて、アーサーとユアンも見かけなかった。

まさか、まさか！

いてもたってもいられなくて、ガラードの部屋を飛び出してすぐさまユアンの部屋に飛び込んだ。

「コルァ！　てめぇ何隠してやがる！」
「は！？　いきなりなんだよ！」
「てめぇ、アーサーに口止めされてんだろ」
「は？　何を？」
「とぼけても無駄だ。ボニーさんとクライドさんを逃がしたんだろ」
「いや、俺知らねーし！」
「とぼけても無駄だっつったろ。俺はもうわかっちまったからな」

言いながら銃を取り出してユアンの眉間に突きつけた。

「オラ、吐け」
「マジ！　マジ知らないから！」
「俺が撃たねぇとでも思ってんのか？　死にたくなけりゃ、吐け」
「マジ副長勘弁しろよ！　俺は本当に…ギャァァ！」

いつまでも口を割らねぇもんだから耳を撃った。耳から血を流して悶絶するユアンに再び銃を向ける。

「次は左だ。吐け」
「マジ副長、最悪だよ。無理だって、アーサー様が一生誰にも言うなって言ってんだぞ」
「心配すんな、俺も共犯になってやる。誰にも、エルメスにも言わねぇ。お前一人で秘密を抱えんのは辛れぇだろ」
「副長・・・」

「――――――――――――――なるほどなー。つーか、実はエルメスと二人の捜索に行ったんだよ。いずれはまた探しに行きたいって言い出すぞ」
「そうなんだよ。エルメスに限らずみんなだって言い出しかねないよな」

「どーすっかなー。その捜索が不毛だなんて俺らにはわかりきってるし、見つからなくて憔悴していくのを見るのもちょっとな」
「いっそ死んだことにしちゃうとか」
「それでエルメスが泣いたら、お前の言う彼女の前でお前のケツに操縦桿ブチ込むぞ」
「いっそ殺せよ。あ、じゃあ、こう言うのは？　例えば・・・・・」
「あ、それでいいな。それで行こう」

というわけで、エルメスとシュヴァリエ及びシャンティファミリーも召集。
シャンティファミリーの奴らは仕方ないが、シュヴァリエの奴らは全員遊んでるか暇なくせしてブーブーうるせぇ。

「黙れてめぇら。今日は重大なお知らせだ。その機能不全な脳と耳をフル稼働してよく聞け」
「いーから勿体つけてねーでさっさと話せ」
「よし、パーシーは後で射殺な。私語厳禁。喋った奴から射殺する」
「・・・」

やっと静かになった。さすが威厳の男、俺。ミスター管理職。

俺　「質問は後で受け付けるからとりあえず聞け。話はボニーさんとクライドさんについてだ」
ガラード「なんか手がかり掴めたの！？」
ガルフ　「二人はどこに！？」

俺　「あの日シュヴァリエ達で呼びに行ったときは既にもぬけの殻で、二人は生死不明だった。それもそのはず」
ガルフ「シカトかよ・・・」
俺　「あの二人はとっくに城から逃走してた」
エルメス「ウソ！　でも衣装合わせとか打ち合わせとかしてたよ！」
俺　「そーだな。二人の代理としてミラーカさんがな」
エルメス「あ、そういえば・・・」
俺　「あの二人はアーサーの手引きでミラーカさんの協力の元、逃亡した」
シャンティ「じゃあ、お二人は…」
俺　「あぁ、生きてるはずだ」

二人が生きている、その事に屋敷は歓喜に沸き立った。こんなにみんながみんな喜ぶのって初めてだな、と感慨に浸ったのも束の間、歓喜の波は質問の津波になって押し寄せてきた。

ガラード「つーかなんで副長知ってんの？」
ガルフ「さては以前から知ってやがったな！」
俺　「や、俺もさっき知った」

そう言ってユアンを前に引き立てると、全員がユアンに視線を注いだ。

リオ　「え？　ユアン、知ってたのか？」
ユアン「いや、俺もよく知らない」
ディナ「は？　全然意味わかんないんだけど」

俺　「だからとりあえず聞けって。ユアンは当事者だ。でもよく知らない、これは本当だ」
トリス「いや、だから意味わかんないって」
俺　「アーサーの不思議能力の一つ、魔眼に最近までヤラれてた」
エルメス「え!?　そうだったの!?」
俺　「そ。コイツはアーサーに操られてあの二人の逃走を手伝った。その事だけを最近思い出したが、その内容はスッポリ抜けたみたいに覚えてなくて、どこにいるのかもわかんねぇらしい。な？」
ユアン「そう。あの日の数日前に、アーサー様とミラーカさんに呼ばれて部屋に入ったところまでは覚えてる。気付いたら車を運転して城に帰ってるところで、その間の事は断片的にほんの少ししか思い出せない」
ベディ「なんでわざわざそんなことまでして・・・」
俺　「さーな。アーサーが何考えてるかわかんねぇのは、今に始まったことじゃねぇだろ」
エルメス「確かにね・・・」

アーサーが何考えてるかわかんねぇ、てのはものすごく説得力あるな。みんな納得して一気に質問の数が減った。

パーシー「覚えてることって？　例えば？」
ユアン「二人の入った棺を運んでるとこ、飛行機を操縦してるとこ・・・くらいかな」
ランス「逃がしたことしか本当にわからないんですね。飛行機という事は、イタリアや近隣国ではないんでしょうね」
ユアン「多分。でもそこがどこかは覚えてないな」
エルメス「うーん、だとしたらアメリカかなぁ。でもアーサーさん

世界中うろついてたみたいだし、わかんないや」
ユアン　「一つ大事なことを覚えてるよ」
ガラード「なに？」
ユアン　「アーサー様はあの二人に「待ってろ」って言ってた。きっと帰ってきてから、アーサー様がちゃんと迎えに行くつもりなんだよ」
エルメス「アーサーさん、人を待たせるの好きだな・・・」
俺　　「全くだ。でも、わざわざ二人にもそう言ったって事は、ほぼ確実に帰ってくるって事だ。今あの二人をやみくもに探しても世界は広いし、見つからねぇだろ。あの二人の無事が分かってるなら、大人しくアーサーの帰りを待とう」
エルメス「そっかぁ。でも、生きてるんだね、良かった。本当に、本当に・・・良かった」

ユアンと俺の話を聞いて安堵したのか、エルメスは嬉しそうにしながら泣きはじめた。普通の泣き顔とは違う、エルメスの嬉し泣きは何度見てもいいもんだ。

クライドさんとボニーさんが生きていることが、どれほどエルメスの救いになったか計り知れない。アーサーが確実に戻ってくるという事が、どれほどエルメスを救ったか知れない。

アーサーは本当にムカつくな。

ちなみに、この召集に至るまでの裏話。
俺の脅迫と甘言に、渋々ユアンは口を開いた。

「クリスマスイブの3日前、あの二人を連れて、逃がした」
「じゃあ、あの二人は生きてるんだな」
「あぁ、生きてる」
「二人はどこだ？」
「それも言わなきゃダメ？」
「当然」
「わわわかった、言うから銃を下ろしてください。あの二人は、日本だよ」
「日本！？」
「そ。アーサー様のご友人の方に預けてある」
「日本・・・なるほど。日本なら吸血鬼は気軽に出入りできねぇもんな。それでお前だったわけか。飛行機操縦できるから」
「そういうこと。二人は何も知らねぇよ。何も知らされずに彼女の元へ連れてって、アーサー様が戻っていらしてから迎えに行くことになってる」
「つーことはお前、アーサーがほぼ確実に帰ってくることも知ってたんだな」
「・・・ま、そういうことになるかな」

アーサー、俺らはどんだけアンタに踊らされてりゃいーんですか。アンタはあと何個策を立ててんだ！　なんだコレは、謎解きはディナーのあとにしろ！

「そか、わかった。撃って悪かったな」
「いいけど、マジで黙っててよ」
「わかってるって。で、その彼女っつーのは信用できんのか」
「できるよ！　アーサー様の友達なんだぞ！　それにあの方はいい人だ！　綺麗だし！」
「うぉ、びっくりした。急に興奮すんな。つーか信用に顔は関係ねーだろ」
「でも彼女はいい人だ！」
「ハイハイ、わかった。お前がそこまで言うなら信用する」

俺の失言に異常に興奮するユアン。知らねぇ間にその彼女とフラグが立っていたようだ。

それは置いといて、マジでアーサー・・・アンタはわざとやってんのか。俺らとエルメスがアンタの掌で躍り狂ってんのがそんなに楽しいか。
俺も異常だけど、アンタの秘密主義と悪巧みと性格の悪さは群を抜いて異常だ。

つーことは、だ。この事を知ってんのは俺とユアンだけ。エルメスは勿論皆にも秘密。なぜ秘密にする必要があるのかはわからない。
エルメスの事を思えばすぐにでも話して日本に迎えに行きたいが、残念ながら複雑な山道だったせいでユアンは場所を覚えてねぇ。それにアーサーがいない状態で海を渡ることに不安がないわけでもない。

どうせ行けないなら下手に話さない方がいいか。下手に話して探して見つからなかったら余計にエルメスの不安を煽りかねないし、日本だとエルメスの時効だのなんだのしがらみも多いから厄介なことになりかねない。

ん、もしかしてそれで日本を選んだのか。そりゃ、日本ならキリスト教国じゃねぇからヴァチカンの人間だって気安くは入れない。吸血鬼も簡単に入れるような国じゃない。潜伏先ならトリンとツァンという選択肢もあるのに、それを差し置いて日本にしたのはその為か？

何より探し出せたとしても、アーサーのいない状態で「宿敵の身内」である俺らがエルメスの傍にいることを、あの二人と例の彼女がすんなり納得するかが疑問だ。アーサーの説明がなきゃ俺らがどれほど説得しても、策略だと疑われても仕方がない。

あ、それで秘密なのか。なるほど。さすがアーサー、ムカつくぜ。

ていう結果にたどり着いて、真実は闇に葬って生きてることだけを伝えることにした。本当ならすぐにでも二人を迎えに行ってエルメスを安心させてやりたい。

でも、エルメスは日本でのこともあるし、ヴァチカンの奴らが日本に近寄る外国人を警戒していないという保証もない。アーサーみたいに魔眼で操れるわけでもねぇしな。

だけど、二人が生きているというだけでエルメスはメチャクチャ喜んでたし、俺もすげぇ安心した。
つくづくアーサーの策略に躍らせられんのはものすげぇムカツクし腹が立つけど、今回ばかりは、感謝だ。

以上

FILE－22　Clock［時計］

シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動報告

時計の針と同じように時間も動かせたらいいと思うのは、不毛な願いだ。

「バレンタインおめでとう」

そう言ったエルメスとシャンティにプレゼントをもらった。二人はそう言いながら全員にプレゼントを配っている。

それに首を傾げる俺ら。おめでとうっておかしくねーか？　それになんでバレンタインで？　いや、確かに今日はバレンタインだが。

「なんでお前らが贈るんだよ？」

「あのねー、日本では女の子が男の子にチョコと一緒に愛を伝える日なの。外国では逆だって日本を出てから初めて知ったよ。みんなには本当にお世話になってるから、日頃の感謝を込めてみた！」

「ふーん、なんでチョコ？」
「さぁ？　日本人は企業戦略に騙されやすいんだと思う」
「つーかコレ、中身チョコなら受け取り拒否」
「拒否しないでよ！　チョコなわけないでしょ！　もう！」
「冗談だって」

正直、エルメスから貰ったもんなら中身がセミの抜け殻でもいいんだが、いや、よくねぇか。
とりあえず、エルメスを虐めておかないと気が済まない。笑いながら箱を開けてみると、中からはシルバーの腕時計が出てきた。

「お、カッコイイ」
「カッコイイ？　気に入ってくれた？」
「あぁ」
「えへへ、シュヴァリエはシルバーで、シャンティファミリーはゴールドで、みんなお揃いなの！」
「い、いい年こいてお揃いかよ・・・」
「みんな仲良し！　ちゃんと使ってね！」

周りを見てみると、まんまとお揃い。ガラードとランス以外はみんなアラフォーだってのに、全員お揃いとか嫌がらせか。
まぁ、エルメスだしなぁ、せっかくくれたんだし、しょうがねぇよなぁ、と渋々時計を装着。そしたら、ガルフが覗き込んできた。

「あれ？　カイだけフェースの色違うじゃん」

「あ？　お前の見して」
「ホラ」

俺のフェースの色は黒で、よく見るとガルフや他の奴らは白だった。

「カイは筆頭だし、リーダーってわかりやすいように！」
「誰にわかりやすくする必要が？」
「・・・それもそっか」

思わずツッコんでしまったが、俺超嬉しい。俺だけ特別扱い！
ヒャッホウ！　なんとかバンザイしたい衝動を抑えてエルメスに向き直った。

「エルメス、ありがとう」
「やっとお礼言ってくれた！　遅いよ！」
「あぁ、ワリーワリー」

むくれるエルメスに思わずニヤケて謝ったら、またバカどもが騒ぎ出す。

パーシー「ちょっと、御覧なさい。副長ったらあのニヤケ面」
トリス「ありゃ嬉しくて仕方がないんですわよ」
キルシュ「そうですわね。なんてったって、自分だけ特別ですものね」

リオ　「大好きなエルちゃんからの特別に愛のこもったプレゼント、そりゃニヤケもしますわよ」

マジ、アイツら・・・という怒りを通り越して、俺は戦々恐々。何故バレた!?　いつの間に俺の本心は白日の下に晒されたんだ!?　大喜びから一瞬で目が覚めた。

ディナ　「シスコンのお兄様にとっては至上の喜びでしょうよ」

あ、そっちか。じゃぁいいや。いや、よくねぇけど。でもバレるくらいなら、シスコンだと思われた方がまだマシだ。

いや、良く考えたら全部シスコンでなんとか通りそうな気がする。いざとなったら、もうそれで行こう。

いや、もしかして本当にシスコン的思想なのか。そうと言われればそんな気もする。いや、ていうかそもそも妹じゃねぇけど。友達なんだけど。つーか、シスコンて何?　んん?　なんかワケわかんなくなってきた。

俺　「君たち、ちょっといいかい?」
リオ　「あら、エルメスのお兄様、なにかしら?」
俺　「とりあえずその貴婦人キャラはよせ」
ディナ「面白いじゃん」
俺　「全然。不快にして不愉快。つーかそもそもシスコンってなんだっけ」

俺の質問にみんなは、ん？　と首をひねりながら考え始めた。よく考えたら俺らみんな男兄弟みたいなもんだし、シスコンなんて概念がよくわかんねぇ。

ガルフ　「とりあえず、妹大好きでー」
キルシュ「妹を独占したくてー」
パーシー「妹にベッタリ」
ユアン　「妹に寄りつく奴が許せなくてー」
ペレアス「でも北都はクリシュナさん許してたから、認めた相手はいいんだろうな」
ベディ　「てことは、妹の相手は自分より上位ならいいのか」
トリス　「えっとねー、シスターコンプレックスは、特に「姉妹に対する恋愛的感情」や「自分のものにしたい独占欲」のある兄弟、と言う図式で捉えられる。ｂｙウィキペディア」
ガラード「へぇ、そうなんだ。え、ていうか恋愛的感情？」
ディナ　「つーか「的」ってなに？」
俺　　「的もなにも、それはねぇんだけど」
ランス　「けど？　それ以外ならあるの？」
俺　　「・・・・・・ねぇよ」
ガルフ　「何、その間」

え、ちょっと待て、ちょっと待て。全部該当するんだけど。俺ってシスコンだったの？　これってシスコンだったの？
いやでも、エルメス妹じゃねぇし。兄妹みたいとは言われるけど、妹じゃねぇし。友達だし。じゃぁ、なんだ。

ペレアス「アラアラ、悩んじゃってるよ」
ガルフ「誰がどう見たってシスコンだっつの。そうじゃなきゃただの異常者だよな」

さすがガルフ、俺の副官だけあって的確な事言いやがる！　俺思わず冷や汗かいちゃった！　あー、いっそのことホントに兄妹ならシスコンで済んだものを！　結局俺はただの異常者じゃねぇか！
そうだ、もう認めよう。それを認めて楽になろう。そうしよう。

俺「ひ、百歩譲ってシスコンだとしても、俺は別に異常じゃねぇから」
ガルフ「は？　シスコンな時点で異常者だ」
俺「な！　ちょ、じゃぁ北都も異常じゃねぇか！」
ガルフ「北都は開き直ってたからいいんじゃねぇの」
ランス「ていうか、北都くんも、って言った時点で認めちゃってるよね」
ベディ「確かに。副長も開き直れば？」

開き直れば・・・うわぁ、なんて誘惑だ。開き直ったら楽だろうな。開き直りてぇー！

でも、俺は明らかに常軌を逸してる。女にすら嫉妬してる位だ。北都の比じゃねぇ。完全に開き直ったら、俺は多分エルメスを監禁する。やっぱりシスコンなんてレベルじゃねぇ。開き直りは、マズイ。

ガルフ「おやおや、また悩みだしたよ」
ディナ「しょうがない兄ちゃんだねぇ」
ベディ「こりゃエルメスも大変・・・あれ？　エルメスは？」
トリス「あれ？　ついさっきまでいたのに」

俺が悩んでると言うのに、エルメスは俺を置いてどこかへ行ってしまった。本当ヒドイ、あの子。俺もコイツらもほったらかしかよ。勝手にやってろってか。なんかすげぇムカつくんだけど！

「チクショー！　エルメェェス！　どこだぁぁぁ！」
「やっぱシスコンじゃねぇか」
「うるせー！」

一言エルメスに文句を言ってやろうと、エルメスを探し回ってみたものの、屋敷の中にはいない。
まさか一人で城に行ったのか!?　いや、さすがにそんな暴挙はいくらアイツでも・・・やりかねねぇ！
一抹の不安を抱えつつ屋敷の外も探し回ってみると、いた。

いつもの様にクリシュナさんの墓に花を供えて、プラス今日は小さな箱も添えてあって。その前にエルメスがしゃがみこんでいた。
そうか、今日はバレンタインだ。日本では女が男にチョコと一緒に愛を伝える日なんだって、さっき言ってたな。

すっかりイライラが収まってしまった俺は、エルメスの隣に座った。

「クリシュナさん、きっと今頃天使にメチャクチャ自慢してんじゃねーの」

「アハハ、なにそれ」

「愛妻家にとっちゃ、嫁からのプレゼントは至上の喜びだろ」

「だったら私も嬉しいな」

「間違いねーよ」

少しの間笑ってたエルメスは、段々悲しそうな表情になって涙を零した。

「クリシュナがね、最後に言ったの。幸せになってって、愛してるよって。でも、それって残酷じゃない？　クリシュナがいなくて、愛する人がいなくて、どうやったら幸せになれるんだろうね」

クリシュナさんはエルメスにとって幸せの象徴そのもの。愛の象徴そのもの。どちらもその愛情の全てを注いでいたのに、あの日に断絶させられた。アーサーとエルメスを守るために、自分の命が削られるとわかっていて、その命を使い果たした。

クリシュナさんが命を使い果たしてでも、守りたいと思った女。その女が泣いているのを見て、きっとさっきまで有頂天だっただろうクリシュナさんも、今は悲しい顔をしているんだろう。

「クリシュナさんは、本当にお前を愛してたんだなぁ」
「でも、死んじゃったら意味ない、傍にいてくれなきゃ意味ないよ・・・」
「んなこと言うな。意味ならちゃんとある」
「え？　なに？」
「クリシュナさんはお前を本当に愛してたから、幸せになってほしいって思ったんだろ。生きてなきゃ幸せにはなれねぇだろ。だからお前をアーサーに託した。アーサーもお前を愛してたから、俺らにお前を託した。クリシュナさんの願いがあったから、それが今繋がってるんだろ。クリシュナさんはいなくなっちまったけど、クリシュナさんの愛が生きてるから、お前が生きてるんだろ」
「うん、そうだね・・・だけど、やっぱり寂しいよ。私はいつまで、こんな思いをするのかな」

さすがにこれ以上はもう、俺には無理だ。それはどうしてもエルメス自身が乗り越えなきゃいけないことだ。
エルメスがクリシュナさんの死と向き合って想い続ける覚悟をするか、新しく恋をするか、クリシュナさんを忘れるか。

早くアーサーが帰ってきて、エルメスの傍にいてくれればいいのに。いや、この際エルメスが愛した相手なら誰でもいい、ランスでもガラードでもアジメールでも。エルメスを愛して、エルメスが愛した人が隣にいてくれたら、幸せになれるのに。

こんな別れ方をしたら、ジュリオ様やアーサーの様に１００年や２００年では忘れられないかもしれないな。それほど長い月日を、エルメスは苦しみ続けなきゃいけないかもしれない。

そこに至るまで、一体どれほどの時を刻まなきゃいけないんだろう。時間は、戻すことはもちろん、進める事も出来ない。時間は時計と同じ動きをしてはくれないんだな。

「お前はきっと、クリシュナさんの事で長い時間をかけて、悩んで苦しむんだろうな」
「・・・そうだね。ずっとずっとこんな思いをするんだろうね」
「でも、場合によっちゃそれもあっという間だ」
「どうして？」
「お前がそのまま足踏みしてたら時間は大して進まねぇだろうけど、お前が進んだらその分時間も早く過ぎるんじゃねぇの」

そう言ったらなんでか知らんがエルメスは驚いた顔をして、笑い出した。

「なに？　なんか俺変なこと言った？」
「アハハ、違うの。クリシュナと同じようなこと言うんだなと思って」
「クリシュナさんが前なんか言ったのか？」
「うん。いつまでも苦しいって言ってちゃダメだよって。前に進みなさいって。カイにまで言われると思わなくてびっくりしちゃったよ」
「そりゃお前、俺が正しいって事だな」

「そうかもね。カイはそう言うところクリシュナに似てるね」
「・・・アーサーに似てるっつったり、ジュリオ様だったり、クリシュナさんだったり。俺は何者だよ」
「二重人格かと思ってたけど、多重人格だったんだ」
「お前そんなこと思ってたの」
「思ってた」

どうやら俺は既に異常者だと思われていたらしい。軽くショックなんだけど。折角人が慰めてるっつーのに、本当にこのお嬢ちゃんはヒドイ子だ。

ま、でも、結果的に涙が止まって今笑ってくれてるから、まぁ、いっか。

以上

ＦＩＬＥ－２３　Ｃｏｎｓｔｅｌｌａｔｉｏｎ［星座］

不死の王　アーサー・ペンドラゴン様

エルメスプランセス　シュヴァリエ筆頭

カイ・ペンドラゴン

シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動報告

もうそろそろ延滞料金１００万超えるぞ。早く戻ってこねぇと借金地獄だぞ。ご利用は計画的に。

「まさかの３か月経過」
「もう春だね・・・どうしよう」
「つーか俺今日で４５じゃん！　怖！」
「え？　カイ今日が誕生日なの？　４５歳？」
「あ、しまった」
「別に隠すことでもないじゃん」
「いや、ミステリアスな方がいいだろ、なんか」
「別に？　あ、誕生日おめでとう」

「ハァ、この歳になると嬉しくねぇ・・・」

ウソです。エルメスに祝ってもらえたら嬉しいです。超嬉しいです。フィーと溜息を吐きながらエルメスと未だ帰らぬアーサーに思いを馳せてたら、急にシュヴァリエ達が笑い出した。

「マジウケる！　これ見て！」

そう言ってトリスが見せてきたパソコンの画面。

3月25日生まれ　牡羊座の基本性格

〇ポジティブキャラクター

・開拓精神、あらゆることに関するパイオニアに成り得る人物。
・新しい事を始めるエネルギーに満ちている。
・人々を牽引していく力、リーダーシップを発揮することができる。
・パワフルでダイナミックな実行力。
・旺盛な競争心、負けず嫌い。
・どんな分野においても自分が一番になろうとする。勝つまで戦う。
・瞬発力、素早く機敏に行動する。
・判断が早い。
・勇敢、多少の危険や障害はものともしないで行動することができる。

・独立的、人に頼る事は考えない。自分で考え自分で行動する。
・スポーツマンとしての才能。
・現実主義者。いざという時に冷静に行動できる。

「おぉ、まさしくじゃねぇか。つーか俺牡羊座だったのか」
「自分の星座位把握してないの？」
「興味ねぇ」
「それより、ネガティブの方見てよ」

●ネガティブイメージ

・独善的、自分の行動は常に正しいと信じている。
・おせっかい。
・せっかちで、早く結果を出そうとする。むやみに他人を急がせる。
・あわてもの、判断も行動も素早いが、そそっかしい。
・勘違いなことをしでかしがち。
・衝動的、粗野、短気。すぐにカッとなる傾向。
・尊大。自分はこの世で一番偉いと思っていることがある。
・自己中心的、宇宙は自分を中心にまわっていると考えている。
・他人の気持ちを考えられない。無愛想でぶっきらぼう。
・中途半端、飽きっぽい。
・やりかけたままの事がそのままになりがち。すぐにやめてしまう。

「・・・・・・・・」

「アハハハハ！　すごーい！　まるっきりこれだよね！」
「星座占いバカにしてた！　マジウケるんだけど！」

全員大爆笑しやがってムカつく・・・微妙に思い当たるところがあるから余計ムカつく。チクショー。大体占いなんて、６０億いる人間をたったの１２種類やそこらで大別しようとすること自体がナンセンスなんだよ！

「くっだらねぇ。バカじゃねーの。こんなん誰にでもあてはまるようにできてんだよ」
「出た、独善的」
「うるせぇよ！」
「出た、短気」
「・・・ムカツク。じゃぁホラ、エルメスの見せてみろ。お前何？」
「あ、見たい見たーい！」
「だから何座だよ」
「出た、せっかち」
「黙れ！」
「私てんびん座！」
「ハイハイ、てんびん座ね」

○天秤座のポジティブキャラクター

・協調性、あらゆる人々との調和を大切にする。
・説得力がある。信用されやすい人物。友人が多い。
・友愛的、平和主義。人々との良好な人間関係を築く。

・外見には気を使う。洗練されたセンスの良いファッション。
・正義、フェアプレイの精神を持つ。
・芸術的センスがある。ロマンチスト。
・如才のなさ、知的で上品な印象を人に与える。
・コミュニケーション能力が高く、社交的、外交的。
・優しさ、共感的。機転がきく。
・なにごとも人とわかちあうことができる。
・常に強いパートナーシップを必要としている。

「微妙じゃねーか？　知的で上品？　外見に気を遣って、ソレ？」
「ヒドーイ！　私だって色々勉強してるもん！　カイより絶対物知り！」
「知識と知性は別モンだろ」
「ムカつく・・・」
「じゃぁ、ネガティブみてみよう」

●天秤座のネガティブキャラクター

・気紛れ。
・策略的な愛情、人に媚びる傾向。
・論争好き。自分を正当化する傾向。
・平和至上主義、面倒なことや不快なことには向かっていかない。
・波風をたてるのを嫌う。問題をためこむ。
・怠け者。贅沢好き。
・優柔不断、決断が遅い。諦めやすさ。
・ナルシスト、虚栄心から自己陶酔に陥る傾向。

・孤独には耐えられない。

「あー、わかるわかる。お前媚びるよな。気紛れだし、面倒事から逃げたがるし、優柔不断で金もかかる」
「えー？　媚びてるわけじゃないよ！　少なくともナルシストじゃない！」
「必死にアーサーに媚びてご機嫌取ってたじゃねぇか。電波がナルシストのいい証拠」
「電波じゃないもん！　でも、孤独には耐えらんないカモ！　ねぇ、これってネガティブなことなの？」
「少なくとも無理やり同室を強いられてる俺にしてみれば、ネガティブ以外の何物でもねーな」
「いい加減それは諦めてよ！　ケチ！」
「我儘に大人しく従ってやってんだから文句位言わせろよ。お前が贅沢言うな」
「むきー！　ムカつく！　なんでネガティブの時だけ食いつくのよ！」
「あー、うるせぇ。キャンキャン言うな」

なんだかんだで合ってるっちゃぁ、合ってるか。俺のは合ってねぇけど。
それからしばらくみんなの占いを見てワァワァ騒いでたら、エルメスがアーサーのを見たいと言い出した。

「アーサーの誕生日知ってんのか？」
「確かこの前調べた時に見たような・・・えーと確かさそり座だっ

たよ！」
「じゃぁさそり座見てみるね」

○さそり座のポジティブキャラクター

・公正で誠実な性質をもつ。
・深くて激しい感情の持ち主。
・内面的なエネルギーが人一倍強い。驚くべき精神力。
・カリスマ的な存在感。強い意志、信念を持つ。
・実行力がある。約束は必ず履行する人物。
・決断的、合理的、内向的、情熱的、優れたセックスアピール。
・神秘的で魅力的。
・鋭い洞察力、直感的、気付き、第六感が冴えている。
・高い潜在能力。負けず嫌い。
・困難、苦境にあっても、かならず這い上がる。
・経営的手腕がある。

「うーん、合ってるっちゃぁ合ってるか」
「公正で誠実・・・？」
「元王様なら経営手腕もありそうだよね」
「約束守るしね」
「情は深いかもな」
「神秘的で魅力的だな」
「アーサーさんちって美形の家系らしいよ」
「マジか」
「カリスマと言えばカリスマだ」
「情熱的で、セックスアピールってエロオヤジって意味？」

「それは違・・・いや、そうかも」
「つーかポジティブ要素がいいトコ取り過ぎじゃね？」
「ではお待ちかね。ネガティブ見てみよう」

●さそり座のネガティブキャラクター

・執念深い。復讐心を燃やす。
・良い事も悪い事もいつまでも覚えている。
・妥協しない。
・支配的、独断的人物。権力を好む。
・なかなか他人と親しくなれない。
・なかなか他人を信用しない。
・不寛容、神経質、秘密主義。
・向こう見ず、暴力的。
・策略的、疑い深さ、嫉妬深い。
・自己抑制がいきすぎることがある。

「あー、確かに。わかるわかる。策略的、懐疑的、嫉妬深いなんてドンピシャじゃねぇか」
「支配的で独断的もだよ。いつも勝手に決めて決定押し付けるし」
「不寛容で秘密主義だし暴力的だよな」
「親しくなれないっつーか、なろうとしないよな」
「自己抑制？　・・・あぁ、エルメスに関しては抑制してたか。しなくていいのに」
「・・・私は有難かったけどね。執念深い、これもだよ。あの人すーごい根に持つから」
「あー、良くも悪くも妥協しねーよな。神経質で完璧主義」

アーサーも例にもれず、ネガティブキャラクターをいじくられて悪口大会になった。怒るなよ、全部事実だ。星座占い、あなどりがたし。俺のは合ってねぇけど。

アーサーがさっさと帰ってこねぇから、みんなで占いなんかやって陰口をたたく羽目になるんだぞ。自業自得だ。

トリス達の思いつきのせいで、一時的に占いが大流行したぞ。占いなんて良いとこだけ信じて悪いとこ忘れちまえば良い気もするけど。つーか、見てもすぐ忘れるし、あんまり意味のあるもんじゃねぇよな。

ま、でも、どの占いにしてもアンタのが一番盛り上がった。アンタが謎の男過ぎて、みんなアンタの本質に興味津々だったぞ。

いない間に、どんどん暴かれてくな。ご愁傷様。それが嫌ならさっさと帰ってこい。あ、金も忘れんなよ。

「あはははは！　カイ見て！　牡羊座の人が１２星座中一番占いの結果が合ってないって反論するんだって！」

アーサーのみならず占いにまで踊らされてる俺って一体・・・

以上

LETTER－5　Color　［色彩］

拝啓　アーサーさん

んもう！　3か月ですよ！　もう春じゃないですか！　待つって決めたけど、正直いつまで待てばいいのかも全然わかんなくて、漠然と待つって決めたもんだから段々不安になってきましたよ。

そう言えば、今日はカイの誕生日でした。別にお祝いとかしなかったけど。それで、トリスが星座占いを見つけてカイの基本性格みたいなのを見たらあまりにもピッタリで、みんなで大笑いしました。

良いところは、パワフルでリーダーシップがあって決断力があって、独立心があって勇敢とか。で、悪い所がそそっかしくて、無愛想で、自己中で、短気。ね、ピッタリですよね。本人は絶対間違ってるって言い張ってましたけど。

それで、牡羊座の人は12星座中一番占い結果が合ってないって反発するんだって教えてあげたらすごく悔しそうな顔してました。本当あの人面白いですよね。

私も占い見てもらったんですけど、いいところに常にパートナーシップを必要としてるって書いてて、悪い所に孤独に耐えられないって書いてました。これは本当に、正解だと思いました。

よくよく思い返してみると、最初の頃はアーサーさんに頼って、クリシュナと出会ってからは、クリシュナにベッタリで、今はカイにまとわりついてます。

本当に私って、誰かが傍にいなきゃ生きていけないんですね。なんか妙に実感しちゃいました。

ていうか私、本当にウザいのかも・・・この前カイが私を避けてるって書きましたけど、その後仲直りできたけど理由は教えてくれなかったんですよね。なんでもないとか言って。

この占いを見て思ったけど、もしかしてウザいのが嫌だったのかも。よく考えたら、孤独に耐えられない私と、孤独を愛するカイじゃ相性最悪じゃないですか。カイにしてみたら相当ウザいのかも・・・まぁ、でもいいですよね、別に。私は寂しいんだもん。

でね、でね、アーサーさんのも見ちゃいました。アーサーさんは１１月１０日生まれだからさそり座でした。

で、さそり座のいいところは情が深くて、約束守って、精神力が強くて、何事からも逃げなくて、神秘的なカリスマ。悪い所は、独断的で、支配的で、策略家で、暴力的で、秘密主義で、妥協しなくて、嫉妬深くて、執念深い。

アーサーさんのもピッタリでみんなで超盛り上がりました。

アーサーさんの占いを見て、思いました。あの戦いのとき、私が逃げましょうって言ったら、アーサーさんは言いましたよね。
それは許されない、それはまるで敗北主義者のようだって。

あれほど大変で辛い状況なのに、そこから一歩も逃げようとしないで立ち向かうなんて、アーサーさんは本当に強い人ですね。

なのに、なのに！　ボニーさんとクライドさんを逃がしたでしょ！　なんで教えてくれなかったんですか！　もう、ヒドイ！　秘密主義も大概にしてくださいよ！　もう！

しかもユアンを魔眼で操ったりなんかして！　もう、本当アーサーさんのやることには着いて行けませんよぉ・・・

でも、すっごく嬉しかった。二人が生きてるってカイとユアンから聞いたとき、本当に光明が見えました。本当、アーサーさんでかした！　って思いました。

アーサーさん、あの二人を逃がしてくれて、本当に、本当に、ありがとうございました。

どこにいるのかわからないし、いつ会えるのかもわからないけど、生きてればそのうちきっと会える。アーサーさんが帰ってきたら、二人にも会える。

ますますアーサーさんが恋しくなりました。ますますアーサーさ

んの帰りが待ち遠しくなりました。嬉しいのに余計ソワソワしちゃって、正直複雑な気分です。

でも、アーサーさんが教えてくれてなかったから、カイと二人で城まで探しに行ったんですからね！

それで城の有様があまりにも酷くて、あの日の事を思い出して辛くなってすぐ帰っちゃって。泣いちゃったじゃないですか。

これが本当のくたびれもうけの骨折り損ですよ。全くもう。

カイも言ってたけど、本当にアーサーさんの企みには振り回されっぱなしです。踊らされっぱなしです。もう本当、いい加減にしてください。一喜一憂するのも疲れるんですからね！

さすがにもう、これ以上の事はないだろうと思うけど、もう本当勘弁してください。

でも、本当に一喜一憂のふり幅がこれほど大きい事ってなかったと思います。二人が生死不明なことにすごく落ち込んでたのに、二人が生きてるってわかっただけで大ジャンプですよ。

人を絶望にも陥れて、人をこれほど歓喜させることって人の生き死に位なものですよね。

先月、バレンタインの時にクリシュナのお墓詣りついでに、クリシュナにもプレゼントあげてたんです。いつも毎年クリシュナが私にくれたり、愛してるって言ってくれたから、今年は私から。

その時カイが来て、一緒にお墓参りしてたらあの日の事を思い出して悲しくなって泣いちゃって。その時にカイが言ってくれました。

クリシュナは私を愛してたから幸せになってほしくて、生きてなきゃ幸せにはなれなくて、だから私をアーサーさんに託して、アーサーさんも同じように思ってたから俺らに託したんだぞって。

クリシュナの愛が生きてるから、それが繋がって私が生きてるんだって。

その時は悲しくて素直にその言葉を聞けなかったけど、いつまでも足踏みしてないで、お前が進めば時間もその分早く過ぎるって言ってくれて、なんか無愛想なクリシュナと話してるみたいでおかしくなっちゃいました。

それでちょっと元気が出て、頑張らなきゃって思いました。クリシュナの、今でも生きている愛を、それほどの愛を無駄にしちゃいけないなって。頑張って幸せになれる様に私も努力しなきゃって思いました。

今はまだやっぱり私の心の中は、あの日の事で、悲しみの青で染まっています。

でも、ボニーさんとクライドさんが生きてた。アーサーさんが帰

ってきてくれるってわかった。カイやシャンティ達が傍にいてくれるから、安心できる。

ちょっとずつだけど、心の中は青ばっかりじゃなくなってきました。私がもっと頑張って元気になったら、もっと青は薄くなるんじゃないかなって思えます。

私の色は、やっぱり青なんだと思います。カイは、黒かな。ガラードは白。ランスは・・・バイオレット。シャンティはオレンジっぽい。アーサーさんは、やっぱり赤でしょ。

みんなが傍にいてくれて、ゆっくり平和に過ごしていけたら、きっと私の心の中は万華鏡ですよ。

でも、アーサーさんが帰ってきたら全部真っ赤になっちゃうかも。それはそれでコワイ。

でも、帰ってこなくて今みたいにずっとカイに引っ付いてたら真っ黒になるかも。それもそれでコワイ。

赤が加わったらそれだけですごく明るく華やかになります。赤が入ったらボニーさんの黄色とクライドさんはブラウンかな。それも加わると思うと楽しみ。

早く帰ってきて、色を添えてください。

敬具

宣誓書

何がそんなに面白いのか、エルメスは食い入るように見つめている。ランスも一緒に。

「相変わらず手際良いねぇ」
「さすがに唯一の取り柄なだけあるね」
「ランス、撃ち殺されてぇのか」
「やだなー、冗談じゃん」

エルメスとランスは俺が愛用してる銃「ファントム」を整備するのをずっと眺めてる。俺的には何がそんなに面白いのかわからんけども、二人はずっと人形劇でも見る子供みてぇにガン見してる。

「私に組立させて！」
「ヤダ、お前絶対壊す」
「壊さないよ！」
「信用ならん。それに俺はコイツを他人に触られんのがヤなの」
「ちぇっ、ケチ」
「ケチじゃねぇ」

コイツに触らせて銃が暴発でもしたらコトだ。エルメスならそう言う事をやりかねない。俺はまだマシだけど、ランスは確実に死ぬ。そこまで発想のおよばねぇ残念な脳のエルメスには、とてもじゃねぇけど触らせるわけにはいかん。

エルメスの我儘を突っぱねて溜息を吐く俺に、興味津々の目を向けてランスが尋ねてきた。

「ねーねー、その銃何年くらい使ってんの？」
「確かまだ2年くらいか。コイツで7代目」
「そんなに壊れるもんなの？」
「使用頻度がハンパなかったからな」
「ふーん。それお気に入り？」
「俺には使い勝手がいいからな。名前も俺に似合ってるし」
「あぁ、確かにカイは怪人だよね」
「お前が言うな」
「言うよ」

ムカつくガキだ。いつか撃ってやる。イラつく俺の気を知ってか知らずか、俺とランスの会話を見てエルメスは異様にニコニコして

やがる。まぁ、エルメスの事だ。何考えてるか想像はつく。

「カイとランスは仲良し親子みたいだね」

ホラ来た。絶対そう来ると思った。ある程度想像のつく言葉に、盛大に溜息を吐く俺とは対照的にランスは文句を並べたてる。

「エルメス様、冗談じゃありませんよ。こんな野蛮な男と僕のどこをどう見たら仲良しに見えると言うんですか」
「丸見えだよ」
「見えませんよ！　失敬な！」
「お前の発言の方が失敬だろうが」
「ハン、カイに敬意を払う義理なんてないもんね！」
「お前ね、一応俺上司なんだけど？」
「以前はね！　今は違うじゃん！　僕はカイの部下じゃなくてエルメス様の部下だから！　勘違いすんな！」
「このクソガキが・・・喰われてぇのか」
「これだから野蛮な男は嫌いなんだよ。ねぇ？　エルメス様？」
「そうだよ。カイ、あんまりランスを怖がらせるような事言っちゃダメじゃん」
「お前な・・・」

このクソガキのどこがビビってるように見えるんだ。

「へへーんだ、喰えるもんなら喰ってみろ！　エルメス様に嫌われても知らないよ！」

って顔に書いてんぞ。ったく、どんな教育を施したらこんなクソガキに育つんだ。親の顔が見てみた・・・こいつを育てたの、俺じゃん。じゃぁ、俺のせいじゃねぇ。コイツが勝手にこうなったんだ。そうだ、そうに決まってる。

しかし、なんでエルメスはコイツの腹黒さに一切気付かねぇんだよ。どこまでバカなんだ。それとも気付いててほっといてるのか。

「私には優しいから別にいいや！」

とか思ってそうだな。あ、それだ。絶対それだ。エルメスは変なところで計算高いとこがあるから間違いねぇ。

溜息を吐きながら銃を磨く俺に、再びランスが質問してきた。

「ねーねー、何歳から銃使ったの？」
「最初は１０歳」
「え！？　そんな子供の時から？」
「まぁ、ガキの頃から仕込んで一流の兵器に育て上げるのが、ジュリオ様の目論見だったからな」
「嫌じゃなかったの？」
「銃を使うこと自体は、別に」
「人を殺すのはヤだった？」
「最初はな。もう、慣れた」
「慣れたのは、いいこと？」

「さぁな」

マセガキが。微妙に嫌な質問してきやがる。つーか、そんなこと聞かれる俺の気持ちも考えろっての。第一、んなこと聞いてどうすんだよ。

と、思ってたら一つの可能性を見出した。

「ランス、お前はダメだ」
「・・・なにがさ」
「お前には一生銃を触らせねぇし、教えねぇ」
「なんで！」
「お前は銃を使えるようになってエルメスを守りたい、とか思ってるんだろうけど、これじゃエルメスは守れねぇぞ」
「守れるよ！　僕が強くなって守るもん！」
「お前が強くなるのはいい。でも、銃はダメ」
「だからなんでだよ！」
「これは人殺しの道具だからだ。人を殺すもので、人を守ろうなんて滑稽だな」
「・・・・・・・」
「お前はいずれエルメスに吸血鬼化してもらうんだろ。実際それで十分すぎるほど強くなれるし、後はガルフやエルメスにでも格闘訓練つけてもらえ」
「・・・・・ケチ」
「ケチじゃねぇ」

ランスにまでケチ呼ばわり。なんだ、俺はそんなにケチか。いや、ケチじゃねぇ。このバカ二人が我儘なだけだ。俺とランスの会話を

聞いてエルメスはまたニコニコしてる。何考えてニコニコしてんのか今回もある程度は想像つく。

俺とエルメスの飯を取りに行くっつって部屋からランスが出て行ったあと、エルメスは嬉しそうに言った。

「カイは優しいね」

ホラ来たー。またしても的外れな感想で勝手に悦に浸りやがって。エルメスの中で俺は一体どんなキャラクターを構成してんだ。

「優しくねぇし、優しさで言ってんじゃねぇよ」
「でも、ランスに銃を使って欲しくないっていうのは、ランスに悩んだり苦しんだりしてほしくなかったからでしょ？」
「違う。銃に慣れたら、撃つことに慣れたら、その内人殺しにも慣れる。俺はそれが嫌だっただけだ」
「それはランスの為にでしょ？」
「いや、俺の為。俺の理想をランスに押し付けてるだけだ」
「でも、結果的にそれがランスの為になるなら、やっぱりそれは優しさだよ」

なんて平和な脳してやがる。コイツに掛かればある程度の奴は善人扱いだ。ある意味恐ろしい。

多分コイツは

「私って周りに恵まれてる！　私の周りっていい人ばっかり！」

とか、幸せなことを思ってるんだろうけど、実際そんな事ねぇ。そんな事じゃその内また誰かに騙されたり裏切られるぞ。エルメスのこういうところも非常に危険だ。

ジュリオ様の事も、トリンの時も、エルメスは人を信じすぎて傷ついた。それが悪い事だとは思わないけど、そのせいでエルメスを傷つけるなら、もう少し人を疑う事も知らなきゃいけない気もするんだけど。

「お前さぁ、その誰でもいい人に見えるのは何とかならねぇの」
「ならない！　だっていい人だよ、カイは」
「いい人じゃねぇし、仮にいい人だとしてもお前にだけだ」
「じゃぁいいじゃん」
「・・・・・」

ダメだ、反論すら思いつかねぇ。つーか呆れて物も言えねぇんだけど。結局エルメスは自分に優しくしてくれるなら、その本質がどうであれ全然構わねぇのか。それってどうなんだ。

エルメスは周りの人間をみんな大事にするけど、それは周りがエルメスに優しくするからだ。もし、今誰かがエルメスに優しくしなくなって、他人みたいになったらエルメスはどうするんだろう。

「なぁ、お前はさ、人殺しに慣れたか？」
「慣れたね」
「でも最初は嫌だったろ」

「最初は嫌だったよ。でも、慣れちゃった。その事はすごく残念に思うけど、仕方ないよね。だって全然知らない人の命は、重く感じないんだもん。それは誰だってそうじゃない？」

「・・・そうだな。俺も、そうだ」

変わってしまったのは、俺だけじゃなかったらしい。エルメスの性格からして、最初はすごく嫌だったはずだ。その為にアーサーとケンカしたって聞いたことがある。それなのに、今は笑って慣れたと言う。

銃が殺すのは他人だけじゃなくて、使う人の心も殺してしまうんだな。つーか、俺はそれを知ってたけど。

もしあの戦争が起きなくて、エルメスがずっと俺らの隊長として人殺しを続けてたら、いずれはエルメスも俺みたいになってたのか。

狂った化け物は、俺とアーサーで十分だ。今ならまだエルメスは引き返せる。これから戦いのない世界で生きて行けば、エルメスは昔のエルメスに戻れるんじゃないかと思う。

エルメスの博愛主義は、広く、浅い。きっと昔は今よりもっと深かった。そのせいで傷ついてきたこともあっただろう。でも、俺はそっちの方がいいと思う。もし、今後そう言うことが起きそうになったら、俺が守ればいいだけの話だ。

俺の心は化け物だ。俺には「ファントム」が似合う。でも、ランスやエルメスに「ファントム」は似合わねぇ。

アーサーに一方的に約束しよう。俺はエルメスを化け物にはしない。アイツを俺やアーサーのような化け物にはしない。アイツの博愛主義を本物にしてやる。

アイツの心は、俺が守るから。

FILE－25　Cunning　［狡猾］

報告　　シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動

連戦連敗。ただいま１０連敗中。どんだけだよ。

「チェックメイト」
「イヤー！　また負けた！」
「エルメス様、相変わらずチェス弱過ぎです」
「ランスが強いんだよ」
「確かにそうですが、僕も手加減してるんですけど」
「そんな真実聞きたくなかった・・・」

１１歳のガキにチェスで全敗と言う結果に打ちひしがれるエルメス。今まで何度も挑んで一度も勝てたことがないらしい。やっぱバカだ。

チェスは知恵を図るゲーム。正直エルメスに一番向いてないゲームと言える。エルメスにはジェンガあたりがお似合いだ。

「お前向いてねーんだよ。諦めろ」
「だって1回くらい勝ちたいじゃん」
「手加減してもらって負けてる奴がよく言うよ。お前にはムリムリ」
「じゃぁカイなら勝てるの？」

エルメスの言葉にランスはギッと俺を睨みつける。なんだそれは、やる気満々か。

「ランスごときに俺が負けるわけねぇだろ」
「じゃぁ私の代わりにやって！」
「いーけど、圧倒的に勝ったりしたらランス泣くかもしんねぇしなぁ」
「誰が！　絶対勝つ！」
「言っとくけど手加減しねぇぞ」
「望むところだ！」

というわけで、なんか俺とランスで対決することになった。

ランスは11歳にしてエルメスを全敗させるだけあって、なかなかやりこんでいるらしい。まぁ、エルメスが弱いだけだけど。で、結果。

「チェックメイト」
「うわー！　ウソだ！」

「ハハハハ、俺に勝とうなんて１００年早ぇぇ」
「カイすごーい！　強いね！」
「いや、ランスもなかなか強い。でも、俺の方がもっと強い」
「マジあり得ない・・・こんな野蛮人に・・・」
「言っとくが俺は頭脳派だ。お前はやる方だけど、狡猾さに欠けるな。まだまだガキだ」
「くっそー！」
「親子対決はやっぱりパパの勝ちだな」

「親子対決」？　親子じゃねぇ。ふざけんな。でも悔しがるランス、いいもの見れた。
俺とランスのチェス勝負を面白がっていつの間にかシュヴァリエの奴らやシャンティ達も観戦してた。

「ていうか、カイは大人げないな。ランス相手に本気出して」
「うるせぇ。俺はウサギを狩るのにも全力を尽くす獅子のような男なの」
「場合によってはそれってバカだよ」
「うるっせぇな！　バカ女に言われる筋合いねぇんだよ！」
「自分だってバカのくせに！　ミナ様の命令だってロクに聞けないバカじゃん！」
「聞いてるよ！　つーかエルメスのは命令じゃなくてただの我儘じゃねぇか！　俺は十分に聞いてますけど！」
「全然足りない。ミナ様の前に跪いて靴舐めろ」
「舐めるか！　ふざけんな！」
「俺らは靴以外ならどこでも舐めるよ」
「うわ！　やめろ、お前ら！　エルメスを変な目で見るな！」

「アンタの部下も最低だね」
「“も”じゃねぇ、“は”だろ！」
「“も”だよ」

全く、ムカつくバカ女とバカなシュヴァリエのせいで勝利の余韻はどっか行っちまったよ。エルメスは突然のセクハラ発言に困ってるし。可哀想に。
エルメスをディフェンスしながらシュヴァリエ達に向いた。とりあえず、コイツらにもう一度釘を刺しておかねば。

「テメェら、俺のエルメスに指一本でも触れたらブッ殺すぞ」
「副長のじゃねぇじゃん」
「あ、間違えた。アーサーのエルメスに・・・」
「今更言い直しても遅えぇよ」

痛恨のミス！　一番言ってはいけないことを公然と言い放ってしまった俺、残念！　一瞬激しく動揺したけど、今後の展開は予想できた。次のコイツらの言葉に期待。

「極度のシスコンだな」

ホラ来た！　よっしゃ！　神様ありがとう！　思わずガッツポーズしそうになる俺。
シュヴァリエ達は一斉にシスコンコールを送り始めるけど、今回ばかりは全許し。敢えてその言葉を飲み込もう。

「カイ、もう否定しないの？」

シスコン呼ばわりされて安心する俺に、微妙に痛いところを突いてきやがる俺のエルメス。が、そこも計算済みだ。

「いや、認めてねぇけど。いい加減反論するのに疲れたから、もう好きにさせる。勝手に言ってりゃいいんじゃね」
「あぁ、そうだね」

クリアー！　さっすが俺！　なんで俺こんなに機転がきくんだろ、本当。マジ俺の脳は完璧だな。本当神はスゲェな。俺のような完璧な存在を作り出すなんて、本当俺スゲェ。
しかし、エルメスは俺の脳を凌駕するほどの爆弾を投下する。

「ねぇ、私カイのなの？」
「え！　い、え、えー・・・いや、違えぇよ。お前はアーサーのだ」
「でもさっき俺のって言った」
「あー・・・それはお前アレだよ。俺の友達ってことだ」
「そうなの？」
「そうだ。つーかそれ以外に何があるわけ？」
「・・・まぁ、そうですね」
「そうですよ」

うっわ、微妙。エルメスは「なんっか釈然としないなぁ」みたい

な納得できないみたいな顔してやがる。
チクショー、俺はまだ修行が足りないのか。人生経験と言う名の修行が足りないのか。もう４５だというのにまだ足りてねぇのか。つーか、良く考えたら今までこんなトラブルなかったからなぁ。しょうがねぇ。俺は悪くねぇ。ジュリオ様のせいだ。
困ったことが起きたら全部ジュリオ様のせいだ。これでオッケイ。

とりあえず、場の空気を入れ替える為に以前から気になってたことをシャンティに相談してみることにした。

「つーかお前らさぁ、いつまでミナって呼ぶ気だよ。もう今はエルメスなんだからエルメスって呼べ。アーサーも」
「なんでアンタにそんな事言われなきゃいけないわけ？　ミナ様はミナ様じゃん」
「そりゃそうだけど。状況的に見てそれがマズそうだから言ってんの」
「なんでマズイの？」
「今俺らは逃亡中の身。エルメス達がインドにいた頃の事は調査でわかってる。一応死んだことにしてるし、城を焼いてきたから報告書なんかも燃えちまってると思うが、逃亡したことが発覚しないとも言い切れない。もし逃亡先としてここが怪しいってことになって、そん時調査員たちが俺達とアーサーやエルメスの名を聞いたら、お前らごと抹殺だ」
「それはいくらなんでも心配しすぎじゃないの？」
「しすぎるに越したことはねぇ。一応データも消したらしいし、その可能性は低いとは思うけど念のためだ。イスラムの奴らの事もあるし、こっちは生死がかかってんだからな」

「うーん、そっか。それもそうだな、わかった」

何とかシャンティが納得してくれた。ずっとこの事は気にかかってたけど、アイツらはミナと伯爵を崇拝してたわけだし、その気持ちを無下にするのも可哀想な気はしたからな。

でも、命には代えられねぇし、何よりシャンティ達まで死ぬようなことになったら大変どころの騒ぎじゃねぇ。

とりあえず、納得してくれてよかった、と思ってたらシャンティが何か思いついたような顔をしてもう一度俺に振り向いた。

「でもさ、いくら名前変えたって、顔変えなきゃ見つかったらアウトじゃん？」

「そう、確かにそうなんだよな。でもこん中で顔変えられんのはエルメスとリオしかいねぇからなぁ」

「え？　リオ顔変えられたの？」

「エルメス知らなかったっけ？　なんか知らんけどアイツはそれができたから、潜入とかさせてたんだけど」

「あー、そうだったんだ。知らなかった」

「それよりどうすっかなぁ。うーん、なんとか頑張って変身能力を開発するか・・・難しいな。じゃぁ整形？　いや、俺の美しい顔に傷をつけるなんざ許せん。大体手術中に元に戻りそうだな」

「何言ってんのアンタ・・・ていうか、アンタら目立つんだよ」

「だろうな。主に俺が美しいから」

「違えぇよ！　全員金髪だからだよ！」

「あぁ、そういえば。じゃぁとりあえず髪色を変えよう」

というわけで、何色がいいかそれぞれアンケートを取ることに。
エルメスとリオは除外。ランスもまだ子供だし除外。俺を含め、残りの１０人の意見を紙に書かせた。

俺　「黒が1人、ブラウン1人、ライトブラウン3人、ベージュ2人、アッシュ？　こいつは却下」
トリス「なんで！？」
俺　「俺とカブるからダメ。それともお前俺に憧れてんの？」
トリス「違えぇし！　もう、じゃぁベージュでいい！」
俺　「じゃあベージュ3人・・・オイ、ブリーチって書いた奴誰だ」
パーシー「俺俺！　プラチナブロンド目指す！」
俺　「テメェ相変わらずクリシュナさん目指してんのか。身の程を知れっつたのを忘れたか」
パーシー「えぇ！？　違うのに・・・じゃぁもう黒でいい」
俺　「えれぇ極端だな。じゃ、黒が2と。とりあえずこれで全員だな」
ペレアス「ん？　数が合わねぇぞ？　あと一人足りなくないか？」
俺　「あぁ、俺は現状維持。俺はこの髪の色気に入ってるから」
キルシュ「えぇ！？　自分ばっかりズルーイ！」
俺　「うるせぇ。俺は筆頭だからいいんだよ。さて、じゃぁ明日にでも買いに行くとするか。オイ、チャラ男3兄弟、お前ら暇だろ。明日行って来い」
キルシュ「自分だってヒマなくせに・・・」

シュヴァリエ達はなんかブーブー言ってたが知ったこっちゃねぇ。
一人くらい現状維持がいても問題ねぇ。それが俺なら尚更問題ねぇ。
でも、この3人に行かせたのは俺の大失策だった。

翌日、屋敷に立ち込める異臭から逃げるように部屋から出てエルメスと二人リビングでテレビを見ていると、急にチャラ男3兄弟が全速力で降りてきた。

キルシュ「敵を補足！　確保！」
パーシー「ヤー！」
リオ　「神妙にお縄に着きやがれ！」
俺　「は！？　うわ、離せぇぇぇぇ！」

3兄弟に強制連行されてキルシュの部屋に連れ込まれた俺は、パーシーとリオに床に組み伏せられるという無残な姿に。

「てめーら何すんだ！　離せ！」
「フハハハ、副長殿、そろそろ年貢の納め時ですよ」

そう言ったキルシュがプラスチックの容器を一生懸命シャカシャカ振っている。

「え、ちょ、マジ、マジやめろ」
「さーてコレは何色でしょう？　当てたらやめてもいいけど」
「ブラウン！」
「残念！」
「ギャァァァァ！」

答えを外した俺の頭の上にキルシュはそりゃもう嬉しそうに笑いながら、ドバドバとカラーリング剤をブッかけた。
あぁ、これがついてしまったら染めねぇわけにいかねぇじゃねぇか。チクショー、クッソー！　くせぇぇぇ！

そして放置すること３０分後。

キルシュ「さぁ、カイくんお風呂いこっかぁ」
パーシー「お兄ちゃん達がキレーキレーしてあげるからねー」
俺　「テメェらマジ覚えてろよ、マジぶっ殺す」

相変わらず捕まったまま今度は風呂場に強制連行。浴室に入ると、そのままシャワーをぶっかけられる。

リオ　「ちょっと、俺にも水が飛ぶんだけど」
俺　「つーか普通頭にだけかけるだろ！　服ビショビショじゃねぇか！　着替え持って来い！」
キルシュ「自分で取りに行けば？」
俺　「マジ殺す・・・って、あー！　服に色移ってんじゃねーか！　俺のアルマーニ・・・テメェらマジ・・・マジ殺す！」
パーシー「ハイハイ、シャンプーするからじっとして。お客様おかゆいところございませんかー？」
俺　「お前らの存在が歯がゆいわ！」

捕まったまま頭まで洗われた上にドライヤーまでご丁寧に掛けられた。ドライヤーの風になびく前髪を見て俺超ショックを受ける。

俺　「マジ・・・黒？」
リオ　「カッコいいよ」
キルシュ「似合ってる似合ってる」
パーシー「すげぇ副長っぽい。超ロック」
俺　「あり得ねぇ・・・黒とかマジあり得ねぇ。確かに俺はロックでニヒルなイケメンだけど、黒はねぇよ。黒はねぇ」
キルシュ「イヤイヤ、俺の見立てに狂いはなかったね」
俺　「主犯はお前か。覚えとけよ」

で、そのまま引きずられて再びリビングへ。未だテレビに夢中なエルメスの隣に放り投げて、３兄弟は全力でその場から逃走した。

「クソ！　アイツらブッ殺す！」

すぐに追いかけようとして起き上がると、エルメスに腕を掴まれた。

「カイも髪染めたの？」
「アイツらに染められたんだよ！」
「カッコいいよ」
「そりゃ俺は何してもカッコいいけど！　でも黒は俺の中では想定外だ！　黒はねぇ！」
「そんなことないよ。似合ってるよ、カッコいいよ」

「・・・そーか？」
「うん。こっちの方がカイっぽくて好き」

俺、撃沈。さすが媚びる女。男の喜びポイントをよくわかってる。
あ、なるほど。アーサーはこの手管にやられたな。なるほど、良くわかった。

とりあえず、エルメスに免じて３バカトリオは許してやることにした。で、服を着替えて再びリビングに降りると、他の染めた奴らもエルメスに報告していたようだ。

「みんなカッコイイ！　ガラードはブラウンの方が似合うよー」
「そう？　ありがとう」

あのアマ！　誰にでも言いやがってムカつく！　なんて打算的でズルい女だ！
瞬間的に相当キレて階段の手すりをボコボコにしてたら、後ろからランスが下りてきた。

「あれ？　カイも染めたの？」
「不本意ながらな！」
「ふーん、似合ってるよ。超ダーク」
「ダーク！？」
「うん、すごい悪者っぽい」

なんだろう、今日は本当になんなんだろう。なんで俺はこんなにイライラさせられるんだろう。
微妙に反論する気力も起きなくて、ランスに手を引かれてリビングに降りると、シュヴァリエ達からもダークだの悪人だの怖いだの言われる始末。しかも最終的にそれが

「副長似合うー！」

どういうことだよ。悪人ぽいのが似合うってどういうことだよ。
俺は天使だぞ。ふざけんな。

「もぉ、カイ、そんなに落ち込むことないじゃない」
「落ち込んでねぇよ！　怒ってんだよ！」
「ちゃんと似合ってるよ？」
「それがムカつくんだよ！」
「なんで？　ちょいワルっぽくてカッコイイよ」
「・・・ん？」
「なんか黒の方がミステリアスっぽくて、カッコイイ」
「まぁ、俺は何してもカッコいいからな」

さすがエルメス。物は言いようとはこの事か。

悪人⇒？　ちょいワル⇒〇

という図式が俺の中で確立してしまった。

キルシュ「ププ、見ろよ。あれ照れてんだぜ」

リオ　「俺らのお陰で大好きな妹チャンにカッコいいって言ってもらえたわけだし」
パーシー「むしろ俺らご褒美貰わなきゃいけないんじゃん」
俺　「そーだな。礼はキッチリ返してやる」
3兄弟　「ギャァァァァ！」

やっぱ許せなかったからとりあえず殴った。次はコイツらピンクとかにしてやる。

「これでみんな変身完了だね。でも、くさい」

顔の前でパタパタ手を振るエルメスに、リアルに落ち込んだ。

ＦＩＬＥ－２６　Ｃｈｅｒｉｓｈ　［愛玩］

シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動報告

バルコニーで煙草を吸いながら、春の夜長に花壇の手入れをするエルメスを眺める俺。

「春になったら植えてみようと思ってたの！」

そう言って、城に行った時に俺が渡したあの青い薔薇の種子を握って、外に飛び出していった。

空いたスペースを見つけてせっせと種を植えていくエルメス。種の数はそう多くはない。元々弱い品種だし芽が出るかもわからないけど、エルメスが一生懸命作業する姿を見ると、芽が出て欲しいなと思う。

煙草を消して、再び火をつけようとすると火が見当たらない。あれ？　どこやったっけ？　とポケットをパタパタ叩いていたら、ハ

イ、と目の間に火が出てきた。それに俺超ビックリ。

目の前には、蝶のような羽根を背中に生やして、指先から炎を出すエルメスがバルコニーの手すりに腰かけて微笑んでいた。

「コンの、化け物が！　ビックリすんじゃねーか！」
「ヒ、ヒドイ・・・」
「あ、でも火は貰う。お前便利だな」
「もう本当ヒドイ！」

そう言ってエルメスが手を引っ込めようとしたから引っ掴んで火をつけると、エルメスは悔しそうな顔をした。

「もう！　私は親切でやってるのに！　文句ばっかり！　便利とかヒドイ！」
「あーワリーワリー」
「・・・謝る気ないよね」
「んなことねぇよ。その羽根、綺麗だな」
「そう？　ありがとう」

一瞬でご機嫌を回復したおバカなエルメス。エルメスの体を反転させて羽根をよく見ると、黒地に青と黄色の模様。

「揚羽蝶か？」

「そうだよ。私は青が似合うって言ってもらえたし、でも北都の黄色の羽根も捨てがたいし、クリシュナの黒い羽根もカッコよかったし。どうしよっかなって思ってたら、さっき目の前を蝶々が飛んでって、これだ！　と思って」
「ふーん、でもアーサーは羽根なくても飛べたじゃねぇか。お前はソレできねぇの？」
「できるよ。斥力を発生させて後はサイコキネシス応用で。でも、羽根に慣れてるから」
「ふーん、意味わからん」
「あはは、カイのバーカ」
「お前ほどじゃねぇよ、バーカ。あ、飛んでるとこ見せろ」
「きゃぁぁ！」

ふと、飛んでる姿が見てみたいと思って、手すりに腰かけてたエルメスを突き飛ばすと、そのまま地面まで落ちていった。

えぇー、なんで落ちるんだよ。意味わかんねぇ。何のために羽根生やしたんだよ。
なかば呆れながら地面を覗くと、ムクリと起き上ったエルメスは怒った顔をしてヒラヒラと戻ってきた。

「ヒドイ！　なにすんのよ！」
「つーか何で落ちてんだよ。飛べばいいだろ」
「急に突き落すからビックリしたんじゃない！」
「その羽根いらなくね？」
「いるよ！　もう、バカ！」
「お前がな」

エルメスはパタパタと滞空しながらキャンキャン吠えている。とりあえず、飛んでる姿を見れたからそれで満足。でもそんなエルメスを見て、飛びながら怒ってるエルメスがなんか面白くて、思わず笑ってしまった。

「何笑ってんのよ」
「いや、綺麗だなと思って」
「ウソばっかり！　明らかにそう言う笑い方じゃなかったよ！」
「イヤイヤ、ホント」
「もう、絶対ウソ！」

怒ったエルメスはそのまま再び花壇にヒラヒラと戻って行った。
春の月の下、ひらりと舞うように飛んでいるエルメスを見て、思わず口にした。

「綺麗だな」
「そうだね」
「うぉ！？」

まさか返事が返ってくると思わずに、超ビックリして横を見ると、いつの間にかシャンティが隣にいて、ニヤニヤ笑ってた。

「おま・・・心臓から口が飛び出るかと思ったじゃねーか」
「ソレ逆ね」

「そんぐれぇビックリしたんだよ」
「ははは、だろうね。綺麗なエルメス様に釘づけだったもんね」
「うるせぇ。つーかなんか用か。エルメスならまだ作業中だ」
「いや、さっきエルメス様が落ちてきたから何事かと思って」
「あぁ・・・なんか落ちてたな」
「カイがなんかしたんだろ」
「俺が？　まさか。何か知らねぇけど勝手に落ちてた」
「いくらエルメス様でも勝手には落ちねぇだろ」

全く猜疑心の強い女だ。俺がこれほど知らねぇっつってんのに。
まぁ、俺が突き落としたんだけど。
疑惑のまなざしを向けていたシャンティは少しすると諦めたのか、エルメスに視線を向けた。

「エルメス様、よく笑うようになったな」
「そうだな」
「よく怒るようにもなったし」
「そうだな」
「今は泣いてる？」
「たまにな」
「そう。アンタの前では泣くんだな」
「お前の前でも泣くだろ」
「最近は泣かない」
「ふーん」
「だからアタシ、アンタがムカつく」
「はぁ？」
「お休み」
「は？」

よし、シャンティの二つ名は「インドの嵐」だ。全然意味わからん。突然話を振ってきて俺を混乱に陥れてさっさと消えやがった。

なんなんだあの女は。一方的にムカつくって言い捨てて、理由も言わずさっさといなくなりやがって。

でも、シャンティと話してて俺はスゲェ嬉しかった。エルメスが俺の前でしか泣かないことが。確実に本当のエルメスを独占しているという事が。

こういう事で喜ぶべきじゃないっていう自制心ブレーキが機能しない。エルメスにとって俺が特別であるという事が、俺にとってはそれほど重要なことなんだろう。

さっきのシャンティとの話を思い起こして、突然安堵した。

あぁ、良かった。俺は異常者じゃなかったんだ。

シャンティはエルメスが俺の前でしか泣かないから、俺にムカついたって言った。それは、俺と同じなんじゃないか。自分がしたい事を自分にできなくて、他人に先を越された。シャンティのは俺に対する嫉妬だ。

そう思い至って安堵する。良かった、俺だけじゃなくて。シャンティもそうだって事は世の中の他人にもそういう奴らがいるに違いない。良かった、俺は異常者じゃないんだ。

つーことはシャンティはナカーマ！　でも、俺の方がランキングは上！　ィヤッホウ！

風呂から上がって血を飲み終わって、くわえ煙草しながら廊下を歩いてたら、同じく風呂上りのエルメスに遭遇。

「なんかちょっとカラーリング剤落ちっちゃった？」
「あぁ、頭洗うたびに黒い汁が出るな」
「真っ黒の方がいいのにー」
「鴉の濡れ羽色と言え」
「なんか気持ち悪い」
「うるせぇ」

エルメスのせいでさっきまでのウキウキ気分はちょっと消沈。まぁ、いつものことだけど。
寝室に入る前にもっかいバルコニーで寝る前ラスト煙草を吸いに出た。一応これはエルメスとランスとアーサーへの配慮だ。アーサーが帰ってきて煙草くせぇって殺されないように、というのが一番の理由だが。
火をつけて微妙に紺色になった空を見つめてたら、エルメスも外に出てきた。

「さっきシャンティと何話してたの？」
「あぁ、お前が落ちてきたのにビックリしたとか何とか」
「それでなんて言ったの？」
「俺は知らねぇっつった」
「よくそんな平然とウソを・・・」

「エルメスが勝手に落ちたとも言った」
「・・・ヒドイ」

俺に蔑みの視線をぶつけてくれるこのお嬢ちゃんを虐めるのはマジ楽しい。俺の日課の一つでもある。エルメス虐めに始まり、エルメス虐めに終わる日常、素晴らしい。
そして素敵な俺は最後にこう来る。

「それと、ひらひら飛んでるエルメスが綺麗だとも言った」

そう言ってにっこり。するとさっきまで俺を侮蔑の眼差しで見ていたエルメスは、嬉しそうに笑った。マジバカ！　単純！　コイツ面白っ！
心の中で大爆笑する俺の顔を覗き込んできて、ホントに？　ホントに？　と、エルメスはウザい。

「本当だって。シャンティに聞いてみろよ」
「じゃぁ聞いてくる！」
「バカ、今頃寝てんだから邪魔すんな」
「あ、そっか」

走り出そうとするエルメスの首根っこを？まえて諭すと、すぐに引き下がった。そのままエルメスを寝室まで引きずって行こうとすると、エルメス大暴れ。

「もー！　私猫じゃないよ！」
「あぁ、犬だっけ」
「もう！　違うよ！　私が主人でしょ！　ご主人様に無礼は許さないわよ！　・・・わっ！」

カッコつけて俺に背を向けた瞬間に、半開きになっていた寝室のドアに激しく頭をぶつけるエルメス。マジ最高、何なのコイツ。さすがはバカの象徴、やることが違う。

「あぁ、お前はなんて可愛い奴なんだ」
「それって、褒めてんの？」
「当たり前だろ。エルメス、なんでお前はいつも俺のハートを鷲掴みにするんだ」
「くっ・・・ムカつく」
「エルメス、俺はもうお前の虜だよ。お前は最高だ。最高にラブリーなバカだ」
「むきー！　ムカつく！」

悔しそうに顔を真っ赤にするエルメスと対照的に俺メチャクチャ上機嫌。あぁ、楽しい、楽しすぎる。今日の俺最高にハッピー。

「お静かに。ランスが起きてしまいます」
「むぅ・・・ていうか、何そのキャラ」
「ご主人様に忠誠を尽くすのがシュヴァリエの役目ですから」
「ムカつく・・・」
「あまり興奮なさると寝つきが悪くなりますよ。さぁ、今日は私と

一緒に寝ましょうか」
「え？　いいの？」
「勿論です。今日はご主人様のお陰ですこぶる機嫌がいいので、私の機嫌を損ねないうちに言う事を聞いた方がよろしいかと思いますが」
「え？　う、うん。ありがとう」
「結構です。本当に今日は最高に上機嫌ですので、一晩中可愛がって差し上げますよ」
「なんかヤダ！」
「冗談に決まってんだろ。うるせぇな。棺で寝ろ」
「あ、ウソウソ！　ゴメン！」
「ハハハ。はー、やっぱお前面白れぇ、最高」
「やっぱムカつく・・・」
「お休み」
「・・・お休み」

ここまで大満足して寝たのはインド来て初だ。いや、人生初と言っても過言じゃない。素晴らしい。さすがは俺のエルメスだ。

ＦＩＬＥ－２７　Ｃｈｅｃｋ　［王手］

シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動報告

昨夜は大変ご機嫌麗しく速攻就寝した俺だったが、目覚めた瞬間から意気消沈。

「なにその手。どけろよ」

寝てる間にいつの間にか腕枕してエルメスを抱っこしてたらしい。ランスは俺のベッドの脇に仁王立ちして、その手をグイッと払いのける。

「何って言われても、寝てる間の事まで責任持てるかよ」

「折角、最近時々だけどエルメス様が棺でお休みになれるようになったのに、カイが過保護にするとまた逆戻りじゃんか」

「お前嫉妬だけのくせにそんだけ正論吐けるなんて大したガキだな」

エルメスを起こさないようにそうっと腕を抜く俺を見て、ランスは怒ったように顔を歪めた。

「前から思ってたけどさ、カイってなんなの？」
「は？　なにが？」
「友達にしては度が過ぎると思うけど」
「んなこと言われてもなぁ。友達なのは事実だし」
「じゃぁ、この前の“俺のエルメス”ってなんだよ」
「うーん、微妙だけどシスコンのようなもんだ」
「そう言われて、その時安心してたよね」
「あ？」
「その言葉を隠れ蓑にしてるだけじゃないの？」
「何が言いてぇんだよ」

内心、ランスの観察力と鋭さに冷や汗の俺。本当にコイツ１１歳？　まさか見抜かれてんのか！？
ランスの返事を戦々恐々として待つ俺に、ランスは俺を睨みつけた。

「本当は、エルメス様が好きなんじゃないの？」
「・・・・・・は？」
「でも、筆頭だから、立場上隠してるだけじゃないの？」
「違うけど」
「隠さなくたってみんなもそう思ってるよ」
「それはない」
「じゃぁなんでエルメス様を自分の物にしたいの？」

「え、いや、それはそういうアレじゃなくて・・・」

俺が素直にウンと言う筈がない。だって好きじゃねぇし。でも否定する割には言葉に詰まる俺にランスは更にキレた。

「カイは裏切り者だ」
「裏切ってねぇよ」
「アーサー様への忠誠を裏切ってる！」
「裏切ってねぇって」
「なんでカイが裏切るんだよ！」
「いや、だから・・・」
「カイなんて嫌いだ！　死ね！　バカ！」
「あっ、オイ！」

全く人の話を聞かないランスはこの俺に向かって罵声を浴びせて、勢いよく部屋から出て行った。激しくドアの閉まる音に、エルメスも目を覚ましてしまった。

「おはよー。なんかうるさいよ」
「あぁ、おはよう。なんだろうな、知らん」

ランスの言葉に自分でも疑問を感じた。確かに俺は友達としては度が過ぎると思う。もしかして、俺がエルメスを独占したいと思ってるのは、本当に恋愛感情から来てるのか？
そう思って寝起きエルメスをガン見してみる。象牙色の肌、黒く

大きな瞳、紅く小さな唇、サラサラの長い茶髪、細く小さい躰、それと巨乳。

まぁ見た目は悪くねぇ。コイツは面白いし、一緒にいるのは楽しい。なんたって俺の神と信仰するほどだ。一般的に考えてこれほど一緒にいて惚れる要素がないわけではない。

でも、どう考えても、どれほど冷静に分析しても、それはない。検索してもそんなファイルは見つかりません。微塵もそう言う感情が湧き上がってこない。やっぱり違うな。やっぱり俺はそう言うのが分からない奴らしい。

ランスはまだ子供だから、人の中に自分が思ってる以上にいろんな感情があることを知らないんだな。自分がそうだから、俺もそうだと思っただけか。でも、直接俺に言ってくるくらいだ。その内大騒ぎしかねねぇな。一回ちゃんと話すか。

そう決めて、着替えた俺は早速シュヴァリエ幹部会と、シャンティ・スニル・レヴィも招集した。

「今日集まってもらったのは、俺にかけられる不当な嫌疑を晴らすためだ」

そう言ってランスを見ると、ランスは俺を睨み返す。

「不当？　正当だろ」
「残念ながら不当だ。それはあり得ん」
「じゃぁ証明しろよ」
「あぁ、いいぜ。ガルフ、俺の女性遍歴を覚えてるだけ述べろ」
「は？　自分で言えよ」
「いや、俺覚えてねぇから」
「相変わらず最低だな」
「まーな。よろしく」

ハァ、全く、と溜息を吐いたガルフは俺の昔を知らない奴らに視線を向けた。

ガルフ　「えーと、カイが女を作ったのはラルフが死んでからガラードが3歳になるまでの約4年間の間だけ」
レヴィ　「え？　その期間だけ？　ていうか聖職者じゃなかったの？」
ガルフ　「吸血鬼になってはっちゃけたっつーのもあるし、その頃は色々あって荒れてたんだよ。それは俺らもだったけど。4年で辞めたのは、まぁ、飽きたらしい」
ガラード「飽きたのか・・・」
ガルフ　「で、最初の2年でカイの毒牙にかかった女は約５００人」
シャンティ「はぁ！？　ご、５００人！？」
ガルフ　「俺の知ってる限りはな。毎晩のようにとっかえひっかえ。一晩に2，3人なんてザラ。勿論水商売とかのプロじゃなくその辺の女。すさまじくコイツはモテてた」
スニル　「あぁ、なんか口が上手そう」

キルシュ「副長が一緒にいる時のナンパ成功率１００％だったもんな」
ガラード「副長、スゲェ。最低じゃん」
俺　「若ェ頃の女なんか大概が性欲処理の道具だろうが」
シャンティ「本当に最低なんだけど」
スニル「微妙に否定は出来んけど、そんなストレートかつ偉そうに言う事でもねぇよ」
ガルフ「で、残り2年で思い直したのか、ちゃんと付き合うようにした。それが更に最低だった」
ランス「なんで？」
ガルフ「その2年で付き合った女は約５０人、それでも異常な数だ。それもそのはず。彼女なのに一切興味もたねぇのコイツ。連絡はいつも相手から、相手から誘いがなきゃ会いにもいかない上に大概断る。会っててもヤることヤったら彼女シカト。５股６股は当たり前。そんなんで毎回ついていけないってフラれる。それの繰り返し」
スニル「ひ、ひでぇ・・・」
レヴィ「そりゃ、そうなるだろうな」
ガルフ「女たちがどれほど尽しても泣いても縋っても、来るもの拒まず去る者追わず。屋敷にまで女が押しかけてきて大騒ぎになったこともある」
ペレアス「あ、懐かしいな、それ。副長その女うぜぇつってビンタしてたよな」
シャンティ「最低・・・」
ガルフ「で、とうとうコイツは悟った。飽きたんじゃないな、あれは間違いだ」
ランス「悟ったって？」
ガルフ「自分は人を愛せないってことを。最初からその感情が欠如してるってことに気付いて、女遊びをやめた」
ガラード「え？　じゃぁ今まで一度も人を好きになったことないの

？」

俺　「いや、そんなことはねぇけど、愛だの恋だの言うレベルまでは到達しなかったな。興味とか好意どまり」

ガルフ「そう。カイはこういう奴だから、心配しなくてもエルメスを好きになるなんてことは、あり得ない」

俺　「そう言う事だ。ガルフご苦労。お前スゲェな。よく覚えてんな」

ガルフ「普通こんな強烈な女性遍歴忘れねぇよ。完全に忘れてるお前もスゲェよ」

俺　「そりゃ忘れんだろ。どうでもいいからな」

ガルフの話を聞いた俺の昔を知らない奴らは唖然。あ、違うな。この視線は軽蔑だ。こういうつまらん話を他人に聞かせるのは気分が悪いが、この話を持ち出さなきゃ俺がなんて言っても納得しないだろう。

事の発端、問題児ランスも例にもれず引いてるが、多分納得してくれただろうと思ったら。

「人を愛する感情がないなんてあり得ないだろ」

「あり得るだろ。そんな奴世の中にいっぱいいるじゃねぇか」

「でも、人としての根源だろ」

「一応俺には家族愛とか兄弟愛はある。所謂友愛は存在する。ただ、女に対する恋愛だけがない。理解ができない」

「そんなわけ・・・」

「ある。世の中には自分の子供を虐待する親もいるだろう。それは俺にしてみればあり得ねぇ。でも、実際にあることだ。お前が知ら

ないだけで、知らないことを存在しないと決めつけるのはよくねぇな」
「・・・カイは、異常だよ」
「あぁ、そうだな。知ってる」
「カイはそれでいいの？」
「少なくとも今この状況では、かえって好都合としか思えねぇけど？」
「それはそうかもしんないけど・・・」
「俺にとっては、邪魔だ。無駄、無意味、余計なものだ。必要ない」

なんか知らんが、ランスの目は悲しみを帯びてくる。もしかして同情してんのか、俺が可哀想な奴だとでも思ってんのか。余計なお世話だコノヤロー。
俺を見つめていたランスは俯くと、少ししたら再び顔を上げた。

「じゃぁ、今はなんなの？　なんでエルメス様にあそこまで尽くすの？」
「アイツが俺の親友で、家族で、大事な人で、俺の生きる理由だからだ」
「それは、愛じゃないの？」
「違うな。似て非なる物、依存と信仰だ」
「依存と、信仰？」
「そ。アイツは俺を何度も助けてくれて、俺の願いを叶えてくれた。その事にスゲェ感謝してるし恩を感じてる。それは信仰だ。今まで色々あって、ありすぎて、俺の心はとっくにブッ壊れてる。それはアイツも同じ。俺とエルメスは相互に依存し合って、お互いの傷をなめ合ってるだけの間柄だ。それでもお互いがいなきゃ生きていけないから、依存する。エルメスは強烈に他人を求めるし、俺もアイ

ツがいなきゃマトモじゃいられねぇから、傍にいて信仰の為に尽くす。それだけ」
「じゃぁ、俺のって言ったのは・・・」
「俺以外の奴に頼る様になって、俺がお払い箱になったら困るだろ」
「じゃぁ、恋愛でもシスコンでもないんだ」
「そうだな。恋人でも兄妹でも、下手したら友達とすら呼べねぇかもな。俺とエルメスは、そういう可哀想な関係だ」

半ば嘲笑的にそう言ってはみたものの、内心イライラがバースト寸前だ。
チクショー、クソガキが、ここまで言わせやがって。あークソ、ここまで俺の本心を白日の下に晒すのは屈辱だ。ここまで言ったんだから納得しねぇとブチ殺すぞ。
イライラかつハラハラしながらランスを見下ろしていると、ランスは驚くべき行動に出た。

「ごめんなさい」
「・・・あ？」
「エルメス様がカイは特別だって言ってた意味が今ようやくわかった。カイにとってエルメス様が崇める人であるように、エルメス様にはカイは導く人なんだ。自分を引っ張って違う世界に連れて行ってくれる人、アリスの白兎」
「アリスの白兎ねぇ・・・それはどっちかっつーとアーサーだろ」
「今はカイだよ。カイがエルメス様を導いてる」
「そうかもな。アーサーが不思議の国に連れてきて、俺が鏡の国から連れ出そうとしてんのかもな。白兎が導いて、白のナイトがアリスを守って、アリスが赤の王様にチェックメイトしたら、こんな悪

夢からも目覚めるんじゃねぇの」
「うん・・・ジャバウォックも、バンダースナッチも、僕たちがやっつける」

アリスの白兎とは上手い事言うじゃねぇか。ウサギなんて可愛い代物じゃねぇけど。つーか内心俺は自分がジャバウォックなんじゃねぇかとすら思うんだけど。まぁ、ランスが納得したならいいや。

つーかここまで話したら全員納得すんだろ。上手くすればシスコン疑惑すら払拭。さすがは俺だ。

今のこの状況は、誰の見てる悪夢なんだろう。アリスか、白兎か、赤の王様か、白のナイトたちか。いや、誰の夢でもいい。チェスの間中爆睡してる赤の王様に、チェックしかけて起こしてやんねぇと。それまで、俺はアリスを導かなきゃな。

いつか必ず、アーサーにチェックメイトを言い渡してやるから、その時はこの夢を、終わらせてくれ。

FILE－28　Consent　［許諾］

報告　　シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動

この前話し合いをしたおかげか、不当な言いようと不快な視線を浴びることはなくなった。マジ良かった。懸念すべきことが一つ減っただけでも、だいぶストレス解消。

ていうか、ランスに至ってはなんかちょっと優しくされてるような・・・気持ち悪りぃ。

それとは対照的に、どういうわけかエルメスは俺によそよそしい。超ショック。もしや話したのか。シャンティの奴、あの昔話をエルメスに話して引かれたのか。

最初はそのことがショックで気づかなかったけど、どうやら避けられているのは俺だけじゃない。シュヴァリエが避けられてる。

それに、エルメスが微妙な態度をとることに気付いてから、シャンティ達も微妙に俺らと距離を置いているような気がしてきた。正確には避けられてると言うか、なんかよそよししいと言うか、何かを取り繕ってるような・・・

初めは大して気にもしなかったけど、もし集団で俺らに隠し事をしているとしたら、俺らに関わる重大なことに違いない。そう思って再び幹部会を招集。

俺　「オイ、お前らもおかしいと思わねぇか？」
ガルフ　「やっぱカイも思った？」
ランス　「僕もそう思った。エルメス様ウソつけないし」
キルシュ「そうそう、シャンティ達はともかくエルメスがね・・・」
ペレアス「そう言われてみれば・・・なんで？」
ガラード「副長、なんで？」
俺　「それがわかんねぇから招集してんだよ、バカ」

6人でうーんと頭を悩ませて、とりあえず思いついたことをそれぞれ言ってみることにした。

ガラード「副長の束縛に耐えられないとか」
ランス　「カイが怖いとか」
ペレアス「副長が嫌いとか」
ガルフ　「カイが虐めるからじゃね？」
キルシュ「わかった！　実はシャンティがカイに惚れてんだ！」
俺　「テメェら、本気で言ってんのか？　だとしたら拷問の末に火炙りにして殺すぞ」
ランス　「冗談じゃーん」
ガルフ　「悪かったって！　心配すんな、エルメスはちゃんとお前が大好きだって！」

俺　「うるせぇよ！　そう言う事言ってんじゃねぇよ！　もっと真面目にやれ！」

ったく、マジ使えねぇバカどもだ。なんで俺の部下はこんなバカの集合体なんだよ。コイツらはバカ組合の団体職員か。腹立つ。

俺　「とりあえずエルメスとシャンティファミリー総出で俺らによそよそしくしてる位だ。隠し事してんのは明らかだと思う。これほど徹底的に集団で俺らに隠蔽しようとするって事は、俺らにとって重大だって事だ」

キルシュ「そうだなぁ。なんだろう、シャンティ達にとっての禁忌を、俺らがそうと知らずに冒した、とか？」

ペレアス「それなら、シャンティの性格からして文句言ってきそうじゃね？」

ガラード「確かに。じゃぁ、払ってる迷惑料だけじゃ本当は足りてなくて、でも泥棒するのは副長が許さないから困ってるとか？」

ガルフ　「それはどうだろう。それをエルメスに話すと思うか？」

俺　「少なくともシャンティはそう言う話をエルメスにするくらいなら、直接俺に言うだろうな」

ガラード「だよねぇ。あーもう、全然わかんない！」

ランス　「折角同居してるのに、仲良く過ごせないのは辛いなぁ」

キルシュ「そーだよなー。折角インドまで来たのにー」

とうとう幹部たちは仲間外れにされてることにスネ出した。確かにコイツらの言う通り、今のままじゃ居心地が悪くて仕方がない。俺達がインドに来たのもある意味運命だと思ってたんだけど――――

心の中で呟いた言葉に、真相が見えた。

俺　「そうか、なるほどな」
ガラード「副長？　どした？」
俺　「あいつらが俺らに隠すほどの事、そして俺らとエルメス、シャンティ達との共通点と言えば一つしかない」
ガルフ「え？　――――――――まさか！」
俺　「おそらくビンゴだぜ。さて、真相を暴きに行くとするか」
キルシュ「俺わかんないんだけど」
ペレアス「俺も分かんないんだけど」
ランス「わからなくていいから、行こう」
俺　「テメェ何仕切ってんだコノヤロー」
ランス「たまにはいいじゃん」

舌打ちしながら幹部どもを引き連れて1階に降りると、エルメスとファミリーの奴らはテレビを見ている。シャンティの姿はない。と、思っていたらシャンティが厨房の方から出てきた。時計の針は既に午前0時を回っている。手を拭きながら出てきたシャンティからは洗剤の匂いがした。

「珍しいな、お前が家事なんて。普段社長業で忙しいお前の代わりに他の奴がやってんだろ」
「あ、うん。たまにはな」
「もう12時まわってるぜ。今まで飯食ってたのか」

「今日は忙しかったからな」
「ふーん・・・お前ら確かヒンドゥー教徒だったよな。でも、洗剤の匂いに混ざって、僅かに牛の匂いがする。ヒンドゥーでは牛肉は禁忌じゃなかったっけ？」

そう言ってシャンティを見据えると激しく動揺して、一瞬だけ俺の背後に視線を向けた。シャンティが目を向けた方向にあるのは地下室への階段。

顔色を蒼くしたシャンティに確信を得て地下室に足を向けると、後ろでシャンティが制止する声が聞こえた。

それを気に留めることなく階段を下りていくと、後ろから必死にシャンティとエルメスが俺達を呼び止める。それでも無視して、地下室の前に降りた。

密閉された地下からは微かに食事の匂いがする。予想は、確実に確信へと変わった。

「・・・やっぱりな。初めまして。いや、ひょっとしたら二度目か？」
「？　君たちは？」

地下室の扉をこじ開けて入ると、中にはひげを生やした老人。その男は俺達を不思議そうに見上げてベッドに座っていた。

「４０年も前だもんなぁ。忘れて当然だ。俺は忘れた事ねぇけど」

「・・・ま、まさか」
「カイ！　待って！　やめて！」
「会いたかったぜェ、イルファーン・スレシュ。会って早々悪いが、死ね」

エルメスの声を無視する以外の選択肢は、俺にはない。目の前の男は、俺の目の前で俺の両親を殺して、俺を攫ってジュリオ様に売った。死んで当然。

素早く取り出した銃のセーフティを外し、スレシュのアタマ狙って引き金を引いた。その瞬間、スレシュの前にエルメスが姿を現して、弾はエルメスの左胸を直撃した。胸を抑える指の隙間からボタボタと血を流し、エルメスはゆっくりと膝をつき、その場に倒れた。

その光景と４０年前の惨劇が、リンクした。
俺は、俺はなんてことを！　エルメスを撃ってしまった、殺してしまった！
途端に恐怖と絶望に支配されて、すぐにエルメスに駆け寄った。

「エルメス！　エルメス！　オイ！　誰か血を持って来い！」
「わかった！」

すぐに倒れたエルメスを抱き起すと、エルメスは苦しそうに顔を歪める。クリシュナさんが居なくなって力を失ったエルメスの、大口径の「ファントム」に撃たれた胸には穴が開き、そこからじわじ

わと血が広がって水色のワンピースを朱く染めていく。

それを見て猛烈な恐怖に襲われた。エルメスを撃ってしまった。もしこのままエルメスが死んでしまったら――――――――――――――！

恐怖と焦燥に駆られてエルメスの名を呼び続ける俺に、苦しそうにしながらエルメスは口を開く。

「うっ・・・大丈夫、ごめんね。大丈夫、心臓には当たってないよ」
「本当か！？　あぁ、エルメス、良かった・・・良かった！」
「カイ、ごめんね。ごめんね。お願い、この人を殺さないで。ごめんね。今まで隠してて、ごめんなさい」

最早スレシュの事なんかどうでもよかった。エルメスが死なずに済むとわかって、心底安堵してエルメスを抱きしめた。

「エルメス・・・良かった。エルメス、なんで俺の前に出てきたりしたんだ。頼むからこういうことはもうやめてくれ」
「それはこっちのセリフだよ。銀弾なんて、もう必要ないでしょ？」
「そうだな、ごめん。もう、捨てる」
「ありがとう、ごめんなさい」

そうしているうちにガラードが大量に血を抱えてきてそれをエルメスに飲ませると、エルメスはムクリと起き上がって、痛みに顔を

歪めながら胸から銀弾を抉り出した。
赤く染まった銀の銃弾はコロンと床に転がる。その銀弾を見て、俺は久しく忘れていた、人を殺すことの恐怖を思い出した。

あと1，2センチずれていたら、エルメスは死んでいたかもしれない。俺がこの手で殺してしまっていたかもしれない。その事を、とても恐ろしく思った。

ひとまずエルメスを休ませるために、エルメスを抱えてリビングに戻った。スレシュも連行して。騒ぎを聞きつけた残りのシュヴァリエ達もリビングに集まってきた。
しばらくして、傷が塞がって落ち着いたエルメスが着替えを済ませて戻ってくると、エルメスは床に手をついて、俺たちに深く頭を下げた。

「みんな、今まで隠してごめんなさい。本当にごめんなさい。スレシュは、生きてたの。スレシュと、私が取引したの。私たちの言うことを聞いて大人しくしている内は、命の保証をすると約束したの。みんなが今までどれほど辛い思いをして来たかわかってるつもり。みんなが何を失ったのかわかってるつもり。でも、約束したの。私と、アーサーさんがスレシュに約束したの。だから、殺さないでください、お願いします」

エルメスにも、きっと俺たちの気持ちはわかってるんだろう。他

人に勝手に家族を奪われたのは、エルメスも同じだ。
床に着いてぎゅっと握られた手の甲に、涙をポタリとこぼしたエルメスは、顔を上げてスレシュに向いた。

「スレシュさん、お久し振りです」
「やぁ、ミナ、久しぶり。大丈夫か？」
「えぇ、平気です。スレシュさん、彼らはかつてあなたがジュリオさんに依頼を受けて攫った子供たちです。彼らはジュリオさんとあなたに、人生を奪われました。家族を奪われました。どうか彼らに、謝罪してください」
「そうか・・・やはり、これも報いか。まさかあの子供達が復讐しに来るとはな」

エルメスの話を聞いて俯いたスレシュは顔を上げると、俺に目を向けた。

「君がカイ・・・カルロか？」
「・・・よくわかったな」
「あぁ、君はおれが頭目になって最初の依頼だったからな。それに、ついさっきシャンティと君たちの話をしていたばかりだ」
「ふーん、なるほどね。覚えてたんなら気分的にはちったぁマシだ」
「・・・君は覚えていないようだが・・・君の両親を殺したのは、おれだ」

その言葉を聞いた瞬間、憎悪の炎が燃え上がった。再び銃を向ける俺と、再びスレシュを庇うエルメス。慌てて俺を止めようとした

レヴィを、ガラードが引き留めた。
「副長を止める権利があるのは、俺達とエルメスだけだよ」
ガラードの言葉にレヴィもシャンティ達も黙り込んで、シュヴァリエ達も俺とエルメスとスレシュの様子を静観している。銃を向けられたエルメスはビクッと体を震わせながらも、その場から動こうとはしない。
「エルメス、そこをどけ」
「カイ、ごめんなさい、ごめんなさい。カイの気持ちはわかるけど、スレシュさんを殺さないで」
「黙れ！　そいつは殺す！　どけ！」
「違うの！　カイのご両親を殺したのは、スレシュさんじゃない！」
「コイツが殺したって自分で言っただろうが！」
「違う！　ボスが自ら現場に赴くはずがない！　スレシュさん、どういうつもりなんですか！　なんでそんなウソつくんですか！」
「・・・ミナ、どくんだ。約束はもういい。彼の言うとおりにするんだ」
「何を・・・!?」
スレシュの言葉に、エルメスも俺も動揺した。スレシュは驚いて掴み掛るエルメスに悲しげに微笑んでみせる。
「おれはもう７０歳だ。どの道もうすぐ死ぬ。今死んでも大差はない」
「そんな！」

「それに、ミナと彼らがここにいるという事は、ジュリオは死んだんだろう？」
「・・・はい」
「君たちが殺したのか？」
「そうです」
「じゃぁ、おれも殺されなければ。少なくとも彼らには、その権利がある」
「さすが長生きしてるだけあるな。よくわかってんじゃねぇか。お前が直接手を下してようがそうでなかろうが、関係ねぇんだよ。エルメス、どけ」
「ダメ！　お願い、これが理不尽だとわかってる！　カイの気持ちもわかってる！　でも、この人を殺さないで。許さなくてもいい、殺さないで。お願い・・・」
「黙れ！　どけっつってんだろ！　俺にはコイツを殺す権利があるんだよ！」
「ダメだよ！　それじゃ、ジュリオさんと同じになっちゃう！」

泣きながらそう叫んだエルメスの言葉にハッとして、その瞬間から憎悪の炎は沈静化していった。

エルメスの言う通りだ。憎悪と復讐心に憑りつかれてスレシュを殺してしまったら、俺はジュリオ様となんら変わらない。
でも、俺のこの苦悩と憎悪を一体どうしたらいいんだ。許してやることなんか出来ない。あの日の惨劇を、４０年経っても、今でも鮮明に脳裏に浮かぶ母さんの血の色を、どうしたら忘れられるって言うんだ。

「カイ、お願い。許せないってわかってる。許さなくたっていい。

でも、どうしてもスレシュさんを殺すなら、その前にスレシュさんに私を殺して貰わなきゃ」

「・・・何、言ってんだ」

「私達は、この屋敷を奪うために、スレシュさんの部下を大勢殺した。ベトナムの時は、トリンのお父さん以外は全員皆殺しにした。だから、スレシュさんには私を殺す権利がある」

エルメスは再びスレシュに向くと、スレシュの目を真っ直ぐ見て尋ねた。

「スレシュさん、私が憎いですか？　殺したいですか？」

「スレシュがエルメスを殺すなら、俺は容赦なくスレシュを殺す」

「カイ、それは・・・」

「ミナ、おれは君を憎んではいない。君は取引の時に言ったね。私は殺したくありません、だから、どうか取引に応じてください、と。おれはあの時の決断は間違っていないと思ってる。部下の大半は生き延びることが出来た。失われた部下は、おれの家族も同然だった。でも、それでわかった。自分のしてきたことが、どれほど非道だったか。家族を奪われることが、どれほど苦痛なのか。ミナのお陰でその事を知った。これほどの苦痛を小さな子供に背負わせたおれには、当然の報いだ」

スレシュの言葉を聞いて、エルメスはポロポロと涙を零して、スレシュの膝に額を付けた。

「スレシュさん、ごめんなさい、ごめんなさい。謝って済むような

事じゃないってわかってます。許されることじゃないってわかってます。ごめんなさい、本当にごめんなさい」

「ミナが謝ることじゃないさ。ミナはおれと取引をしただけ。ミナは何もしていないだろう」

「でも・・・でも・・・ごめんなさい、ごめんなさい・・・」

膝に泣き縋るエルメスの頭を、スレシュは優しく撫でて困ったように微笑んだ。

話から察するに、実際にスレシュの部下を殺したのはアーサー達で、エルメスは取引を持ちかけて皆殺しを防いだだけなんだろう。それでもエルメスは懺悔する。

今は自分の家族が奪われて、俺も、俺達も、スレシュも、エルメスも、同じだから。家族を奪われる者の気持ちを、知ったから。

俺も、エルメスも、スレシュも同じ――――――――――

気が付くと、スレシュに向けていたはずの銃口は床に向いていて、俺の腕は下がっていた。

これは、エルメスに免じて今日の所は見逃してやっていいんじゃねぇのってことか。そう結論付けて、銃をしまった。

「エルメス、悪かった。スレシュは殺さねぇから」

未だ膝にすがって泣いているエルメスの肩を撫でてそう言うと、エルメスは驚いたように顔を上げて余計に泣き出すと、すぐに今度は俺に飛びついてきた。

「カイ、ゴメンね、ゴメンね、ありがとう」
「お前に泣かれちゃしょうがねぇからな」
「ごめんなさい、ごめんなさい」
「もう謝るな。別にお前のせいじゃねぇだろ」
「うん・・・カイ、ありがとう」
「ゴメンな、エルメス。ありがとう」

エルメスが止めなければ、俺は憎悪に支配されて、ただ復讐心のみでスレシュを殺そうとした。ジュリオ様と同じように。
あの惨劇を二度と繰り返しちゃいけないと思ってたのに、エルメスが止めなければ繰り返すところだった。

俺と同じように家族を奪われたエルメスは、ジュリオ様を許そうと決めた。今でも悩みながら努力してる。苦しみながらもそこから這い上がろうとしてる。
俺と同じように家族を奪われたスレシュは、その罪を受け入れて懺悔し、反省した。スレシュまで改心したってのに、俺がそうしないわけにいかねぇ。

４０年前から止まってしまった時計の針を、いい加減動かしてやらねぇと。
泣きつくエルメスの肩を撫でて、シュヴァリエ達に振り向いた。

「俺は、スレシュを許そうと思う」

「副長!?　本気で言ってんのか!?」
「あぁ。エルメスに免じて、だけど。もういい加減、憎むのにも疲れた。お前らはスレシュをどうしても殺したいか？」

俺の言葉に困惑と動揺を隠せないシュヴァリエたちは顔を見合わせて悩み始める。しばらくすると、ランスが前に進み出てきた。

「カイにできることが僕にできないはずないじゃん。いいよ、許しても」

ツンとすましたランスの生意気な物言いに、シュヴァリエ達の両手はWで、とうとう呆れ笑が浮かんだ。続いてガラードが歩み出る。

「俺もいいよ。今は、エルメスがいるから」

ガラードの言葉に、みんなも首を縦に振った。

ベディ「確かに思い出としては最悪だけどさ、昔の事だしな」
リオ「今はエルメスやみんながいるし」
パーシー「そうそう。その事がなきゃ、みんなに出会えなかったもんな」
ガルフ「きっとこういう運命だったんだろ」
トリス「むしろ今の方が大家族で楽しいじゃん?」
ユアン「だよな。それまで一人っ子だったのに今や１２人、いや１３人兄弟?」

キルシュ「スレシュがいなきゃ、きっと一生出会わなかった。みんなとも、エルメスとも」
ペレアス「そこを汲むなら、許してやってもいいか」
ディナ「つーかぶっちゃけ、俺覚えてないんだけど」
トリス「あ、実は俺も」
ガラード「そう言えば俺もだ。物心つくころには副長がお父さんだったし」
俺「誰がお父さんだ」
ベディ「うわ、そういやガキの頃、副長を兄ちゃんって呼んでたわ！」
パーシー「そう言えば！　懐かし！　気持ち悪！」
俺「テメェら後でリンチな」

数分前まで殺すだの殺さないだの、相当シリアスな雰囲気だったはずなんだが、バカどもの手に掛かればこのザマだ。コイツらの切り替えの早さと能天気っぷりは、最早賞賛に値する。

いつの間にかエルメスもクスクス笑っていて、エルメスの笑顔を見て改めて、みんなと出会えてよかったと思えた。

「つーわけで、スレシュ。水に流すってわけにはいかねぇが、まあ、許してやる」

スレシュに振り向いてそう言うと、スレシュは顔を歪めたかと思うと目に涙を溜めて床に額をこすりつけた。

「君たちには、本当に申し訳ない事をした。本当にすまなかった。ありがとう。本当にありがとう。本当に、すまなかった」

絞り出すような声で謝罪を述べるスレシュに、多分それなりに反省してるんだろうな、そう思った。

そんで、みんな乗り越えてきてるんだから、俺も頑張らなきゃいけねぇかってなんとなく覚悟を決めた。

エルメスはジュリオ様を許そうとしてる。俺も、エルメスとコイツらと一緒に頑張って、これから新しく時を刻んでいこう。

FILE－29　Clock gear［歯車］

この話には、まだ少し続きがある。

その後、少ししてスレシュが落ち着いた頃に、俺らの様子を静観していたシャンティが急に前に出てきて、エルメスの前に跪き頭を下げる。どうしたのかと見守っていると、シャンティはエルメスと俺に目を向けて言った。

「エルメス様と、カイ達シュヴァリエが許してくれるかはわからないけど、お願いがある」
「え？　なに？」
「・・・スレシュを、地下室から解放してほしい」
「は！？」
「え！？」

思わぬ相談に驚いて、エルメスと顔を見合わせた。突然の事にスレシュ自身もとても驚いている。

「えっと、それはどうして？」
「ずっとスレシュの世話をしてて思った。スレシュは根っからの悪人じゃない。利益を求めていただけで、自分のしたことを悪だと知らなかっただけだ。それに頭もいいし、機転も利く。トリンとツァンはマイケルさんに助役をやってもらってるんだろ。アタシも、ア

タシの会社の相談役として、スレシュを雇いたい」
「えぇ!?　そ、それは・・・」
「お前、本気で言ってんのか？」
「本気だ。アタシ達は学も経験もない。ブレインとして役立つ素材が欲しい」

何とも野心的なシャンティの言葉に、再び顔を見合わせる俺とエルメス。

「え、あ、カイとみんなはどうしたい？」
「決定権があるのは俺らじゃねぇだろ」
「決定権・・・アーサーさんだ」
「よし、アーサー連れてこい」
「無茶言わないでよ・・・アーサーさんならどうするかな？」
「うーん・・・そうだな。あくまで俺の考えだけど、アーサーならシャンティの意見を汲むな」
「え!?　アーサーさんなら怒りそうな気もするけど・・・なんで？」
「アーサーならシャンティの夢を応援するだろうし、それに約束もある。スレシュが約束通り大人しくエルメスやシャンティに従ってれば問題ない。逆らったり妙な真似したら殺せばいい。何よりスレシュはもうトシだ。そんな無茶やってもメリットがない。最後に役に立ってもらった方が双方に利潤がある」
「あぁ、なるほどぉ・・・じゃぁ、そうしよっか」
「そうしよっかって、あくまで俺の意見だって言ってんだろ」
「でも、アーサーさんっぽいからいいんじゃない？　アーサーさんはいつもこっちがビックリするような決断するし」
「まぁ、そう言えばそうだな」

結局俺も納得してエルメスと二人でシャンティに向き直った。

「じゃぁ、私がアーサーさんの代理として、スレシュさんの地下室からの解放を許可します」
「シャンティ、お前ちゃんと見張っとけよ」
「二人とも、ありがとう」

俺とエルメスの答えを聞いて、シャンティは深く頭を下げる。続いて俺達はスレシュに向いた。

「スレシュさん、突然ですけど、これからはシャンティの会社で相談役として尽力してください。シャンティと共に、会社の発展と不可触の民の救済に尽力すると、約束できますか？」
「勿論だ。シャンティの興した会社はいい、素晴らしい。シャンティの夢を叶える歯車になれるのなら、おれの罪の償いにもなるだろう」
「そうだな。言っとくけど、妙な気起こしたら即抹殺だからな」
「あぁ、わかってる。信用しろとは言わないが、そんな気は微塵もない。あの男と、アルカードと約束したからな」

スレシュの言葉を聞いて嬉しそうに微笑んだエルメスにつられて、俺もなんだか安心した。

その後の話し合いで、スレシュの居室は結局地下室のままだけど、鍵はエルメスが壊して、俺達の居室のある4階に近づかないという事で今後の生活指針が決まった。
エルメスとシャンティは今後の細かい話をすると言ってスレシュと共に地下室に行ったから、俺とランスは先に部屋に戻った。

エルメスから貰った腕時計を見ると、もう時間は夜中の3時。ランスも眠そうだ。
風呂でも入るか、と、ピストルのホルダーを外そうと手をかけた瞬間に、エルメスを撃ったことを思い出す。

マシンピストルCz75－SP01をベースに、化け物を一撃の下に殺せるようにベディが改造したCz75－SP00 Custom“PHANTOM”

ゴトリ、とテーブルの上に「ファントム」を置くと、傍までランスが歩み寄ってきた。

「お前も見てたなら、よくわかったろ」
「え？」
「銃は、人を守ることなんか出来やしねぇんだ。銃は人を殺す道具なんだよ」
「でも、カイはエルメス様を撃ちたくて撃ったわけじゃないだろ」
「同じことだ。俺が銃を抜かなければ、エルメスを撃つことはなかったんだからな」
「そりゃそうだけど・・・」

「銃が奪うのは、他人の命だけじゃねぇ。自分の心も、大事な人を失うことだってあるんだ。それが故意か事故かは問題じゃねぇ」
「じゃぁ、エルメス様の言った通り、銀弾を捨てればいいよ。そしたらエルメス様が傷つくことはなくなるじゃん」
「あぁ、そうだな。でも・・・決めた」

すぐにキャビネットの引き出しを開けて、ストックのマガジンとスペアの「ファントム」を取り出す。するとランスが嬉しそうにしながら寄ってきた。

「カイ、意外と騎士じゃん」
「意外は余計だ。お前、証人になれ」
「うん」

俺とランスはその足でガルフの部屋に向かった。ガルフは俺とランスが入って来たのを見て、俺が手にしている物を見て、クスっと笑う。

「どーした？　百戦錬磨のカイも、さすがに怖くなったか」
「まーな。つーか、少なくとも今は必要ねぇと判断した」
「今は？」
「まぁ、コイツが活躍する機会が今後ない事を祈るが、世の中何が起こるかわかんねぇからな。本当に必要な時が来るまで、お前が「ファントム」を預かっててくれ」
「なるほどね。了解」

ガルフのデスクの上に銃を置くと、ガルフはそれを箱にしまって戸棚の奥に押し込んだ。振り向いたガルフは俺とランスを見てまたクスッと笑う。

「ランスを連れて来たのは、道徳の教育？」
「まぁ、そんなとこだ」
「ハハハ、ある意味カイは優秀な教育者かもな。ランスは反面教師やってりゃ、随分立派な奴になるぜ」
「あはは、確かに！」
「何納得してんだテメェ」
「そりゃするよ。ねぇ？」
「そーだな。カイ、エルメスを撃った時、撃ったことが怖かったか？」
「あぁ。今思えば、エルメスならああいう事をやりかねねぇ。それすらも気が回らねぇ程に憎悪に憑りつかれて引き金を引いた自分に、エルメスを殺しそうになったことに、怖くなったよ」
「一旦人殺しが怖くなったら、もう二度とできねぇかもしんねぇぞ」
「そうだな。でも、もう必要ねぇだろ」
「だな。もう俺達は死を振りまく神じゃなく、エルメスを守護するシュヴァリエだからな」
「白兎に銃なんて物騒な物は似合わないしね」

ランスの言葉に思わず俺とガルフは笑ってしまった。確かにウサギに銃なんか似合わねぇ。

「ランスの言う通りだな。白兎の持ち物は、時計だけで十分だ」

俺だけフェースの黒い、鈍く光るシルバーの腕時計を見ると、規則正しく時を刻む。俺は４０年も遅刻してしまったけど、俺の時計の歯車は再び動き始めた。

きっといつか、４０年分の時間に追いつける日がやってくる。エルメスとコイツらがいるなら、一緒に努力していけばきっと、スレシュを許してやれる日がやってくる。

この日俺は「ファントム」を手放して、人を殺すことを、やめた。

LETTER－6　Connection　［因縁］

拝啓　アーサーさん

事件です！　大事件です！　スレシュさんが生きていることをシュヴァリエのみんなに知られちゃいました！

でも、みんなはスレシュさんを許すって言ってくれたんです！　本当に良かった！　これを事件と言わず何と言いましょう！　さらには事件はこれだけじゃありません！

ちょっと興奮しちゃった・・・順を追って説明しますね。

この前起きたらカイはすぐにシュヴァリエの幹部会議をするっていなくなっちゃって、仕方なく一人でリビングでテレビ見てたんです。だいぶ経って、アジメールさんが食事の乗ったトレーを持って厨房から出てきたんです。

「アジメールさん今からご飯ですか？　こんな時間に一人で？」

「え、あ、うん」

なんか妙な態度取るな、と思ってよく考えたら、アジメールさんが向かって行こうとしてるのは地下室で、そこに監禁している人がいたことを思い出しました。

というか、完全にスレシュさんの事忘れてました。そう言えばインドを出る時にスレシュさんの処分をシャンティに押し付けて出てきたんだった・・・と思って。

でも、同時にシュヴァリエのみんなの事を思い出して、凄く焦りました。アジメールさんに聞いたら、インドに来た翌日にシュヴァリエのみんなとジュリオさんとスレシュさんの関係を話してたから、何とかバレないようにやっててくれたみたいです。でも、それもいつまで隠し通せるかわからない、とも。

アジメールさんの微妙な態度は、多分今がこんな状態だから、私にも心配かけないように内緒にしてくれていたんでしょう。

一回スレシュさんとも話そうかと思ったけど、私が地下室に出入りしてるのを誰かに見られるとマズイし、どうしようと思って頑張って隠してたんだけど、やっぱり私には女優は向いてなったみたいで。

とうとうカイの名推理で昨日、バレちゃいました。

カイ達は私達が止めるのも聞かないで地下室に乗り込んで、ドアを開けたカイはすぐさまスレシュさんを殺しにかかりました。それは何とか止めることが出来て、その後カイ達に謝罪して話し合いをしました。

カイもみんなも、両親を殺されて誘拐されたことで今までずっと苦しんでいました。あれから４０年経ってもその苦しみに苛まれてきたんです。

今となっては、カイ達の気持ちは私にも痛いほどわかります。大事な人を奪われることがどれほど辛い事なのか、子供の時分に親を失うという事がどれほど辛い事なのか。

でも、それでもスレシュさんを殺してほしくありませんでした。理由としては、私もですが、アーサーさんとスレシュさんとの約束を破らせるわけにいかないと思ったから。

そう説得したら、カイはひとまず引き下がってくれたんですが、ここでまさかの事件です。スレシュさんがカイにカイの両親を殺したのは自分だと名乗り出てしまいました。

当然カイは怒ってスレシュさんを殺そうとします。私にはそれが真実だとは思えなくて、勿論嘘だって根拠もありませんでしたけど一生懸命説得しました。

スレシュさんを殺してほしくない理由はもう一つあります。もしカイ達がスレシュさんを殺してしまったら、それは憎悪に憑りつかれて復讐したジュリオさんと同じなんじゃないかと思ったからです。

そのことを話したら、カイは少し落ち着いたようで、卑怯だと思いましたけど、とどめに言いました。

「カイがどうしてもスレシュさんを殺すなら、先に私をスレシュさんに殺して貰わなきゃ」

カイにスレシュさんを殺す権利があるのなら、スレシュさんにも間違いなく私を殺す権利はあります。正直、賭けでした。我ながら随分卑怯なことを言ったなと思います。スレシュさんの部下を直接殺したのは私じゃなかったけど、それでも見殺しにして容認していたんだから同じことです。

でも、スレシュさんは言いました。私が取引を持ちかけてくれたおかげで、自分の所業の非道さに気付けたんだと。ミナが謝る必要はないよ、と。

スレシュさんは自分のしたことを反省して、更に私まで許してくれました。私は卑怯な手段を使って話を納めようとしたのに、私達だってスレシュさん達に酷い事をしたのに、スレシュさんは許してくれたんです。

その事がとても申し訳なくて、本当に申し訳なくて、自分が嫌になりました。スレシュさんは言いました。家族を奪われることは辛いこと、それほどの思いを小さな子供に負わせてしまった自分には、当然の報いだと。

それを聞いて思いました。きっと、今のこの現状も報いなんだと。ベトナムで、インドで、イタリアで、私は大勢の罪もない人を殺しました。たくさん、たくさん殺しました。きっと神様はその事を怒ってたんですね。だから私から家族を奪った。愛する人を奪った。

今私の身に起きていることは、当然の報いだったんです。それは自分で反省して受け止めなければいけないことなのでしょう。ちゃんと後悔して反省して懺悔する必要があることなのでしょう。

だから、スレシュさんに謝りました。謝ったからって今更どうにもならないし、許されることじゃないってわかってたけど、とにかく謝りました。そして、心に決めました。もう二度と、誰も殺さないって。もう二度と、こういうことを起こさないようにしようって、決めました。

スレシュさんの思いが通じたのか、カイもスレシュさんを殺さないって約束してくれました。そしてシュヴァリエのみんなに、俺は許そうと思うって、お前らはどうするって聞いてくれました。

最初はみんな動揺してたけど、今はみんなが、私がいるからいいよって。スレシュがいたからみんなと出会えたんだし、それを汲むなら許してあげるって言ってくれました。

私はみんなの強さと優しさが、とても嬉しかったです。みんながいてくれて、本当に良かったって思いました。

それで何とか和解が成立したんだけど、ここで第2の事件が発生です。

何とシャンティが自分の会社の相談役にしたいから、スレシュさんを解放してくれって言い出したんです。それには本当にびっくりしました。

スレシュさんは根っからの悪人じゃないし、自分達には学も経験もないから優秀な人材が欲しいって。

相変わらずシャンティは野心的でプライドの高い女の子です。どうしようかってカイに相談したら、カイはアーサーさんならシャンティの意見を汲むはずだって言ったから、じゃぁそうしよっかってことになって、結構あっさり決まっちゃいました。

それから今後の話し合いをスレシュさんとシャンティと3人でし

たんですけど、ジュリオさんの事とかを少しだけスレシュさんと話しました。その時にスレシュさんはジュリオさんの最期を聞いて言いました。

「そうか、ジュリオは幸せな最期だったんだな」

それを聞いて、涙が出ました。ジュリオさんが最後にそう思ってくれたなら、カイが辛い思いをした甲斐があった、と思いました。

そして、今日になって第3の大事件です。今日ランスがコッソリ教えてくれました。

「カイは銃を封印しましたよ。もう人殺しをしないって決めたようです」

なんでそうなったかっていうと、私の憶測なんですけど、実は最初にカイが地下室に乗り込んだとき、スレシュさんを殺すのを阻止するために私が間に入り込んで、カイの撃った弾に当たってしまったんです。

その時カイもみんなもすごく心配しました。カイの撃った弾は銀弾で、心臓の近くに当たったから。正直な話、あぁコレ死んだな、と思いました。

すごく痛くて苦しくて、倒れた私を抱き起したカイは必死に、本当に必死に私の名前を呼んでくれました。大丈夫だよって言った時にすっごく安心した様子でした。

その時に、もう銀弾なんて必要ないでしょって言ったら、もう捨てるって言ったんです。

まさか銃自体を封印するって決めるとは思わなかったけど、その事で撃つことを怖くなったのかなって思いました。

この前、ランスが銃を習いたがってるって見抜いたカイがランスに言ったんです。

「これは人殺しの道具だ。人を殺すもので、人を守ろうなんて滑稽だな」

それを聞いて、カイは優しいなって思いました。そう言ったら本人は否定してましたけど。

その時ランスはむくれちゃったけど、大人しくいう事を聞きました。今回の事を教えてくれた時は、すごく嬉しそうに話してくれました。カイは僕が思ってた以上に騎士でしたって。

本当に仲良し親子です。なんだか嬉しい。これを言ったらカイはまた怒るんでしょうけど。

でも、その時最後にランスが言ったことが意味が分からなかったんですけど。

「白兎の持ち物は時計だけで十分ですからね」

どういう事でしょう？　カイが白兎なんですかね？　白兎ってなんですか？　全然あの人にウサちゃんのイメージが湧かないんですけど、どこからやって来たんでしょう。

着てる服もいつも黒いし、性格も黒いし、今は髪も黒く染めちゃって完全に黒猫みたいなイメージなんですけど。白兎とは対極なんですけど。意味わかりません。

聞いてもランスは教えてくれなかったし、考えてもどうせわかんないから諦めます。

そう言えば聞いてくださいよ！　この前カイに猫パンチされたんですよ！　手すりから突き落とされた上に、心配したシャンティに俺は知らないとか私が勝手に落ちたとか言ってたんですよ！　ヒドイですよね！

そう言えば前にインドにいた時もアーサーさんから窓から落とされたような・・・ここでは落ちる運命なんでしょうか・・・

とりあえずこれからは、銃を持つ人の前に立ちはだからないこと、落ちないことを心がけます。

そうそう、アーサーさんに見せたいものがあるんです。髪を染めたみんなと、まだ咲くかわかんないけど、城から持ってきた薔薇が咲いたらその薔薇と、新しい私の羽根。

それともう一つ、「元マフィア」で「現相談役」のスレシュの姿。

これでアーサーさんが帰ってきたら、シャンティはアーサーさんに共同経営者になってくれとか言い出しそう。

アーサーさん、少しずつ私達はいい方に向かっていってます。運命を受け入れて乗り越える覚悟をして、努力してますよ。

やっぱりまだ辛い事もあるけど、きっとアーサーさんが帰ってくるときに、笑顔でお帰りって言えると思います。

早く帰ってきてくださいね。お願いしますね。

敬具

ＦＩＬＥ－３０　Ｃｕｒｅ　［治療］

シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動報告

あれからスレシュは朝シャンティと共に出社して、夜戻ってくると持ち帰った仕事に没頭しているようだった。

俺達は相変わらずスレシュとは距離を置いてるけど、まぁ無理に詰める必要もないと思うし、正直すぐには無理。でも、インドにいた頃スレシュの世話をしていたのはエルメスだって言ってたから、エルメスはスレシュには普通にしてる。

それがかなり複雑な気分だけど、それでこそエルメスかとも思う。つーか、アーサーが帰ってきた時、スレシュはどうするんだろうな。やっぱりさすがにアーサーを許すことはできないのか、それとも許すのか。まぁ、そん時にならなきゃわかんねぇか。

やっぱり俺らは全面的にスレシュを信用できるわけじゃないし、ウソをついて取り入ってる可能性もあるから、基本警戒してる。

仕事は増えることになるが、俺らはそれでいいと思ってるし、その辺はエルメスやシャンティ、スレシュ本人もわかってるようだ。

つーか、すっかり忘れてたんだけど。いい加減、催眠術師探そう。

あれからもっかいよく考えてみたけど、やっぱ俺は異常かなと。シャンティと同類ではあるけど、そのレベルが段違いだと思う。

フッツーに考えて、友情が信仰に発展するなんてあり得ねぇと思うし。まぁ、依存はよくあることだとは思うが。

正直考えるのも面倒くさいから、やっぱり消すことにした。

「エルメス、俺出かけてくるから」
「どこ行くの？」
「ヒミツ」
「私も行く！」
「ダメ」
「どうして？」
「お前には言えない所に行くから」
「・・・いってらっしゃい」

俺の微妙な言い回しに勝手に勘違いしたエルメスは、引きながら渋々送り出した。微妙に腹立つな。まぁ、結果オーライって事でいいか。

早速街に繰り出して、あらかじめ予約しといた催眠療法をやって

るっつー先生の所に行った。

「どーも」
「あなたがカイさんね。さぁ、そこに座って」

受付をすませてドアを開けると、セクシー美人女医が椅子に座って微笑みかける。ベディが喜びそうだ。
言われたように椅子に座ると、先生はクリップボードを手にして問診を始める。

「ご相談はどういったことですか？」
「催眠術で性格っつーか感情の一部を消せるんですか？」
「場合によっては可能ですよ。厳密には消すというか消えたと暗示をかけると言った方が正しいですが」
「あぁ、じゃぁ俺の異常性を消してください」
「異常性・・・？　詳しくお話を伺ってもいいですか？」
「いいですよ。長くなりますけど」

とりあえず自分の生い立ち、以前のヤバイ仕事、ジュリオ様の事やエルメスの事、そして俺を悩ませる異常性について話した。勿論そこまで詳しくは話さないし、ヴァチカンの事や吸血鬼の事は黙って、元某国の国家権力ってことにしたが。
俺の話を聞いて先生は頭を悩ませる。

「それ、本当の話ですか？」

「信じ難いでしょうけどね」
「一応信じますが、それが本当だとすると難しいかもしれませんよ。とても根の深いもののようですから」
「でしょうね。ずっと同じことを繰り返してきましたから。でも、今回ばかりはそれじゃ困るわけですよ。このままエスカレートしたらアイツに迷惑がかかる」
「そうですね。最悪の場合「アイツを殺して俺も死ぬ」でしょうね」
「・・・思った以上に最悪だ。なんとかお願いします」
「わかりました、やってみましょう」

そう言うと先生は俺に向き直って、俺の額に手を当てる。

「リラックスして、深呼吸して、落ち着いて私の言葉に耳を傾けてください。ゆっくり、ゆっくり目を瞑って」

先生の静かな声に耳を傾けながら、深呼吸をしてゆっくりと目を瞑る。少しすると先生は口調を変える。

「それではまずそのお友達の事を思い浮かべてください」
「はい」
「・・・・・入ってませんね」
「そうみたいですね」

実際俺は平常心そのもの。全然催眠にかかってる感じがしない。
先生はうーんと唸りながら俺の額から手を外すと、もう一回やって

みましょう、と同じことをやり始めるが依然として催眠状態に入らない。

「じゃぁやり方を少し変えますね」

そう言って今度はライターを取り出した。火をつけて俺の前に差し出すと、それを凝視するように言われて言う通りにやってみる。

「集中してください。この火をよく見てください。炎の中にお友達の事を思い浮かべてください」
「・・・あー先生、全然ダメ」
「・・・ダメですか」

先生と二人でガッカリ溜息。どうやら俺は催眠術にかからないタイプの人間らしい。先生の話だとたまにそういう奴がいるようだ。

「もしくは、カイさんは緊張しているのかもしれません」
「緊張？　してませんよ」
「いえ、ここに来た事にではなく、状況にです。そのお友達の為に毎日気を張っているんじゃないですか？」
「それは、まぁそうですね」
「それに数か月前の事件のせいで、そのお友達とお身内の方しか信じたくない、と思ってらっしゃるのかもしれません。あるいはその両方か」
「そうかもしれませんね」

「カイさん、まずはあなた自身が心身ともにリラックスできる状況を作ることが先決ですね。可能な限り自分にとって楽な方にしてみてください」

「俺基本的に自分のことしか考えてないんですけど」

「いいえ、あなたはいつも状況を難しく考えて思い悩む癖があるようです。現に今あなたの頭の中はお友達の事でいっぱいでしょう？」

「・・・・ですね」

「お友達の方と距離を置くのは難しいでしょうし、それはあなたにとっては苦痛でしょう。とりあえずは、お友達の方やお身内の方と楽しく過ごすことだけを考えてみてはいかがでしょう？」

「そうですね。そうします」

「困ったことがあったらいつでも相談にいらしてくださいね」

「あぁ、はい」

結局俺は何をしに来たんだろうか。ただカウンセリング受けただけじゃねぇか。この俺がカウンセリング・・・なんか俺のプライドが許さないんだけど。なんか腹立つんだけど。

どうも催眠術もきかねぇみたいだし、やっぱこれは自分で解決しろって事なんだな。柄にもなく他人の力に頼ろうとするとこういうことになる。よくわかった。もう二度と行かねぇ。

そう決めてガッカリしながら歩く帰り道、通りかかった店のショーウィンドウに「ＭＡＤＥ　ＩＮ　ＪＡＰＡＮ」と書かれたガラスの万年筆を発見。それを見てエルメスを思い出した。あ、これアイツに買ってやろう。

速攻買い物して少しご機嫌回復して屋敷に戻ると、俺を出迎えてくれたのはニヤニヤ笑ったディナとベディ。

「何笑ってんだよ、気持ちわりぃな」
「オニィチャン今夜の相手はどんな女？」
「セクシー美人女医」
「マジ！？　羨ましすぎる・・・」
「ベディお前本当好きだな」
「そんな事よりエルメスがさ、副長が自分を置いて夜遊びしに行ったってご機嫌斜めだぞ」
「早くエルメスの相手してあげなよ、オニィチャン」

それを聞いて速攻エルメスの下にダッシュしたエルメス思いな俺。そう言えばアイツ俺が夜遊びしに行ったと思ってたんだった。いっちょ前に嫉妬なんかしやがって、うい奴め。

「エルメス、ただいま」
「あ、カイ、おかえりー」

勢いよく部屋に戻ってドアを開けるとエルメスはキロと遊んでて、帰ってきた俺にそう言ってにっこり笑った。

なんか思ってた以上に普通なんだけど。ハッ、さてはアイツら俺を騙しやがったな！？　俺がスッ飛んで行った様子を見て今頃笑ってやがるに違いない！　チクショー！

ドア前でひとしきり打ちひしがれた後、不思議そうにするエルメスの傍に寄ると、エルメスの髪にキロの羽根がついていることに気が付いた。それに手を伸ばそうとすると、スッと逃げられる。

「汚い手で触らないでくれる？」
「ピィ」

なんか思ってた以上にご機嫌斜めだったんだけど。鋭角に斜めなんだけど。ヒドイ言われようなんだけど。

エルメスは相変わらずニコニコしてるけど、よく見たら営業スマイルだった。笑顔でそんな辛辣なことを言うなんて、エルメスも成長したな。

やっぱりご機嫌を損ねてたエルメスに、思わずニヤケちゃった俺。

「エルメス、なーに怒ってんだよ？」
「別に？」
「俺がいなくて淋しかったんだろ」
「別に」
「俺がお前ほったらかして遊んでるのがヤだったんだろ」
「違うもん」
「じゃぁ何に怒ってるわけ？」
「別に怒ってないし、そんなのカイの勝手じゃん」
「じゃぁさっきの触るなってなんだよ？」
「別になんでもない」

エルメスは段々営業スマイルが消失していく。その様子に俺ご満悦。

こういうエルメスを見れるなら、また夜遊びすんのも悪くない。頻繁に遊びに行くとエルメスが慣れるから、たまーに遊ぶことにしよう。とか最低なことを考えた俺は、さっき買ってきた万年筆の入った箱をエルメスの前に出した。

「そんな怒んなよ。コレ買ってきたんだよ。お前にやる」

訝しげに箱を受け取ってフタを空けたエルメスは、その中のガラスの万年筆を綺麗、と言いながら手に取る。

「ソレさぁ、この前雑誌で見かけたんだけど、日本製のガラスの奴でスゲェ書きやすいって書いててさぁ。お前たまにせっせとなんか書いてんだろ。お前にやろうと思って、探したんだぜ」

俺のウソつき！　そんな情報知らねぇよ！　しかし俺のウソにまんまと騙されたエルメスは嬉しそうに笑った後、ハッとした顔を向けた。

「カイ、あの、ごめんね？」
「なにが？」
「なんか、態度悪くて」
「なんで態度悪かったわけ？」

「カイが遊びに行っちゃったから」
「なんで俺が遊びに行くのがヤなの？」
「だって、なんかヤだ。淋しいじゃん」

もう、エルメス可愛い！　健気！　よし、やっぱ夜遊び再開しよう。でも面倒くせぇから素人女はもうやめよう。
やっぱり最低な俺はそう決めて、エルメスの髪に着いたキロの羽根を取る。

「もう怒んねーの？」
「うん、ゴメンね」
「いーよ」

やはり俺にはエルメスが最高の癒しだ。んで、やっぱ俺って最低。

ＦＩＬＥ－３１　Ｃｏｍｂｉ　ｏｆ　ｆｏｏｌ［バカコンビ］

報告　　シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動

今思えば、マインドコントロールだったんだろう。

あの戦いが始まる前にアーサーが言ってたよな。ジュリオ様は俺らをジュリオ様に絶対的に服従する忠実な兵器として育て上げたんだと。

それを踏まえて考えると、そもそも俺は「そう言う風」になるようになっていたのか。

この前の催眠術の件で、ちょっとだけ精神医学について調べてみた。同じものかと思ってたけど、洗脳とマインドコントロールは違う物らしいな。

【通常、児童からの教育段階で偏った情報を与えて、特定の（一部の者に都合の良い）思想や価値観を持たせてしまう場合はマインド

コントロールに、既に成長して主義・思想を持つ人間に働き掛けて、特定の主義・思想に（本人の意思に関わり無く強制的に）変更してしまう場合は洗脳に分類される。
特に後者では、薬物の使用や過酷な環境下において、人間の精神が極めて受動的になることを利用して行われる】

だとさ。俺はジュリオ様に子供の頃からマインドコントロールされて、きっと今はジュリオ様によって精神的に追い詰められたせいで、エルメスを盲信するように洗脳されたって事なんだろう。

いや、自分からそうなっちまったってことは、セルフマインドコントロールにあたるのか。ま、どっちにしたって異常に変わりはねぇし、どっちでもいいか。よくねぇか。

でも、そこまで精神的に狭搾していたんだとしたら、あの先生の言った通り、俺は色々深く考えすぎるタチなのかもしれないな。場合によってはそれは良い事なんだろうが、この事に関しては悪い事なんだろう。

この点に関しては、エルメスを見習った方がいいのか。シュヴァリエ達を見習った方がいいのか。あんなバカどもを見習えと？　スゲェ嫌なんだけど。

しかし、俺には悩みの種が尽きないんだから仕方がない。そりゃ悩み事も山積みになるはずだ。

「はぁ、もう半年も待ってるのに、アーサーさんはいつ帰ってくるの？」
「さーな」
「んもー！　バカ！」
「俺に言うな。アーサー帰ってきてから本人に直接言え」
「ムリ、コワイ」

今の所最大の悩みの種はアーサー、アンタだ。アンタのせいで俺が責められてんだぞコノヤロー。

今日は6月25日。半年経ったぞコノヤロー。マジでいつまで待たせる気だコノヤロー。エルメスがどんだけアンタの帰りを心待ちにしてるかわかってんのかコノヤロー。

サンルームで煙と共に溜息を吐く俺の隣で、エルメスもキロを見つめながら深い溜息を吐いている。エルメスはきっと俺なんかよりもはるかに待ちくたびれてる。辛いだろうな、そう思ってエルメスを見ていたら、エルメスが何かを思いついたような顔をしてこちらに振り向いた。

「あのね、6月は北都の誕生日なんだよ」
「へぇ、そうなのか。おめでとう」
「アハハ、ありがとう。北都が生きてればもう18歳だ。アーサーさんと出会ったころはまだ子供だったけど、生きてればもう大人な

んだね」
「そうだな」
「きっとランスもすぐに大人になっちゃうね」
「だろうな」

もしかしたら、エルメスはランスに北都の影を見てるのかもしれない。まぁ、無理もない。ランスはまだ子供だし、初期の頃からエルメスに懐いてたし。
完全にそう思ってたらランスが気の毒な気もするが、今すぐだと効果が期待できないから、エルメスにモーションかけるのは最低でも16になるまで待てつってるし、まぁいいか。

「そういや、お前と北都って年離れてるな」
「実はウチの両親デキ婚だったらしいんだ。本人達は授かり婚だって言い張ってるけど。それで結婚が早くて家に余裕なくてずっと一人っ子で、私が兄弟ほしいってせがんだらしい。覚えてないけど」
「ハハハ、なるほどな。お前ガキの頃から我儘だったんだな」
「ま、ね。今思うとすごい我儘なお願いだよね」
「じゃあ北都メチャクチャ可愛かったろ」
「そう！　もう、私嬉しくてさ、家族全員溺愛だよ。北都を独り占めしたくて傍から離れなかったもん」
「俺にはどっちかっつーと北都のが溺愛してるように見えたけど？」
「多分小さい時から溺愛しすぎたんだねぇ。小さい頃はお姉ちゃんと結婚するんだって聞かなかったもん。可愛いよねぇ。私もウンって言ってたけど」

そう言って嬉しそうに笑うエルメス。仲がいいのは大変結構。で

も今の発言がアブナイ気がするのは俺だけか。エルメスは実はショタコンなんじゃねぇか。

いや、じゃあクリシュナさんは？

「そんだけ溺愛してて、北都はよくお前の結婚許したな。大反対されてもおかしくなさそうじゃん」

「最初聞いたときはアーサーさんに任せるよりは安心できそうって言ってたよ」

「そんな前から仲悪かったのか、あの二人は」

「もう最初からだよ。お姉ちゃんを連れてっちゃう奴なんか嫌いだって」

初代白兎は狂犬に噛みつかれたか。アーサーに噛みつくとは、北都は怖いもの知らずだな。さすがはケルベロスの再来だ。

そう言えば俺もクリシュナさんと北都にエルメスを虐めるなって散々文句言われたような。虐めてねーし。遊んでただけだし。

「でね、後からもう一度聞いてみたの。どうして結婚許してくれたの？　って」

「そしたら？」

「そしたらね、僕といる時よりもお姉ちゃんが幸せそうだから譲ってあげるって」

「なんて姉思いな奴・・・」

「本当に。だから私も北都には幸せになって欲しかったんだけどね。体は消えちゃっても、ずっと一緒に楽しく生きていきたいなって思ってたのにな」

「北都はお前と一緒にいられて幸せだったと思うぞ」

「そうかな？」
「絶対そう。決まってるだろ」
「そっか。ありがと」

そう言ってはみたものの、そう返事をしたもののエルメスは悲しそうだ。当然だ。北都はそれほどまでにエルメスが大好きで、エルメスもそれをちゃんとわかってて大事にしてたのに死んでしまった。キロに目を向けたエルメスの瞳には、とうとう涙が浮かんでくる。

こういう時、エルメスが俺の前でしか泣かないのか、俺がエルメスを泣かせてしまっているのか、どっちなのかわからなくなってくる。

俺だって北都と同じくらいエルメスを大事に思ってるつもりなのに。きっと北都はエルメスを泣かせたりしなかったはずなのに。エルメスの心は俺が守ると決めたはずなのに。

泣いているエルメスになんて声をかけてあげたらいいかわからなくて、とりあえず頭を撫でてみる。するとエルメスは俺の肩に頭を預けて余計に泣き出してしまった。

あぁ、ヤバい、どうしよう。なんで？　なんで？　と、内心大慌てな俺の気を知ってか知らずか、エルメスは泣き続ける。仕方なしに再びナデナデを再開すると、しばらくしてからエルメスは俺から離れた。

あぁ、やっぱり俺はエルメスを泣かせてしまうんだな、と軽く自

己嫌悪に陥る俺に、エルメスは涙を拭って顔を上げた。

「カイ、ありがとう。もう落ち着いたから大丈夫だよ」
「そか」
「カイは優しいね」
「優しくねぇ」
「優しいよ。私を泣かせてくれるから。私が泣ける場所になってくれるから」
「・・・俺が？」
「うん、あのね、泣いたら、涙と一緒に罪とか悲しみも一緒に流れていく気がして、落ち着くの。カイは前からそうだったでしょ。私の気持ちをわかってくれて、ただ泣かせてくれる。だから、カイが傍にいてくれたら安心して泣けるの。私、カイのそう言う優しさが大好きだよ。ありがとう」

エルメスは勘違いをしている。俺はエルメスの気持ちをわかってない。エルメスがそう言う風に思っていたとは完璧想定外。むしろ俺が勘違い。逆にありがとう。

エルメスも勘違いしてるし、俺も勘違いしてるし、本当にアーサーの言った通りバカコンビだ。

つーか、先生の言った通り俺は本当に考え過ぎなのかもな。少なくとも、悪い方にはあまり考えないことにしよう。その方がストレスの軽減にもなるしな。
そう考え直していると、エルメスはにっこり笑って言った。

「弟は、北都はいなくなっちゃったけど・・・でも、カイはお兄ちゃんみたい。優しくて楽しいお兄ちゃんが傍にいてくれて、私ってホント幸せ者だよね」

なーにバカなこと言ってんだかと思ったが、それで喜んだ俺も、バカだ。

ＦＩＬＥ－３２　Ｃｈｉｖａｌｒｙ　【騎士道精神】

決意表明

届かないとわかっていても、祈らずにはいられない。叶わないと知っていても、願わずには、いられない。

化け物に堕ちても尚、「愛」という感情を消してくれなかった残酷な神よ、地獄に堕ちろ。

主よ、永遠の安息を彼らに与え、
絶えざる光でお照らしください。
正しい人は永遠に記憶され、
悪い知らせにも恐れはしないでしょう。

天使があなたを楽園へと導きますように。

楽園についたあなたを、殉教者たちが出迎え、
聖なる都エルサレムへと導きますように。
天使たちの合唱があなたを出迎え、
かつては貧しかったラザロとともに、
永遠の安息を得られますように。

自分にやらせてほしい、と名乗り出たディナのレクイエムと共に暗い墓穴に沈められる棺を見て、エルメスは慟哭する。

後悔に眉を顰め、苦悩に顔を歪め、悲壮に涙するエルメスは、レクイエムと二つになった墓石に、改めて思い知らされた。

愛していた大事な家族が、ミラーカさんが、死んだと。

慟哭して泣き縋るエルメスを抱きしめながら、俺は心に決めた。

昨日、エルメスが突然言い出した。

「ミラーカさんを迎えに行く」

以前城に行ったときは、エルメスはそのあまりの荒廃ぶりに耐えきれずにすぐに戻ってしまった。
もう平気なのか、そう聞きたかったけど、エルメスの瞳は自らを奮起するような光が宿っていて、その言葉を飲み込んだ。

さすがに2人だと、というか俺1人だと心許ないと思って、ガラードと3人で城に行った。

城に着いて、その様相に驚愕するガラードと、繋いだ手により力を込めて俯くエルメス。驚いていたガラードはそんなエルメスにすぐに気付いて、空いているもう片方の手でエルメスの肩を撫でる。

「ありがとう」

顔を上げたエルメスは礼を言って微笑むと、手を離して城の裏庭へ歩き出した。俺とガラードもすぐにエルメスの後に着いて行く。
墓石の前に辿り着くと、エルメスはその前に跪いて手を合わせる。

「ミラーカさん、遅くなってごめんなさい。一緒にインドに帰りましょう。本当はオーストリアに連れて行きたかったけど、できなくてごめんなさい。こんな、お墓を暴く様な事をしたくはなかったけど、ミラーカさんを一人にしておきたくないんです。一緒に、帰りましょう」

ミラーカさんに語りかけたエルメスは立ち上がると、墓石を外してガラードに持たせた。エルメスはもう一度手を合わせ礼拝すると、両手を地面に向ける。その直後からボゴッと地面が蠢き始め、土がだんだんと横に流れていき、そこからミラーカさんの棺がゆっくりと這い上がってきた。

棺が完全に姿を現すと避けていた土は元の場所に戻り、更に周囲の土も寄せ集めて、最初からそこには何もなかったかのように均される。

ガラードに持たせた墓石を再び元に戻すと、エルメスは左手を棺に添えて、右手を俺達に差し出す。俺達が手を取ると、インドの屋敷のサルーンに出た。

「カイ、ガラード、葬儀の準備をお願いしてもいい？」
「カトリック式しか知らねぇけど、いいか？」
「うん、お願い。その間、私休んでいいかな。まだ力を使うのにあまり慣れてなくて、ちょっと疲れたから」
「あぁ、そうしろ。ガラード、準備は俺が仕切るから、お前はエルメスに着いてろ」
「わかった。じゃ、エルメスいこっか」
「うん、ありがと」

ガラードと共に階段を上っていくエルメスの背中を見送って、ミラーカさんの棺の前に跪いて十字を切った。

「ミラーカさんは東欧系だったからもしかしたら正教会かもしれま

せんが、俺らカトリックしか知らないので、許してください。そのかわり、これから毎日エルメスが会いに来ますから。もう貴女を一人にはしませんから」

ミラーカさんの棺にそう語りかけて、俺もシュヴァリエ達を招集しに向かった。

俺　「ミラーカさんは吸血鬼として死んだから、吸血鬼らしく弔う。十字架も聖水も聖餅もいらない。聖鐘も不要だ。聖水の代わりに血を用意しろ。あとはレクイエムと埋葬だけでいい。あぁ、花の準備を忘れるな。ミラーカさんに似合う華やかな牡丹や薔薇を用意しろ。レクイエム覚えてる奴は？」

トリス「あ、俺覚えてるよ」

ディナ「俺も」

俺　「じゃぁどっちか頼む」

ディナ「俺がやりたい。俺にやらせて」

俺　「あぁ、任せた。じゃぁ残りの奴らはミサの準備だ。トリス、ユアン、リオ、お前らは花を調達してこい。ベディとペレアスは新しい石碑を用意しろ。逆十字の紋を刻め。パーシーとキルシュは墓穴を掘れ。ガルフ、埋葬するまで彼女はクリシュナさんの部屋に安置しろ」

返事をした面々はすぐに準備に着手した。俺も細かく指示を出して、ミサの進行を練りながらエルメスの事が気になった。

アイツ、きっと今頃泣いてるんだろうな。無理して笑顔なんか取

り繕いやがって。とりあえずガラードに任せてるから安心できるとは思うけど。ガラードならきっと、エルメスと一緒に泣いてくれるはずだ。

内心エルメスの事を思うと気が気じゃなかったし、本当は俺が傍にいたかったけど、そう言い聞かせた。

仕事から帰ってきたシャンティ達も作業に合流すると、シュヴァリエ達が「ここは任せてエルメスに着いててやれ」と言ってくれて、その言葉に甘えることにした。

寝室に入るとエルメスは寝ているようで、エルメスの手を握ってベッド脇にガラードが腰かけて、エルメスを見つめていた。

「エルメス、泣き疲れたみたいで寝ちゃったよ」
「そうか、その方がいい。寝てる間は何も考えなくて済むからな」
「うん、そうだね」

そう言えば、インドに来た初期の頃はまだ夜だってのに早く寝たりしてたな。もしかして、眠っている間は恐怖から逃げられるって無意識に眠っていたのか、そう考えながらガラードの反対側に腰かけて、眠るエルメスの髪を撫でた。

「眠り姫みたいだね」
「あぁ」
「夢の中くらいは、幸せな夢を見て欲しいな」

「そうだな」
「最近は悪夢とか見てる？」
「たまにな。うなされてたり、飛び起きたりすることがある」
「・・・エルメス、急に迎えに行こうなんて言って、まだ早かったんじゃないかな。大丈夫だったのかな」
「どうだろうな。エルメスは乗り越えようとしてるんだろうけど、一人で我慢させるのは、心配だ」
「そうだね。乗り越える手伝いはしたいけど、無理はさせたくないな」

ガラードと二人でエルメスの様子を見ていると、午前0時を回った頃にランスが寝室に戻ってきた。

「とりあえず、一通り準備は終わったよ」
「そうか、悪かったな。お前はもう寝ろ」
「僕もエルメス様見てる」
「いや、お前は寝ろ。で、朝になってからエルメスを見てろ。俺は昼間起きてられねぇし、多分エルメスもそうだと思うが、念の為。俺がついてるから、二人とも風呂行って来い」
「わかった」
「じゃぁ、副長お願いね」
「あぁ」

二人が出て行ったあと、エルメスの髪を撫でながら、思う。エルメスはあの戦争の後、俺達の前では「普通」にするように努めていた。
勿論、ふさぎ込んで泣いていたけど、それでも明るく振舞ってい

た。この「異常」な状況で「普通」であるというのは、逆に「異常」なんじゃないか。そう思うと、急激にエルメスが心配になってくる。

裏切りに耐え、家族を失ったことに耐え、アーサーが消滅したことに耐え、ジュリオ様を許そうと努め、俺達にまで気を遣い、アーサーの帰りを待ちながら、自分の力で乗り越えようとしている。

エルメスは強い奴だけど、人は、それほどの苦痛に耐えられるようにできているのか？　本当は、エルメスの心は無事ではいられないんじゃないのか。

エルメスの以前と変わってしまったところ、以前よりはるかに怒らなくなって、媚びるようになった。愛想笑いをするようになった。我儘を言うようになった。贅沢をするようになった。よく眠るようになった。人がいないことに恐怖するようになった。悪夢に飛び起きるようになった。俺に銃を向けられた時、恐怖していた。フラッシュバックに悩まされることがあった。

そう考えて、精神医学の本の内容を思い出した。

――――――――――――――――――――エルメスは、ＰＴＳＤだ。

再体験・回避・過敏症状、間違いない。エルメスは何とかそれを踏破しようとしているけど、これ以上無理をさせたら最悪の場合、解離性同一性障害を起こす可能性もある。

我儘や贅沢をするのは無意識に危機介入をしているのか、現実逃避か、あるいは新型の鬱病の可能性もある。

エルメスの精神は、崩壊寸前だ。俺が守らなければ。自分のことで四の五の言っている場合じゃない。エルメスを、助けなければ。

葬儀が終わって、今日もエルメスと一緒に寝た。棺で寝ろなんて突き放すのはもう止そう。エルメスの恐怖を少しでも軽減させたい。あんな風に泣くのは、今日で最後にしてあげたい。

「エルメス、もう城に行くのはやめような」
「・・・うん」
「あんまり、無理しようとするな」
「うん」
「最終的にお前が幸せになるなら、どれほど時間がかかってもいいから、急ぎ過ぎるな」
「うん」
「一度メンタルクリニックに行って診てもらうか？」
「やだ。知らない人になんて会いたくない」
「そうか。じゃぁ俺達に何でも頼れよ。前は多少って言ったけど、何でも言う事聞いてやるから。お前の望みは、全部叶えるから」
「・・・ありがと」

俺は、決めた。エルメスを幸福に導くことが出来るなら、俺は何でもする。何にでもなる。以前ランスが言っていた。

「本物の騎士は悪にすら手を染めるものです」

俺はエルメスに生涯の忠誠を誓ったシュヴァリエだ。エルメスの為に生きて、エルメスの為に死ぬ。エルメスの望みは、全て実現させてやる。

エルメスが望むなら、何でもする。何だってやってやる。何だって許してやる。それがエルメスの望みなら、何をしても許される。例え誰が困ろうとも、俺が壊れてしまっても、エルメスの幸せが、俺の幸せだ。

神を殺してでも、エルメスを幸福に導いてやる。それが俺の、使命だ。

決意表明2

とは言ってみたものの、ちょっと早まったかなとも思ったり。つーか、つーか俺はもう本当、うつ病になる。

「エルメス、俺ちょっと出かけてくる」
「私も行く！」
「・・・わかった」
「どこ行くの？」
「あー、本屋」

本当は先生にエルメスの事を相談しに行こうと思ってたんだけど。俺の事はともかく、エルメスの事はちゃんとしたプロに聞いた方がいいと思ったんだけど、あえなく挫折。

よく考えてみたら、エルメスは俺が出かけようとするといつも着いてきたがるし、俺が屋敷の外で単独行動をすることは不可能に近い。

まぁ、折角秀才なんだから自分で勉強するか、と諦めて本屋に切り替えた。

「カイ、何の本買いに来たの？　エロ本？」
「違ぇよバカ！　アレだよ、雑誌。ファッション誌」
「あぁ、カイ服好きだもんね」
「そーそー。お前にも好きなの買ってやるから持って来い」
「うん！」
「予算は2万だからなー」
「わかったー！」

元気よく返事をしたエルメスは、すぐに専門書の書架へ向かって言った。それを見てちょっと焦った俺。
つーか、俺もそっちに用事があるんだけど、エルメスの隙を見てなんとかするか、そう思って陰からエルメスを見ていると、エルメスは順調に本を選別していく。その背表紙を見て呆れた。

量子論、量子力学、ニュートン力学、物理学、相対性理論、宇宙論・・・お前は何になる気だ。ノーベル賞でも狙ってんのか。まぁ、俺らのアタマなら狙えるだろうけど。

しばらく見張っているとエルメスは別の書架に移動したから、すぐさま本を選別して買い物を済ませた。少し待っていると、エルメスも本を選び終わって俺の所にやってきた。エルメスの身長よりもうず高く本を積んで。

「あ、カイやっと見つけた！」

そう言って俺の下に走ってきたエルメスに一抹の不安。

「バカ！　走るな！」
「あっ、わぁぁ！」
「うわっ！」

案の定陳列棚にぶつかったエルメスは、俺に向かって本をぶちまける。咄嗟に前に出てエルメスを抱き留めて、本をバサバサとナイスキャッチ。俺スゲェ。
回りの通行人たちから拍手と賛辞を浴びながらホッと息を吐くと、俺から離れたエルメスも大喜び。

「うわぁ、カイすごーい！　カッコイイ！」
「それよりお前、お約束みたいなことすんのやめてくんない」
「えへへ、ごめんね」

謝罪するエルメスからは微塵も反省の毛色が感じられない。腹立つ。恐らく同じことを繰り返してアーサーに怒られ慣れたんだろうな。
エルメスの抜け作は今に始まったことじゃねぇか、と諦めてそのまま会計を済ませて店から出ようとしたら、意外な人に遭遇した。

「あら、カイさんお久し振りですね」
「先生！　ここで会ったが百年目ですね！」
「言葉のチョイス間違えてません？」
「こんなところで会えるとは、運命を感じます」
「そんな事おっしゃって、彼女さんに後から怒られますよ？」

苦笑しながら先生が俺の横に視線を移して、釣られて見るとエルメスが膨れっ面をしていた。　どうもほったらかしにしていた事に気を悪くしたようだ。

「カイの知り合い？」
「あぁ、エルメスわりぃ。この人はえっとー・・・」

そこまで言って困った。素直に紹介するわけにいかねーじゃん。言葉に詰まる俺に、エルメスは猜疑と軽蔑の視線を投げかける。

「カイ、まさか・・・」
「違う違う！　ちょっと耳貸せ！」
「わっ、なに？」
「この人は医者だ。血を盗みに行った時に見つかっちまって。金握らせて血を盗むのを黙認してもらってんだよ」
「え？　そうなんだ。カイってドジだね。慎重にって言ったのに」
「うるせぇ。吸血鬼って事は言ってねぇから気をつけろ」
「うん、わかった」

何とか適当に誤魔化せた。我ながらいい言い訳を思いついたもんだ。話に納得したエルメスは先生に向かってにこっと笑いかけた。

「はじめまして、どうもお世話になってます。私彼女じゃないですよ。カイのあるじでエルメスと言います」

「まぁ、それは失礼しました。カイさんがお仕えしてる方なのですね。私医者をやってます、ジュノと言います。よろしく」
「こちらこそ、よろしくです」

自己紹介を済ませてほのぼの雰囲気でエルメスとジュノ先生は握手を交わす。その瞬間、エルメスは驚いたような顔をして、それにジュノ先生も気づいた。

「あらエルメスさん、もしかして気付いちゃいました？」
「き、気付いちゃいました」
「は？　なにが？」
「お二人とも、今からお時間あります？」
「はい、私もジュノ先生とゆっくりお話ししたいです」
「ありがとうございます。上階にテラスがあった筈ですから、そこに行きましょう」
「はい」
「だから、何が？」

俺の何が？　を置き去りにして二人はさっさとエスカレーターに向かって行き、エルメスが早く！　と急かすもんだから渋々ついて行った。

テラスに到着してエルメスはあたりをキョロキョロと窺って安全を確かめると、すぐに目を輝かせてジュノ先生の手を取った。

「ジュノ先生に出会えて、私感激です！」

「ありがとうございます。もしかしてエルメスさんも？」
「はい！　カイもです！」
「まぁ、そうだったんですね」
「だから何がだよ」
「もう！　カイの鈍感！」
「イテ！」

なぜかエルメスにバシっと腕を叩かれた。なぜだ。俺は質問しただけなのに。腕をさすりながらエルメスを睨みつけていると、エルメスは嬉しそうに言った。

「ジュノ先生も人間じゃないよ」
「は！？　ウソだろ！？」
「本当！　だって手を握った時、皮膚の物質がタンパク質じゃなかったもん」
「あら、それでわかったんですね」
「は？　じゃぁ先生は何者ですか？」
「当ててみてください」

そう言って微笑むセクシー美人女医。背が高くすらっとして、出るとこは出た妖艶な肢体。栗色のウェーブのかかった長い髪、弧を描く綺麗な唇、艶やかな白い肌、黒く大きな瞳、見た目はミラーカさんに匹敵するほどの美人。

美しくなけりゃ化物としての値打ちはないと聞いたことがある。美しさこそが神への背徳だと。それを踏まえたら十分にその資格があると言える美貌の女性。こんな美人が化け物なんて勿体ねぇ。

「とりあえず、吸血鬼ですか？」
「違いますよ」
「あ、じゃぁ妖精！」
「残念」
「まさかの人狼？」
「違います」
「わかった！　死神でしょ！」
「不正解」
「ま、まさか天使ですか？」
「まさか。違いますよ」
「えー、もうわかりませんよ。先生俺降参」
「わかんなーい！」

完全お手上げな俺とエルメスに先生はクスクス笑う。しょうがないな、という顔をした先生はにっこり微笑んだ。

「ヒントです。私は国ではこう呼ばれています。大公爵ジュノ・アスタロト」
『えぇぇぇぇ！？　ア、ア、アスタロト！？』

聞き覚えのある名前に、エルメスと仰天して顔を見合わせた。

「え、え、ジュノ先生があのアスタロトですか！？」
「あの地獄の大悪魔、地獄の３大領主の一人、アスタロト！？」

「あら、ご存じ戴けてたみたいで嬉しいです。いかにも私が“大公爵”ジュノ・アスタロトです」
『マジでぇぇぇぇ！？』

アスタロトっつったら以前ドイツに悪魔退治に行った時に、アーサーが逃げられたって言うあの大悪魔アスタロト！
大物中の大物じゃねぇか！　しかもこの人の配下の悪魔いっぱい殺しちまってるし、それがバレたら殺される！

「エルメス、あの事は黙ってろよ」
「そ、そうだね。アーサーさんが取り逃がすほどだもん。絶対敵わないよ」
「つーかまさか直接会い見えるとは思わなかったぜ」
「本当だよ・・・うっかり謝罪しそうになっちゃったよ」
「マジお前絶対言うなよ。言うなよ」
「うん、これは本当絶対言わない」

エルメスとヒソヒソ相談を済ませて先生に向くと、相変わらずニコニコ微笑んでいる。悪魔が常に恐ろしい顔をしているとは限らないってこういう事なんだな、と納得するほど綺麗な微笑だ。全く持って恐ろしい。

「す、すいません。俺ら元神父と元シスターなもんでビックリして」
「そうなんですよ。まさか実在するとは」
「あら、そうだったんですね。そういえば二人はなんの魔物ですか？」

「あ、私達は吸血鬼です」
「もう悪魔に比べたらカスみたいな化け物ですよ」
「ホントホント」
「元聖職者で吸血鬼？　お二人とも随分と面白いですね」
「えへへへへへ」
「ハハハハハハ」

なんとかご機嫌をとりつつ、媚びつつ、笑って誤魔化すバカコンビ。アスタロトと知って急に怖くなった俺らは必死だ。
はっきり言ってアーサーより怖ぇ。つーかなんでまた人間界にいるんだよ。なんで医者やってんだよ。

「あの、ジュノ先生・・・いや、ジュノ様」
「ジュノでいいですよ」
「いえ、そう言うわけには参りません。ジュノ様は何故医者を？」
「あぁその事ですか？　医者なら効率よく患者の魂を戴けますから」
「あ、あぁ、そうですよね。さすがジュノ様」
「でもカイさんが術にかからなかった理由がはっきりしてよかったです。吸血鬼なら人間用の術がかからなくて当然ですもの」

アレ催眠術じゃなかったのか！　俺魂抜かれそうになってたのか！　怖！　この人怖！
意外な新事実に震えあがる俺。そんな俺とは対照的にエルメスはあろうことかジュノ様に食って掛かった。

「術ってなんですか！　カイを殺そうとしたんですか！」

「ごめんなさいね。それが生業ですもの。こうして知己になったからには、もう殺そうとしたりしませんよ」
「ほ、本当ですか？」
「えぇ、本当です。吸血鬼の知り合いができる事なんて滅多にありませんからね。殺してしまうのは勿体ないですから」
「そ、そうですか。ならいいです」

意外にあっさり引き下がるエルメス。俺の為に怒ってくれたのは嬉しいんだけど、できる事ならもう少し引っ張ってほしか・・・いや、無理か。無理だな。エルメスがジュノ様の逆鱗に触れなかっただけ幸いだと思おう。

「あの、ジュノ様は男ですか？　女ですか？」
「エルメスさんまで・・・性別は、悪魔にはありませんよ。普段人間になるときは男の方が圧倒的に多いですが、女医の方が男女問わず安心されますから」
「あぁなるほど、さすがジュノ様。さすが知略の悪魔ですね」
「エルメスも見習え」
「うん、頑張る」
「でも前回来た時にとてもいい男と出会って、その顔を拝借しようかどうか迷ったんです」
「いい男？」

首を傾げる俺らににっこり笑ったジュノ様は、パッと男に姿を変えた。それを見た瞬間ジュノ様に抱き着いたエルメスに、その瞬間、その一瞬で俺は走馬灯が１００回見えた。

「アーサーさぁぁぁん！」
「エルメス！　やめろ！　やめろって！」
「だって、アーサーさ・・・あ、しまったぁぁぁぁ！」

無理やりエルメスを引きはがすと、すぐに事態に気付くも時すでに遅し。アーサーの姿をしたジュノ様は、アーサーの様に不遜に笑った。

「お前達、この男と知り合いか」
「ウソ・・・声も喋り方ま・・・むぐっ」
「お前もう喋んな！　いやいや、違うんですよ！　エルメスが好きな俳優に似てたから興奮しただけですよ！　本当！」
「この私にそんなウソが通用するとでも思っているのか？　元ヴァチカンのエクソシスト」
「・・・」

こ、怖えぇぇぇぇ！　さすが知略の大公爵！　あっさり見抜かれて俺放心。俺に無理やり口を塞がれたエルメスも放心。

これはもう、死んだな。俺ら死んだ。さようならみんな、さようならアーサー。ジュリオ様、今から逝きます。

死を覚悟して心の中で遺言を呟く俺とエルメスに、偽アーサーは再び不遜に笑う。

「心配するな。さっきも言っただろう。吸血鬼、しかもあの男の知り合いならば殺す理由はない」

その言葉に生気を取り戻したエルメスは、口を塞いでいた俺の腕を剥がして偽アーサーに食いついた。

「アーサーさんの知り合いなら殺す理由がないってどういうことですか!?」
「以前あの男、アーサーに会った時に約束をした」
「は!?　約束!?」
「そうだ。吸血鬼の女は永遠の処女。アーサーの眷属の女吸血鬼、その娘の魂と引き換えにアーサーの身内の者を殺さない、とな」
「えぇぇぇぇぇ!?」
「その娘と言うのはエルメス、お前だな?」
「ちっ違います!　違います!」
「私にウソは通用しないぞ。吸血鬼の魂など、そうそう手に入るものではない。楽しみだ」
「ヒィィィィ!」

アーサー!?　マジあり得ねぇんだけど!　何勝手なことぬかしてんだテメェは!　何勝手にエルメスの魂悪魔に売り渡してんだテメェは!　自分の売れよ!　つーかアンタが逃がしたのかよ!　マジ最低だなテメェは!

ショックでエルメスは再び放心だよ。エルメス可哀想すぎんだろ・・・いくらジュノ様と敵対してアーサーじゃ敵わないってなったからってそりゃねぇよ。もうテメェ帰ってくんな。むしろ死ね。

ジュノ様の登場で、アーサーに反旗を翻した俺の隣で何とか気を取り直したエルメスは、悲しそうに俯いて呟いた。

「でも、それならあの戦争の時、私の魂と引き換えにみんなを助けてくれればよかったのに」

俺としてはその意見には大反対だが、エルメスの気持ちはわかる。そんなエルメスの様子を見て、ジュノ様は溜息を吐く。アーサーみたいに。

「その件に関してはアーサーに打診したが、拒絶された」

「え？　そうなんですか？」

「あぁ、去年の秋ごろだったか。急に現れて「今くれてやるわけにはいかない。それより、ソイツの魂を他人に奪われそうだ。そうなるとお前が困るだろう。そうならないように策を施せ」と言われてな」

「去年の秋？　あ、私の誕生日！　道理でアーサーさん一人でインドに・・・」

「それで、どうしたんですか？」

「カメルレンゴを操り教皇に入れ知恵させて、敵の首魁を殺させた」

「はぁ!?　あれはジュノ様の命令だったんですか！」

「そうだ」

なんてこった・・・マジ、なんてこった。あれはただの教皇命令じゃなかったのか。てことは、俺がジュリオ様を殺したのはジュノ様の、アーサーの策略って事か！　マジでどこまでアンタは・・・

俺はどこまでアンタの策略に踊らされりゃいいんだよ！

「マジ最低だよ、最悪だよアーサー・・・アイツ死ねばいいのに」
「本当、今度ばかりは死ねばいいのにね。最低」
「ハハハ、あの男は吸血鬼にしておくには惜しいな。死んだら悪魔にしてやろう」
『やめてください！』

とりあえず、テメェ帰ってきたら殴らせろ。撃たせろ。つーか殺す！　できるかどうかはおいといて。
エルメスの魂を悪魔に売り渡すわ、カメルレンゴ操って俺にジュリオ様殺させるわ・・・まぁジュノ様がそういう手段をとると予測してたかは定かじゃねぇが、結果としては同じこと。

テメェは悪魔以上に悪魔だ！　最低だ！　死ね！　テメェが最低すぎて目の前の偽アーサーにすらムカつく！　クソ！　殺してぇぇぇぇ！

「ジュノ様・・・とりあえずその姿やめてもらえません？　怖さ５割増しなんですけど」
「本当お願いします。アーサーじゃビビッて誰も食いつきませんから」
「だろうな。せいぜいひっかかるのは頭の悪い女だけでしょうね」

言いながらパッとさっきの美人女医の姿に戻ってくれたジュノ様に感謝。しかしその言葉を聞いて落ち込むエルメス。

あぁ、誰よりも引っかかったのはコイツだった。つくづくアーサーはロクでもねぇ奴だ。
エルメスはひとしきり落ち込んだ後、急にハッと顔を上げて、恐る恐るジュノ様に振り向く。

「あ、あの、つかぬ事をお伺いしますが、私、ジュノ様に殺されるんですか？」
「今すぐってわけではありませんよ。今すぐじゃつまらないですからね」
「じゃぁ、いつですか？」
「ときにアーサーは？」
「今いないんです。なんか消滅しちゃってて。帰ってくるとは言ってるんですけど」
「そうですか。とりあえずアーサーが帰ってくるまで待って、それから面白く魂を戴ける算段を整えるとします」
「お、面白く・・・」
「エルメスさん、これから仲良くしましょうね」
「いっ！　あう、ハイ・・・」
「その際、カイさんにも役に立っていただくとしましょう」
「拒否権は・・・」
「ありません」
「ですよねー・・・」

アーサー、テメェがクソ野郎なせいで、俺がエルメスの魂を面白く売り渡す手伝いをする羽目になったぞ。どうしてくれんだコノヤロー。
つーか面白くってなんだよ。こえーよ。マジこえーよ。何させられんの俺。

「カイさん、エルメスさん、魂を貰うんですから当然、代価として一つだけ願いをかなえてあげましょう。その願いを達成する為であれば何でもお手伝いしますから、何でも言ってくださいね」
「はぁ・・・ありがとうございます」
「え、つーか俺もですか」
「あなたにも願い事がありましたよね？」
「あれはキャンセルで・・・」
「不可です。今なら変更は可ですよ」

これは、強力な味方だと思っていいんだろうか。願い事の仕方によってはウマイ事行きそうだが、相手は知略の大公爵だ。相当うまく立ち回らないとあっさり魂喰われるぞ。

あー・・・こういう時にアーサーがいればなぁ。エルメスがハンニバルと揶揄したほどの策略家だし・・・いや！　もうアーサーには頼らねぇ！　アンタみたいなろくでなしには頼らねぇ！

どーせエルメスも俺も魂喰われんのが避けられねぇんなら、俺がなんとかするしかない！　つーか、俺がなんとかする！　見てろよ、クソ悪魔ども！

つーか俺、悪魔に魂喰われて死ぬんだ・・・ここまで不幸か、俺の人生。

辞表

ガックリと肩を落として屋敷に帰ると、普段よりも賑やか。リビングに入ると驚くべき光景。

ミニスカートからスラリと伸びた綺麗な足を投げ出してソファに腰掛けるジュノ様と、その爪先にマニキュアを塗るシュヴァリエの姿。

俺とエルメスは思わず手荷物をその場に落下させた。

「何やってんですか！？」

「何してんだテメェら！」

同時に叫んだ俺らにジュノ様とシュヴァリエ達は満面笑顔で振り向く。

「二人ともお帰りなさい」

「副長、エルメスおかえりー」

「おかえりじゃねーよ！　何やってんだ！　つーか何してんですか

！」
「ジ、ジュノ様どうしてここが・・・」
「うふ。獲物を逃がすはずがないでしょう？」

にこやかな大悪魔とデレデレなシュヴァリエにまたしても放心。
どうやら俺らは大悪魔にロックオンされてしまったようだ。

「さすが副長だな。こんな美人の知り合いがいるなんてさ」
「さすがは百戦錬磨」
「さすが色男」
「こっちの気も知らねぇで・・・」

俺とエルメスはその美女に殺される予定なんだけど。つーかさっきまで偽アーサーされてたせいか、俺にはもう女に見えない。メッチャ怖い人にしか見えない。獰猛な魔獣にしか見えない。ウサギとアリス大ピンチ。

戦々恐々とする俺とエルメスに残された選択肢は一つしかない。
意を決したようにエルメスは俺に向いた。

「カイ、逃げよっか」
「そうだな、それ以外に生き残る術はない」
「瞬間移動なら追ってこれないよね、きっと」
「あぁ、そうだな、そうしよう」
「アーサーさんのせいでこんな目に遭うんだから待つ筋合いないよ」
「全くだ。もう他人に関わるのはよそう」

「そうだね。もうひっそりと引きこもり生活をしよう」
「どっかの山奥か、無人島でも買うか」
「あ、それいいね」

相談が纏まった俺らは手を繋いでみんなに向いた。

「今までありがとうございました。もう会う事はないでしょう。さようなら」
「絶対に探すな」
「えぇぇぇぇぇ!?」

突然の別れを切り出した俺らに驚愕の視線を向けるシュヴァリエ達に、バイバイと手を振って着いた先は・・・どこだ、ここは。

到着した先、俺の目の前にはスレシュの屋敷より一回りデカイ屋敷がそびえたっている。都会的な街並みに、広い庭、デカイ屋敷。賑やかに通り過ぎる東洋人。

「エルメス、もしかして・・・」
「とりあえず急だし、トリンとツァンにお世話になろうと思うの」
「やっぱベトナムか・・・」
「え？　もしかしてなんか都合悪い？」
「いや、全然」

全然都合悪い。気まずい。と思ってるのは多分俺だけだとは思う

けど、ぶっちゃけあの二人には会いたくねー。
しかし、背に腹は代えられねぇし、状況が状況だ。正に藁にも縋りてぇ気分だ。と言っても、別にあの二人を藁だと思ってるわけじゃねぇ。敵だと思ってるだけだ。

気合を入れなおす俺の隣でエルメスが門のベルを鳴らすと、ハーイとトリンの声が響く。

「トリン！　エルメスだよ！」
「え！？　急にどうしたの！？」
「ちょっと色々あって、いかんともしがたい状況に」
「とりあえず門開けるね。入って！」
「ありがとう」

その言葉の直後に耳に着く金属音を立てながらゆっくりと鉄製の門扉が開いていく。門をくぐって広い庭を抜けると、玄関先でツァンとお腹の大きくなったトリンと金髪の老人が出迎えてくれた。

「うわぁ、トリンお腹大きくなったね！　もうすぐ？」
「そう、来月の予定。ていうか、二人ともどうしたの？」
「ていうか二人だけ？」
「あ、あはは、マイケルさん、ご無沙汰してます」
「久しぶりだね、アミン。そっちは恋人かい？」
「いや、友だ・・・」
「下僕です！」
「誰が下僕だ！　ふざけんな！」
「もう、冗談なのにぃ。カイはすぐ怒るんだから」
「この状況で冗談言えるお前の神経疑うわ！」
「さっきから状況がどうのって何があったの？　中入って、話聞か

せて？」
「そだね。お邪魔しまーす」

広いエントランスを抜けてリビングに通されると、リビングにはメイド達が待ち構えていて、恭しく首を垂れる。通常ならなかなかにいい気分なんだろうが、今はそんな気分にすらなれない。

溜息を吐きながらソファに腰かける俺に、ツァンがニヤニヤしながら尋ねてきた。

「なになにー？　ついに愛の逃避行？」
「そんなわけねーだろ。アホか」
「ていうか、むしろそれならまだ良かったよ。まだマシだったよ」
「確かに、そっちの方がはるかにマシだな・・・」
「本当、何があったのよ」
「愛の逃避行どころか、魂の逃避行だ」
「なにそれ？」
「命がけで逃げてきたの。私とカイは一生逃げなきゃいけないの」
「なにから？」
『悪魔』
「は？」

首を傾げるデイヴィス一族に事の顛末を話してやると、その表情は驚愕から怒りに変わり、段々と呆れた表情を浮かべはじめる。んで、最終的には憐憫に。

「アルの性格の悪さもそこまで来ると悪魔だな」
「まさかそれほどとは思わなかったよ。ちょっと見損なっちゃった」
「でしょでしょ！　ちょっとどころか私はかなり見損なったよ！　もう本当あの人何考えてるんだろう。最悪だよ」
「またしても俺はとばっちりだ。よくよく考えてみたらあの時俺がエルメスの傍にいなきゃ、俺まで狙われなかったかもしんねぇのに」
「よく言うよ。とばっちりは完全に私の方！　そもそもカイの知り合いで、最初から狙われてたじゃない」
「・・・そうだった」

現実逃避にエルメスに責任を追及するも失敗。そもそもあそこで偶然会わなければこんな事には・・・やっぱある意味運命か。俺とエルメスは悪魔に魂喰われて死ぬ運命だったのか。

でも、いくつか気になることがある。こうまでなってもアーサーがそんな事をするはずがないと思う部分はあるし、俺もエルメスも、なぜすぐに殺さないのか。

そりゃ、すぐに殺すのはつまらないと言うのはわからなくもないが、アーサーの帰りを待つ必要性を感じない。

ひょっとすると、俺らはジュノ様に嘘を吐かれた？　本当はアーサーとジュノ様の間では別の約束が取り付けられていて、それを隠蔽するために嘘を吐いた？　その可能性はゼロじゃない。きっと裏がある。

殺さないと明言するほどだから、きっと何かの取り決めは合ったんだろう。

アーサーはあの戦争が起きることを随分前から予測していた。もし、ジュノ様と出会う前から予測していたとしたら？　いや、出会った後でもアーサーはジュノ様に再度会いに行ってる。その際に願い事の内容を変更していたとしたら？

アーサーはエルメスの魂を売ったりはしないだろう。その策謀の限りを尽くして、ジュノ様の裏を掻こうとするはずだ。エルメスの魂をやり玉に挙げておいて、その魂を狩る条件を付けている可能性は十分にある。ジュノ様をも騙すほどの策を用意していてもおかしくはない。

アーサーの願い事、今思いつくのは死者蘇生。そして、エルメスの幸せとアーサー自身の幸せ。それを手に入れるには、過去の清算？　そもそもアーサーがジュリオ様と“ミナ”と出会わなければこんなことにはならなかった。アーサーは過去を変えようとしているのか？

いや、わからない。そんなこと、両方とも可能だとも思えないし、仮にそれが成就してエルメスもしくはアーサーの魂が喰われては意味がない。

うーん、わからん！　相変わらずアーサーは何考えてんのかさっぱりわからん！　元々の考え方の違いか、もしくは生きた年月の違いか、その両方か。とにかく俺にはどんだけ考えてもわからん。

とりあえず現時点でわかっているのは、

・アーサーとジュノ様の間で何かの取引があった。
・俺とエルメスはアーサーが帰ってきた後に魂を喰われる。

こんだけは確実って事か。こんだけわかっても何もわかんねぇ。今回ばかりはヒントが皆無だ。謎だらけ。相変わらず俺を悩ませやがる。チクショウ。

「カイ？　どうしたの？　ずっと難しい顔して？」
「え、あ、いや、なんでもない」

急にエルメスに思考を中断されて現実に帰った瞬間、屋敷の電話が鳴り響く。何となく嫌な予感。電話に出て少し話したトリンはこちらにチラリと視線を送る。その視線に横に首を振ると、トリンは頷いた。

「え、あ、そうなんだ。えっと、こっちには来てないよ。うん、本当知らない。ごめんね、うん、うん。じゃぁね」

受話器を置いたトリンは溜息を吐きながら再びソファに腰かける。

「シャンティからだったよ。二人がそっち来てないかって」
「ハァ、探すなっつったのに」
「いや、急にいなくなったら探すだろ」
「もう会う事はないだろうって言ったのに」
「そんな言い方されたら探すと思うよ」
「ここも時間の問題かもな」
「そうかもね。落ち着いたら本格的に逃げる準備しなきゃね」
「だな」
「二人とも本気だね」

「まぁ、しばらくはゆっくりしてなよ。うちなら家業の都合上、食料も簡単に手に入るし」
「ありがとう」

それから屋敷の中を案内してもらった後、部屋を賜ることになった。ここにきて若干揉めた。

「部屋はアミンが前に使ってたのが残してあるけど、そこでいい？」
「うん、いいよ」
「カイくんも好きな部屋使っていいからね」
「あぁ、ありが」
「カイもおんなじ部屋でいいよ」

ある程度は予想してたけど、エルメスのその言葉に二人はナヌッと表情を変える。こういうやり取りは久しぶりだ。
俺もエルメスと同室で過ごすのには随分慣れたけど、たまには一人で過ごしたい。もう本当我儘言わないから、短期間だけでもいいから一人にさせてほしい。

「ちょっとアミン、そりゃおかしいよ」
「どうして？　今までおんなじ部屋だったんだから問題ないよ」
「え！？　同じ部屋だったの！？」
「そーだよ。コイツが我儘言うから。それにあっちの屋敷は部屋が満室で空いてねぇし」
「でもウチは部屋いっぱい空いてるから、分けた方がよくないか？」
「俺的にもそうしたいのは山々だけど」

「おんなじ部屋じゃなきゃヤダ！」
「コレだよ」

溜息を吐く俺に珍しく二人から憐憫の眼差しを受ける。その調子でもっと俺を憐れんで同情した上に畏怖してくれたら万々歳だ。

「アミン、さすがにそれじゃカイくんが可哀想よ」
「可哀想じゃないよ」
「お前な・・・」
「カイはイヤなの？」
「嫌だけど」
「えぇー！？」
「何ビックリしてんだお前。俺は最初から嫌がってただろーが」
「でも最近は何も言わなかったじゃない」
「そりゃ慣れただけだ」
「じゃぁいいじゃない」
「お前・・・」
「そう言う問題か？」

コレもある程度予想していたが、エルメスは俺の意見を汲む気はないらしい。どこまでも我儘な甘えん坊だ。結局どこに行っても俺が折れる羽目になる。

「あーもー、わかったわかった同室でいいから。トリン、どっかの部屋から」
「ベッド持ってこなくていいからね」
「アミン！？　何言ってんの！？」

「今も一緒に寝てるから問題ないよ」
「・・・カイくん、本当に友達なの？」
「一応な」
「今回はちょっと自信なさげだな」
「バカ言うな。自信満々だ」
「カイは友達だよ。ただ私に絶対服従なだけだよ」
「それ友達じゃなくて主従関係だよね」
「いつの間に立場逆転したの？　アミンに弱みでも握られてんの？」
「そんなわけないじゃない！　カイが自分むぐっ」
「黙れ。とにかく、もう面倒くせぇからコイツの言う通りでいい」
「・・・そう。わかった」

俺が折れて、エルメスの口を塞いだまま引き摺って部屋に荷物を置きに行った。部屋に着いたらエルメスが大暴れするもんだから離してやった。

「ぷは。ていうか、荷物ってさっき買った本しかないんだ」
「トリン、ツァン、わりぃけど今日はお前らの服貸せ」
「いーけど、俺のじゃカイには小さくない？」
「今日はしょうがねーからな」
「ねぇ、一瞬だけインドに戻ってみる？」
「はぁ？　それでジュノ様がいたらどうすんだよ。捕まったら終わりじゃねぇか」
「私が捕まったら終わりだけど、カイだけなら私は逃げる」
「ざけんな！　死ぬときは一緒だ！　お前も道連れ！」
「道連れがなければいいセリフだったのに」
「ていうかアミンなにげにヒドイよね」

ますます増幅する憐憫の眼差し。おそらくこの二人の目に俺はエルメスにいい様にこき使われる気の毒なイケメンに映っていることだろう。つーか俺本当気の毒だ。やっぱりあの誓いは早まった気がする。

その後も風呂の時以外はエルメスは俺に引っ付いて来るし、俺を引き回す。さすがに半年以上その状態だったから俺は慣れてるけど、二人の目には異様に映ったようだ。

エルメスが風呂に入ってる間自由時間をゲットした俺にツァンが話しかけてきた。

「カイも大変だね」
「マジで」
「アミン、前はあそこまでなかったと思うけど、やっぱりあの事件の影響かな」
「多分な。家族がみんないなくなっちまって孤独が怖いんだろう。この上更に悪魔に命狙われてんだから、不幸極まりねーよ」
「それはカイだって一緒じゃん？　アミンに構ってる余裕あんの？」
「ねぇけど。でも、アイツを何とかしてやることの方が先決だ」
「アミンに何かあんの？」
「俺の憶測だけど、アイツは多分ＰＴＳＤだ。あの事件が相当トラウマになってる。今は悪魔から逃げ回ってるけど、これはこれで良かったかとも思ってる」
「なんで？」
「状況から切り離すことも重要だと思ってな。インドにはクリシュナさんとミラーカさんの墓もあるし、あの事件を想起させるものが多い。インドから離れて少しでも思い出す機会が減れば、アイツも少しは落ち着けるかなーと」
「あぁ、それはそうかもね。カイは思った以上にアミン思いだな」

「まーな。伊達に世界一大事にしてねぇよ」
「二番じゃなかったんだ」
「エルメスには言うなよ。アイツ調子乗るから」
「アハハ、なるほどね。わかった」

ＰＴＳＤの治療法はいくつかある。投薬治療、同じ悩みを抱えた人間が集まって互いに慰め合う集団療法、そして家族療法。
治療には近親者の理解が不可欠だ。一人で悩ませてるとより重症化するって書いてあったし、トラウマの原因を連想させるものを極端に避けるようになると、一人で行方をくらましたりすることもあるらしい。

本来ならインドであの二人の墓参りもちゃんとさせてやって、の方があの二人にとってもいいんだろうが、今は我慢してもらうしかない。
こんな理由で逃げ回るのは不本意以外の何物でもねぇけど、旅行にでも連れてってやろうかと思ってたし、良かったと言えばよかったのかもしんねぇ。

つーか逆に状況が状況なだけに、これ以上ネガティブになりたくもない。可能な限りポジティブに考えてねぇと、マジでうつ病になるぞ俺は。少なくともエルメスの事考えてる間は余計なことを考えずに済むから、ある意味俺にとってもいい薬だ。

煙草に火をつけながら考え事をしている隣で、ツァンはクスリと笑う。

「実はね、俺勝手にカイに親近感持ってんだけど」
「何で？」
「俺と同じだから、かな」
「同じって？」
「大事な人との未来の為に、組織と過去を捨てたところ」
「お前も？」
「そう。俺元々デイヴィスファミリーの人間でさ、組織に拾われて育てられた。ファミリーの為にトリンとアミンに近づいて、トリンを売ってアミンを殺すつもりだった。だけど、いつの間にか俺は本気でトリンを愛してて、それに気づいたアミンが言ったんだよ。組織に恩があるのはわかるけど、過去は組織に置いてきて、未来を全部トリンにあげてくれって。それで組織を抜ける決意をした。結果的にはトリンがボスの娘だったお陰で丸く収まったけどね」
「そーか、お前も色々あったんだな」
「その時はやっぱすっごく悩んだけど、どうしてもトリンを幸せにしたかったし、トリンと幸せになりたかったから、今は後悔してない」
「そうか」
「多分カイもその内そう思える日が来るよ」
「だといいけどな」
「カイは悩んでるだろうけど、努力してるから絶対大丈夫」

にこっと笑いながらツァンはお腹を撫でるトリンに目を向ける。ツァンは悩んで選択した未来で、幸福を勝ち取った。他人に押し付けられた人生を退けて、自分で悩んで選択した未来。

苦悩と努力の果てに幸福が待っているという、いい前例だ。最初は嫌だと思ったけど、いい話を聞けてイイもんを見れた。ここに来たのは正解だったかもしれねぇ。

「お前らの子供が生まれるまでは、ベトナムにいようかな」
「もしかして、子供好きなの？」
「まーな」
「超意外なんだけど」
「うるせーよ。言っとくけど俺もう2人育ててるぞ。一人は失敗したけど」
「それ聞いちゃうと心配なんだけど」
「任せろ」
「ヤダよ」

この二人の幸福がエルメスの幸福になるなら、俺もちょっとくらいは我慢するとしよう。少なくとも魂喰われる前に、少しくらいは幸せにしてやんねぇと可哀想だからな。

吸血鬼だって人間より長生きってだけで、いつかは死ぬ。人間と同じように苦しいことも楽しいこともあっていいはずだ。

髪に見放された存在にだって、幸福になる権利はあるはずだから。

LETTER－7　Complaint　［苦情］

拝啓　バカマスター

私、怒ってるんですけど。本気で怒ってるんですけど！　一体どういう事ですか！

ジュノ様に聞きました。私の魂売ったらしいですね。どういうことですか。一体今度は何を企んでるんですか。

ボニーさんとクライドさんの時以上に驚くことはもうないだろうと思ってたのに、あっさりビックリ一位に躍り出ましたよ。一体どういう事ですか。

大体みんなの命を保証するために私の魂を捧げるなら、なんで戦争が起きた時にその契約を執行しなかったんですか？　私一人の命でみんなが助かるなら、私はそれでよかったのに。

アーサーさんがあの時私だけでも守ろうとしてくれたのはわかるけど、じゃぁどうして私の魂をジュノ様に売ったんですか？　本当に、何を考えてるんですか？

今に始まったことじゃないけど、アーサーさんが何を考えてるの

か、全然わかりません。カイまで巻き込まれて、命を狙われる羽目になりましたよ。しかも、カイは面白く魂を奪う手伝いまでさせられる羽目になりましたよ。一体どうしてくれるんですか。

なんですか、面白くって！　こっちは殺されるんだから、何にも面白い事なんかありませんよ！　本当ムカつく！

それでも一応冷静だったカイは、なんかずっと考えてましたよ。そりゃ、私だって何の目論見もなくアーサーさんが私の魂を売るとは思えませんよ。アーサーさんの事だから、絶対何か裏があるはずですもん。

でもね、それを差し引いても裏があろうがなかろうが、ムカつくものはムカつくんです！　私は本当に怒ってるんですからね！

私はアーサーさんが帰ってくるのを待つって決めたのに、アーサーさんが帰ってきたら私は死ななきゃいけません。

アーサーさんが帰ってきて、やっと前みたいに戻れるって喜んで、ボニーさんとクライドさんにも再会して私が幸せを取り戻した瞬間に、ジュノ様は私の魂を奪うのでしょう。

私はこれからアーサーさんが帰ってくるまで、ずっとその事を心配しながら生きなきゃいけないんです。

アーサーさんが帰ってきて私が死んだら、それまでずっと私を支

えてくれたみんながどれほど悲しむか。みんなの思いと努力が水の泡になってしまうのかと思うと、悲しくて仕方がありません。

だから私はもう、あなたを待ちません。待つのをやめます。アーサーさんが帰ってくるのを待つって事は、自分が死ぬのを待つって事だから。みんなの悲しみを迎えることになるから、もうやめます。

ていうか、もう逃亡しちゃいましたもんね！　もうアーサーさんなんか知らない！　私にはカイがいるからもういいです！

よくよく思い出してみたら、ジュノ様の配下の悪魔に殺されそうになった時も、助けてくれたのはアーサーさんじゃなくてカイでしたから！

その間アーサーさんは助けるどころか、私の魂をジュノ様に売ってたんですもんね！　最低！

なんか前はクリシュナと二人でカイが頼りにならないのどうの言ってましたけど、アーサーさんに比べたらカイの方がよっぽど頼りになりますよ！　バカ！

アーサーさんが帰ってきたら私の所在なんてすぐにバレちゃうでしょうけど、捕まりっこありませんからね！　なんたって私は瞬間移動の術を習得しましたから！　ざまーみろ！　一生逃げ回ってやりますよ！

もう、事ここに至ってくると、アーサーさんが私を好きだっての

も怪しいもんですよ。アーサーさんならみんなを騙せそうですもんね。

本当は私の事なんかどうでもよくて、私の魂を代価にして何かしようとしてるんでしょ。あの時どうしようもなかったことって言ったら、やっぱりミラーカさんですよね。術者に魂を捧げちゃってたから、ミラーカさんはどうしても救うことが出来ませんでしたもんね。

私の魂を代価にして、ミラーカさんを生き返らせる気ですか。そうですか。

まぁ、ミラーカさんならいいような気もするけど・・・気が向いたら協力してやってもいいです。でも、今は絶対イヤ！　ていうか、それなら自分の魂売りなさいよ！　バカじゃないの！　自分だけ幸せになろうとして！　ムカつく！

ていうか、すっかり忘れてたけど二度ならず三度までもキスしましたね！　腹立つ！　別に必要なかったでしょ！　普通に飲めって言われたら自分で血ぐらい飲みますよ！　バカじゃないの！

もう本当なんなんですか。本当ムカつく。今から一時間歯磨きしてきます！

もういいですよ。アーサーさんが自分だけいい思いしようとする

なら、いいです。私だって自分の好きにします。自分の好きに生きて幸せ掴んでやりますよ！

別に私アーサーさんが居なきゃダメってわけじゃないし！　アーサーさんが居ないことになんてもう慣れましたもん！

私にはもうカイがいるから、アーサーさんなんていりませーん！

バーカ！　バカマスター！

ま、アーサーさんがジュノ様との契約を取り消して、謝ってくれるなら許してやろうかなって考えなくもありません。けど、考えた結果やっぱ許せないってなるかもしれませんけどね！

でもそれって自業自得ですからね！　バカ！　どうせなら私の魂使って、クリシュナか北都を蘇生させてやりますよ。いっそのことジュリオさんを蘇生させてやりますよ！

まぁ、できるかどうかは知りませんけど。絶対ただでは死にませんから！　目にモノ見せてやる！

敬具

FILE－35　Career［経験］

シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動報告

逃亡生活を始めて半月経った。追手の追撃は今のところない。平和そのもの。変わったところと言えば、エルメスが異常に長時間歯磨きをするようになったことくらいだ。

なんなんだろうな、あれは。歯磨き依存症？　新しい形の精神病か？

「お前もう３０分歯磨きしてっけど、なんか意味あんのか」
「ほーほふ！」
「なんて！？」

歯磨き中のエルメスに話しかけたせいか、何を言ってるのかわからん。口をすすいでタオルで拭いたエルメスは、何故か怒ったような顔をしている。

「消毒よ！」
「消毒？　ゴキブリでも食ったのか」
「そんなわけないでしょ！　アーサーさん！」
「は？　アーサーの消毒？　意味わかんねぇ」
「ん？　もしかしてカイはあの時見てなかった？」

「なにを？」
「・・・なんでもない」
「意味わかんねぇ。なんだよ？」
「なんでもなーい！」

って言われても気になるんだけど。アーサーの消毒ってなんだよ。アーサー喰って消毒？　いや、そもそも喰ってねぇだろ。
あの時？　あの時見てたって、戦争のときか？　歯磨き？　消毒？　・・・あぁ、思い出した。

「なんだお前、舌まで入れられたのか」
「やっぱ見てたんじゃん！　ていうかそこまではなかった・・・いや、ん？　どうだったかな？」
「そんな連日長時間歯磨きするほど、口ン中掻き回されたんか」
「ヒィ！　嫌なこと言わないでよ！　そうじゃないけどムカつくの！　これは復讐なの！」

プッ。嫌なことだってよ。残念だったな、アーサー。あーあ、アーサーがエルメスの魂売ったりするからだぜ。
エルメスがアーサーに惚れる確率は、今回の件で相当低くなったな。ざまぁみろ。それにしても、ちっちぇえ復讐だな。

エルメスの話を聞きながら笑ってたら、別の復讐を思いついた。

「エルメス、もっと効果的な復讐を思いついたぞ」
「なに！？」

効果的な復讐という言葉にエルメスはピョンと飛びついてきた。
そのまま体を反転させてエルメスを壁に押し付けて、顔を近づけた。

「俺が消毒してやろうか？」

はっきり言って、これはただの趣味だ。人妻だったくせに、こういう話題になるといつもエルメスは過剰に反応する。いつも通りエルメスを虐めて、怒ったエルメスがキャンキャン言うのが楽しみだ。

「うん！　是非！」
「なんでだよ！」
「ぬゃ！」

相変わらずエルメスは俺の想像の斜め上を行きやがる。思わずツッコみと同時に頭突きした。
つーか、条件反射で頭突きしたもんだから、手加減できなかった。ケロリとするエルメスとは対照的に、想定外の痛さに文字通り頭を抱える俺。

「痛ってぇー・・・なんで俺の方が痛てぇんだよ」
「さぁ？」
「つーかお前アホか。何言ってんだお前」
「むしろそれはこっちのセリフじゃない？」
「そーだけど、何だよ是非って。お前俺に惚れてんのか」
「違うよ！　ちょっと怒りで我を忘れてただけ！」

「ハイハイ。あぁ、俺って罪な男だな。アーサー許せ。まぁ、俺に惚れない女の方がどうかしてるけどな」
「何その自信!?　バッカじゃないの！」
「お前がな」

結局エルメスはキャンキャン言いだして、俺の望んだ展開に。さすがはエルメス、面白れぇ。よし、もうちょっと虐めてやろう。

「お前の気持ちは嬉しいけど、ゴメン」
「何謝ってんの!?　気持ちなんかないし！」

俺の謝罪にキーキー文句を垂れるエルメス。そんなエルメスに罪な男・俺は、憤慨するエルメスの両肩をギュッと掴んで、真っ直ぐにエルメスの目を見つめて、笑いをこらえつつ、こう言ってやる。

「でもな、お前の事は本当に大事に思ってる。世界で一番お前が大事なのは変わらない。お前は優しいし可愛いし、その内絶対好きになるから。だから、それまで待っててくれ」
「え？　・・・本当？」

エルメスは驚いた顔をしてキョトン顔をしている。そしてその表情のまま左上にヒョイと視線を向けて考え始めて、小さく笑った。恐らくエルメスの心中はこうだ。

「待てって言われても別に好きじゃないけど。でも、この際アーサーさんなんかどうでもいいけど、カイのことはちゃんと考えた方がいいのかも。それにしても、カイが私のことをそんな風に思ってて

くれたなんて・・・そんな風に思ってくれるのは嬉しいな」

絶・対・間違いない。エルメスのそのニヤケた面があまりにもおかしくて、とうとう吹き出した。

「ブッ！　アハハハ！　何喜んでんだ！　んなワケねーだろ！　バーカ！」

「えぇ!?　ひ、ヒドーイ！　最低！」

一気に怒り出したエルメスは俺の手を振り払って、更にキャンキャン吠えだす。そんなエルメスに俺、爆笑。

あー、マジ最高だコイツ。んなこと万に一つもねぇっての。確率で言えば宝くじの方が高いくらいだっての。はー、マジウケる。笑いすぎて涙でてきた。

「もー！　カイのバカ！　ヒドイ！　最低！」

「アハハハハハ！」

「ちょっと、いつまで笑ってんのよ！」

「はー、マジ面白れぇ。マジで最高だな、お前」

「カイは最低だよ！　もぉぉ！　バカ！」

「！！　痛ってぇぇぇ！」

とうとうキレたらしいエルメスは俺の大腿部に猛烈な蹴りを入れて、その勢いで転倒する俺に一瞥をくれると、その場から走って出て行った。

「痛てぇぇぇぇ！　クソ！　マジ痛てぇんだけど！」

ひとしきりその場で悶絶して何とか体を起こした。ブツブツ文句を言いながら痛みをこらえて立ち上がろうとすると、蹴られた右足に妙な違和感。

ゴキン。

「マジかよ！　骨折してるし！　あンの野郎・・・！」

自分のしたことは棚に上げて、俺は心底リベンジを誓った。

治った足で速攻リビングに攻め込むと、リビングではトリンとエルメスが二人で話をしていた。さすがにこの場だとまずいと思って、二人の背後に仁王立ち。

「オイ、エルメス。ちょっとツラ貸せや」
「なによ、やる気？」
「当たり前だろーが！　こっちは骨折してんだぞ！」
「何言ってんの。自業自得でしょ？　別に相手してあげてもいいけど、カイじゃ私の足元にも及ばないよ」
「上等だコルァ！　表出ろコルァ！」
「フン、威勢だけじゃ私には勝てないよ」

「え、ちょ、ちょっと、二人とも・・・」

フフンと鼻を鳴らして、自信満々に立ち上がるエルメスを制止するようにトリンが声をかけると、エルメスはトリンににっこりと微笑んだ。

「トリン、心配しないで。カイ程度の相手、すぐ終わるから」

エルメスのその言葉にブチ切れた。この俺様に向かって「カイ程度」だと？　ナメやがって！

外に出るのも待たずに、俺に視線を向けたエルメスに殴り掛かると、エルメスは笑ったまま俺の拳をパシッと受け止めた。

「ちゃんと本気出してる？　この程度じゃ勝てないよ」

「テメェごときに本気出すかよ！」

「手加減して負けたらみっともないよ」

「それはテメェだろ！」

「教えてあげてるんじゃない」

そう言ってニヤリと笑うエルメスになんだか嫌な予感がして、腕を引っ込めようとしたけど、エルメスに握られた手はびくともしない。一瞬焦った後、嫌な予感は的中。

エルメスに握られた手が、その部分からパキパキと音を立てながら氷結していく。強烈な冷気から激痛が響く。

あまりの痛みに無理やり腕を振り払おうとした瞬間にエルメスが手を離した。

「もう、無理に暴れると手が壊れちゃうよ？」
「痛ってぇ・・・テメェ能力使いやがって、卑怯だぞ！」
「戦いにおいては卑怯も正攻法もないんでしょ？　勝ちさえすれば手段は常に正当化されるって言ったのはカイじゃない」
「テメェ・・・」

そう言えば前にエルメスとストリップ剣劇で大喧嘩した時に、そんな事を言った気がする。まさか覚えてやがったとは、チクショウ。

「どーせならまた脱いでくれると、俺も燃えるんだけどな」
「そう？　じゃぁ燃やしてあげる」

そう言ってエルメスがパチンと指を鳴らすと、掌にボゥっと炎が燃え上がる。
ヤベ、どうしよう。勝てる気がしねぇ。よく考えたら、エルメスに触れた時点で爆破されてもおかしくねぇんだった。

正直内心かなり焦って、作戦立てるべきだったと後悔していると、天の助け。

「アミン、屋敷を火事にする気？」
「あっ、そっか、ゴメン」

ソファの背もたれに顔を乗っけて呆れたように溜息を吐くトリン。

トリンのその言葉に、エルメスは慌てて炎を引っ込めた。
そのタイミングでエルメスに中段蹴り。吹っ飛ばされたエルメスは反対側のソファにドサッと倒れこんだ。

「ちょ！　今私トリンと話してたでしょ！？」
「だから？　戦闘中によそ見してんじゃねぇよ」
「いや、だから家の中でケンカはやめてくんない・・・」

力なく制止しようとするトリンにイラッと来て視線を向けると、なんだか顔色が悪い。不審にトリンを見る俺にエルメスも気づいたのか、エルメスが起き上がってきた瞬間トリンが顔を歪めた。

「うっ・・・痛・・・」
「トリン！　どうしたの！？」
「お腹、痛い・・・」
「えぇ！？　もしかして陣痛！？」
「そうかも・・・」

トリンの様子に一瞬でパニックに陥る俺とエルメス。トリンの出産予定日はまだ半月先のはずだったから、トリン本人も予期していなかったようだ。

「ど、どうしよう、どうしよう」
「とりあえずお前はトリンに着いてろ。俺は車回すから、オイそこのアンタ、ツァンとトリンの両親呼んで来い」

「は、はい！」

メイドに呼びに行かせて、俺も車を取りに行こうとエントランスへ向かった瞬間、エルメスが悲鳴を上げた。

「どうした！？」
「トリン！　破水！」
「破水！？　って、破水したらどうなるんだ？」
「えっ！？　わ、忘れたけど、なんかヤバかった気がする！」

エルメスも突然の事に相当混乱しているようだ。その時トリンの両親とツァンが上階から慌てた様子で降りてきた。

「おばさん！　トリン破水したんです！　どうなるの！？」
「本当！？　それは、もう生まれちゃうって事だよ！」
「マジで！？」
「ヤバい！」

俺ら全員大慌て。その間もトリンは苦しそうで、駆け寄ったツァンが手を握って一生懸命励ます。その隣でエルメスは何故か頷いた。

「よし！　私がトリンを病院に連れてく！」
「は！？　お前大丈夫なのか？　トリンは妊婦だぞ？　影響ないのか？」
「でも一刻を争うんだよ。人間だって構成物質は基本的には私達と変わらないはずだから、行けるはず。ツァンも一緒に行こう」

「え、どういうこと？」
「カイは後からトリンの両親と一緒に車で来て」
「・・・わかった」

確かにエルメスの言う通り、チンタラしてたらトリンも子供も危険だ。トリンを抱き上げたエルメスは、戸惑うツァンに腕に捕まるように言う。

「え？　どうすんの？」
「大丈夫、すぐに病院に着くから捕まって」
「わ、わかった」

そう返事をしてツァンがトリンの腕を掴んだ瞬間、３人はその場から姿を消した。それを見届けて驚愕して呆然とするトリンの両親を連れて、俺も病院へと車を走らせた。

病院に到着して処置室の前に行くと、エルメスが部屋の前のソファに座っていた。

「エルメス！　トリンは！？」
「あ、今処置してもらってる。ツァンも一緒にいるよ。たまたま先生が手が空いてたみたいで、本当に良かった」
「そっか。じゃぁ後は祈るのみだな」

そう言って俺もエルメスの隣に腰かけるも、トリンの両親はその場をウロウロ。娘と孫の緊急事態に気が気じゃないらしい。トリンの両親の様子を見て、俺とエルメスはなぜか和んでしまった。

「マイケルさん、おばさん、とりあえず座りましょ。ツァンがついてるから大丈夫ですよ」
「そうそう。それに俺らの祈りは神様聞いてくんねぇから、二人も祈ってくんなきゃ足りねぇよ」
「あ、確かにね。むしろ私達が祈ったら、トリンまでとばっちり受けちゃうかも」

そう言って力なく笑うエルメスを見て二人も落ち着いたのか、大人しくソファに腰かけた。その時、処置室から悲鳴が響き渡る。

「うぅー！　痛い痛い痛い！」
「トリン！　頑張れ！」

いよいよ本格的になって来たらしいトリンの悲鳴とツァンが励ます声。聞いてくれないとわかっていても、俺もエルメスも必死に祈らざるを得なかった。

それから待つこと5時間、処置室から出てきた医者に全員で立ち上がって詰め寄った。

「先生！　トリンは、赤ちゃんは!?」

掴み掛るマイケルさんに、先生は病室に視線を移す。開けられたドアからは微かに赤ん坊の泣き声が聞こえた。

「ちゃんと検査しなければわかりませんが、破水してましたし逆子でしたけど、赤ちゃんは無事に生まれましたよ。対処が早かったおかげですね」

その言葉に全員でバンザイして大喜び。とうとうトリンの両親は泣き出してしまって、その様子を見た医者も嬉しそうに笑った。

「病室に移ったらはじめましてのご挨拶ができますから。もう少し待っててくださいね」

「はい、先生ありがとうございます！」

少しするとツァンも出てきて、トリンは裏から病室に赤ちゃんと搬送されたようで、少しするとナースが呼びに来た。

案内されて病室に入ると、ベッドで横になるトリンの隣には小さな赤ん坊が静かに寝息を立てていた。その赤ん坊にみんな一瞬でメロメロだ。

「うわぁ、すごい、生まれたての赤ちゃんってこんなに小っちゃいんだね」

「うーん、トリンに似てるか？　男？　女？」

「女の子だよ。名前はまだ決めてないけど、この子には感謝しなきゃ」

「そうだね、そうだね」

「アミン、違うわよ」

「え？」

てっきり生まれてきたことに感謝、的なことだろうと思ってた俺とエルメスはトリンに視線を移すと、呆れたように笑った。

「この子のお陰で二人の喧嘩が止められたんでしょ」
「あ、そうだった」
「そう言えば、忘れてたな」
「仲直り出来てこっちも安心したわ。この子に感謝してよ？」
「すいません」
「ありがとうございます」

謝罪とお礼を述べる俺とエルメスにまた呆れたように笑いかけたトリンは、赤ん坊に視線を移して微笑む。その表情は母親の慈愛そのもので、見ているこっちも幸せな気分になった。
が、急激に懸念すべき事案が発生する。

「エルメス、俺ちょっともう限界」
「実は私も」

安心したせいか、どっと疲れが押し寄せてくる。ベッドの傍から離れて後ろに行こうとする俺らに、みんなはどうしたの？　と首を傾げた。

「私達、昼間の眠りには勝てないの。ごめんね」
「あ、そう言えばもう朝か」

「そうそう。このままここにいたら俺ら寝ながら灰になるから、悪いけど先に屋敷に戻る」
「そうだな。二人ともありがとう」
「いえいえ、じゃ悪いけどお休み」
「トリン、夜になったらまた来るね」
「うん、二人ともありがとう。お休み」

見送るデイヴィスファミリーにお休みの挨拶をして、手を取った俺らは屋敷の部屋に転移した。
部屋に着いた瞬間に、猛烈な眠気に襲われる。もうフラフラな俺はベッドに倒れこんで、エルメスはクローゼットを慌てて開ける。

「うぅ、早く着替えなきゃ、このまま寝落ちしちゃう」
「俺もう、無理。寝る」
「ダメだよ、ちゃんと着替えなきゃ」
「うるせー、お前が骨折させたせいで修復にエネルギー使ったんじゃねぇか。もー無理」

そう言ってそのままベッドに潜り込んだ瞬間に記憶が飛んだから、そのまま寝たっぽい。
翌日目が覚めると、エルメスは既に起きたようでいなかった。丁度着替えが終わった頃に、エルメスが部屋に入って来た。

「カイ、ご飯持ってきたよ。それとお風呂も準備してもらったから入ってね」
「お、気が利くな。ご苦労」

「なんでいちいち偉そうにすんの？」
「偉いから」
「私の方が偉いよ？」
「俺の方が人として偉い」
「人じゃないくせに・・・ていうか前も同じ会話をした気がする」
「そういえばそうだな」

前に同じ会話をした時は、スペインで人殺しの真っ最中だったんだっけ。あの時人殺ししながらこんな話をしてたのに、今は人の誕生を祝いながらこんな話をしているのか。
うっぁぁ、平和だなー。これが人並みの幸せと言う物か。ていうか今の方が本来なら普通なんだよな。

エルメスも同じようなことを考えていたのか、毒気を抜かれたような顔をして俺に血を渡しながら、隣に腰かけた。

「トリンも赤ちゃんも無事で、本当に良かったね」
「あー、昨日は超焦ったな」
「本当。でもいい経験が出来て良かった！」
「本当だな」

今まで俺もエルメスも、人の「死」しか見てこなかった。人の「生」を見るのと人の「死」を見るのは全然違う。
俺達は人の血を食らう化け物で、人を殺さなきゃ生きられない。トリンとツァンがいなければ、きっと一生出会う事がなかったであろう人の「生」と言う物は、本当に素晴らしい。

俺もエルメスも吸血鬼だから、自分の子供を手に入れることは一生叶わない。不老不死でも、強くても、こんなに不幸なことはない。人間が羨ましい。人間は素晴らしい。

人ってすげぇんだな。母親は偉大だ。赤ん坊は人類の宝だ。生まれてきただけで、人に幸福を振りまく。

人間じゃない俺らにとってその瞬間に立ち会えた経験は、貴重な財産だ。

ＦＩＬＥ－３６　Ｃｈｅｅｒｆｕｌ　［快活］

シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動報告

支度をして再び病院に向かった。今度は普通に車で。その事になぜかエルメス上機嫌。

「カイが運転してるの初めて見た！」
「あー、そういやそうだな」
「ドライブー！」
「いや、違うだろ」

まぁ吸血鬼に本来車なんて必要ない。ただ、人間として生活するうえで車があった方が色々と都合はいい。でも城にいた頃はエルメス達は車を所有してなかったし、今までも所有したことがないんだろう。と、考えていたら。

「あぁー！　そう言えばインドの空港に車放置しっぱなしだ！　アレどうなったんだろう？」
「なんだ、車あったのか」
「うん、クライドさんとボニーさんは運転できたから。インドから

出る時に空港に放置してそのままだ」
「もう3年も経ってんなら、さすがに廃棄されたんじゃねぇのか」
「だよねぇ、懐かしいなぁ。クライドさんのフォード」
「フォードだったのか」
「うん、ボニーさんとクライドさんは生前からフォード愛好家だったんだって」
「へぇ、なんで？」
「速いから。強盗の際に逃げるのに役に立つからって」
「・・・へぇ」

エルメスもそうだが、つくづくアーサーのファミリーの人間は変わり者だ。あの二人、生前は強盗犯かよ。どうりでチンピラのはずだ。つーか一般人と、大学教授と強盗犯と貴族と王族が同居してたのか。スゲェ環境だな。
勝手に納得して呆れる俺の横でエルメスは更に興奮してハシャギだす。

「でもね、基本的に長距離移動の時にしか車使わなかったから、こういう風に日常的に乗るのってなんか新鮮！　楽しいー！」
「あぁ、そーですか。そりゃよかったな」
「うん！　カイも楽しいでしょ？　ドライブ」
「別に。つーかドライブじゃねぇって」
「もー、カイつまんなーい」
「うるせぇ。つーかもう着くぞ」
「ちぇっ、ケチ」
「そこでケチはおかしいだろ」

途端にむくれるエルメスをほっといて病院に到着。駐車場に車を停めて車から降りると、何故かエルメスから熱い視線。

「なに、気持ちワリィんだけど」
「ヒド！　人が感動してたのに！」
「は？　なんで？」
「車をバックで停めてる時の男の人はカッコよく見えるって、本当だったんだと思って」
「まぁ俺は何してもカッコいいけど。お前俺に惚れるなよ、迷惑だから」
「惚れないわよ！　ていうか迷惑とかヒドくない！？」
「ヒドくねぇ。マジ迷惑」
「やっぱヒドイ・・・ていうかムカつく！　何様？」
「俺様」
「バカじゃないの？」
「お前がな」
「ムカつく！　もう二度とカイの事褒めてやんないから！」
「いらねぇ。お前からの褒め言葉に有難味なんてねぇよ」
「むきー！」

と、言いつつちょっと残念な俺。しまった、言いすぎた。まぁでも、エルメスの事だからすぐに忘れるだろう。バカだから。

暴れるエルメスを引きずってトリンの病室に行くと、トリンの両親がベッド脇に座っていて、その反対側でベッドに持たれる様にツァンが眠っていた。

「ツァンさっきまで起きてたんだけど、さすがに一晩中起きてたから眠くなったみたい」
「アハハ、そうなんだ。マイケルさんとおばさんも私達が来たから大丈夫ですよ。一旦屋敷に戻って休んでください。お風呂もお食事も用意してもらってるから」
「あら、エルメスは気が利くわね。ありがとう。じゃぁ帰りましょうか」
「そうさせてもらおう。ツァン、起きなさい。帰るよ」
「んぁ、はい・・・」

トリンの両親に揺り起こされたツァンは眠そうに顔を上げる。そんなんで運転して帰れんのか。と、考えていたら一つ気付いた。

「そーいや、おばさん今エルメスって呼んだか？　今までアミンって呼んでたのに？」

俺の質問に目が覚めたらしいツァンがにこっと笑う。

「一緒だと紛らわしいからな」
「一緒？」

首を傾げる俺とエルメスに笑ったトリンは、赤ん坊を抱き上げてエルメスに抱かせた。

「この子の名前決めたの。アミンって名前にする」
「えぇ！？　本当に！？　嬉しーい！」
「ふっ・・ふぅ、ふぎゃぁ、んぎゃぁ」

「あわわ、泣いちゃった」

赤ん坊の傍で大声を上げたエルメスのせいで赤ん坊が泣きだして、エルメス大慌て。エルメスは必死にあやすも、中々泣き止まないので、俺が赤ん坊を取り上げた。

「お前抱き方が違うんだよ。よーしよし、怖いオバチャンはもういないからなー」
「誰がオバチャンよ」

そう言って抱いた赤ん坊の背中をたたきながらあやしていると、すぐに赤ん坊は泣きやんだ。それを見たエルメスをはじめ全員驚愕。

「カイすごーい！　伊達に二児のパパじゃないねぇ」
「当たり前だろ。お前とはキャリアが違うんだよ。つーかもう俺の事褒めないんじゃなかったのか」
「あ、そうだった」

ほら、やっぱり忘れてた。やっぱバカ。俺一安心。なぜか悔しそうな顔をしてるエルメスの横で、ツァンもトリンも感心した視線を向ける。

「すげー、カイ本当にパパやってたんだな」
「ていうか、カイくんがパパって似合わなさすぎるよね」
「確かにね。カイはどう見ても子供好きには見えないもん」
「うるせー。余計なお世話だ」

尊敬されてもいいはずなのに、なぜか笑われる俺。俺が子供好きなのそんなにおかしいか？　つーかむしろ俺は慈愛の天使だぞ。おかしいはずはない。コイツらがおかしい。

ひとしきり笑った後、ツァンとトリンの両親は「じゃぁお願いね」と病室を後にして、俺らも赤ん坊をベッドに戻して、そのわきに座った。

「ねぇトリン、どうして私の名前にしてくれたの？」

子供ベッドの赤ん坊を覗き込みながらエルメスがトリンに問いかけると、トリンは嬉しそうに笑う。

「エルメスみたい女の子になってほしいと思ったんだ」
「え？　私みたいに？」
「娘にバカになってほしかったのか」
「違うわよ！　エルメスは、私達にとって運命の友人だから」
「運命の友人？」
「そう。エルメスと出会わなかったら、ツァンにも出会ってなかった。ツァンもずっとファミリーの人間だっただろうし、相変わらずお父さんはマフィアでお母さんと結ばれることもなかったんだと思う。エルメスと出会って、ツァンと出会って、私達もお父さんたちも結婚して、赤ちゃんまで生まれて。エルメスがいなかったら、今私きっとこんなに幸せになれなかった。私達はことごとくエルメスに運命を変えられたの。運命が変わって、今最高に幸せ。だから、この子にもエルメスみたいに、誰かに幸福を振りまく運命の女の子になってもらえたらなって思ったんだ」

トリンのその言葉を聞いて、エルメスは涙を零した。きっと、エルメスにとってその言葉は何よりも嬉しかったに違いない。あの戦争で家族が死んだことで自分を責めていたエルメスなら、なおのこと。

「トリン、ありがとう。すごく嬉しい。トリン達が今幸せだって思ってくれて、私も凄く嬉しいし、幸せだよ。本当にありがとう」

「お礼を言うのはこっちの方だよ。ありがとう、エルメス」

泣き出したエルメスの頭を撫でてトリンは嬉しそうに、ちょっと困ったように笑う。

幸福を振りまく運命の女の子。エルメスには、人を変える力がある。エルメスの傍にいたらみんな心を動かされて、幸せを望んでしまう。そしてエルメスの望んだとおりに、幸せになるんだ。

エルメスを、取り残して。

それでもエルメスは、自分の周りが幸せでいることが幸せだと思ってる。それは俺も同じかもしれない。エルメスの幸せが、俺の幸せだと思う。

もしエルメスがもっともっと昔にジュリオ様と出会っていたら、運命は変わっていたのかもしれない。

ジュリオ様の心を支配した憎悪を溶かして、人生をやり直す勇気を与えてくれたのかもしれない。そんなこと今考えたって不毛なんだけど、エルメスにならそれが出来たのかもしれないと思うと、い

っそのことジュノ様にそれをお願いしたくなる。

あ、でもダメだな。そうなると、俺達とエルメスは出会わないことになる。それは嫌だな。うん、無理。

きっと、今はこうなる運命だったんだろう。変わるのは、これからか。

帰りの車の中、エルメスは未だに思い出し泣きだ。最近気付いたけど、コイツ感動屋だな。

既に若干呆れてきた俺の様子に気づくこともなく、エルメスは口を開く。

「私、すっごく嬉しかった」

「あぁ、よかったな」

「うん、あのね、私ね、私は災厄だと思ってたの」

その言葉に思わずエルメスに視線を移すと、「危ないから前見て」と笑われた。前方に視線を戻しながら「なんで？」と尋ねると、エルメスは小さく笑う。

「まだそんな事言ってんのかって思うかもしんないけど、やっぱりあの戦争でのことで後悔はあるんだ。私がもっと早く覚醒してればみんなを助けられたのに、助けられなかった。あの時私は最後まで何もできなかった。生き延びてなお、カイやみんなに心配かけて、迷惑かけて、私はみんなを不幸にしてる。これを災厄と言わずにな

んて言うのかなって」
「そんなこと思ってる奴一人もいねぇよ」
「うん、わかってる、わかってるんだけどね。でも、私のせいで誰かが苦しんでるのは間違いないから」
「たとえ苦しんでたとしても、それはお前のせいじゃない。単なる足掻きだ」
「うん、その事にさっきやっと気づいたよ。トリンは私が運命を変えたって言ったけど、違うんだ。トリンもツァンも自分たちで悩んで考えて、幸せになろうって足掻いて勝ち取ったんだよ。私が変えたわけじゃない。私は友達に幸せでいて欲しいって思っただけ。でも、私がそのきっかけになれたことは、凄く嬉しい」
「お前がアイツらの幸せを願って説得したから、アイツらも足掻こうと思えたんだよ。お前は災厄なんかじゃない。少なくともアイツらにとっちゃ、お前は幸福の象徴で、幸福を振りまく運命の女・・・うぉっ！」

いきなりエルメスがタックルをかましてきたせいで、ハンドル操作を誤って対向車にぶつかりそうになった。
何とかエルメスを引きはがすと、エルメスも驚いた顔をしていた。

「びっくりしたー・・・」
「ソレ俺のセリフ！　危ねぇだろ！　状況考えろ！」
「ゴメン。嬉しくて、つい」
「つい、じゃねーよ。全くお前は・・・」
「えへへ、ゴメンね？」
「笑い事じゃねーし」

さっき泣いたカラスがもう笑いやがる。エルメスの喜怒哀楽はパラパラ漫画並に高速で切り替わる。気紛れにも程がある。まぁ、慣れたからいいけど。

事故未遂ですっかりテンションが上がったらしいエルメスはにこっと笑った。

「ねぇ、カイは今幸せ？　それともやっぱり不幸？」
「ん？　フツー」
「普通って何？」
「状況的には不幸極まりねーけど、お前虐めんのが楽しすぎる。プラマイゼロでフツー」
「なにそれ・・・あぁ！　私といるの楽しいんだ？」
「全然」
「もー、素直じゃないな！　私は楽しいよ！　カイも楽しいでしょ？」
「いや、疲れる」
「んもぉぉぉ！　カイのバカ！」
「ハハハ！　あー、やっぱお前面白れぇ。ウソウソ楽しいって」
「ウソ！　今のは意地悪言うのが楽しかったんじゃない！　バカ！」
「バカはお前な」

本当の所を言うと、俺は全然幸せじゃない。あれから半年以上経ってだいぶ落ち着いてきたけど、あの出来事はどう転んでもいい思い出にはならない。

ジュリオ様の事もそうだし、スレシュのことだってすんなり受け入れられたわけじゃねぇし、アーサーの事もジュノ様の事も自分のことも、俺の苦悩の種は順番待ちをしてる位だ。

でも、エルメスといる時は、エルメスと笑い合ってる時だけは忘れられる。それに、エルメスが楽しいと言ってくれるなら、俺はそれでいい。そう言う日が続くことがエルメスの幸せならば、俺はそれでいい。

そう言う日が続いて、それが当たり前になって以前の様に、「楽しいし、幸せだよ！」と明るく笑顔で言ってくれる日がやってくるなら、俺は幸せだ。

そうなってくれるなら、いくらだって足掻いてやるさ。

ＦＩＬＥ－３７　Ｃｈｉｓｐａ　［火花］

シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動報告

トリンの出産から約2週間後、ベトナムに来てからちょうど一か月が経過。あの戦争から7か月が経過。

夏真っ盛り。ベトナムは暑い国だと聞いたが、吸血鬼の俺らには大して影響はない。とりあえず、インドもだけど暑い国で昼間に起きてる奴が気の毒だ。

そのせいなのかなんなのか、エルメスは買い物に行きたいと言い出して、今スポーツショップ。

「お前バカだろ。何が悲しくて真夜中に水遊びしなきゃいけねーんだよ」

「絶対楽しいよ！　夏は海と花火って決まってるんだよ！」

「知らねーよ。面倒くせぇ」

「行く前から遠足は始まってるんだよ！　ほら、カイも早く水着選んで！」

遠足なのか？　つーかエルメスのハシャギっぷりが超うぜぇ。第一俺ら海行っても楽しくねぇだろ。海に拒絶されてんだから。

まぁ、既に花火は買っちまったし、気分だけでも楽しみたいって事なんだろう。だからってわざわざ水着を買う必要もねぇと思うけど。

適当に買い物を済ませて、例によってハイテンションなエルメスと共に海へＧＯ。到着した時には既に午前０時を回ってて、さすがに海には誰もいなくて閑散としてる。

車を停めて浜辺に降りると、エルメスは速攻波打ち際に走り出した。

「うわーい、海ー！　ヒィ！」

案の定海に拒絶されて、後ずさりするエルメス。さっきまであんなに浮かれてたのに、泣きそうな顔をして俺に振り向いた。

「カイ、どうしよう。水遊びできない」
「やっぱりな。今日は花火だけで我慢しろ」
「えー、折角水着買ったのに！　着たかった！」
「じゃぁ着れば？」
「うん！　そうする！　そこで待っててて！」

アイツは無意味な行動が大好きだな。そう言ってエルメスは車に戻って行った。どうせなら車から降りた時に花火持って、エルメスが戻ってくる間に全部やっとくんだった。

１０分ほど待たされて出てきたエルメスはまんまと水着に着替え

て、両手に花火を持って嬉しそうに走ってきた。

「えへ、どう？　可愛いでしょ？」

そう言ってその場でクルリと回ってみせるエルメス。白のホルター―ネックのフリルのついたビキニに、下はスカートみたいなやつ。水着自体は可愛い。

「うーん、３２点」

「辛口！　もっとイケるよ！　７０点くらい！」

「微妙に謙虚だな。他の女が着てたら９６点だが、お前が着てることで３分の１になる」

「・・・カイの目には私はどう見えてるの？　普通の女の人の３分の１にしか見えてないの？」

「そーだな。でもお前の首から下はまぁまぁだ」

「ヒドーイ！　もう、バカ！　眼科行け！」

「お前がな。首、値札ついてんぞ」

「あぁっ！」

慌てて首元に着いた値札を引きちぎるエルメスに俺大爆笑。エルメスは悔しそうに顔を真っ赤にして、笑い転げる俺を憎々しげに見つめていたが、少しすると花火をガサゴソと漁り始める。

パチンと指を鳴らして花火をつけると、俺に向けて発射した。

「うぉ！　お前何すんだ！」

「笑い過ぎなのよ！　ムカつく！」
「むしろそれはお前のせいだろ！　お前が笑かすからじゃねーか！」
「くっ・・・でもムカつくんだもん！」
「責任転嫁すん・・・うわっ！　やめろって！」
「アハハ！　面白ーい！」

ムカつくつって怒ってたはずなのに、いつの間にか嬉しそうに笑って俺に花火を向けるエルメス。この小悪魔め。悪魔の恐ろしさを思い知らせてやる。

俺もすぐに花火を漁って、おあつらえ向きの花火を発見。すぐに火をつけてエルメスに向けると、ひゅうぅと音を立てて、エルメスに到着した瞬間、パァンと火の花を咲かせた。

「きゃぁ！　ケホっ、打ち上げ花火とかズルい！」
「ハハハ、今の花火のお陰で４０点まで上がったぞ」
「いらないわよ！」

それからはしばらく花火で迫撃ゴッコだ。良い子のみんなは悪い子になってから真似しろ。ぶっちゃけ、意外と楽しかった。
でも、飛び道具系の花火が尽きてくると、さすがに大人しく花火を楽しむことにした。

「あ、つーか俺の服焦げてるし。買ったばっかなのに」
「カイも水着に着替えればよかったのに。そしたら焦げるの水着だけで済んだのに」

「なんだお前、俺の下半身に恨みでもあんのか」
「何言ってんの！　バカじゃないの！」

エルメスはプリプリ憤慨しながら、消えた花火を捨てて再び漁り始める。すると、あ、と声を上げて嬉しそうに向いた。

「カイ、線香花火入ってた！　コレやろう！」
「線香花火？　なんだそれ」
「日本の伝統的な花火でね、日本人はみんなこの花火好きなの」
「へぇ」

火をつけたエルメスは一つを俺に持たせて、もう一つを自分で持って花火にじっと見入る。線香花火はパチパチと火花を散らせて、徐々に火の玉を形成していく。

「地味だな、オイ」
「地味とか言わないの！　控えめで、侘び寂びがあって、趣があるでしょ？」
「ワビサビ？」
「人の一生は花火に似てるって聞いたことがあるよ。きっと線香花火みたいに、最初はゆっくりはじけて、どんどん元気にはじけて行ってそれから徐々に衰えて、最後に一際パチンってはぜて・・・」
「あ、落ちた」
「こんな風に死んじゃうのが、人なんだね」

そう言ったエルメスの花火も、最後にパチンと爆ぜると火種はフルフルと揺れて、ポトリと地面に落ちた。

「なんっかこの花火、寂しくねぇ？」
「それが侘び寂びというものですよ」
「俺にはわかんねぇなぁ」
「カイにはわかんないかもねぇ」

笑いながらエルメスがもう一度線香花火を差し出してきて、再びその花火を見つめる。
すげぇシンプルな花火だけど、なんとなくエルメスの言ってたことが分かった。なるほど、この儚い感じがいいのか。
線香花火の魅力を理解した俺に、エルメスは声をかけてくる。

「あのね、線香花火の火種が最後まで落ちなかったら、願い事が叶うんだよ」
「なんだそれ。ロマンチストにも程があんぞ」
「昔からそう言うの。落ちなかったことないけど」
「なるほど、だから叶うんだな」
「そうそう。カイも何かお願いしてみたら？」
「急に言われてもな」

そう言いつつ、ひそかに願ってみる。すると、エルメスの火種はポトリと落ちた。それを見てエルメスは残念そうだ。
しかし、俺の火種は一向に落ちない。紅いまま身を震わせた火種は、少しすると大人しくなって黒くなって動かなくなった。

「あ、すごい！　カイなにかお願い事した？　きっと叶うよ！」
「残念ながらしなかった。エルメスは何お願いしたんだよ？」
「世界平和！」
「アホか。壮大過ぎて花火レベルじゃ叶えきれないだろ。もっと手頃なのにしねぇからだぞ」
「カイはお手頃なお願いしたの？」
「いや、そんなに手頃では・・・」
「やっぱお願いしたんだ！　なに？　なに？」
「チッ！　秘密」
「もう、ケチ！　いーなぁ、カイのお願い叶うよ、きっと。羨ましい！」
「だといいけどな」

俺の願い事なんて言わずと知れた「エルメス限定ラブ&ピース」だ。また前みたいにエルメスが愛と平和に包まれた世界に生きられたらいいなと思った。
神は聞いちゃくれねぇだろうけど、線香花火は俺の願いを聞き届けてくれただろうか。

エルメスがきっと叶うと言うのなら、叶うんだろう。俺の願いが叶う日がやってくることを花火とエルメスが保証するのなら、俺も頑張りがいがあるってもんだ。

そうしたら、死ぬ前に一際デカく火花を散らせて、潔く死んでやる気にもなれる。

悪魔に魂喰われて死ぬ前に、エルメスに大輪の花火を見せてやろう。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8837w/

契約の代価２　―インモラリティ・コントロール―

2011年10月30日03時13分発行